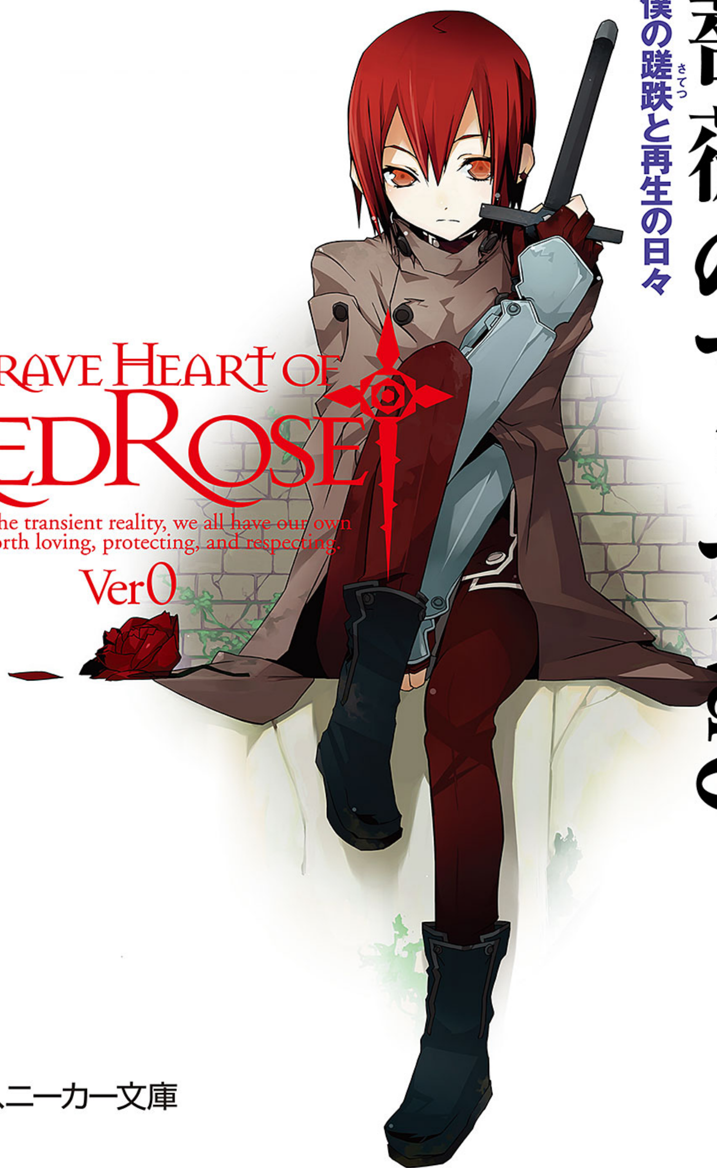
薔薇のマリア Ver0

僕の蹉跌と再生の日々

十文字青
Ao Jyumonji



角川スニーカー文庫

A BRAVE HEART OF RED ROSE

Even in the transient reality, we all have our own lives worth loving, protecting, and respecting.

Ver0

サンランド無統治王国首都エルデン第十三区
〝彷徨える魂区〟

顔を上げると、冷たい雨粒が頬や、唇や、顎を叩いた。
吐く息が白く、空はどこまでも暗い灰色だった。
足が重くて。
とても重くて。
右手でつかんでいる紐の先に繋いだ滑車付きの棺が。
左手で握って引いている母の手が。
振り返って母に声をかける。
もう何度目だろう。母は返事をしない。
こちらを見てさえくれない。
どこか遠くを見つめている。時折、棺に目を落とす。
でも、行こう。
進もう。
もう少しだから。
あそこに希望があるのだと信じて――




鉄鎖の憩い場


モリーリップスアサイラム

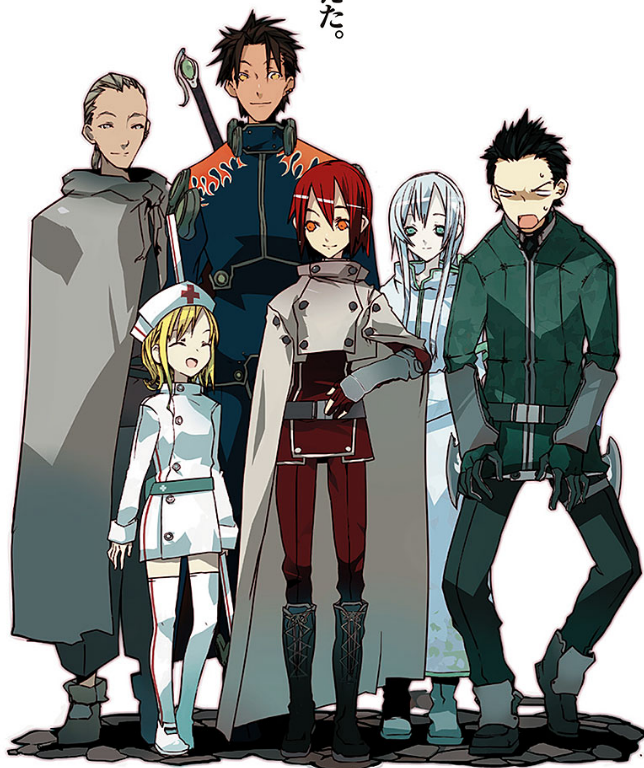





閉鎖魔宮


鉄鎖の憩い場

仲間との日々
――そう悪くないもののように思えた。



薔薇のマリア Ver0

僕の蹉さ跌てつと再生の日々

十文字　青



角川スニーカー文庫

本作品は縦書きでレイアウトされています。

また、ご覧になるリーディングシステムにより、表示の差が認められることがあります。



A BRAVE HEART OF RED ROSE Ver0

— Days of stumbling and recovery—

Ao Jyumonji

First published 2005 in Japan

By

Kadokawa Shoten Publishing Co.,Ltd.

A BRAVE HEART OF REDROSE
Ver0

CONTENTS

CONTENTS

A BRAVE HEART OF RED ROSE
Ver0
MAIN CHARACTERS



Molly Lips
モリー・リップス

アサイラムの医術士。



Azian
アジアン

クラン《昼飯時(ランチタイム)》の頭領(マスター)。



Mariarose
マリアローズ

主人公。美貌の《侵入者(クラッカー)》。



Katari
カタリ

ZOOのメンバー。



Tomatokun
トマトクン

クランZOOの園長(マスター)。



Korona
コロナ

魔術士。天然。

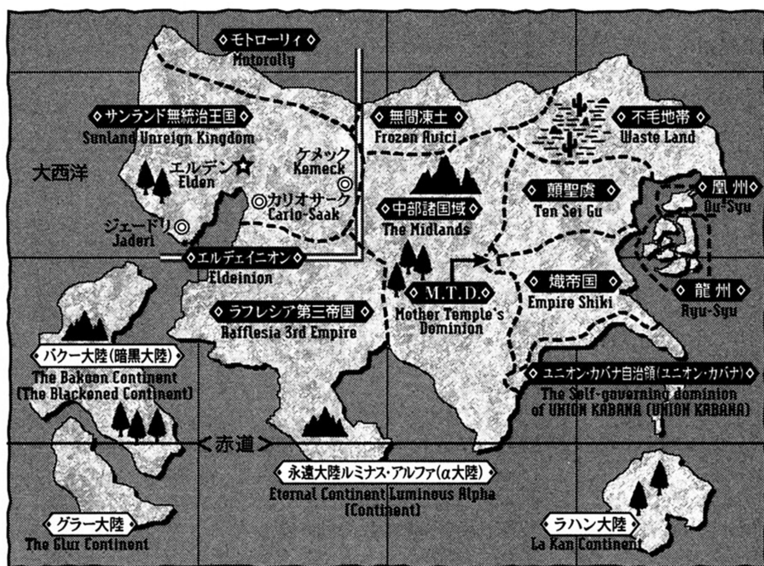
and the others

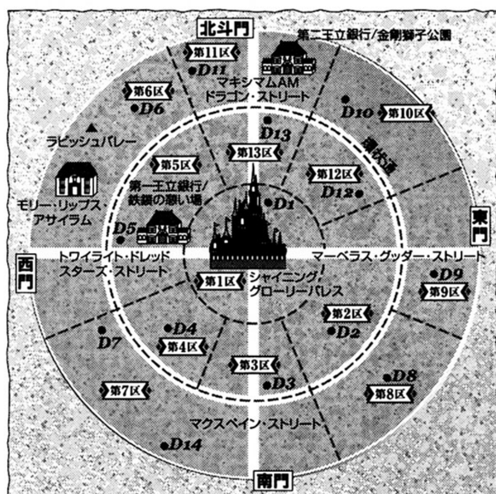
A-U-T'aulma Fuck'luca 大公爵ファッルーカ

Red Zeppelion 赤の男爵

and "ZOO"

The World of "A BRAVE HEART OF RED ROSE"





Elden: the Metropolitan area of Sunland Unreign Kingdom
サンランド無統治王国 首都エルデン

MAP製作／On Graphics



illustration : *BUNBUN*
design work : *design CREST*

Omenage XXX Xth revolution Xth day

サンランド無統治王国首都エルデン第十三区

〝彷徨える魂区(RSW)〟

chapter.0

塔

顔を上げると、冷たい雨あま粒つぶが頬ほおや、唇くちびるや、顎あごを叩たたいた。

吐はく息が白く、空はどこまでも暗い灰色だった。

足が重くて。

とても重くて。

右手でつかんでいる紐ひもの先に繋つないだ滑かつ車しや付つきの棺ひつぎが。

左手で握にぎって引いている母の手が。

振ふり返って母に声をかける。

もう何度目だろう。母は返事をしない。こちらを見てさえくれない。

どこか遠くを見つめている。時折、棺に目を落とす。

でも、行こう。

進もう。

もう少しだから。

あそこに希望があるのだと信じて、ここまで来た。

第十三区。

彷徨さまよえる魂たましい区。

それなのに、行く手に立ち塞ふさがるように立っている無数の高い建物は、雨ににじんで、黒々としていて、何か恐おそろしいもののように思えて仕方なかった。

立ち止まっていると、悪い予感ばかりして、母の手を強く握っても、握り返してはくれない。

だけど、きっと、きっと、大だい丈じよう夫ぶ。

　全部もとどおりになる。

　そのためには、自分が、自分だけは、しっかりしないと。

「行こう、お母さん」

　無む駄だかもしれないけれど、笑え顔がおを作ってみた。

　母も、ほんの少しだけ、かすかに笑ってくれたような気がした。

Omenage 897 6th revolution 17th day

サンランド無統治王国首都エルデン・アンダーグラウンドD5

〝メリクル第二迷宮〟

chapter.1

大迷惑

エルデェイニオン機術士匠しよう合製、ＥＭＵ印の暗視鏡ＩＶ７８００越ごしに見るメリクル第二迷宮は、青みがかった白と黒の濃のう淡たんだけで塗ぬり潰つぶされている。

息を殺して足音を消し、重く湿しめった濃淡の闇やみをかきわけて進んだ。

曲がり角のところで冷たい石いし壁かべに背中をよせ、一息ついた。

この迷宮に巣くう身長一・二メーテルの鶏にわとりといった姿のメリクルは、視覚より聴ちよう覚かくに依い存ぞんしている。飛べない羽が腕うでみたいに発達し、金属や宝石等を収集する習性があって、個体としてはわりあいおとなしい。マリアローズのような単独の侵入者クラッカーにとって、メリクルは狙ねらい目めの獲え物ものといえる。

むろん、常に注意深く冷静に行動し、なおかつ禁きん忌きを破らないのが前提条件だ。

たとえば、メリクル迷宮に光を持ちこんではならない。

メリクルはかすかな光にでも過か剰じように反応して興奮する。暗くら闇やみに慣れた彼らの目に、光は毒なのだという。それだけなら単なる弱点にすぎないが、光で興奮したメリクルは、特とく徴ちよう的な鳴き声で必ず仲間を呼び集めようとする。らしい。

なぜ、らしいかといえば、そんな愚ぐ行こうに及およんだ馬ば鹿か者ものの話は聞いたことがないからだ。

当然だ。

何せ、サンランド無統治王国首都エルデンと、その地下──深しん淵えんにして広大なるアンダーグラウンドにあるメリクル第一、第二迷宮とを結ぶ出入口には、凄すさまじい量の貼はり紙がみがしてある。

《この先、光を持ちこむべからず》《新しん鮮せんな死体になりたくなかったら、松たい明まつなんぞ使うなボケ！》《暗視鏡がないクソ野郎モウフオは、今すぐここで首をくくって死ネ！》

それでもあえて、メリクル迷宮をやわらかい光でやさしく照らしてみましょう、なんて考える間の抜ぬけた暇ひま人じんはまずいない。

まあ、光を持ちこまず、ちゃんと暗視鏡を装着し、調子に乗って奥の方へ行きさえしなければ、メリクル迷宮は稼かせぎやすい場所ではある。

ゆえに、混雑する。

普ふ通つうにやっていたら、獲物の奪うばいあいなど日常茶さ飯はん事じだ。場合によっては、侵入者クラツカー同士の斬きりあいに発展することもある。そうなると、メリクルどころの騒さわぎではない。この国には血の気の多いやつなんかいくらでもいる。

そもそも、典型的な専業の侵入者クラツカーは、一いつ攫かく千せん金きんを夢見る短たん絡らく的で暴力的な荒あらくれ者だ。マリアローズのように、体格並びに筋力標準未満で、すばしっこさと知ち恵えと少しの経験だけが頼たよりの一いつ匹ぴき狼おおかみは、頭を使わなければ生き残れない。

というわけで、今、マリアローズがいるエリアには、おそらく他ほかの人間はいない。

苦労といくつかの偶ぐう然ぜんが重なって見つけた、ここはまさしく穴場だ。

メリクル第二迷宮一階の崩くずれた石壁の陰かげに空いた穴を通って――いや、そこから落ちなければ来られない。マリアローズはここを裏迷宮と呼んでいる。他の侵入者クラツカーたちが押しあいへしあい殺しあいしている一いつ般ぱん的なメリクル第二迷宮は、表迷宮というわけだ。

その裏迷宮に入って、まだ五分足らず。

マリアローズはこれから五時間ほどそこらをうろつき、メリクルを捜さがして、勝てそうなら襲おそい、無理そうならやりすごす。たいていのメリクルは、かつて人間が使っていた武具や装そう飾しよく具ぐを身に着けているので、そいつを強ごう奪だつし、金になりそうな物は持ち帰って売り払はらう。

要するに、侵入者クラツカーとは職業的な追い剝はぎ、強ごう盗

とう、泥どろ棒ぼうだ。

　侵入者クラッカーたちの免めん罪ざい符ふは、相手が人間ではないということだろうか。

　もっとも、このサンランド無統治王国には、原則として殺人、盗ぬすみなどの罪を裁く者など存在しないのだが。

「ぉ──」

　と、マリアローズは声を出しそうになり、慌あわてて自分の口を押さえた。何か足音らしきものが聞こえたのだ。

　そっと顔を出して、角の向こうをうかがった。

　メリクルだ。

　遠くからこちらへ向かって歩いてくる。金属のこすれあう音がするのは、鎧よろいを着ているせいか。どうやら、武器は持っていないらしい。これは与くみしやすし、とマリアローズは見た。

　ただ、今すぐ正面から向かってゆくのは下げ策さくだろう。

　一番理想的なのは、あのメリクルがどこかで方向転てん換かんして背中を見せる展開だが、都合よくそんなことが起こる理由は思いつかない。やつはマリアローズがいる角までやってくる。そう考えるべきだ。となれば、ここで息をひそめてやつを待ち構え、出会い頭がしらに一発でしとめるのが上策ということになりそうだ。

　方針は決まった。あとは心を落ち着けて、静かにそのときを待つのみだ。緊きん張ちようなどしていない。慣れている。これまで数えきれないほどのメリクルを葬ほうむってきた。

　昨日もメリクル。

　一昨日おとといもメリクル。

　その前もメリクル。

　その前の前もメリクル。

　──メリクルばっかり。

だって、メリクルを相手にするのがもっとも危険が少なく、そのわりに実入りはいいのだから、仕方ないではないか。

道楽で侵入者クラッカーをやっているのではないのだ。働かざる者食うべからず。これは生存のため、何を措おいても必要な金を稼ぐための仕事だ。人間という生き物は、生きている限り、何かにつけ金がかかるようにできている。当然、金があればあるほど、いい暮らしができることはいうまでもない。

さりとて、無茶はできない。

もし死んでも、死体がひどく損傷していなければ、高層寺院のナマグサ坊主ぼうずどもに金を払って蘇そ生せいさせてもらうこともできるとはいえ、マリアローズはいつも一人だ。死体を高層寺院に運んでくれる者などいない。死んでしまえば、元も子もないのだ。

だから、今日もマリアローズは慎しん重ちように敵を選んで、冒ぼう険けんをせず、着実に、確実に、一匹ぴきずつ息の根を止める。焦あせらず、苛いらつかずに。

あと十五メーテル。

十二。十一。

十。

不意に、後ろの方で何かが床ゆかに落ちたような音がした。

「……へ？」

マリアローズは思わず声を洩もらしてしまった。音だけではない。この場にあってはならないものを背後に感じてとっさに振ふり返り、それを目もく撃げきしてしまったからだ。

暗視鏡越ごしだと、かすかでもめちゃくちゃ青白い。

やや遠いが、間ま違ちがいなかった。

灯あかりだ。

━━嘘うそ。

愕がく然ぜんとしながら、次に頭をよぎったのはメリクルのことだった。

やばい。これは非常にまずい。

きっとあの音に気づいたのだろう。メリクルの足音がけたたましくなった。近づいてくる。角を曲がれば、メリクルはあの灯りを感知するはずだ。すると、興奮して奇き声せいを発し、仲間を呼ぶ。らしい。いや、らしい、なんて悠ゆう長ちようなことはいっていられない。今は確実にそうなると想定して行動すべきだろう。

もう考えたり迷ったりする時間はない。あとは迅じん速そくに行動するだけだ。

そう、迅速に。

それはマリアローズの得意分野のはずだ。

何しろ、マリアローズが身に着けているのは、ハイ・アットＣのぴったりした皮革製胴どう衣いとズボンにブーツ、それに厚手の外がい套とうの他ほか、金属製の防具は籠こ手てだけだ。

籠手とベルトは、〝ショコラット〟と名乗っている機術士に作らせた特注品カスタムメイドで、色々と仕し掛かけが施ほどこされているのだが、qVpの背負い袋ぶくろなど、それ以外の装備は軽さ重視で選んでいる。とにかく、体の動きを極力制限しないよう気をつけているから、マリアローズはきわめて身軽だ。

力強いけれども、鈍どん重じゆうな肉にく食しよく獣じゆうではなく、非力だが、素す早ばやい草そう食しよく獣じゆうのように――マリアローズは角から躍おどり出て、突とつ進しんしてくるメリクルに右手を差し向けた。

距きよ離りは二メーテルもない。

近い。近すぎるが、かえって狙ねらいやすいと一いつ瞬しゆんで開き直った。

左手の親指で右籠手の左ひだり脇わきにあるスイッチを、人差し指が右脇にあるスイッチを押すと、作動音がした。かすかな反動とともに、籠手の手首内側あたりに備えつけた装置から、太い針のような矢が射出された。

　矢は物の見事に命中した。

　メリクルのくちばしの上、人間でいえば眉み間けんの位置に突つき刺ささった矢は、しかし、メリクルをすぐには止められなかった。マリアローズもそれは予想していた。

　で、どうしたかといえば、体当たりをぶちかました。

　むろん、相手が武器を持っていなかったからこそ、そんな乱暴な真ま似ねができたのだ。

　個体差はあるものの、矢に仕込んだ神経毒Ｐ９ドウター＋プラスが効きはじめるまで、メリクルならば四、五秒程度だろう。マリアローズに突き倒たおされたメリクルは、起き上がりかけたところで全身を痙けい攣れんさせた。合成毒物によって誘ゆう発はつされたショック症しよう状じようだ。

　マリアローズは、ここでようやく腰こしの剣けんを抜ぬいた。

　断面が菱ひし形がたの細い両りよう刃ばの剣身を持ち、柄つかは飾かざり気けのない十字型で、全長──たったの六十五サンチ。

　エストックと呼ばれる種類の刺し突とつ剣けんの中でも、これはかなり小さい。

　しかも、中古だ。錆さびていて、見み栄ばえのしない、誰だれも見向きもしないような一ひと振ふりをある露ろ店てんで見つけ、タダ同然の値段で買い叩たたいた。自分で磨みがいて、一応、錆さびはとったけれども、実用性についてはかなり疑ぎ問もん符ふがつく。

　実際、あまり役に立っていない。というか、剣で勝負するには、マリアローズはあまりに非力すぎる。高名な剣聖ヴァン・ヴラドＸＬ〝モータルレッド〟の弟で子しバーニング・バラッドの著書、二十年間に三百万部という驚きよう異い的な販はん売ばい部数を誇ほこる『武技概がい論ろん』を参考に練習してはみたが、物になるまで修しゆ行ぎようしていたら餓が死ししてしまいそうなのでやめた。

　結局、マリアローズのエストックは、こんなときに使われるケースが一番多くなった。

つまり、とどめ用に。

メリクルとて生き物なのだから、さっさと楽にしてやるのが慈じ悲ひというものだろう。

「まあ、慈悲深いやつがこんなことするかって話だけど」

マリアローズは仰あお向むけで体を震ふるわせているメリクルの胸部に狙いを定めた。メリクルは生意気にも鎖くさり帷子かたびらを着ているが、幸い刺突剣は中古でも貫かん通つう性能が高い。心臓は胸のほぼ中央だ。思いきり突いて素早く引き抜くと、おびただしい量の血液が溢あふれ出した。すかさず返り血を浴びないように飛び退のき、襤ぼ褸ろ切きれで血ち脂あぶらをぬぐったエストックを鞘さやに収めた。

「さて──」

それから、ただちにメリクルの装備品と所持品を検分する。いつもならそうするところだが、今はそれどころではない。あの灯りの正体を確かめる方が先だ。

さっき灯りを見たのは、裏迷めい宮きゅうの入口、つまり、表迷宮と裏迷宮とを結ぶ穴がある方向だった。

加えて、何かが落ちてくる音。

まさか、考えたくないけれども、誰か灯りを持ちこんだ者が、誤って穴に落ちた……？

だが、あの穴に到とう達たつするには、表迷宮の入り組んだ通路を十五分ほども歩く必要がある。途と中ちゅう、どこかでメリクルか他ほかの侵入者クラッカーに出くわす可能性は高い。マリアローズだって、この場所を秘密にするため、遠回りしたり足音を忍しのばせたり、いつも骨を折っているくらいだ。

ありえない──と思い、即そく座ざに首を振った。決めつけはよくない。こういった異常事態が発生したときは、少しの判断ミスが死に直結する。予断は禁物だ。

マリアローズは角に戻もどり、もう一度、顔だけ出して様子を見てみた。

やはり、灯りだ。

動いている。距離はだいたい三十メーテルくらい。ちょうど穴のあたりだろうか。

あそこは少し開けた広場状になっていて、そこから二本の通路が延びている。アンダーグラウンド内部では磁石が用をなさないが、方位表示付きの表迷宮の地図と照らしあわせると、この二本の通路が向かう先は、それぞれ正反対の北と南だ。

灯りが揺ゆれているのは、広場とマリアローズのいる角とを結ぶ北の通路に入ってすぐの地点らしい。

「あらー……」

と、そいつが呟つぶやいた。

人間の声に、人間の言葉。とりあえず、人だということは間ま違ちがいなさそうだ。

こうなると、暗視鏡はむしろ邪じゃ魔まだった。マリアローズは暗視鏡を額の上までずらして、目を凝こらした。

紛まぎれもない。人だ。灯あかりの正体は、そいつが持っている松たい明まつだった。

その人間は暗い色の三さん角かく帽ぼうをかぶり、同じ色でだぶだぶのローブを着て、痩やせている。

松明を持っているのとは逆の手に、木製の杖つえらしきものを握にぎっていた。魔ま術じゆつ士しか。

顔までは見えないが、声は女だったように思う。それも、かなり若い女の子だ。

彼女はマリアローズがいる角の方へと歩きながら、きょろきょろしている。

「ここ、どこなのかな。全然わかんないしょや、もー……」

「──訛なまってる？」

　あの訛りは、以前、聞いたことがある。どこの訛りかまでは知らないが、とにかく田舎いなか者ものだろう。などと考えながら、マリアローズはその場から動いていない。だが、果たして、本当に動かなくていいのだろうか。

　妙みようなのだ。空気がざわめいている。迷宮全体が細かく振しん動どうしているかのようだ。危険が迫せまっているらしい。マリアローズの第六感が告げている。逃にげた方がいい。ここはやばい。今に何かとんでもなく大変なことが起こる。逃げろ。今すぐに、と。

「けどさ……」



　逃げるなら、アンダーグラウンドから出るべきだ。が、その道の先にあの魔術士がいる。松明を持った、信じがたい間ま抜ぬけが。

　そんなところに、光に敏びん感かんだというメリクルが現れでもしたら──

「死ぬって」

　自分がメリクルの大群についばまれる場面なんて、想像しなかった。それより行動を優先した。マリアローズは走り出した。奥へ、ではない。魔術士がいる方へ、だ。マリアローズは急いで表迷宮に戻り、いったん地上へ出て、それから仕切り直すことを選せん択たくした。

　しようとした。

「あ、人が──あの……！」

　だから、魔術士に声をかけられても無視し、マリアローズはひたすら駆かけた。再び何かが床ゆかに落ちる音を聞いたのは、魔術士とすれ違った直後だ。

　しかも、いくつも、立てつづけに。

　落下地点は進行方向にある。おかげで、マリアローズはそれが何かすぐにわかった。ただちに百八十度方向転てん換かんした。そうせざるをえなかった。穴から床に落ちてきたのは、メリクルだったからだ。

　その数、一匹ぴきではなく、二匹ひき以上、おそらく十匹未満。

　おまけに、それは第だい一いち陣じんにすぎなかった。メリクルはあとからあとから落ちてきた。とめどもなく落ちてくるようだった。唯ゆい一いつの好材料は、連中が団子状というか、折り重なった布ふ団とんみたいな状態になって、すぐには起き上がってこられないことだ。

　マリアローズは全力疾しつ走そうの態勢に入ろうとしながら、毒づいた。

「くそ、何でこんな……！」

「あの！」

「──にゃっ」

　ところが、マリアローズの逃とう避ひ行こうは最初の段階でつまずいた。

　魔術士に外がい套とうの端はしをつかまれ、勢いあまってすっ転んでしまったのだ。

「あ、何か凄すごい音が……ご、ごめんなさい、えと……」

「くっ――いきなり何するんだよ、この皺しわなしプリン脳のとんちき魔術士！」

　マリアローズは立ち上がるのもそこそこに、魔術士を罵ば倒とうした。

「人が逃げようってときに邪魔をして、もともときみのせいに違いないってのに……だいたい、きみが持ってるそれ！　それだよ、それ！　いったいどういうつもりなのさ！」

「は、これはその、どうやら松明というものらしく……」

「松明というものらしくぅ？」

　近くで見ると、魔術士はやはりそうとう若い。背は小こ柄がらなマリアローズよりもずいぶん低く、あどけなさを残した顔立ちからすれば、せいぜい十代半ばくらいだろう。

　三角帽からはみ出した彼女の髪かみの毛と瞳ひとみは、冗じよう談だんみたいにきれいなすみれ色をしている。

　それをいったら、マリアローズの頭とう髪はつも嘘うそみたいにきれいな真しん紅くで、瞳はオレンジの果実より鮮あざやかな橙だいだい色いろなのだが。

「――まるで、あれだね。きみ自身、松明の存在は知らないんだけど、みたいな言い方じゃないか」

「す、すみません、これは親切な方からの頂き物でして。もしや、知らないと何か不都合でも……？」

「あったりまえだろ！　メリクル迷宮に松明持って入るやつがどこにいるんだ！」

「こ、ここに」

「ばか！」

　マリアローズは手を伸のばして魔術士から松明を奪うばおうとした。火を消すつもりだったのだが、どう考えてもこれは遅おそきに失している。状じよう況きようからして、メリクルたちは魔術士を追って穴から落ちてきたのだろうし、呆あきれて物も言えないことに、この魔術士ときたらそれに気づいていないらしいのだ。

　まったく、何たる無神経。何たる無む軌き道どう。何たる無む思し慮りよ。何たる無知蒙もう昧まい。何たる無分別。何たる無痛分ぶん娩べん（←無関係）。

　マリアローズも、久々に命に関かかわる危機と出くわして、動転していた。侵入者クラツカーを始めてから二年ほどは、毎日のように死にかけたものだが、半年近く前に裏迷めい宮きゆうを発見して以来、危ない目に遭あうこともめっきり減った。そうして、生死の瀬せ戸と際ぎわで黒字と赤字の間を行ったり来たりする生活から抜け出す代わりに、緊きん張ちよう感かんとある種の充じゆう実じつ感かんを失ってしまったような気がする。

　あの頃ころは、今日の晩飯、明日の朝飯をどうしようという問題が最大の関心事で、常に必死だった。

　所しよ詮せん、自分はこんなものなのかとか。こんなことを延々繰くり返していて、どうなるのかとか。本当にこのままでいいのかとか。自分にはもっとやるべきことがあるんじゃないかとか。そんな余計なことを考える余よ裕ゆうなんて、これっぽっちもありはしなかった。

　きっと、裏迷宮でのメリクル狩がりに慣れすぎたのだろうと思う。はっきりいって、飽あき飽きしてさえいた。往々にして、凶きよう事じはそういったタイミングで訪おとずれるものなのだ。

　マリアローズが魔ま術じゆつ士しから松たい明まつをひったくったとき、「キウエエエエエエェェェェ」とでも表現するしかない甲かん高だかい鳴き声があたり一帯に響ひびき渡わたった。

　鳴き声は連れん鎖さした。すぐに、迷宮の奥の方からも聞こえてくるようになった。

　今や、裏迷宮全体がメリクルの鳴き声で満たされている。そう思えてしまうほど、連中の声は不ふ吉きつだった。金属で硝子ガラスを引っ掻かいた音みたいに、神経を逆さか撫なでする種類の音だ。

　マリアローズは身をもって知ることになった。光を目にしたメリクルは、興奮して仲間を呼ぶ。本当だったのだ。別に知りたくなんてなかったが。

「あの、これは……？」

　魔術士がのんきに耳を押さえて顔をしかめている。

　マリアローズは火がついたままの松明を床に放ほうり、暗視鏡をかけ直した。

「さあ、何だろうね。死ぬまでにゆっくり考えれば？　時間はあんまりないだろうけど」

「ひょっとして、時間制限ありですか？」

「大あり」

「どれくらいでしょう？」

「あいつらに訊きけば」

　マリアローズはまだ鳴いているメリクルたちの群れを顎あごで指し示した。

「えと」

　魔術士は少し考えこむ仕草をした。

「人間の言葉は通じるでしょうか」

「通じると思う？」

「あまり……」

　メリクルには上位種と下位種がいて、上位種は大おお柄がらで頭がよく、共通語を操あやつることもできるという。だが、マリアローズは下位種にしかお目にかかったことはない。穴の下でたむろしている二、三十匹ぴきのメリクルもすべて下位種だ。

　ちなみに、さっきから地鳴りのような音が聞こえる。

　もしかすると、奥の方からさらに何匹か何十匹か何百匹かのメリ

クルが、ここへ向かってきている足音かもしれない。というか、確実にその足音だろう。

「ね、きみ」

　マリアローズはベルトの脇わきに並んでいる小さなホルダーのカバーに手をかけた。

　魔術士が首を傾かしげる。

「はい？」

「僕はきみがどーして松明持ってここに入ってきたのかとか、何でそんなに常識知らずのアンポンタンなのかとか、なぜゆえそこまでどうしようもなく迷めい惑わくなやつなのかとか、そういうのはもう一いつ切さい尋たずねない。こうなっちゃうとどうでもいいことだしね。でも、一つだけ僕のお願い、いいや、違ちがうな、命令がある。これだけは絶対に守って」

「え？　あ、はい」

「僕の邪じゃ魔まをするな」

　マリアローズはホルダーのカバーを外し、指先大の小こ瓶びんを抜ぬきとった。

　右手で二本、左手で二本。

　それぞれの小瓶を人差し指と中指、中指と薬指で挟はさみ、いつでも投とう擲てきできるようにする。

　小瓶を満たしているのは、ハーレム・ゴードンという無色透とう明めいの液体だ。マリアローズが自分で生成した。材料費は結構高い。エルデンでの成人一人の食費は、一巡じゅん月げつあたり最低三万ダラー程度といわれているが、ハーレム・ゴードンは一本およそ三千ダラー。つまり、この四本を消費すれば、三分の一巡月分以上の食費が消えることになる。

　けれども、死んでしまえば、金がどうとかいっていられない。非常に勿もっ体たいないが、裏迷宮に嫌いや気けが差すのも、これでいいのかとため息をつくのも、生きているからこそできることだ。本当にとても高価なものだし、金はたいていのものより大切だか

ら、まったくもって断腸の思いだけれども、命と引き換かえにはできない。

　マリアローズは駆かけ出した。魔術士が何か叫さけんでいる。何を？　知ったことか。

　穴の下のメリクルどもが、マリアローズに気づいて鳴くのをやめ、一いつ斉せいにこっちへ向かってくる。互たがいの距きよ離りは、十五メーテルかそこら。もう少し引きつけた方がいいだろう。あと二歩。

　──今だ。

　まず右手の小瓶を、二本ともメリクルの群れに向かって投げつけた。

　ほとんど間を置かず、左手の二本。

　ハーレム・ゴードン。

　ラフレシア第三帝てい国こくの鬼き畜ちく錬れん金きん士しイシュタル・アガメムノ・ゴードン子し爵しやくが生成した、心臓病治ち療りよう薬やくセーラム・ゴードンの改良版、あるいは改悪版だ。

　なお、セーラム・ゴードン自体も、飲めばたちどころに内臓が破は裂れつするという、心臓病なんか吹ふき飛ばしてしまう画期的な特効薬だった。どうやら子爵は、肥え太って心臓に疾しつ患かんを抱かかえる貴族を派手にぶち殺す暗殺薬のつもりで、これを作ったらしい。

　実際、セーラム・ゴードンによって死者も出た。

　おかげで、子爵は殺人罪で起き訴そされ、国から逃とう亡ぼうせざるをえなくなった。

　そんないわくつきのセーラム・ゴードンだが、ハーレム・ゴードンはそれ以上の破は壊かい力りよくを有している。そうなるよう、手を加えたのだから当然だ。

　いわば、爆ばく薬やく液えき。

酸素が一定濃のう度ど以上の空気に触ふれた瞬しゆん間かん、ハーレム・ゴードンは気化して、その体積が閃せん光こうを発しつつ瞬間的に膨ぼう大だいな量に増大し、要するに、爆発する。その反応の際に可燃性のガスも発生するため、爆発しつつ激しい炎ほのおをも撒まき散らす。

マリアローズは、ハーレム・ゴードン入りの小瓶にこんな愛あい称しようをつけていた。

爆ばく弾だん、と。

マリアローズが伏ふせると、爆音が轟とどろいた。目を閉じたのだが、瞼まぶたの裏が真っ白く染め抜かれた。

同時に、衝しよう撃げき波はと熱がきた。

爆弾一本分の爆発力はたいしたことはない。しかし、四本分となると、さすがに並みではない。体勢を低くしていなければ、マリアローズ自身も間違いなく吹き飛ばされていただろう。

目を開けて、膝ひざ立だちになる。

ざっと見たところ、爆発そのもののせいでひっくり返って燃えているメリクルが、五匹か六匹。焼かれたまま走り回ったり、のたうち回ったりしているメリクルが、その倍程度。残りは爆発時の閃光に目をやられでもしたのか、「ウキャウキャ」と鳴きながらじたばたしている。この鳴き声が、なぜか楽しそうにはしゃいでいるように聞こえるものだから、やや滑こつ稽けいというか、シュールな光景ではあった。

おまけに、後ろの方で「あうう」という情けない声が聞こえてきた。

振ふり返ると、魔ま術じゆつ士しが仰あお向むけに倒たおれてローブが豪ごう快かいにめくれ上がり、棒きれみたいに細い足と白い下着が丸見えになっていた。

「……何やってんだか」

どうも緊きん張ちよう感かんが削そがれる。今後、あの魔術士のことは一いつ切さい無視した方がよそさうだ。まだ虎こ口こうを脱だつしたわけではない。これからがむしろ正念場なのだ。

　とにかく、是ぜが非ひでも表迷宮へ出られる穴までたどり着いてやる。

　マリアローズは決意を新たにして、メリクルどもの中へ突とつ入にゅうしようとした。が、足を止めざるをえなかった。というより、足が萎なえてしまい、動いてくれなかった。

　穴のある広場から南へ延びた通路に、多数の人ひと影かげ、いや、鶏とり影かげ、もっと正確にいえばメリクル影が現れたのだ。

　しかも、そいつらはやけに整然としていた。まるで統とう率そつのとれた軍隊みたいだった。

　メリクルのくせに。

「くそ、鶏風情ふぜいが……」

　マリアローズは後あと退じさりながら、腰こしのホルダーに手を伸のばした。ハーレム・ゴードンは残り二本しかない。他ほかの小瓶はこの場面で使っても意味があるとは思えなかったり、ここでは自分にも被ひ害がいが及およぶ可能性が高いものばかりだ。

　さらに、後ろ——魔術士が転がっている道の先からも、これまたメリクルたちの大群が迫せまりくる気配がする。

　挟はさまれた。

　南からくる一団も、北の角から現れた一団も、幅はば四メーテルほどの通路にきっちり五列に並んでいる。

　逃にげ道はない。

「はっ、こ、こここ、これはっ！」

　魔術士も、ようやく自分の置かれた立場を認にん識しきしたらしく、大おお慌あわてで這はうようにしてマリアローズの足に飛びついてきた。

「あのさ」

　マリアローズは軽く頭を振って、籠こ手てに仕込んだ矢の数を確認した。今日は表迷めい宮きゅうで一本、さっき一本撃うったの

で、右籠手は一本、左籠手には三本そのまま残っている。射出機構にはかなり強力なバネが使われているから、今すぐ予備の矢をつがえ直すのは無理だ。

「言ったよね、邪じゃ魔まするなって。離はなれてくれない？」

「あ、は、はい！　ごめんなさい、つい！」

「早く離れる！　さっさと！　うざったいから立って！」

「はいっ！」

　魔術士は跳はねるように立ち上がり、生意気にも南を向いているマリアローズと背中あわせになった。

　だが、もうマリアローズの頭の中には、どうしようとか、何かやり残したことはないかとか、そういった七しち面めん倒どうな思考の居場所などない。考えるのは無意味だ。今は考えれば考えるほど絶望するだけだし、絶望したまま戦えるほどマリアローズは強くない。

　ただ、やはり、こんなところで、という思いはどうしてもぬぐい去れなかった。

　こんなわけのわからない、どこの馬の骨とも知れない、ちんまりした魔術士のせいで。

　──僕は、ハーレム・ゴードンを大おお盤ばん振ぶる舞まいして、大損した挙句、死ぬ。

　死ぬのか。

　何てことだ。

「きみ、名前は」

　たいして役に立つとも思えないが、マリアローズは一応、剣けんを抜ぬいた。

「え？　あ、今しばらくお待ちを……」

　魔術士は背後でごそごそやっている。背中にくくりつけた何かを

外そうとしているようだ。そういえば、杖つえを持っている以外にもやたらと長いものを背負っていたっけ。

　どうでもいいことだが。

　だいたい、今どき黒っぽい無地の三さん角かく帽ぼうとローブに杖の三点セットなんて、いかにもな格好をしている魔術士はまずいない。そこまで「我わが輩はいは魔術士である」と自己主張するくらいなら、そんなことをしていないで、魔術の一つや二つ使ってみせろ──いや、待て。

　彼女は見た目、魔術士なわけで。

　魔術士といえば、様々な肉体的精神的訓練や薬物による体質改造によって、半ば人間とは違ちがう生き物と化している。五十歳の弟で子し持ちの魔術師マギより、御おん年とし百歳で孫弟子持ちの魔導師マジスタの方が若々しい外見を保っていることも、珍めずらしくないという。であれば、彼女が見かけどおりの年ねん齢れい──十二、三、四、五歳とか、そのあたりではなく、実は偉い大だいな魔導師マジスタでしたというオチも、ありえなくはないわけだ。

　もちろん、それは淡あわい期待というか、妄もう想そうというか、脳内悪あがきにすぎない。

　実際、ちらりと魔術士の様子をうかがってみて、マリアローズは自分の顔がハニワになるのを感じた。

　ちなみに、ハニワとは東の果てにある龍りゆう州しゆうで、王様の墓に埋うめるという粘ねん土ど製の人形だ。ちょっとユーモラスでかわいい形をしているものだから、土産みやげ物ものとしても人気があり、ここエルデンの市場でもたまに見かける。マリアローズも一つ持っている。

「……何やってるの」

「はい？　あ、見てのとおり、お師し匠しよう様に授さずけていただいた剣を」

　確かに、魔術士は背中にくくりつけていたのだろう剣を両手で持ち、代わりに杖を紐ひもで背に固定していた。しかし──

「長いね」

「ちょっと使いづらいです」

「大きいね」

「そうなんですよ。持って歩くのが大変で」

「片かた刃ばだね……」

「古ぼけていますが、何やら値打ち物らしく。でも、コロナの、あ、や、わたしのお師匠様は偉えらい魔術師マギですから、剣は使わないので、コロ、わたしにお授けくださったのです。ついでにコロナも放ほうり出されちゃいましたけど」

「ふうん……きみ、コロナっていうんだ」

「はっ、なぜ！」

「自分で言ってたじゃないか、今」

　マリアローズは自分たちから七、八メーテルほどの距きょ離りを置いて一いつ斉せいに立ち止まったメリクルどもに目をやり、コロナ、コロナ、コロナ、と呟つぶやいた。

　コロナが囁ささやくような声で訊きいてくる。

「あの……なぜ、コロナの名前を連呼されますか？」

「いい質問だ」

　マリアローズはやけくそで笑った。

「呪のろいだよ。呪じゆ詛そさ。もし仮に万が一、僕がここで死ぬようなことがあった場合、もちろん、きみも死ぬわけだけど、絶対にきみの魂たましいに安息なんか与あたえてやるもんか。きみは死んでも未来永えい劫ごう苦しみつづけるんだ。僕の呪いによってね」

「もしかして、何ナニ某ガシさんも魔術をたしなまれますか？」

「魔術はそんなに得意じゃないから、あまりたしなまないけどね。こういうのは怨おん念ねんの強さ次し第だいで何とでもなるんだ。ところで、その何ナニ某ガシってのは何だよ」

「まだお名前をうかがっておりませんので」

「疫やく病びよう神がみに名前を教えてやる趣しゅ味みはないね」

　マリアローズがそう言ったとき、北側の一団が中央から左右に分かれた。

　いったい、何が起ころうとしているのか。

　固かた唾ずを呑のんで見守っていると、空いた道を後列から進み出てくるものがある。

　もの、というか、メリクルだ。

　たぶん、メリクルだと思うが、でかい。

　普ふ通つう、メリクルの背せ丈たけは一・〇～一・二メーテル、せいぜい一・四メーテルくらいが関の山のはずなのに、あのメリクルは身長約一・六メーテルのマリアローズより遥はるかに背が高い。横よこ幅はばも、倍はあるだろうか。板ばん金きん鎧よろいで身を固め、頭の形があわないだろうに、無理やり人間の兜かぶとまでかぶって、手には巨きよ大だいな両手剣をぶら下げている。

　しかも、悠ゆう然ぜんと列の前に出てきたそいつは、喋しやべった。

　何と、人間の言葉らしきものを。

「ウワァガナハァ、アドゥゥォォグゥォニィィィ……！　ディ、ディィンゲン！　ヒサシブディッ！　ヒツマブシッ！　ショ、ウワァレドショウブシドッ！　カデバミノガジデヤドゥッ！」

「……………………」

　呆ぼう然ぜんとしているマリアローズの隣となりで、コロナが「ははあ」とうなずいた。

「なるほど、あなたと勝負してこちらが勝てば、この場は見み逃のがしていただけるというわけですね。あいわかりました！　力不足かもしれませんけど、コロナが精せい一いつ杯ぱいお相手いたします！」

「いや、お相手って……」

　よく何を言ってるのかわかったね、という感想はさておき、コロナとあの大きなメリクルがタイマン勝負する図なんて、マリアローズには想像がつかなかった。

　コロナはマリアローズより体が小さいだけでなく、魔術士なのだ。剣けん術じゆつに長たけた魔術士の話なんか聞いたことがない。また、身の丈たけ一・九メーテルくらいありそうなあのメリクルは、生半可な戦士ではなさそうだった。

　初めて見た。あれが上位種というやつか。

　だが、尻しり込ごみするマリアローズをよそに、コロナはすっかりやる気になっているようだ。

「では、アドゴニーさん。少々お待ちください。コロナ、今から用意をしますので」

「ナァァォォォアァ！　アドゥゥォォグゥォニィィィ……！」

「あ、はい、アドゥゥォォグゥォニィィィさん、ですね」

「ゾウダァァァッ！」

「了りよう解かいしました。それでは、ちょっとお時間を拝借してもよろしいですか？」

「ズギニジドォォ！」

「ありがとうございます」

　コロナは、アドゴニー（と人間風に表記しておく）にぺこりと頭を下げて一礼し、全長百十五サンチほどはありそうな剣を構えたまま、目をつぶって何事か呟き出した。



　マリアローズはその様子を眺ながめながら、ぼんやりと思った。

　これがとんでもなく強大な魔術の呪じゅ文もんだったりしたら、どんなにいいだろう、と。

　しかし、聞こえてくるのは「強ーい強ーいコロナは強ーいコロナ

はとってもとってもとおっても強ーい」という、世界全体を白ませるような言葉だ。

　マリアローズは石の天てん井じようを仰あおいだ。一いつ瞬しゆん、立ちくらみがしたけれども、ふと魔術の中には暗示術という技術があることを思い出した。自分、または他者に暗示をかけることによって、限界を超こえた力を発揮させたり、心を極限まで落ち着かせたりする。暗示術とは、まあ、一種の催さい眠みん術じゆつみたいなものだ。コロナが行っているのはそれに違ちがいない。

　だが、マリアローズが知る限り、暗示術は魔術の訓練過程で用いる。暗示術を繰くり返すことによって、人間が無意識のうちに自分にかけているリミッターを外す方法を覚えるのだという。

　ただし、暗示術で無理やり限界を超えさせたままの状態で、たとえば実戦に挑いどむとなれば、話は全然違う。

　リミッターは単なる障害物ではない。必要だから存在する。人間の脳は何割だか数％だかしか活用されていないとよくいわれるけれども、それ以外の部分も決して無む駄だではない。たった何割か数％かを働かせるために、それだけの余白がなければならないのだ──と、マリアローズはある魔術師マギに教わった。

　マリアローズは専門家ではない。その理り屈くつの正当性については判断がつかないが、コロナは無む邪じや気きに暗示術を押し進め、ついに瞼まぶたを押し上げた。

　コロナの全身が青白い燐りん光こうで覆おおわれ、ローブの裾すそや髪かみの毛が微そよ風かぜに揺ゆらいでいるかのように見えるのは──マリアローズの気のせいだろう。たぶん。

「倍化完了ブーステツド……！　さあ、アドゥゥォォグゥォニィィィさん、お待たせしました！」

「ウゴォォォォォウゥゥゥ！」

　アドゴニーも両手剣を頭上で軽々と回転させつつ一歩前に出て、気合い十分といった感じだ。

　その雄お叫たけびに応じて、下位種のメリクルどもが、煽あおり立てるように総員で床ゆかを踏ふみ鳴らしはじめた。

　彼らの昂たかまりゆく興奮が、マリアローズにもひしひしと伝わってくる。

　こうして戦いの舞ぶ台たいは整った。

　整ってしまった。

　マリアローズだけを取り残して。

　コロナが振ふり返ってマリアローズにウィンクしてみせようとしたのだろうが、うまくできなかったらしい。両目をつぶってしまい、ただのまばたきにしか見えなかった。

「どうかここはコロナに任せてください」

「いや、任せるっていうか」

「大だい丈じよう夫ぶです！　倍化ブーストしたまま戦うのは一分だけにしなさいとお師し匠しよう様に言われてますけど、その間に必ずや！　片をつけてみせますから！」

「……一分……」

「あわわ、いけない、こうしてる間にも刻一刻と時間が過ぎていってるしょや！　というわけで、コロナ、行きまーすっ！」

「あ」

　止められなかった。まあ、止める必要などないのだが。

　これはもともとコロナが蒔まいた種なのだ。本人がそのあたりを理解しているのかどうかはあやしいけれども、出てきた芽は自分で刈かりとるのが筋だし、マリアローズは被ひ害がい者しやだ。コロナがどうなろうと関係な──

「い？」

　マリアローズは目を疑った。

　小さなコロナが、あまりにも凄すさまじい速度と勢いで、アドゴニーに突とつ進しんしていったからだ。

　しかも、ただ突つっこんだだけではない。

アドゴニーの手前約一メーテルで急停止したコロナは、彼女の体には大きすぎる片かた刃ばの剣けんを斜なななめに振るった。鋭するどく、迫はく力りよくのある一いち撃げきだった。アドゴニーは半歩下がって両手剣でこれを弾はじいたが、その剣先がぶれた。何と、巨きよ漢かんのアドゴニーが力負けしそうになったのだ。

おそらく、油断もあったのだろうが、それだけではない。

二合、三合。コロナは初撃がまぐれではないと証明するように次々と撃ちこみ、アドゴニーが防いだ。剣と剣が触ふれあうたびに散る火花が下位種どもをさらに刺し激げきし、足あし踏ぶみが激しくなって、歓かん声せいとも悲鳴ともつかない鳴き声のボリュームが、どんどん上がってゆく。

いくら暗示術で倍化ブーストしているとはいえ、あの巨体と剣で互ご角かく以上に渡わたりあうなんて。

──凄すごい。

たいしたものだ。称しよう賛さんに値あたいする。

そうは思いながらも、マリアローズは素す直なおに感心できないでいた。

だって、あんなに小さくて、頼たよりなげで、きっとまともに魔ま術じゆつを操あやつることもできないへっぽこ魔術士が、自分よりずっと勇ゆう敢かんに剣を振り回して戦っているのだ。

何だか、みじめではないか。

これでは、マリアローズが臆おく病びよう者ものの能なしみたいだ。むろん、コロナは別にあてつけるつもりなんてないだろうが、意識せずにそういうことをするやつこそ一番タチが悪い。

そこまでゆくと、被ひ害がい妄もう想そう以外の何ものでもないと、自覚はしている。自分が排はい他た的な孤こ立りつ主義の利己主義者で、性格がよくないのも承知していた。だから、メリクルどもが熱ねつ狂きようしている中、マリアローズはコロナの勝利を願うでもなく、自分が生き残ることだけ考えていた。

そして、皮肉にも、コロナが頑がん張ばってくれれば頑張ってくれるだけ、事は簡単だった。

　はっきりいって、メリクルの下位種は馬ば鹿かだ。連中はアドゴニーとコロナの勝負に熱中していて、マリアローズの行動になどこれっぽっちも注意を払はらっていない。

　おかげで、剣を鞘さやに戻もどしたマリアローズがこっそり壁かべ際ぎわにより、思いきり姿勢を低くしてたまにメリクルどもをかきわけつつ穴を目指しても、まったく気づかれなかった。

「一分は超こえたかな……さて、どれくらいもつか」

　そんなことを呟つぶやきながら、ひたすら穴のある広場へ向かうだけでいいのだ。

　マリアローズは自分がひどいとは思わない。コロナが気の毒だとも。もとはといえば、コロナのせいだから、という以上に、ここサンランド無統治王国はそういう場所だ。

　黄たそ昏がれの魔導王の一人にして、〝原子のアトミツク・極大マキシマム・魔術士ドレッドスター〟開祖キング・グッダーI世が、異界の扉とびらだらけだったエルデェイニオン地方を制圧して、異界生物フリークスどもを地下に封ふうじこめる蓋ふたとして首都エルデンを建設し、サンランド建国を宣言して以来、王の方針は変化していない。

　君臨すれども、統治せず。

　支配すれども、関知せず。

　とはいえ、歴代のキング・グッダーが、何もしていないわけではない。王は常に〝古代九く頭ず竜りゅうの呪のろい〟に力を注いで蓋を維い持じしつづけ、総勢三万以上の魔導兵団ドレッドループスを制せい御ぎょして国を守り、各種公共サービスを滞とどこおりなく運営している。

　しかし、サンランドには法がない。秩ちつ序じょがない。極論すれば、奪うばいたければ奪えばいい。殺したければ殺せばいい。ただ、自分も奪われるかもしれない。殺されるかもしれない。また、奪わず、殺さないのも個人の自由だ。

　従って、マリアローズがここでコロナを見捨てて一人で逃にげたとしても、サンランドの流りゅう儀ぎでは、全然あり、ということになる。

「コロナ、か」

　ちくりと胸が痛んだ。いや、気のせいだろう。まあ、うまく地上へ戻ることができたら、名前くらいは覚えておいてやろう。どうせ、すぐ忘れてしまうだろうが。

「さよなら」

　マリアローズは低く呟き、匍ほ匐ふく前進に近い体勢でとうとうメリクルたちの密集地帯を抜ぬけた。

　穴が空いているのは、だいたい三メーテルくらい先の天てん井じようだ。

　その真下だった。

　そいつがたたずんでいたのは。

　よりにもよってというか、もうマリアローズは壊こわれたハニワみたいな顔をするより他ほかになかったわけだが、そいつは大きい。あのアドゴニーよりも一回りでかい。態度もでかく、いかにも大物然としている。アドゴニーと同じように、だが、もっと立派な鎧よろい兜かぶとを身にまとい、手にした分厚く巨きょ大だいな両りよう手て斧おのは、マリアローズをたやすく木こっ端ぱ微み塵じんにできそうだった。

　いかにも大物なそいつは、当然、アドゴニーと同じように共通語を喋しやべった。

「何ダ、オ前」

　しかも、アドゴニーより上手だし。

　マリアローズは無む駄だと知りつつ、八割がた自じ暴ぼう自じ棄きで引きつった愛あい想そ笑わらいを浮うかべた。

「あー、ええと、僕は……別にあやしい者じゃなくて、何ていうか……そう！　ただの単なる純じゆん粋すいな通りすがりなんで、できたら見み逃のがしてくれたらなー、なんて」

「面おも白しろイコトヲ言ウヤツダ」

「あははは、そ、そう？」

「ゴ褒ほう美びニ殺シテヤル」

「ちょっ──」

　マリアローズはとっさに横転して、大物の両手斧をよけた。少しでもよけるのが遅おくれていたら、間ま違ちがいなくザクザクに砕くだけた床ゆかと同じ運命をたどっていたことだろう。

　だが、一度、不幸な運命の女め神がみのキスから身をかわしたとはいっても、いつまで逃げ回っていられることやら。

　マリアローズは、飛び起きて重心を低くし、何が起きても対処できる態勢を整えはした。

　けれども、大物は依い然ぜんとして穴の下に仁に王おう立だちしたままだ。何匹びきかの下位種も騒さわぎに気づいたらしい。連中が指示を仰あおぐように羽を震ふるわせると、大物は両手斧を持ち上げて首を横に振ふり、メリクルにしては太すぎる声で鳴いた。

「ギィィイエッ、ギャギャッ」（←メリクル語？）

　これで下位種どもは引き下がってくれたが、状じよう況きようは全然好転していない。かえって、大勢に押し囲まれた方が混乱に乗じる余地があるぶん、マリアローズとしてはまだやりようがあった。

　まさか、あのアドゴニーよりも賢かしこくて強そうなやつと、サシで渡わたりあう羽目になるとは。

　しかしながら、ここで諦あきらめればすべてが終わってしまう。

　十七年と少々。これまでの決して長くはない人生で、手に入れたものより、失ったものの方が遥はるかに多い。正直、現時点では、捨てるのが惜おしいような人生ではないとも思う。

　だが、ちっぽけで、とるに足らず、何の価値もない──そんな存在として生きて死ぬためだけに自分が生まれたなんて、思いたくない。というか、我が慢まんならない。我慢してたまるか。

　おそらく、今は雌し伏ふくの時なのだ。這はい上がる方法なんて

まったく考えつかないが、生きてさえいれば、何かの拍ひよう子しで逆転のチャンスが訪おとずれないとも限らない。いつか損失分を補ほ塡てんし、人生を立て直す機会が巡めぐってくるかもしれないではないか。

　そのためには、まず生き抜くこと。何が何でも生き延びることだ。

　マリアローズは臍へその下、丹たん田でんのあたりにすべての力が集まるようなイメージで、精神を集中させた。

　使うのは久々だ。思い出したのは、コロナのおかげか。そのコロナはまだ戦っているようだ。気合いの声と剣けん戟げきの音が聞こえる。

　コロナのせいで、コロナのおかげ。

　変なものだと思ったが、マリアローズは雑念を追い払はらい、ベルトについている小物入れから、左手で一ひと粒つぶのミラ石をとり出した。

　失敗したら、おしまいだろう。かといって、爆ばく弾だんなどの薬品を使うには、あまりに距きょ離りが近すぎる。あの重装備には籠こ手ての矢なんか通じそうもない。他に手はない。

　マリアローズは、からからに乾かわいた唇くちびるを舌で湿しめらせようとした。舌もあまり湿っていなかった。剣を抜いて、やや白はく濁だくした透とう明めいのミラ石は左手の中に握にぎりこんで隠かくした。

　──大だい丈じよう夫ぶ、絶対にうまくいく。

　大物が両手斧を床に突つき刺さして胸をそびやかした。

「我ガ名ハ、ゴンドァガ・グァレェェィゴリィィィ。オ前タチ人間ノ言葉デイエバ、将軍トイッタトコロダ。王ノ血族ニ連ナル者デモアル。オ前ノ名モ訊きイテオコウカ」

　マリアローズは答えなかった。それどころではなかった。特殊なチヤネ精神集中リングを維い持じし、グレゴリー（と人間風に表記しておく）の顔面に向けてエストックを突き出すだけで精せい一いっ杯ぱいだった。

いわゆる不意打ちというやつだが、グレゴリーは身じろぎ一つしなかった。当たり前だ。マリアローズのエストックは全長六十五サンチ、剣身だけでいえば五十サンチほどしかない。剣先はグレゴリーに届いていなかった。考えようによっては、かなり間ま抜ぬけな光景だ。

だが、これでいい。

マリアローズは左手のミラ石をエストックの柄つかにあて、たぶん世界最短の呪じゆ文もんを発した。

「煌フアン……！」

呪文によって、精神連結したＬＥＰ（下層エレメンタルプレーン）から呼び出されたのは、光の要素精せい霊れいＬｕｉだった。

要素精霊には、実体がない。質量もなく、定まった形もなく、世界に及およぼす力だけがある。だから、マリアローズのように、魔ま術じゆつをちょっと囓かじっただけの者でも呼び出せてしまう。むろん、失敗することも多く、力の強い要素精霊は気難しいので無理だが、ミラ石が大好物なＬｕｉはかなり性格が素す直なおだ。相あい性しよう次し第だいではあるが、そうとう手なずけやすい部類に入る。

Ｌｕｉは一いつ瞬しゆんでミラ石を食いつくした。

マリアローズは彼らに命じた。否いな、要よう請せいした。

──光れ。思いっきり光れ。ほんのわずかな時間でいい。疲つかれたらすぐに帰ってもらって構わない。光れ、光れ、光ってくれ！

果たして、Ｌｕｉは応こたえてくれたようだ。

エストックの剣先に光がともった。光は拡大し、あっという間に広がって、消えた。

おそらく、一秒にも満たないが、その間に放たれた強きよう烈れつな白い光のせいで、メリクルどもが一いつ斉せいに悲鳴を上げた。

それに続くのは、尋じん常じようではない興奮というより狂きよう乱らんのはずだけれども、その両者は連続しない。間がある。光

を浴びせられたメリクルどもが、眼部に強烈な痛みを覚え、きっと何かを考えることもできない、少しの間が。

　マリアローズは剣を捨てて、グレゴリーの脇わきをすり抜けた。穴まではたった三メーテルだ。

　あと一歩。

　すでにマリアローズは、天てん井じようから崩ほう落らくした岩がん塊かいに足をかけていた。そこからさらに跳ちよう躍やくすれば、穴の縁ふちに手をかけることができる。

　だが、そこまでだった。

「──あぐっ……！」

　跳とび上がって手を伸のばしたマリアローズの背中に、重く鈍にぶい衝しよう撃げきが走った。グレゴリーが振ふり返りもせずに繰くり出した、両りよう手て斧おのの柄えによる一撃だった。

　Ｌｕｉの光を目の前でまともに食くらったのにも拘かかわらず、グレゴリーは慌あわてず、騒さわがず、小こ面づら憎にくいほど冷静に、マリアローズの望みを打ち砕くだいたのだ。

　つんのめって床ゆかに倒たおれたマリアローズは、ちゃんと息ができない。

　もちろん痛いが、それにも増して息苦しさが。

　何より、口くち惜おしさが。

　透明な塩しお辛からい液体となって、マリアローズの両目から溢あふれようとしていた。

「きゃっ」

　と、コロナの声とともに、金属が床に転がる音が聞こえた。

　何が起こったのか、マリアローズには見えないけれども、たぶんアドゴニーと一いつ騎き打うちを続けていたコロナが、剣を叩たたき落とされでもしたのだろう。

「あうう……倍化ブーストきれちゃったら勝負になるわけないべさ……はらら？　何で？　真っ白で何も見えないしょや！　体も動かないし……仕方ないです、アドゥゥォォグゥォニィィィさん、この勝負、コロナの負けですね。この上は煮るなり焼くなりご自由に……何ナニ某ガシさん、ごめんなさいぃぃ……」

　どうやら当たりのようだが、もうコロナのことを気にしている場合ではなかった。

「オ前ノ仲間モアドゥォゴニィィィニ敗北シタ。残念ダッタナ、人間。マサカ魔術ヲ使ウトハ思ワナンダガ、ホレ」

　グレゴリーが兜かぶとを脱いでみせた。そこには鶏にわとりめいたメリクルの顔が間ま違ちがいなくあったものの、退化した目の部分には、暗視鏡のごとき物体があてがわれていた。

「オ前ハ自分ノ浅ハカサニヨッテ死ヌノダ」

「……うるさい」

　マリアローズは痛みをこらえて声を絞しぼり出し、どうにか立ち上がろうとした。

「うるさい……鶏なんか、に……そんなこと、言われる筋合い、ない……よ……」

「ソノ鶏ニ、オ前ハ今、敗レ去ル」

「誰だれが……！」

　まったく頭にくるが、グレゴリーの言ったことは正しい。現状を的確に表してもいた。

　でも、それがどうした。

　そうは思っても、気力だけあって体がついてこないし、状じよう況きようが悪すぎる。

「人間ヲ殺スノハ久々ダ。オ前ハ弱スギタガ、暇ひま潰つぶシニハナッタゾ！　ソシテコレカラでぃなーノめいんでぃっしゅトナルノダ……！」

だって、すでにグレゴリーは死し刑けい宣告に等しいそんな言葉を吐はいて、天井を削けずりながら両手斧を高々と振り上げていた。あとは振り下ろすだけだ。

当然、マリアローズはよけようとした。

が、体がちゃんと動いてくれない。これでは、よけられない。嘘うそだ。信じない。そんなことがあっていいはずはない。よけられなければ、本当に、完全に、死んでしまうのだ。

嫌いやだ。

絶対に嫌だ。嫌だ！　嫌だ、嫌だ、嫌だ！

──死にたくない……！

その願いをたまたま小耳に挟はさんだ、親切で暇な神でもいたのだろうか。

そうでなかったことは、後ほど判明するのだが。

しかし、今まさにこのときは、穴から落下してきてグレゴリーの頭頂部に短たん剣けんを突つき刺さした男が、漆しつ黒こくの天使に見えた。

天使はグレゴリーの肩かたの上にしゃがみこむような姿勢になって、その耳みみ許もとで甘く囁ささやいた。

「Scream,baby.」

まるで二人の間でのみ通じる秘密の冗じよう談だんを恋こい人びとに言って、笑わせようとでもするかのように。

あるいは、ベッドの中で戯たわむれ半分に愛を告げるかのように。

泣き叫さけべ、と。

天使はグレゴリーに言ったのではない。グレゴリーの頭頂部に突き立てた短剣に向けて言ったのだ。

マリアローズは慌てて耳を塞ふさいだ。しかし、天使の短剣から

発せられたのは、そんなことで遮さえぎれるような生やさしい音ではなかった。

　高い、あまりにも高すぎる音。聞いていると脳の神経がぶち切れそうな、心の準備もなくまともに聞いてしまったら、気が狂くるってしまいそうな音。たとえ心の準備をしていても、頭の中がごちゃごちゃに引っかき回されてしまいそうな音。

　それは叫び声だ。

　この地上に存在する、ありとあらゆる負の感情に彩いろどられた、千人分の断だん末まつ魔まの叫びだった。

　そんな音を聞かされたメリクルどもは、脳天に短剣を食らったグレゴリーだけでなく、アドゴニーもそれ以外も残らず気絶、または絶命した。

　何しろ、暗くら闇やみで生きるメリクルたちは視覚が退化しているぶん、聴ちよう覚かくが発達している。人間にとってのとてつもなく不快な音は、彼らにとって致ち命めい的てきな音になりうるのだ。

「──フッ」

　こうして死をばら撒まいた黒衣の天使は、前のめりに倒れてゆくグレゴリーの遺体から跳び離はなれ、短剣の刀身を黒い布切れでひとぬぐいして腰こしの鞘さやに収めた。

「決まったネ」

「……あ、アジアン、どうしてこんなとこに……」

　驚き呆あきれ、ついでに安あん堵どしたせいで、思わずマリアローズは月並みな反応を示してしまった。

　薄うす青あお色いろの瞳ひとみと白磁めいた肌はだ以外、髪かみの毛も棘闇ソーンダークの衣い装しようも黒一色のアジアンは、背せ丈たけこそ一・七メーテル少々しかないものの、控ひかえ目にいってもかなりの美形だ。

　また、この男は魔ま導どう王おう時代の秘宝、泣き叫ぶスクリーミング短剣・ダガーを所有し、昼飯時ランチタイムとかいうふざけ

た名のクランの頭領マスターでもある。

　しかし、この黒衣の天使まがいが、実はとんでもないやつだということを、マリアローズは知っていた。

　特に知りたくはなかったのだが、一年ほど前に初めて会って以来、思い知らされる出来事が多々あったのだ。

　それにしても。

「嘘みたいだよ、こんな都合よく、絶好のタイミングで……」

「愛ゆえに」

　アジアンは黒衣を翻ひるがえして華か麗れいに一礼し、懐ふところから一輪の真っ赤な薔ば薇らをとり出した。

「マリア、ボクはいつもキミのことを見守っている。何かあったらすぐに駆かけつけるサ。当たり前だろう？　なぜならボクはキミを愛しているんだからネ。ささ、キミの名にも冠かんされている、キミの美しさと可か憐れんさにピッタリの花だヨ。受けとっておくれ」

「う、うん」

　マリアローズはまくし立てられて圧あつ倒とうされ、ついついアジアンの手から薔薇を受けとってしまった。が、すぐに我に返って薔薇を床ゆかに叩たたきつけようとし、いや、花に罪はないからと、差し出されたアジアンの手をぺしりと叩いた。

「べっ、別に僕がきみに助けてって頼たのんだわけじゃないし！　きみはきみ自身の意志で勝手にやっただけだろ。感謝なんてしないからな！」

「オゥ・マイ・スウィーテスト……相変わらずつれないネ？」

「あったりまえだ！　きみみたいな変態野や郎ろうに、誰だれがつられてやるもんか！」

「でも、そんなところもキミの魅み力りょくだヨ、ハニー」

「ぞぞぞぞぞぞぞぞぞ」

　全身の鳥とり肌はだが立つ音がした。

　マリアローズは両りよう腕うでで自分の体を抱だき締しめ、億千万の嫌けん悪おをこめてアジアンを見上げた。

「……まったく、今日は最悪の厄やく日びだよ。わけのわからない変なやつのせいで、とんでもないことに巻きこまれて、頭のイカれたさらに変なやつに助けられるなんて」

「フッ、まあ、変なやつのせいで命を落としてしまうよりはよかったじゃない？」

「そりゃそうだけど……」

　マリアローズはため息をつき、起き上がろうとして背中に鈍どん痛つうを覚えた。ちょっと嫌な痛み方だ。ひょっとしたら、これは骨までいっているか。

　骨に損傷があるとすると、背骨が壊こわれていたらさすがに動けないだろうし、肋ろっ骨こつあたりか。

　ただ、呼吸は普ふ通つうにできているので、折れた肋骨が肺に刺さったりはしていないようだ。

「──くそ、痛いな……歩けるかな」

「ウフ」

　アジアンが一いっ瞬しゅん含ふくみ笑いをしてすぐに真顔になり、また手を差し伸のべてきた。

「ほらほらマリア、ボクにつかまって。ぎゅっと。ぎゅっとネ？　イヤイヤ、いやらしいことなんて何もしないヨ？　するはずがないじゃないか。ボクの頭の中にあるのは、ただキミへの真しん摯しな愛のみ。キミが苦しんでいたら、見返りなんて一いっ切さい求めず、とにかく助けてあげたい。イイヤ、どうか何なに卒とぞ助けさせてもらえないだろうか？　それがボクの望みなんだ」

「めっちゃくっちゃあやしーんだけど」

「嘘うそォ？　どこがァ？　何があやしいのかなァ？　そんなはずないヨ？　マリア、ボクを信じてくれ、イヤイヤ、信じてくれなど

とは言うまい。ただ今このときだけ、キミを抱きかかえて地上まで運ぶ、それが嫌いやなら肩かたを貸す、その栄えい誉よにボクを浴させて欲しい」

「……うーん……」

　はっきりいって、嫌だ。

　とてつもなく嫌だが、このままだと這はってアンダーグラウンドを出なければならないかもしれない。というか、この状態で跳ちよう躍やくし、穴の縁ふちに手をかけて一階へ上るなどという荒あら業わざが、果たして可能だろうか。

　無理に決まっている。

「緊きん急きゆう事態だし、仕方ない、のかなあ……」

「そうゆうことだヨ」

　渋しぶ々しぶ、無理やり、強ごう引いんに自分を納なつ得とくさせようと頑がん張ばっているマリアローズを、アジアンはさっさと抱き上げてしまった。

「ああ、全人類の夢、お姫ひめ様さま抱っこ。マリア、キミにとってこれが初お姫様抱っこだったりしたら、光栄至し極ごくだな」

「……やっぱ下ろして」

「ここまでさせておいて、そんなこと言いっこなしだヨ」

「ここまでってどこまでだよ……違ちがう、この体勢だと、痛いんだってば。怪け我が、背中だから」

「何と！　ごめん、ごめんヨ、マリア。ボクとしたことが、お姫様抱っこですっかり有う頂ちよう天てんになってしまって。さあさ、これでどうカナ？」

　アジアンは器用に体を反転させて、マリアローズを背負う格好になった。

「……うん、これならあんまり痛くはない」

「ウフッ、背中になーんだかやーらかいモノが」

「あ、あたるか！　そっ、そんなやーらかいもんなんか、僕にはついてない！」

「冗じよう談だんだヨ」

　アジアンはマリアローズに頭を小こ突づかれても、実に楽しげに笑っている。こんな男が、その筋では虐殺人形カーネイジ・ドールの異名をとっているなんて、世の中、本当にわからない。こんなやつ、人の弱みにつけこんでやらしいことをしようとする、ただの変態野郎ではないか。

「あのさ、アジアン……お尻しり触さわるのやめないと殺すよ？」

「キミに殺されるのなら本ほん望もうサ」

「じゃ、死んで」

　マリアローズは右籠こ手ての発射口をアジアンの首筋に押しつけた。あとはスイッチを押すだけだが、そのための左手がアジアンにつかまえられていて、どうしても動かすことができない。

「くっ、放せ！　僕に殺されるなら本望なんだろ！」

「放さないヨ。マリア、確かにキミに殺されるのは本望だけど、ここでボクが死んでしまったら、キミはきっと無事地上へ戻もどれないからネ。キミには死んで欲しくない」

「僕が生きようと死のうと僕の勝手だっ！」

「またそんな悲しいことを……」

　などとやっていたら、後ろの方で声がした。

　人間の声だ。

「……あのー……」

「ン？」

　アジアンがマリアローズごと振ふり返ると、折り重なるように倒たおれているメリクルどもの中から一本の細い腕が突き出て、ひら

ひらと手を振っていた。

「できれば救助していただけませんかー。どうやら自力では脱だつ出しゆつ不能らしく……厚かましいお願いだということは承知しているのですが、うう、重くて死んでしまいそうで……」

「アレはキミの友人かい、マリア？」

　アジアンに訊きかれて、マリアローズは「全然」と答えたけれども、あのまま放置してゆくのはさすがに気が引ける。

　そう──怪我はしたものの、命拾いはしたことだし、後々この出来事を恩に着せるなり何なりして、コロナを利用することもできるかもしれない。

　とはいえ、利用価値があるのかどうか。きわめて微び妙みようというか、たぶんなさそうだが。

「──友だちではないけど……一応、助けてやって。あと、ついでに僕の剣けんと金目の物も拾っといてね」

Omenage 897 6th revolution 17th day

サンランド無統治王国首都エルデン第五区・第一王立銀行前広場
〝鉄鎖の憩い場（アイアンチェインスクウェア）〟

chapter.2

暴行未遂決闘未満

アンダーグラウンドを出て、第六区のアサイラムで医術士モリー・リップスに治ち療りようしてもらったあと、市場や銀行に用があったので、第五区の第一王立銀行方面へ足を向けた。

第一王立銀行は、無利子無期限で金銭を預かってくれ、預けた金は国内十一箇か所しよにあるどの王立銀行でも引き下ろすことができる。無統治と銘めい打うったサンランドで、王が国民に提供するいくつかのサービスのうち一つが、このバンキングシステムだ。

ちなみに、行員はキング・グッダーによって擬ぎ似じ生命を与あたえられた魔ま導どう兵へいが務める。よって、横領など起こりえないし、人件費もかからない。銀行強ごう盗とうを企くわだてる者は、各銀行に配置された平均三百以上の魔導兵を撃げき破はしなければならない。鈍にび色いろの甲かつ冑ちゆうで全身を覆おおい、命を惜おしまず、しかも完かん璧ぺきな連れん携けいでもって鬼き神しんのごとく戦う彼らに挑いどもうとする者は、まずいない。

第一王立銀行前広場の各所には、そんな魔導兵たちが立ち、あるいは巡じゆん回かいして、事が起これば即そく座ざに集合できる態勢を常時維い持じしている。国中でもっとも利用者が多く、窓口の数も一番多い銀行だから、ここには総勢千に及およぶ魔導兵が配備されているという。

それで、鉄鎖のアイアンチエイン憩い場スクウエア。

鉄てつ塊かいのごとき魔導兵どもが、始終うろついてこの場を警けい固ごしていることから、そう呼ばれるようになった。

ただ、もしここで一いつ般ぱん人じんが誰だれかに暴行されても、魔導兵は助すけ太だ刀ちしてはくれない。その意味では、必ずしも安全な場所ではないのだが、彼らの助力をえる手段はある。そこらじゅうにいる魔導兵にくっついてしまえばいいのだ。

すると、魔導兵は敵意に対して敏びん感かんだから、相手も手出しできない。手出ししたら、魔導兵どもと喧けん嘩かになる可能性がある。誰だってそれは避さけたい。

こうした事情により、銀行付近での暴力行こう為いはご法はつ度と、という意識がエルデン市民にはある。

　それはたぶん、エルデン市民だけでなく、サンランドに住む者ならたいがいは身につけている常識、生きるための最低限の知ち恵えではなかろうか。

　さて、鉄鎖の憩い場だ。

　銀行を囲む三百メーテル四方くらいのこの空間には、無数の露ろ店てんがひしめきあう市場あり、ベンチや花か壇だん、芝しば生ふなどを備えた公園あり、それらを利用する者の姿は一日中消えず、他ほかにも広場に面した建物には様々な商店が店を構え、買い物客が引きも切らず出入りしている。

　にぎやかだ。活気があって、混こん沌とんとしている。スリが横行し、くだらない理由や交こう渉しよう事に端たんを発する罵ののしりあいが絶えることはない。けれども、殺しあいや奪うばいあいより、駆かけ引きや騙だましあいの方が重んじられるという点において、エルデン中でもっとも健全な場所かもしれない。

「──で」

　マリアローズはベンチに腰こしかけてアイスクリームを舐なめていた。

　六巡じゆん月げつ　中ちゆう旬じゆん。永遠エターナル大陸コンチネントルミナス・アルファ、通つう称しようαアルフア大陸の北西部に位置するエルデンに、夏はまだ訪おとずれていないが、鉄鎖の憩い場は人口密度が高いせいか、若じやつ干かん暑い。おかげで、アイスクリーム売りの露店は結構繁はん盛じようしていて、おいしそうだったから、アジアンをパシらせて買ってこさせたのだ。

　そんなことはどうでもいい。

「どうしてきみまでここにいるのさ」

「はい？」

　マリアローズの足あし許もとで石いし畳だたみの上に座りこんでいるのは、黒っぽい三さん角かく帽ぼうにローブに杖つえ、背には大きな剣というでたらめな格好のいんちき魔ま術じゆつ士しコロナだ。

「えと、どうして、と言われましてもですね、コロ、あ、わたし、

他に訪ねるあてもありませんし、せっかく縁えんあってお知りあいになることができたわけで」

「知りあい？　誰と？　誰が？」

「それはもちろん、コ、あ、わたしと」

　コロナは自分を指差してから、マリアローズとアジアンを順番に人差し指で示した。

「何ナニ某ガシさんと、何某さん、ですね」

「おいおい、キミ、待ってくれヨ」

　マリアローズの隣となりでくっつきすぎず離はなれすぎずの距きょ離りを保っていたアジアンが、身を乗り出して異議を唱えるふりをし、さりげなく体をこすりつけてきた。

「ちょっとアジアン、撃うつよ？」

「おっと、失礼。わざとじゃないんだヨ？　信じてくれ、ボクの目を見て。ほら、嘘うそをついているような目はしていないだろう？」

「瞳ひとみが薄うすい青で白目は充じゅう血けつしてないってだけで、嘘をついてるかどうかはさっぱりわからないんだけど」

「ウフ。では、覚えておいてくれ。これが世界一正直で誠実な者の目だヨ」

「なるほど。それがどさくさに紛まぎれて人の太ふと腿ももに手を這はわせる変質者の目なんだね」

「なっ！　これは……！　違ちがうんだマリア、これはボクの悪戯いたずらな手が勝手気ままに！」

「連帯責任。アイスクリームもう一個」

「フッ、しょうがないお姫ひめ様さまだネ？」

「殺す」

　マリアローズはアジアンの眉み間けんに狙ねらいを定めて、右の

籠こ手てから矢を放った。撃ってから、しまった、と思った。ここは鉄てつ鎖さの憩いこい場だ。もし矢が命中せず、巡回中の魔導兵にでも当たったら、大変なことになる。

　幸い、アジアンが異様な反射神経を発揮して、泣き叫ぶスクリーミング短剣・ダガーで矢を叩たたき落としてくれたからよかったが。

　さすがの虐殺人形カーネイジ・ドールも、やや顔を青ざめさせている。

「……今のは少々危なかったヨ、マリア」

「う、うるさい！　もとはいえばきみのせいだ！　気色の悪いことを無む駄だにべらべら喋しやべりまくるくらいなら、甘んじて僕の矢を受けるくらいの根こん性じよう見せればいいだろ！」

「ホゥ。つまりそれは何かい？　キミの矢をしっかりこの身で受け止めれば、ボクの愛を受け入れてくれると？」

「受け入れるわけないだろ、ばか！」

「あの」

　と、コロナがおそるおそるといった感じで口を挟はさんできた。

　マリアローズはぎろりとコロナを睨にらみつける。

「何だよ、疫やく病びよう神がみ。まだそこにいたの？」

「あ、はい、すみません、実はお訊ききしたいことが」

「きみに質問する権利があるとはとても思えないけど、わかった。聞くだけは聞いてやるよ。僕ときみの関係はそれで終しゆう了りよう。以後、知りあいでも何でもなし。きみがうろちょろしてると、悪いことばかり起こりそうだからね。きみって、周りを引っかき回すだけ引っかき回して、自分だけは平然としてるタイプでしょ。よく言われない？　どっか行けって」

「はあ……言われてみますと、二、三、心当たりがないわけでもなく……」

「やっぱりね。だいたい、さっきだって僕は大おお怪け我が。きみは倍化ブーストの反動でちょっと筋肉痛なだけ。何もかもきみのせいなのにさ」

「ごめんなさい……」

　コロナは悄しよう然ぜんとしているように見える。少し言いすぎただろうか。いや、こういうやつは、甘い顔をするといつまでもつきまとってくる。何というか、哀あわれっぽい目で庇ひ護ご者しやを求める野の良らの子犬みたいな風ふ情ぜいが、コロナにはあるのだ。

　残念ながら、マリアローズには野良犬の世話をしてやれるような余よ裕ゆうはない。

　正直、マリアローズだって、エルデンをうろついている野良猫ねこのようなものだし。

　同情は禁物だ。マリアローズの方が同情してもらいたいくらいなのだ。とはいえ、本当に同情されたら、かなり腹が立つだろうけれど。

「あ、それで、質問なのですが──」

　まあ、コロナもあっという間に立ち直ってしまうあたり、たいして切せつ迫ぱく感かんはないのかもしれない。

　しかも、顔を赤らめながらの、その質問とやらの内容が、またとんでもなかった。

「何ナニ某ガシさんと何某さんはご夫婦ですか？　それとも、いわゆるその……こ、恋こい人びと同士？」

「……………………」

　マリアローズの眼前を血色に染めたのは、殺意という名の赤い霧きりだった。

　一方、アジアンは態度を一変させ、親しげにコロナの両りよう肩かたに手を置いた。

「キミ、確かコロナくんといったネ？　ボクとしては実際、キミの

ようなちっこくて幼すぎる感じはまったく好みじゃないし、興味がない子にやさしくするほど暇ひまでもないんだけど、そう、博愛精神というやつかな。人類愛とでもいおうか。ということで、コロナくん、何か困ったことがあったら、ボクに相談するがいいヨ。ちなみに、ボクとマリアの間あいだ柄がらはフィアン──」

「嘘うそをつくな、大嘘を！」

　アジアンの側頭部を殴おう打だしようとしたマリアローズの右手は、だが、空を切った。読まれていたのだ。アジアンは悠ゆう々ゆうとかわした右手をつかんで体を回転させ、マリアローズを抱だきかかえるような体勢に持ちこんだ。

「嘘だなんてそんな。ボクは二人の未来予想図を語ったまでサ」

「くっ、放せ、不ふ埒らち者もの、異常者、倒とう錯さく者しゃ、変態！」

「お二人は仲がよろしいのですねぇ」

　ほのぼのとそんなことを言う肉にく弾だん系少女魔ま術じゆつ士しなど、いっそ撲ぼく殺さつしてやりたい。それがマリアローズの嘘偽いつわりない気持ちだが、両手両足を駆く使ししたアジアンの拘こう束そくをどうしてもふりほどけなかった。アジアンは上背がある方ではないし、体つきも細身に見えるのだが、敏びん捷しょうなだけでなく、やたらと力も強いのだ。

　対するマリアローズは、背が低くて体重も軽いし、鍛きたえてもあまり筋肉がついてくれない。

　小動物的な瞬しゅん発ぱつ力りょくには若じゃっ干かん自信ありだが、アジアンにはかなわない。

「むかぁっ……！　こうなったら自じ爆ばくしてやる！」

「フフッ、愛いとしいマリアに自爆なんてさせやしないヨ。さっきキミが爆薬を使った場面は見せてもらったからネ。あれはベルトのホルダーに入っているんだろう？」

「ん？」

　マリアローズはアジアンに抱きすくめられている不快感とは別の

理由で眉まゆをひそめた。

「ちょっと待って。僕がハーレム・ゴードンを使ったのって……」

「ハーレム・ゴードン？　それがあの爆薬の名前かい？　フム、聞き覚えのない名前だネ。当然、錬金士Ａ組合Ｇ製の正規品ではないだろうが、それにしてもずいぶん物ぶつ騒そうな──ハッ」

　アジアンも自分の失言に気づいたようだ。それをごまかすためだろう。アジアンはマリアローズを解放して身を翻ひるがえし、長めの前まえ髪がみをぱさりとかき上げた。

「フッ。ではマリア、ボクは償つぐないのアイスクリームを買ってくるとするヨ」

「……クソ野郎モウフオ」

　マリアローズは露ろ店てんの方へ向かうアジアンの背中に向かって低く言ってから、一つため息をついた。

　アジアンめ。裏迷めい宮きゅうであんなことが起こるずいぶん前から、やつはマリアローズの行動を観察していたのだ。少なくとも、マリアローズがハーレム・ゴードンを使ったときにはもう、どこかで息をひそめて機会をうかがっていたに違ちがいない。

　つまり──アジアン、颯さつ爽そうと登場してマリアローズを危機から救い出す。→マリアローズ、アジアンに感謝。→「あれ？　何だか感謝だけじゃないような気がする」→「これって恋？　もしかして愛……？」→アジアンの未来予想図が実現。→そんなわけあるか。

　まあ、助けられて命拾いしたのは事実だ。嬉うれしくもありがたくもないが、メリクルの晩飯になるよりマシな結果であることは否定できない。金の面でも、怪我の治ち療りよう費ひはアジアンが勝手に払はらったし、アイスクリームも奢おごらせたから、非常に腹立たしくはあるものの、今回のところはプラスマイナスゼロということにしておくべきか。

　というか、実は上位種アドゴニーとグレゴリーの持ち物でめぼしいものをアジアンにいくつか運ばせて市場で売り払ったから、収支でいえば完全にプラスなのだが。

いずれにせよ、コロナについては話が別だ。

「さ、質問は終わったんだ。消えなよ。それから金輪際、僕の前に姿を現さないでね」

「あっ、は、はい」

コロナはいそいそと立ち上がったが、不満げというより不安げだ。

「あの、えと、どうもその、コロナ、あ、わたしが未熟なばかりに、色々とご迷めい惑わくをおかけしてしまった模様で」

「ああ」

マリアローズがそっけなく応じると、コロナはうつむいて下した唇くちびるを噛かんだ。

思うに、きっとこの子はこれまで何度も同じようなことをしでかして、同じような扱あつかいを受けてきたのだろう。そのたびに自分を勇気づけて立ち直り、また失敗を繰くり返すわけだ。彼女自身も大変だろうが、周りはもっと大変だ。はっきりいって、傍はた迷めい惑わく以外の何ものでもない。

しばらくすると、コロナはやっと気持ちの整理がついたらしく、笑え顔がおを浮うかべて頭を下げた。

「ではコロ、いえ、わたしはこれにて失礼します。またお会いする日まで、お元気で」

少しばかり痛々しい笑顔だった。

マリアローズはコロナから顔をそむけた。

「だから、もう会わないんだってば」

「あ、そうでした」

「行って」

「はい……あの、マリア、さん」

コロナにそう呼ばれても、マリアローズは別に驚おどろかなかっ

た。アジアンがマリアマリアとやかましいくらい口にしていたし、それがマリアローズの名だとわからない方がどうかしている。

「何だよ？　いったい」

「いえ、あ、その、マリアさんって……」

「僕がどうしたのさ」

「お、おきれいですね。とても。すごく。わたしはほら、こんなですから、鏡とかもほとんど見ないのですが、マリアさんはきれいなので感動してしまい……それだけです！　それでは、コロナ、行きます！」

　コロナはそれだけ言うと、回れ右して駆かけ去っていった。

　まったく、言うに事欠いて「きれい」とは。マリアローズはコロナを追いかけてひっつかまえ、怒ど鳴なりつけてやろうかとも思ったが、何だか面めん倒どうだ。もうどうでもいい。どうせ今後、そこらですれ違っても、話をすることもないはずの相手だ。

　とにかく、これで疫やく病びよう神がみは追い払った。明日はまた一人で暗視鏡をつけ、裏迷めい宮きゆうの粘ねばつく濃のう淡たんの暗くら闇やみの中、たやすくしとめることができそうなメリクルを捜して、捜しまくり、殺して、値段がつきそうなものを奪うばい、市場で売って―

　侵入者クラツカー稼か業ぎようにに手を染めてから、約二年半。

　色々とひどい目に遭あったり、死にかけたり、食えなくてひもじかったりしながら、一人でメリクル第一迷宮か第二迷宮あたりをうろつくのが無難だと結論づけたのが、一年半ほど前。

　それから、ついに裏迷宮を発見して、半年。

　エルデンで手っ取り早く金を稼かせごうと思えば、クァラナド歓かん楽らく街がいで体を売るか、侵入者クラツカーをやるしかない。特に、アンダーグラウンドにわんさと眠ねむっているはずのお宝を入手できれば、エルデン以外では一生身を粉にして働いてもまずお目にかかれない大金を稼ぎ出せるはずだ。

　誰だれしもがそう考えて侵入者クラツカーに身をやつすのだが、

成功者はほんの一ひと握にぎりにすぎない。大部分は生活に追われてその日暮らしだ。

エルデンでの侵入者クラツカー稼業には大きな落とし穴があるのだ。

実は、この物ぶつ騒そうな首都周辺にはのんきに農耕牧ぼく畜ちくをやっていられる場所がないため、輸送費その他が上乗せされて食しよく糧りようが馬ば鹿か高だかい。また、侵入者クラツカー稼業にも色々と金がかかる。とりわけ、マリアローズのように装備に工夫を凝こらして非力さを補わざるをえない者は、人一倍、生き抜ぬくために金を使っている。

だったら、もう足抜けしてしまえ──と思ったことも一度や二度ではないが、しかし、辞やめていったいどうする？　マリアローズが銀行に預けてある蓄たくわえ程度では、商売の元手にもならない。かといって水商売は嫌いやだ。いっそこの国を出るか？　出てどうする？

結局、先立つものがなければ、何をするにしても身動きがとれないということだ。

つまりは、金だ。

侵入者クラツカーの間では語り草になっているが、アンダーグラウンドで稼ぎ出した金でどこぞの小国を丸ごと買収し、王になりおおせた者だっている。坊主ぼうずに蘇そ生せい式しきを施ほどこしてもらうのにも金がかかる。場合によっては、命さえも金で購あがなえてしまうのだ。

だから、銀行で預金残高を確かめ、一いつ喜き一いち憂ゆうするのがマリアローズの日課だった。

今日は出費があって五百ダラー。今日は千ダラー。今日は大当たりで三千ダラー。傷いたんだ装備を買い直し、大きく目減りしたぶんを取り戻もどすため、しばらくちょっと無理をしよう。頑がん張ばったあとは自分へのご褒ほう美びに、少し高級な食堂で美う味まい飯でも食って、無む駄だ遣づかいだったと後こう悔かいし、また裏迷宮へ向かう。貯ちよ蓄ちくは徐じよ々じよに増えていっている。順調だ──順調、だって？

　みみっちい。

　何てしみったれているのだ。悲しくなってくるが、どうしようもない。何か劇的に状じよう況きようが変わるような手でも打たなければ、今までどおりコツコツやってゆくしかない。

　だが、今回のようなことがあると、それさえもあやしくなってくる。

　たとえば、コロナの存在が偶ぐう然ぜん、マリアローズに不運をもたらし、運悪くあんな事態になったという見方もある。

　一方で、今までたまたま運よくグレゴリーやアドゴニーといった上位種と巡めぐり会わなかっただけ、という考え方もできる。

　これから先も裏迷宮に通うとすれば、また上位種と出くわすかもしれない。

　その可能性は否定できない。いつもアジアンが助けてくれるとは限らないのだ。というより、アジアンをアテにすること自体、間ま違ちがっている。

　限界。

　アンダーグラウンドがエルデンと〝古代九く頭ず竜りゆうの呪のろい〟に蓋ふたをされ、異界生物フリークスたちが決して地上へ出られないように、マリアローズの頭上にも蓋がある。

　息苦しい。自分は━雑ざ魚この中の雑魚。その他大勢。いつまでも一人でちまちまやっていて、何になる？　たかだか数巡じゆん月げつ分の生活費にしかならない程度の預金残高を眺ながめ、誰にも頼たよらず一人でやっているにしては、まあよくやっている方だ、なんて！

　馬ば鹿かみたいだ。こんな気持ちのまま、明日もまた一人で裏迷宮？

　ダメだ。行けない。嫌だ。あの鶏にわとりくさい空気の臭においも嗅かぎたくない。もし、上位種に遭そう遇ぐうしたらどうする？　死ぬ。次はきっと本当に死ぬ。屍しかばねをさらし、腐くさってゆき、無に帰して、何も残すことなく、ただ死ぬ。一人で死ぬというのは、そういうことだ。

　嫌だ。しかし、このままだとそんな未来しかないように思える。何か。どうかしないと。

「マリア？」

　不意に自分の名を呼ぶ声がして、マリアローズは顔を上げた。

「……何だ、アジアンか」

「何だはないだろう。ほら、アイスクリームを買ってきたヨ。あれ？　あのちっこいのはどうしたの」

「どっか行った」

「フム。まあ、ちっこいのにはもともと興味がないし、どうでもいいか。ボクはキミがいればそれでいいんだ。たとえ世界が灰になっても、キミさえいれば、それでネ」

「あっそ」

　アジアンから渡わたされたアイスクリームはチョコミント味だった。舐なめると脳天に突つき抜けるほど冷たくて、ミントの清せい涼りよう感かんとチョコレートの甘さがふわりと口の中に広がる。おいしい。

　こう見えて、アジアンは物知りだ。どの露ろ店てんのアイスクリームが一番上等な食材を使っているかまで知っている。強いだけでなく、役に立つことも、くだらないことも、よく知っている。

　隣となりに座り、にやにやしながらマリアローズを眺めているアジアンを横目で見て、不公平だ、とマリアローズは思う。

　初めてアジアンと会ったのは、一年くらい前か。あのときも、アンダーグラウンドの出入口で、薬物ジヤン中毒者キーの悪党バスターどもに襲おそわれていたところを救われた。以来、アジアンはマリアローズにつきまとってくるようになって、それからも何度か助けてもらった。

　アジアンはずっと強かった。マリアローズはずっと弱いままだ。

　マリアローズも、アジアンくらい強かったら、一人でも平気なのだろうか？

　さらに、アジアンときたら、こんなに変なやつなのにクランを率いていて、仲間までたくさんいるのだ。

「ね、アジアン」

　二つめのアイスクリームを食べ終えたマリアローズは、ベンチの上で片方の膝ひざを抱かかえこんだ。

「クランって、どんな感じなの」

「ン？　どうしたのサ、いきなり」

　アジアンは怪け訝げんそうに細い眉まゆをひそめた。

「キミは、そう、団体行動というのかな。群れるのが嫌きらいな人だと思っていたけど」

「嫌いだよ。てゆうか、できない。誰だれかと稼かせぎを分けるのとか、嫌いやだし」

「まあ、ウチにも、人嫌いであまり協調性のない輩やからはいないわけじゃないんだけどネ」

「昼飯時ランチタイム、だっけ」

「ウン。ただ、クランといっても様々だヨ。ウチにはウチの、ヨソにはヨソの色があって。ウチに限っていえば、別にこれといった目的があって集まった連中じゃない。あぶれ者の集まりみたいなものサ。でも――」

　アジアンは肩かたをすくめてみせた。

「結構、面めん倒どうなものだヨ。人が大勢いるというだけで、色々、シガラミとかサ。義理とか、通さないといけない筋もあるし。したくないことをやらざるをえないときだってある。一人ならうざったいからやーめたで問題ないけど、クランに身を置くとそうはいかない場合が出てきたりするしネ」

「ふうん……」

　アジアンの口調はいつになく真実味があって、ふざけていなかった。さすがにクランを束ねる立場にいると、変態鬼き畜ちくにもそ

れなりの苦労があるのだろう。

　だが、マリアローズの興味はそんなところにはない。

「けどさ、たとえば、クランの仲間と一いつ緒しよにアンダーグラウンドに潜もぐったり、なんてこともあるわけでしょ？」

「それはネ」

　アジアンはうなずいた。

「この街で多少なりとも腕うでに覚えのある者なら、侵入者クラッカーの真ま似ね事ごとは誰でもしているし。何人かで組んだ方が、安全で効率がいいのは確かだからネ。ボクはあまり興味がないけど、Ｄ１とかＤ２の奥の方にある竜りゅうの寝ね床どこ、あとはＤ13のダーナムレーンかな。あのあたりは、ウチの連中もよく攻せめてるみたいだヨ」

「全部やばいとこばっかじゃないか」

　アジアンが挙げたのは、アンダーグラウンドの中でもかなり危険とされていて、とんでもない財宝が入手できるという場所だ。それはもう、メリクル迷宮なんか目ではない。エルデンに商品を仕入れにくるα大陸中の商人どもが、百万、千万単位の金と引き換かえにしてでも欲しがる品々が、そこでは手に入るらしい。

　マリアローズの口からため息が洩もれた。

「……一人でやってたんじゃ、いつまで経たってもそんなとこには行けないんだろうな。死んじゃったらおしまいって頭がどうしてもあるから、リスクは冒おかせないし」

「マリアは大だい丈じよう夫ぶサ。何かあっても、ボクがいつも見守っているヨ？」

　アジアンの戯ざれ言ごとなんかどうでもいい。正直、内心でかなり迷いはあったが、思い立ったが吉きち日じつという言葉もある。行きづまった現状を打開するために、これ以外の手段は考えつかないし、今を逃のがせば二度とそのチャンスは巡めぐってこないかもしれない。

　マリアローズは思いきって言った。

「あのさ、僕が……昼飯時ランチタイムに入るってのはどうかな？」

「ダメ」

　アジアンはこれっぽっちの躊ちゆう躇ちよも見せず、即そく座ざに右手と左手の人差し指で×を作った。

　これは予想外の反応だった。

　実は、自分に好意を持っているらしいアジアンなら、まず拒きよ否ひしないだろうという計算もなくはなかったのだ。そうでなければ、いくら勢い任せとはいえ、こんな恥はずかしいことを言ったりはしなかった。

　そう、マリアローズは顔から火が出るくらい恥ずかしかった。

　今まで一人で全然平気だとうそぶいて、つんとしていたのに、やっぱりどうか仲間に入れてくださいと下手に出て、挙句、あっさり断られるなんて──

「……どうしてさ？」

「とにかくダメ」

「いいだろ、ケチ。一人くらい増えたってどうってことないじゃないか」

「ダメ。絶対にダメだ。ウチの連中は柄がらがよくないし、そもそもクランに入っている人間なんて、たいがい血の気が多いろくでなしの精神異常者だヨ。ボク以外はネ。それに、マリアみたいに可か憐れんな人には別の危険もある」

　可憐、という箇か所しよが引っかかったけれども、マリアローズは構わず訊きいた。

「別の危険って？」

「それはネ──」

　と、アジアンが眉をひそめて空に指を向けた。つられてそれを目で追ったマリアローズは、だが、一いつ瞬しゆん後には視線をもと

の位置に戻もどして仰ぎよう天てんした。

　いない。目の前にいたはずのアジアンが、忽こつ然ぜんと姿を消してしまっていた。まばたきほどの間に、いったいどうやって？　どこへ？

　そんなことを考えていると、後ろから耳じ朶だにふっと熱い吐と息いきを吹ふきかけられた。

「は……なっ！」

「こ・お・ゆ・う・こ・と・だ・ヨ」

「くっ、アジアン！」

　とっさに振ふり向こうとしたマリアローズを、アジアンが後ろから羽は交がい締じめにした。それだけにとどまらず、あろうことかアジアンは、真しん紅くの頭とう髪はつに鼻の頭を突つっこませ、マリアローズの首筋に唇くちびるを押しつけようとした。

「フッ、キミの美しさは人を惑まどわす。甘かん美びなる幻げん想そうと快感を与あたえる麻ま薬やくなのだヨ。危険だ、ああ危険だとも、荒あらくれ者どもがキミに群がり、襲おそいかかる光景が目に見えるようだっ」

「や、やめろ！　放せったら、この！」

　マリアローズはアジアンの脇わき腹ばらに肘ひじ鉄てつをお見み舞まいしたが、まったくきいていないようだ。懸けん命めいにアジアンの腕を引き剥はがそうともがいても、いかんせん力の差がありすぎる。

「ばか変態鬼畜卑劣悪漢極悪非道最低最悪凶悪助平！　放せ放せ放せ……！」

「放さない。放すもんか。ウフフ、そう、ボクは最初からこうするべきだったのかもしれないネ？　この国の掟おきてに従って、欲しいものは力ずくで手に入れる。でも大丈夫だヨ、マリア。キミだってすぐに嫌いやじゃなくなるサ」

「ならない！　なるわけないだろ！　やめろったら！」

　暴れ、わめくマリアローズを、通行人や屋台の主人やその客や休きゆう憩けい中ちゆうの人々らが見物している。が、助けに入る物好きはいない。いるはずがない。たとえ公然と殺人が行われたとしても、大多数の者は見すごすだろう。それがサンランド無統治王国だ。

　こんなときにマリアローズがとりうる手段といえば、魔ま導どう兵へいを巻きこんでアジアンを退治させることくらいだが、折おり悪あしく近くに魔導兵はいない。いたとしても、魔導兵の陰かげに逃にげこむなどできないだろう。本気を出したアジアンが、それほど迂う闊かつであるはずはない。

「がぁうっ……！　や、やめろー！」

　それにしても、アジアンは巧こう妙みようで、マリアローズの脇腹をくすぐったり、首筋から耳に吐息をかけたり。襲われているのに、マリアローズの顔は朱しゆに染まって、ひょっとしたら襲われているようには見えないかもしれない。

　誤解だ、と叫さけびたかった。

　けれども、自分はこの男に襲われているのだと宣言したところで、何の意味があるだろう。誰だれも助けてなんかくれない。

　もうこのまま、マリアローズは昼日中、人前で──

「おい」

　そのとき、天の恵めぐみのように降り注いだ低い声は、アジアンのものではなかった。

　振り返ると、マリアローズから見て右の方向、ちょうどアジアンの背後をとる位置に立っている男は、おそらくただ者ではない。アジアンがとっさにマリアローズから離はなれ、殺気をみなぎらせて身構えたという事実が、そのことを証明している。

「……気配を消して他ひ人と様さまの背後に忍しのびよるなんて、あまりいい趣しゆ味みじゃないネ」

「公衆の面前で婦女子を暴行しようとしてた輩やからが言う台詞せりふじゃないな」

普ふ段だんのマリアローズなら、人を婦女子呼ばわりした男に、まず激げき怒どするところだ。

しかしながら、今は怒いかりよりも驚おどろきが先に立ち、次いであまりに馬ば鹿か馬鹿しくて気が抜ぬけた。

だって、その男ときたら、オレンジ色の炎模様フアイヤーパターンで端はし々ばしや脇が飾かざられた濃のう紺こん色の奇き抜ばつな全身鎧よろいを身にまとい、表地が濃紺で裏地が赤の外がい套とうをなびかせ、装そう飾しよく過か剰じような大剣を背負い、手にはなぜか木製の看板を持っているといういでたちなのだ。

鎧や大剣にしても、安物ではないだろう。よく見れば、男自身も涼すずしげな目鼻立ちの中にも浅黒い肌はだや眉まゆに精せい悍かんさが漂ただよい、意志の強そうな唇が印象的で、なかなか男前ではある。

けれども、それらを打ち負かす無む闇やみな派手さとアンバランスさがあいまって、この男を一種の道どう化け師しに見せていた。

「そこのお前、大だい丈じよう夫ぶか」

マリアローズに向けられた道化師の目は、黄玉トパーズに似ている。まるで満腹のときの獣けものみたいに静かで、その奥底にただならぬものを秘ひめていそうだった。

「見たところ、剝むかれてもいないし、怪け我がもないようだが」

「むっ、剝かれてたまるか！」

マリアローズはようやく我に返って立ち上がり、道化師につめよると、自分の目の位置が相手の胸にあった。結果、どうしても道化師を見上げることになって、自分の体格に劣れつ等とう感かんを持つマリアローズとしては、不ふ機き嫌げんにならざるをえない。

「だいたい、僕は婦女子なんかじゃない！　訂てい正せいしろ、この独う活どの大木！」

「そうなのか。そいつはすまなかった。きれいな顔をしてるから女だと思ったんだ」

道化師は眉一つ動かさずにそんなことを言った。

　マリアローズにしてみれば、それがまたいっそう頭にくる。

「あのさ、きれいとかかわいいとか、そういう歯の浮うくような台詞は、女の子を引っかけるときに使うものだろ。この僕に向かって言わないでよ！」

「別に男でもきれいなやつはいるぞ。逆に女でも醜みにくいやつはいるだろう」

「冷静に反論するな！　とにかく、これ以上、僕のことをきれいとか言ったら殺す！」

「わかったわかった。それより、だ」

　道化師は鷹おう揚ようにうなずき、マリアローズを押しのけてアジアンに向き直った。

「お前はまだ俺に用がありそうだな」

「ああ、あるヨ。当然じゃないか」

　アジアンは腰こしの鞘さやから泣き叫ぶスクリーミング短剣・ダガーを抜き、蒼あおざめたその刃はを舌先で一ひと舐なめした。

「いいところで邪じや魔まをして。挙句、ボクのマリアと親しげに口をきく。いったい何者なんだ、キミは？　見たところ、マリアとは初対面のようだが」

「ちょっとアジアン、いつから僕がきみなんかのものに──」

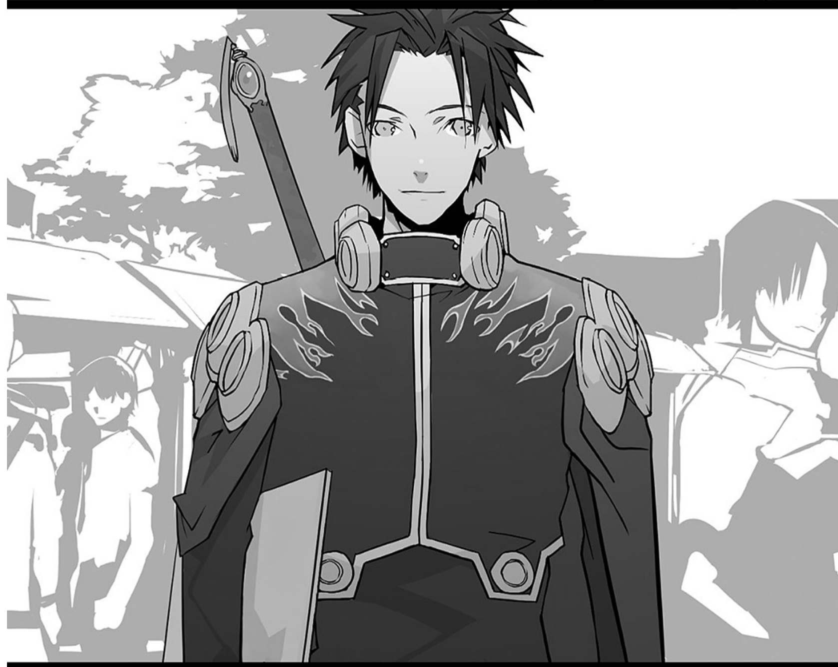
「まあ、ここは俺に任せろ」

　道化師が長く逞たくましい左ひだり腕うで一本でマリアローズを押さえ、右手で持っていた看板を預けてきた。

「悪いが、これを預かっていてくれないか」

「え？　あ、ああ、うん……」







　マリアローズは看板を受けとって、書かれた文字をざっと読んだ。

《α大陸動物化計画推進中！　我々ＺＯＯズーは加盟者募ぼ集しゆう中ちゆうです！　※老ろう若にやく男なん女によを問いませんが、日常生活に支障のない体力の持ち主に限らせていただきます。

ご了りよう承しようください★》

　とあるが、何だ、これは。

　また、看板の意味不明な文面より、もっと気にしなければならないことがあるように思えた。

「──って」

　マリアローズはここがどこかと考える。考えるまでもなかった。ここは多数の魔導兵がうろつき、刃にん傷じよう沙ざ汰たはご法はつ度ととされ、エルデンで一番安全だと信じられている場所だ。

　それなのに、アジアンの手には魔導王時代の秘宝、泣き叫ぶスクリーミング短剣・ダガーがあった。

　そして、今、道化師も背中の大剣を抜き放とうとしている。

　よりにもよって、ここで。

　鉄てつ鎖さの憩いこい場で。

　彼らは抜き身の剣でもって、喧けん嘩かをおっぱじめようとしていた。

「……マジ？」

　しかも、その原因はマリアローズなのだ。彼らが勝手にやっているわけだから、責任を感じたりはしないが、完全な第三者として野次馬に徹てつするほどまでには割り切れない。

「ね、ねえ、二人とも。場ば所しよ柄がらもあるし、いくら何でもここじゃ……」

「フッ、ボクを見くびらないでくれ」

　アジアンが酷こく薄はくそうな笑えみを唇くちびるの端に浮かべ、泣き叫ぶスクリーミング短剣・ダガーをくるりと一回転させた。

「キング・グッダーの魔ま力りよくは確かに偉い大だいだヨ。それは認める。でも、魔導兵なんか怖こわくない。そこのキミだって同

じだろう？　それとも、ここでボクとタイマン張るのは嫌いやかい？」

「いや、俺も構わんぞ」

　事もなげにそう答えた道化師の大剣が、これまた見たこともないような形状をしていた。

　鈍にぶく琥こ珀はく色いろに輝かがやくその刀身は、まっすぐではない。波打っている。一見、実用品ではない、飾かざり物ものかと見み間ま違ちがえるくらいだが、そうではないことはすぐにわかる。たぶん三歳児でも、彼の大剣が秘める威い力りよくのほどは感じとれるだろう。

　きっと、あの剣は鋼鉄を飴あめのように斬きり裂さく。人などたやすく両断してのけるはずだ。

　凶きよう暴ぼうさと厳格さが同居したその刃は、見る者を恐きよう怖ふというよりも畏い怖ふさせる。

　魔導王時代の秘宝の一つに数えられるような、あるいはもっと貴重でえがたい、人の手にあまるほどの稀まれなる剣。

　ただ、その所有者が炎ほのおの紺色道化師だというあたり、滑こつ稽けい感かんは否いなめない。

「だけど……」

　彼らは本当にここで決けつ闘とうするつもりなのだろうか。もはやマリアローズだけではない。ここいら一帯にいあわせた者は皆みな、固かた唾ずを呑のんで二人の動向を見守っている。

　そんな緊きん迫ぱくしきった空気の中、道化師は実にふてぶてしく悠ゆう然ぜんと構えていた。

「ほう。なかなかいいものを持ってるじゃないか。泣き叫ぶスクリーミング短剣・ダガーか」

「よくわかったネ。でも、キミのも負けてなさそうだな」

　一方、アジアンは口ぶりほど余よ裕ゆうはないか。一目で得物を泣き叫ぶ短剣と見破られ、手の内を一つあばかれただけでなく、道

どう化け師しとその剣の不気味な存在感を警けい戒かいしているのかもしれない。マリアローズはこんなに真しん剣けんで剣けん呑のんなアジアンを初めて見た。

「名を聞いておくべきところかもしれないが、自らの手で命を奪うばった敵に墓を作ってやる趣しゆ味みはないのでネ。墓石に刻む名など聞いても意味がない」

「洒落しやれたことを言うやつだ。しかし、無む駄だなお喋しやべりをしている暇ひまがあったら、さっさとかかってきたらどうだ？」

「そうさせてもらおう……！」

　叫ぶなり、アジアンが跳とんだ。

　真上に。

　と思ったら、一いつ瞬しゆん後にはアジアンの姿は掻かき消えていた。

　道化師が大剣を横よこ薙なぎに振ふり回した。空気を引き裂くというより、叩たたき壊こわすかのような音がしたものの、空から振ぶりだ。道化師は何を狙ねらったのか。ただ闇やみ雲くもにアジアンの接近を防ごうと、剣を振っただけなのか。否。違う。そうではなかった。

　現に、アジアンは身を低めて道化師の剣をぎりぎりでかわしていた。

　上へ跳ちよう躍やくしたはずが、どうしてそこに。

　誰だれもがそんな当たり前の疑問を抱いだくより早く、アジアンはそのままスライディングして道化師の足を払はらおうとし、最小限の動作でこれをよけた道化師が大剣を振り下ろした。アジアンもすかさず横に転がってこの斬ざん撃げきから逃のがれ、素す早ばやく距きよ離りをとった。

「──結構やるネ……」

「すばしっこいやつだな。だが」

　道化師は大剣を肩かたに担かつぐような構えをとって、ニヤリと笑った。

「来いよ。一いち撃げきでしとめてやる」

「できるつもりかい？　自信家だネ……嫌きらいだな、そういう男」

「お前は本気を出してないみたいだからな。手て抜ぬきじゃ俺には勝てん」

　たった数秒、まだ剣をあわせてさえいないというのに、道化師は何かを見み透すかしたようにそんなことを言った。しかも、驚おどろいたことに、それは的外れな指し摘てきではなかったようだ。

　アジアンがかすかに唇を歪ゆがめた。

「フッ、お見通しか」

「勘かんだけどな」

　道化師は軽く肩をすくめてみせ、先に剣を鞘さやに収めた。

「何のかの言ってここは戦うような場所じゃない。おそらく、特にお前にとってはな。どうしても今、決着をつけたいんなら、場所を変えるか？」

「イーヤ」

　アジアンも泣き叫ぶスクリーミング短剣・ダガーを腰こしの鞘に戻もどして首を横に振った。

　その瞬間、鉄てつ鎖さの憩いこい場周辺で止まっていた時が動き出し、群衆も緊きん張ちようから解放された。

「やめておこう。その必要があれば、きっとまたどこかで敵同士として出会うはずサ。決着はつけるつけないも含ふくめて、そのときまで保留しておくヨ」

「そうか」

「名も訊きかないでおく。ボクも名乗らない」

「ああ。好きにすればいい」

「フフッ、いちいち気に食わない男だヨ」

　アジアンは身を翻ひるがえして立ち去ろうとしたところで足を止め、首だけ振り向かせた。

「マリア、ボクはいつもキミを見守っているからネ」

「見守ってくれなくて結構。むしろ、見ないで」

　マリアローズが冷たく返すと、アジアンはひどく寂さびしそうな微笑しようを浮うかべた。それ以上、何も言わずに雑ざつ踏とうの中へと消えてゆく後ろ姿も、まるで親を求めてさまよう迷い子のようで、どこか痛ましい。

　何だか、調子が狂くるう。

　いや、あれはきっとアジアンの演技に違ちがいない。

　マリアローズは自分にそう言い聞かせ、あらためて道化師に向き直った。

「んーと……一応、お礼とか言っといた方がいいのかな」

「別にいらんぞ。俺が勝手にしゃしゃり出ただけだしな。それより、看板」

「え？　ああ、これね」

　看板を手にした道化師は、「さて」と空いた手で褐かつ色しよくの頭とう髪はつを掻き回した。

「勧かん誘ゆう、続けないとな。しかし、朝から誰一人として見向きもしてくれん。いい加減、暇だったもんでそこらを眺ながめてたら、変な男に絡からまれてるきれいな女を見かけて」

「……女じゃないんだけど」

　マリアローズの両目から一瞬、殺人光線デス・レイが放射されかけた。わざとではないのかもしれないが、何だか少しとぼけたところのある男だ。

「あと、きれいとかって言い方もしないで欲しいって、僕、言ったよね」

「そうだったか？　まあ、許せ。悪気はないんだ」

「自分で言うことかな、そういうの」

「ヒヒヒ」

　と、唐とう突とつに道化師がやたらと下品な笑い方をしたので、マリアローズは意表をつかれた。鎧よろいや剣と看板などの組み合わせは確かに悪目立ちするものの、落ち着き払った言動や泰たい然ぜん自じ若じやくとした雰ふん囲い気きに、この笑い方はまるでそぐわない。

「……変なやつ」

「何か言ったか？」

「いや、別に。ところで、その看板に書いてあるα大陸動物化計画って何？」

「おお、興味があるのか？」

　道どう化け師しは看板をばんと掌てのひらで叩き、眉まゆを上げて目を細め、唇くちびるの両りよう端たんをつり上げた。そんな大おお仰ぎような表情の作り方も、彫ほりが深くて男くさい中にも品のある彼の顔には、あまり似合わないとマリアローズは思う。

「興味っていうか。わけがわからないから、気になっただけだよ」

「わけがわからない？　ふむ、そうか。だったら、一つうちに入ってみるか？」

「うちって？」

「俺のクランだ」

　道化師は看板に書かれた文字のうち《ＺＯＯ》の部分を指差した。

　マリアローズは顔をしかめて読んでみる。

「……ズー？」

「ああ。動物園という意味だ」

「どーぶつえん？　何それ？」

「うむ。まあ、ここには動物園なんてないものな。簡単にいえば、色んな動物を集めて檻おりに入れたり、柵さくで囲ったりして、見物できるようにした場所のことだ」

「そんなことしてどうするの？」

「だから、見物するんだ。芝しば生ふで弁当を食ったりしてな。だが、ゴリラなんかは糞ふんを投げつけてきたりするから、油断は禁物だぞ」

「ごりら？」

　マリアローズは混乱しそうになった。どーぶつえんだのごりらだの、珍ちん妙みよう奇き天て烈れつな言葉をぽんぽん口に出すこの男のことがわからない。理解できそうもない。そもそも、理解しなければならないのだろうか。

「うーん……謎なぞすぎ。謎は謎のままにしといてもいいんだけど、何かこう、もやもやしたものが……」

「そいつはよくない」

　道化師がマリアローズの腕うでをとってニンマリした。

「もやもやは晴らしておくべきだな。よし、善は急げだ。行くぞ」

「い、行くって、どこに？」

　本来、ここで尋たずねるべきは「どこ」ではなく「なぜ」だ。すっかり道化師のペースに巻きこまれたマリアローズは、自分のあやまちに気づかなかった。

「それほど遠くじゃない。うちのアジトというか、たまり場みたいなところがあってな。暇ひまなやつはだいたいそこにいるんだ」

「へ？　あ、いや、だけど僕は」

「来るだけ来てみて、嫌いやだったら帰ればいいだろう。うちに入るかどうかまでは無む理り強じいしない。それとも、何か用事でもあるのか」

「別に用事はないけど」

「だったら、いいじゃないか。確か、何人かアンダーグラウンドに潜もぐってる連中はいるはずだが、ユリカは残っていると思うし、大だい丈じよう夫ぶだな」

「アンダーグラウンド……」

　その単語がマリアローズの脳のう裏りを駆かけ巡めぐり、アジアンと互ご角かくに渡わたりあう道化師の姿が浮うかび上がった。

　この男は強い。アジアンと同等、もしくはそれ以上に。

　そんな男の仲間なら、たぶんそれなりの力は備えているだろうし、彼らを利用すれば、メリクル相手のしみったれた侵入者クラッカー稼か業ぎようともおさらばできるかもしれない。アジアンには昼飯時ランチタイムへの加入を断られたわけだし、ひょっとしてこれはチャンスではないのか。

「……かも」

「鴨かも？」

「や、こっちの話。わかった、行くよ。とりあえず、行ってみるだけね。うん、行くだけ行くだけっと」

「そこまで強調しなくてもいいだろう」

「いーから、はい、さっさと連れてく。ほらほら」

「ああ」

　道化師はマリアローズに背中を押されて歩き出した。

　ところがこの男、無む駄だに背が高いために、マリアローズとは歩ほ幅はばが違ちがう。同じ歩調で歩いているとすぐに差がついてしまうので、マリアローズはかなり早歩きしなければならない。そんなことは言わなくても気づけよという話だが、マリアローズの方

から「ゆっくり歩け」と要求するのも何だか腹立たしい。

　やむをえず、マリアローズは一いつ生しよう懸けん命めい足を動かしていたのだが、突とつ然ぜん、前を行く道化師が立ち止まった。

「痛っ」

　マリアローズは道化師の胸きよう甲こうに鼻の頭をぶつけた。

　この男、足を止めるのと同時に、百八十度回転したらしい。

「……止まるなら止まるって言ってよね」

「ああ、すまん。まだお前の名を訊きいてなかったと思ってな」

「そういえばそうだっけ」

　マリアローズは少し躊躇ためらって軽く唇くちびるを噛かんでから、ぼそりと教えた。

「僕は……マリアローズだよ」

「ほう」

　道化師はわずかに目を見開いて口くち許もとを緩ゆるめた。

「これはお前自身に言うんじゃないからいいだろう。きれいな名前だな」

「あ、ありがと」

　わりあいすんなりとその言葉が口をついて出たのは、我ながら驚おどろきだった。

　だが、実は、マリアローズも自分の名は嫌きらいではない。むやみに美々しい響ひびきがあり、幼い頃ころから悩なやみの種ではあったが、両親がマリアローズに残してくれたのは、思い出以外ではこの命と名前くらいだ。天てん涯がい孤こ独どくの身だし、他ほかの名を名乗ることだってできたけれども、捨てる気にはなれなかった。

「えっと……」

　しかし、自分が大切にしているものを他人に褒ほめられて、それが嬉うれしいというのは何だか気き恥はずかしいものだ。

　照れ隠かくしに顔の下半分を右手で隠したマリアローズを、道どう化け師しが妙みような目つきで──といっても変な意味ではないが、やけにまじまじと見つめているので、余計に頰ほおやら耳たぶやらが熱くなった。

「な、何見てるんだよ？」

「うむ」

　道化師は黄玉トパーズのような両りよう眼めをわずかにすぼめた。

「お前──」

「僕がどうかした？」

「いや……」

「何だよ」

　顔に何かついてでもいるのだろうか。マリアローズはさりげなく手で顔をまさぐってみたが、別に変わったところはない。道化師がなかなか口を開こうとしないので、いい加減、痺しびれが切れた。

「あ、そうだ。僕は名乗ったんだから、きみの名前も教えてよ。それが礼れい儀ぎってものだろ」

「おお、そうだな。俺の名は」

　道化師は一つうなずいてから、真顔で名乗った。

「トマトクンだ」

「は？」

　聞き違いかと思った。

　マリアローズは首をひねって少し唸うなった。

「んーと……ごめん。僕の耳がおかしいのかな、よく聞こえなく

て。もう一回、お願い」

「ああ。俺の名は」

　やはり、聞き違いでなかったようだ。

　道化師は、はっきり、しっかりと発音してみせた。

「トマトクンだ」

「トマト……くん？」

「いや。トマトクンだ」

「トマトが名字で、クンが名前とか……その逆、なんてことはないよね」

「ない。いい名前だろう。お気に入りだ」

　トマトクンの表情は、いたって真ま面じ目めだった。マリアローズをからかっているわけではないらしい。少なくともそのように見えるトマトクンに、マリアローズは自分でも何だかよくわからないまま、押しきられるように同意していた。

「そ、そだね……」

Omenage 897 6th revolution 17th day

サンランド無統治王国首都エルデン第十一区・第二王立銀行内

〝動物園事務所（ズーズオフィス）〟

chapter.3

動物園

　それほど遠くじゃない。

　トマトクンはそう言ったはずだが、中通りやら、環かん状じよう通どおりやら、マキシマムＡＭドラゴン・ストリートやらを延々四十五分ほども歩かされ、たどり着いたのは第十一区の第二王立銀行前、金こん剛ごう獅じ子し公園だった。

　銀行前ということで、金剛獅子公園にも多数の魔ま導どう兵へいがうろついている。ただ、こちらは鉄てつ鎖さの憩いこい場と違って、木立があったり噴ふん水すいがあったりする公園らしい公園だ。食べ物類の露ろ店てんがちらほらあるだけで、人通りは多くない。第二王立銀行の利用客も、第一王立銀行と比べればずいぶん少ないに違いない。

　まあ、円形の首都エルデンの中で北ほく端たんに位置する第十一区の北ほく斗と門など、馬ば鹿かでかいわりに無用門ジヤンクゲートと呼ばれるくらい閑かん散さんとしている。北斗門を出るとすぐクライド山脈にぶちあたるので、今は鉱脈も涸かれたというクライド大鉱洞どうを探検するのでもなけば、まず用がないのだ。

　というわけで、マリアローズも第二王立銀行を使ったことはない。

「でも、アジトって……」

　あやしげなその単語の語感を考えれば、にぎわしい場所は確かに相応ふさわしくない。それはわかるのだが、やや中ちゆう途と半はん端ぱな感じはする。どうせならもっと人のいないところか、秘密の隠かくれ家がっぽい凝こった立地の方がそれらしいのではないか。

「ね、トマトクン。きみのクランのアジトだかたまり場だかは、このあたりなの？」

「ああ、すぐ近くだ」

　トマトクンは看板で第二王立銀行の建物を指し示した。

「あそこだからな」

「え？」

　マリアローズは銀行とトマトクンを交こう互ごに見て、指で左右のこめかみを押さえた。

「──あー……と、ちょっと待って。あれって、銀行だよ……ね？」

「銀行だな」

「で、きみが指し示したのは、まさか、銀行……ではないよね？」

「いや、銀行だ」

「へ？　だって、銀行は銀行でしょ？」

「当たり前だろう。何を言っているんだ、お前」

　トマトクンは眉み間けんに深々と縦たて皺じわを刻んでいるマリアローズを置いて、さっさと銀行の方へと歩いてゆく。もうわけがわからないが、マリアローズもここで突つっ立っていたって仕方ない。やむをえずついてゆくと、トマトクンは鉄てつ格ごう子しが下ろされた銀行の窓口ではなく、分厚い金属製の扉とびらの前に立った。

　両りよう脇わきに魔導兵が二体ずつ控ひかえるその扉は、魔導兵どもが出で入いりするとき以外、固く閉とざされていて、人間が近づくような場所ではない。

　その扉を、トマトクンは無造作に開けた。

　瞬しゆん間かん、マリアローズは魔導兵が反応するのではと身構えたが、何も起こらなかった。

「ん？　どうした。来いよ」

「う、うん」

　トマトクンに手招きされ、マリアローズはおそるおそる第二王立銀行に足を踏ふみ入れた。

　むろん、銀行の中なんて初めてで、重厚にして壮そう麗れい、格調高いといってもいいほど立派な内装に、まず驚おどろかされた。

石造りの外観や鉄格子の窓口は、どちらかといえば実用一点張りで頑がん丈じようそうな印象しかないのに、中はまるで別世界だった。

　聞くところによると、王立中央文書館やＫＧ秘宝美術館は、魔導王時代の建築様式をとり入れているらしいから、この銀行も同様なのだろう。

　それにしても、魔導兵しかいないはずなのに、こんな豪ごう華かさが必要なのだろうか。

　いや、魔導兵以外もここにいるわけだが。

「だけど、これって……微び妙みように不用心じゃない？」

　マリアローズは正面ホールの隅すみに置かれた壺つぼやら甲かつ冑ちゆうやらに視線を這はわせた。

「あれもこれも、すっごく高そうだし」

「ここの備品には手を出さん方がいいぞ」

　トマトクンは門もん扉ぴを閉めてヒヒヒと下品に笑った。

「魔導兵どもにリンチされたいなら、話は別だが」

「あ、やっぱり？」

　そうそううまい話があるはずがない。マリアローズは宝石がふんだんに鏤ちりばめられた壁かべ掛かけに伸のばしかけていた手を、慌あわてて引っこめた。

「けど、これ値打物なんだろうな……」

「ここに置いてある物は、たいがいグッダーがサンランド建国前に支配していた払暁ドウーン千年ミレニ王国アムの遺産だ。そこらに出回っている品物じゃないから、売ったら高いかもな」

「ドゥーンミレニアム……？　聞いたことないや」

「大昔の話だからな。知る必要はないだろう。知っていてもあまり役には立たんし」

　トマトクンは自らの知識を誇ほこるでもなく淡たん々たんとそう言って、正面ホールの脇わきにある階段の一段目に足をかけた。

　するとどうだろう。階段が動きはじめ、トマトクンの体が上階へと運ばれてゆくではないか。

　いかなる仕組みによるものか、見当もつかない。だが、またトマトクンに何か言われるのも癪しやくなので、マリアローズも動く階段に乗ってみた。一段目に乗る際のタイミングが結構つかみづらかったけれども、乗ってしまうとたいしたことはなく、二階まではあっという間だった。

「エスカレーターは初めてか？」

　トマトクンにそう訊きかれて、マリアローズは少しだけ口を尖とがらせた。

「べ、別に……えすかれーたーっていうんだ、これ。ま、初めてだけどさ……」

「うむ。エレベーターとエスカレーターってのが、意外と間ま違ちがえるんだよな」

「えれべーたー？」

「名前が似てるだろう」

　似ているといえば似ているが、マリアローズにとっては二つとも初めて聞いた言葉だ。マリアローズを混乱させるだけ混乱させておいて、当のトマトクンはもう二階の広い廊ろう下かを奥の方へ向かって歩き出しているし、まったく始末におえない。

　だが、今は我が慢まんのしどころだ。うまくトマトクンのクランに潜もぐりこむことができれば、新しい展望が開けるかもしれない。少なくとも、今より生活が苦しくなることはないだろう。

　いや、きっとよくなる。

　ひょっとしたら、億万長者だって夢ではないかもしれない。

「……さすがにそれはちょっと夢見すぎかな」

マリアローズは小声で呟つぶやきつつ、早歩きでトマトクンを追った。

そのうち、ようやくトマトクンが立ち止まったのは、十字路を二つ直進して突きあたった壁かべの左手側にあるドアの前だった。

「ここだ」

トマトクンが指し示したドアの上には、木製の札が釘くぎで打ちつけられている。壁の素材は明らかに木ではなく、かなり硬かたそうなのに、どうやって釘を打ったのか。細かな謎なぞは置いておくとして、札に書かれている荒あら々あらしい個性的な文字を目で追うと、《ZOO'S OFFICE》と読めた。

「ＺＯＯの……事務所？」

「ああ。俺は単純に集会場とか、動物広場とか、そんな名前がいいと言ったんだけどな。納なつ得とくしないやつがいて、こんなふうになった。だが、字は俺が書いたんだぞ」

「そ、そう」

「とりあえず入れよ」

トマトクンがドアを開けた。

しかし、また何かおかしなことが起こるのではないか。マリアローズは尻しり込ごみしかけたが、ええい、ままよ。意を決して中に入ると、そこは巨きよ大だいな円えん卓たくとそれを囲む椅い子すが多数設しつらえられた、飾かざりっ気けのない十数メーテル四方の広々とした部屋だった。

壁の一面に並ぶ大きな窓のそばに、子供が一人、こちらに背を向けて立っている。

どうやら、窓まど際ぎわに置かれた棚たなの中身を整理していたようだが、なぜ子供？

しかも、その子供は純白の女性用ナース医術士服・ユニを着て、同色の女性用ナース・医術士帽キヤツプをかぶっていた。形は女性の医術士なら誰だれでも身に着けているものなので珍めずらしくはないものの、体にあわせてサイズが小さいし、服と帽ぼう子しの脇

に赤いラインが一本入っているのが、やや奇き妙みような印象だ。

「あ、おかえりなしゃい、トマトクン──」

　振ふり返ったその子供はやはり女の子のようだった。ついでに、舌足らずだ。

　女性用ナース・医術士帽キヤツプからのぞく髪かみの毛はくすみのない美しいブロンドで、灰色がかった青い瞳ひとみや桜色の唇くちびるには艶つやがある。特に痩やせてもいないが、太ってもおらず、頬ほおはふっくらしているのに顎あごはほっそりしていて、肌はだが新雪みたいにどこまでも白く、それはそれはたいそう可か憐れんだった。

　おそらく、十歳か十一歳といったところだろう。

　現在すでにかなりの美少女といってもよく、体形や顔立ちが変に崩くずれなければ、将来、傾けい城せいの美女となることは疑いえない。

　だが、繰くり返すが、まだ子供だ。

「そちらはお客しゃま？」

　女の子がこちらへ歩いてくる。何かの拍ひよう子しでマリアローズの遠近感が狂くるっていて、彼女の姿がどんどんでかくなるということも、むろんない。彼女は完全無欠の子供だ。

「ああ」

　トマトクンがマリアローズの背中を軽く叩たたいた。

「今日からうちに入ることになったマリアローズだ」

「ちょっと、僕はまだ入るって決めたわけじゃ──」

「そうだったか？」

「そうだよ。勝手に決めないでよね」

「ヒヒヒ」

　トマトクンが下げ卑びた笑い声を立てている間に、女の子がマリ

アローズの目の前までやってきた。こうして見ると、女の子はマリアローズより頭一つ分以上、身長が低い。そういえばコロナも小さかったが、他人を見下ろす機会なんてそう多くないマリアローズにしてみれば、悪い気はしない。相手は子供だが。

「わたしはユリカよ。ユリカ・白雪しゆノーホワイト。うちに入る入らないは別べちゆとしても、縁えんあって知りあったわけだし、よろしくね、マリアローズしゃん」

「あー……ええと、うん、よろしく」

　マリアローズはユリカが差し出してきた手を握にぎった。当然だが小さい手で、ひんやりと冷たい。子供の手はだいたいあたたかいものだと思っていたが、そんなことはないらしい。

　それにしても、やけに大人びた喋しやべり方をする子供だ。ませている子なのか。医術士の格好をしているのは何のつもりだろう。医術士ごっこ？　それより、ユリカはどうしてＺＯＯのアジトにいるのか？　まさか、トマトクンの娘むすめだとか。

　トマトクンはユリカみたいな娘むすめがいるような年には見えないが、若作りという可能性も──

「どうかした？」

　ユリカが小首を傾かしげた。その仕草がとてつもなくかわいらしい。何というか、ペットにしたい、思わず抱だき締しめて頬ずりしたくなってしまう、庇ひ護ご欲よくそそりまくりのかわいさだ。

　マリアローズは手を放して咳せき払ばらいをした。

「い、いや、何でも」

「しょれならいいけど。あ、わたしのことはユリカと呼んでね」

「あ、だったら僕も、マリアローズとかマリアでいいよ」

「わかったわ、マリア。しょれから、誤解しゃれるといけないから、念のために前もって言っておくけど、わたし」

「うん」

「こう見えても、にじゅうしゃんしゃいなのよ」

　マリアローズの顔がハニワになって、砕くだけ散りそうになった。

　にじゅうしゃんしゃい。

　にじゅうさんさい。

　二十三歳━マリアローズより、六歳年上。

　見た目は十歳なのに。

「今、お茶を淹いれるわね。どこかしょのあたりの椅い子しゆに座しゆわっていて。トマトクンも」

　ユリカは窓際の棚へと向かった。ここで余計なフォローを入れずに時間を置くあたり、かなり慣れていると見た。こういうときは、自力でショックから立ち直るまでそっとしておいてもらうのが一番いい。何か言われても、返事に困るだけだからだ。

　マリアローズはトマトクンとともに、大だい円えん卓たくを囲む椅子の一つに腰こしを下ろした。顔はまだハニワのままだ。低い唸うなり声が聞こえたので横を見ると、トマトクンが座り心ごこ地ちが悪そうに体をもぞもぞさせていた。当たり前だ。あんなでかい大剣を背負ったまま座ってしまえているのが、かえって凄すごい。

　本人もようやくそのことに気づいた様子で、「……こいつのせいか」と呟つぶやきながら腰を浮うかし、背中から外した鞘さやごとの大剣を大円卓の上に置いた。

「ふう。これでくつろげるな」

「いや、最初から気づこうよ？」

「細かいことにはこだわらんタチなんだ」

「細かいっていうか、大おお雑ざつ把ぱすぎるよ？」

「これでも何とかやれてるから大だい丈じよう夫ぶだぞ、たぶん」

「そのぶん、他ほかの人が苦労してるんじゃないの……」

「そんなことはないと思うが」

「はい、熱あちゆいから気をつけて」

　と、トマトクンとマリアローズの前に、ユリカがお茶の入ったカップを置いた。色からすると、緑茶だろうか。サンランドでは薄うす茶ちや色いろのバスク茶やコーヒーが一いつ般ぱん的で、緑茶はわりと珍めずらしい。マリアローズはカップを持ち上げて、湯気を顔にあてた。

「ありがと。うわ、いい香かおり」

「どういたしまして。わたし、お茶は大好しゆきで色々集あちゆめているの。これはジェードリからとりよしぇた、龍州産しやんのハイアット茶よ」

　ユリカはマリアローズの隣となりの椅い子すに腰かけ、自分のお茶を一口すすってほっと息をついた。

「よかった。うまく淹れられたみたい」

「うん、おいしい」

　マリアローズも茶を口に含ふくんで香りと味をゆっくり楽しんだ。こんなに上質な茶を味わうのは、子し爵しやくの館やかたにいた頃ころ以来だろうか。

　当時は、だが、とにかく厳しく仕込まれた作法を守ることが最優先で、背筋が伸のびているか、カップをつかむ指の形、腕うでの角度は正しいかなど、そんなことばかりに心を砕いていた。正直、茶の味なんてよくわからなかった。

　あの頃、身に着けさせられた癖くせが、いまだに抜ぬけていない。

　マリアローズはそのことに気づいて、何ともいえない気分になった。

　悔くやしいとか、苛いら立だたしいとか、もっと近い気持ちを挙げるとするなら、恥はずかしい。

　まだ忘れられないのか。

もう何年も経たっているのに。

「お前」

熱いハイアット茶を一口で飲み干したトマトクンが、カップをテーブルに置いた。

「出身はラフレシアか」

「……え？　な、何で」

「茶を飲む作法にラフレシア貴族の匂においがあるんでな。立たち居い振ふる舞まいにも訓練された跡あとがうかがえる。だが、お前の歩き方はいわゆる貴婦人キヤット歩きウオークというやつに近くないか。いったい、どういう教育を受けたんだ」

「ど、どうだっていいだろ、そんなこと！」

「それもそうだな」

細かいことにこだわらない性格のせいだろう。トマトクンは鋭するどさのわりに淡たん泊ぱくだから、まだ何とか許容できる。これでしつこかったら最悪だ。絶対、一いつ緒しよにいられない。しかし、ぼんやりしているようで見ているところは見ているし、意外と知識も豊富そうだし──

「……油断のならないやつ」

「何か言ったか？」

「いや、全然。これっぽっちも。まったく」

「そうか。ああ、そうだ。ユリカ、他の連中はアンダーグラウンドか？」

トマトクンに訊きかれて、ユリカがこくりとうなずいた。

「トワニング以外のエルデンにいるみんなはしょうよ。最しやい近はじゅっとＤ１の閉へい鎖しや魔ま宮きゆうでしょう」

「ふむ。園長マスターの俺が一人で勧かん誘ゆう活動にいそしんでるってのに、何てお気楽なやつらだ」

「そのお気楽なやちゅらに、お前たちは勧誘に向かないから、自分一人でやると言ったのは誰だれだったかしら？」

「誰が言ったんだ？　そんなこと」

　トマトクンは腕うで組ぐみをして首をひねっているが、事情を知らないマリアローズでもわかる。そう言ったのはトマトクン自身に違ちがいない。それをすっかり忘れて、仲間をお気楽なやつら呼ばわりするトマトクンの方こそ、とんでもないやつだ。

　まったく、毎日こんな男を相手にするのでは疲つかれるだろう。マリアローズは軽い頭痛を覚えたが、ユリカは微び苦く笑しようを浮かべただけだった。慣れ、か。

　しかし、Ｄ１の閉鎖魔宮。

　その固有名詞は、少なからずマリアローズを興奮させた。

　完全な円形の都市エルデンは、十三の街区に分けられている。たとえば、円の中心部に位置する第一区には、キング・グッダーの居城シャイニンググローリーパレスや王立中央文書館が建っているのだが、第七区を除く各街区にちょうど一つずつ、アンダーグラウンドの出入口が存在する。

　内部で分断されている場所もあるとはいえ、アンダーグラウンドをきっちり区分けするのは困難だ。が、アンダーグラウンドの総面積はエルデンの数十倍ともいわれる。便べん宜ぎ的にでも、何らかの手段で区分けしたい。そこで、出入口周辺一帯を街区と重ねあわせ、第一区の出入口から降りたあたりならば、ディヴィジョン１、つまりＤ１と呼んでいるわけだ。

　ただ、便宜的といったが、アンダーグラウンドの異界生物フリークスたちは、同じ異界の出身者同士で集住する傾けい向こうがある。異界生物フリークス間で勢力争いすることも多いせいだろう。

　すると、ディヴィジョンごとに棲せい息そくする異界生物フリークスの種類、地下建造物の特色などが定まってくる。メリクルと蜥蜴とかげ人が入り混じって暮らすなどということは、まずありえない。

　Ｄ１。

　そこには地獄ヘルと呼ばれる異界からやってきた悪魔デビルどもが巣くっている。

　他ほかの異界生物フリークスにはない多様性を持つ悪魔は、個体差が大きいものの、侵入者クラッカーにとっては総じて手て強ごわい相手だ。という話だ。マリアローズはお目にかかったことがない。

　かつて魔ま導どう王おうたちに使し役えきされ、あるものはその友となり、あるものは兵として戦争に駆かり出され、またあるものは召めし使つかいのようにこき使われたりもしたという、悪魔。

　それゆえに連中は、莫ばく大だいな魔導王時代以前の宝物を隠かくし持っているらしい。また、人に似た姿の悪魔が身に着けている悪魔製の武具装そう飾しよく具ぐは、高値で取引されてもいる。

　そんな悪魔どもがいるＤ１を、ＺＯＯの連中は攻せめているというのだ。

　メリクルをちくちくやっていたマリアローズにしてみれば、はっきりいってＤ１など夢の中でも見ることができない。足を踏ふみ入れたことがないので、どんな場所か知らないし。

「Ｄ１、か……おっかないところなんだろうね」

「ん？　行ったことがないのか。何だったら行ってみるか？」

　トマトクンはまるで散歩にでも誘さそうように軽く言った。

「どのみち、ここで他のやつらと顔あわせをするだけで、入るだの入らんだのと判断するのは難しかろう。一緒に行動してみれば、色々見えてくる部分もあるだろうしな」

「しょれは悪くない考えだと、わたしも思うけど」

　ユリカが斜ななめ上の方へ視線を泳がせ、右手の人差し指を唇くちびるにあてた。

「いきなりＤ１はどうかしら。危険しゅぎない？」

「うむ。まあ、俺とお前に、カタリとピンパーネル、サフィニアがいれば、たいがい大だい丈じよう夫ぶだとは思うが――と、噂うわさ

をすればというやつか」

　トマトクンがドアへ目をやった。銀行の壁かべや窓はそうとう遮しや音おん性が高いらしく、動物園ズーズ事務所オフィスはきわめて静かだ。それらしい音は何も聞こえなかったが、五秒ほどするとドアが開き、先頭をきって部屋に入ってきた男が高々と右手を挙げた。

「まいど！　いやあ参ったわ。三人で閉鎖魔宮はちいとばかしきっついなあ。明日あたり、ユリカも一緒にどや。医術士がおらんと無理でけへんし、先に進まれ━て、お？」

　やたらとケメック訛なまりがきついその男は、魚みたいに少々目が離はなれていて、ややエラが張り気味だった。顔に似合わず、最近、エルデンで流行しているＤＳ□ドラツグスター・ＴＹＱＮタイクンの要所要所を板金で固めた動きやすそうで粋ＣＯＯＬな鎧よろいを着ている。両りよう腰ごしに一本ずつ吊つるしているのは、やや奇き妙みような形だが、斧おのだろうか。

　彼の後ろにも、髪かみと目が砂色でやはり砂色の薄うすい衣ころもを身にまとった痩そう身しんの男と、魔ま術じゆつ士しらしい水晶様材クリスタリンの杖つえを持った幸さち薄うすそうな女がいる。

　彼ら三人の視線が、一いつ斉せいにマリアローズへと注がれた。

　特に、魚顔の男はぶしつけに好奇心をあらわにして、まじまじとマリアローズを眺ながめている。

「どちらさん？」

「人に名前を訊きく前に、自分から名乗ったらどうなんだよ」

　マリアローズはつっけんどんに答えた。魚男の視線にある種の粘ねばっこさを感じて、胸むな糞くそが悪くなったのだ。

　だが、魚男はマリアローズの態度など気にした様子もなく、右手の親指で自分を示した。

「あー、わしはカタリっちゅうもんや。ほんでもって」

　次いで砂色の男を引き出してきて肩かたを叩たたく。

「こいつがピンパーネル」

　ピンパーネルと呼ばれた砂色の男は、かすかに頭を下げてみせた。珍めずらしい形をした薄うす手での砂色の衣にサンダル履ばきのピンパーネルは、腰の左右に鞘さやごとの短たん剣けんを一本ずつ差しただけという軽装だ。十代ということはないだろうが、年ねん齢れいはちょっと推おし量りがたい容よう貌ぼうをしていた。

「あと、こいつは──」

　と、カタリが最後に紹しよう介かいしようとした女は、銀ぎん髪ぱつと翡ひ翠すい色いろの瞳ひとみが美しいものの、顔色が悪すぎる。これはもう、白いというレベルではない。健康状態が心配されるほど青白い。

　さらに、カタリの言葉を引き継ついで自ら名乗った声が、瀕ひん死しの重体者みたいにか細く、どんよりと暗かった。

「……サフィニアです……」

　サフィニアは自身の髪や瞳の色とよくあう、白と銀色を基調として各所に薄い緑色でアクセントがついたローブを着ている。魔術士の衣い装しようとなるとマリアローズもよく知らないが、ローブだけを見れば、あまり華か美びなデザインではないものの、決して地味ではない。それなのにサフィニアが身に着けると、途と端たんに印象が変わる。

　寒々しい。陰いん鬱うつで、じめじめした重苦しささえ漂ただよう。

　マリアローズは思わずたじろいだ。かつて、これほどまでに強きよう烈れつな不幸オーラをまとった人物は見たことがない。サフィニアはいながらにして主張している。わたしは不幸せな女です、呪のろってしまっていいですか、と。

「ほんで、そちらさんは？」

　カタリに尋たずねられ、マリアローズはやっとサフィニアの呪じゆ縛ばくから解き放たれた。

「ああ、僕は……まあ、ＺＯＯの見学者ってとこかな」

「見学者やて？　ほうほう。で、名前は？」

「マリアローズ」

「マリアちゃんか」

　カタリがそう言って鼻の下を伸のばしたとき、マリアローズは悪い予感がした。予感は的中した。カタリは「ひょっ！」と奇声を発し、驚おどろくべき軽けい捷しようさで大だい円えん卓たくの下に潜もぐりこむと、マリアローズの太ふと腿ももに頰ほおをくっつけて尻しりを撫なで回しやがったのだ。

「うーむ、ちいと硬かためやけど悪うない、悪うないで。やっぱり別べつ嬪ぴんはんの膝ひざ枕まくらは、漢おとこの浪漫ロマン、極ごく楽らく浄じよう土どの蜜みつの味や！　おふっ？　何や震ふるえとるやないか。初う心ぶなんやな。かわいいのう。せやけど大丈夫やで、そのうちようなってくるさかい──」

「おい」

　マリアローズは怒いかりに顔を引きつらせながら、カタリの頭頂部に籠こ手ての射出口を押しつけた。カタリが「へ？」と顔を上げた瞬しゆん間かん、躊躇ためらわずに撃うった。殺す気だったのだが、カタリはとっさに跳とび上がって矢を回かい避ひし、大円卓に頭をぶつけて悲鳴を上げた。マリアローズはそこを狙ねらって二射目を放った。今度こそ命中したかと思ったのに、何と、カタリは矢を白歯どりした。

「ひ、ひひはひ……」

　カタリは大円卓の下から飛び出して矢を床ゆかに吐はき捨て、マリアローズにつめよってきた。

「いきなり何すんねん！　し、死ぬて！　マジで！」

「唾つばを飛ばすな、汚きたないだろ！」

　当然、マリアローズも椅い子すを立って応じる構えだ。

「きみみたいなやつは死んで当然だ。死ねばいいんだ。死んだ方が世のため人のため僕のためだ。このエロエラ張りのエロ半魚人！」

「みぐっ、人が気にしとることを……」

「ひょっとして自分は人間じゃないんじゃないかって不安なんだろ。そうだよね。うん、わかるよ、その気持ち。その顔だもんね。その懸け念ねんは正しいよ。きみは人間じゃない。人間のなりそこないだ。だから死ね！　今すぐ死ね！」

「し、死んでたまるかいダァホ！　わしみたいな半魚人にかてな、生きる権利は──て、誰だれが半魚人じゃ！　人間やっちゅうねん！」

「じゃあ人間らしく人間の顔してみなよ。無理だろ？　できないよね？　できるわけないよ。はい、きみが人間じゃない証明終わり。終しゆう了りよう。残念だったねー。来年またチャレンジして」

「来年かい！　一年も待たんとあかんのかい！　それまでわしは半魚人かい！」

「つらいだろ？　悲しくてせつないだろ？　だから死ね！　死んで楽になってしまえ！」

「うきいいいいいいっ……！　このアマッ！」

「ぷちーん」

　と口で言ったわけではないが、「女」という単語に反応した脳の中でそのような音がして、マリアローズはぶちきれた。

「誰が女だ……！」

　叫さけびながら、左籠手から二連射。生意気にもカタリはこれをよけた。いや。

　カタリはその場にぺたんと尻しり餅もちをついて、その結果、たまたま矢をかわすことになっただけらしい。どうやら、意識的な回避行動ではなかったようだ。

「お……お、お、おお、女や、ない……？」

「女じゃなくて悪いか！」

　マリアローズはいっそ魚男をハーレム・ゴードンで爆ばく殺さつ

してやろうかと思った。だが、周りが気になった。どうも空気が妙みようだ。

　見回してみると、ユリカは目を見開いて手で口を押さえているし、サフィニアやピンパーネルまで呆あつ気けにとられたような表情をしている。眠ねむそうに欠伸あくびを噛かみ殺しているのは一人、トマトクンだけだ。

「あ、ご、ごめんなしゃい、マリア、わたし……」

　マリアローズと目があったユリカは、気まずそうに顔をそむけた。

「てっきり女の人だとばかり……」

　反省しきりといった様子のユリカを怒ど鳴なりつける気には、さすがになれない。マリアローズはトマトクンたちから離はなれた位置の椅子に座り直し、ため息をついた。

「──もういいよ。ユリカとかピンパーネルさんとかサフィニアさんは気にしないで。半魚人は絶対に許さないけどね」

「半魚人はやめろて……」

　カタリらも荷物を大だい円えん卓たくの上に置いて椅子に座った。入れ代わりにユリカが彼らのお茶を用意しようとして席を立つと、トマトクンが一つ伸びをしてから口を開いた。

「今、マリアローズを連れて、どこかへ行ってみようという話をしてたんだが」

「へ？　唐とう突とつやな」

　カタリが首を傾かしげた。

「ああ、見学者ゆうことは、まだうちに入るて決めとらんっちゅうことやさかい、とりあえずどこぞへ潜って様子を見てみる、と。そういうことでっか？」

「ああ」



「ええんやないの。わしは賛成やで。せやけど、肝かん心じんの本人の意志はどないやねん？」

　カタリがちらりとマリアローズに視線を送ってきた。マリアローズはカタリに見られるだけでも頭にきたが、思い返せばクランに入って大おお儲もうけしようとここへ来たのだ。いちいち腹を立て

ていないで、大人になることも必要だろう。

「僕も別に異存はないけど。ま、ここで半魚人の顔を見てるだけだと、それだけで嫌いやになってきて冷静な判断は下せそうもないしね」

「まだ言うんかい」

「当たり前だ。未来永えい劫ごう言いつづけてやる」

「未来永劫かいな……」

　顔をしかめて頭を掻かくカタリを尻しり目めに、トマトクンが一つうなずいた。

「決まりだな。問題は場所だが」

「閉へい鎖さ魔ま宮きゆうでええやん」

　いかにも立ち直りの早そうなカタリが、大円卓をぽんと叩たたいた。

「ちょうど劫ごう火かの件もあるしな。せや、劫火っちゅうたら、わしらのうちでは誰も使う者がおらへんけど、マリアローズが腰こしに吊つるしとるんは、珍めずらしいことにエストックやないか。同じ刺し突とつ剣けんやから、首しゆ尾びよく手に入ったらマリアローズに使つこてもろうたらええし」

「ごうか……？」

　そのとき、マリアローズの両目は猫ねこのように光っていたかもしれない。猫みたいな耳がついていたら、ぴんと立っていたことだろう。

「焼きバーつくしニング刺しレイ貫く剣ピア〝劫火〟。魔ま導どう王おう時代の秘宝の一つだ」

　トマトクンの言葉を受け、カタリが身を乗り出して熱く語りはじめた。

「劫火っちゅうのはな。双そう生せい児じ魔導王ニオ・キオが地じ獄ごくの侯爵ラデオンメリカイン・ザックに作らせた姉し妹まい剣

けんの片割れや。わしは以前、劫火の妹にあたる凍てフローつかせズン刺しレイ貫く剣ピア〝凍とう甚じん〟を見せてもらったことがあるんやけども、これが軽いの何の。素す晴ばらしく扱あつかいやすうて、おっとろしい威い力りよくを秘ひめた、しかしニオ・キオの死後、長らく行方ゆくえ不明になっとった魔ま剣けんなんやで」

「それが閉鎖魔宮に？」

　マリアローズが身を乗り出して訊きくと、カタリは「せや」と力強く首を縦に振ふった。

「もともと閉鎖魔宮はニオ・キオが造ったモンで、その出入口は別の場所にあったらしいからな。それをキング・グッダーがアンダーグラウンドに封ふうじこめたっちゅうわけや。せやから、劫火は閉鎖魔宮にあるに違ちがいない、と、わしは以前からこう睨にらんどった。ついこの前や。中央文書館で色々文ぶん献けんを漁あさっとって、ある書物に、赤のレッド・男爵ツエペリオンゆう悪魔がニオ・キオから劫火を渡わたされた、との記述を発見したのんは」

「赤の男爵……」

「ほんで、わしらが最近ターゲットにしとるのが、閉鎖魔宮内にある赤のレッド・男爵館ツエペリアルや」

「そこに、劫火が？」

「あるらしい。少なくとも、わしが調べた限りでは必ずある」

「でも、さっきＺＯＯのメンバーでは使う人がいないって言ってたよね。何でそんなものをわざわざ？」

　マリアローズが呈ていした疑問に答えたのは、三人の分のお茶を持ってきたユリカだった。

「カタリはマニアなのよ。武具や装しよう飾しよく具ぐから家具、古い物から新しい物まで、特に珍めじゆらしい物を手にとってじっくり観察しやつしているときが何よりも幸しぇなの」

「ま、まあ、それもあるけどもやな……」

　カタリはばつが悪そうな表情をしている。まるで悪戯いたずらを見み咎とがめられた子供のようだ。こういう場面を見せられると、

確かにユリカの方が年上のようにも思えなくはない。

「それだけやないで。劫火なら、売ってもそれなりの金にはなるわけやし」

「へえ。いくらくらいになるの」

「せやな。三億ダラーってとこか」

「ふうん」

　あまり聞き慣れない単位だったので、マリアローズは最初、ぴんとこなかった。

　すぐに待てよ、と思った。

　三億。三万ダラーで一巡じゆん月げつ最低限の暮らしができるとして、三億ダラーだと一万巡月。ということは、約八百三十三年？　かなり長生きしても、老後の心配はなさそうだ。

　それどころではない。

「さ、さんおくぅっ……！」

「魔導王時代の秘宝でも、由来がきっちり知られとるモンは価値が高いんや。劫火はその筋でも有名やからな。どうしてもそんくらいにはなるがな。場合によっては、もっと吹ふっかけても欲しがるやつはおるやろ」

「行く」

　マリアローズは即そつ決けつした。

　三億ダラー。

　劫火。

　迷う要素はない。

　いや、あるのかもしれないが、今は考えられない。考える必要があるとも思えない。

「行くよ。閉鎖魔宮。今から行く？　今じゃなきゃ、明日がいいか

な？　さーて、だとしたらこれから準備しないとね、うん」

「おいおい」

　トマトクンは苦笑いを浮うかべている。

「いきなりＤ１は難易度が高くないかとか、そのあたりを話しあおうと思っていたんだがな」

「それは平気。全然問題ないよ」

　──僕はきみたちの後ろに隠かくれてるだけだから。

　一応、本音は隠しておいた。三億ダラーで頭が一いつ杯ぱいでも、そういう知ち恵えは回る。それを弱者の小こ狡ずるさと嘲あざけられても構わない。もともと、マリアローズには体格や筋力の面で標準に満たないというハンディがあり、魔ま術じゆつの専門教育を受けたわけでもなく、錬れん金きん術じゆつも見よう見み真ま似ねだ。結局、他人を利用でもしない限り、個人的な限界を超こえて人生を黒字に転てん換かんさせるなんて、とうてい不可能なのだ。

　とにかく、明日は閉鎖魔宮だ。明るく、楽しく、表面的には皆みなで仲良く閉鎖魔宮。こんなに明るい気分で次の日の訪おとずれを待つのは、いつ以来だろう。

　マリアローズの胸は躍おどっていた。悪い予感はこれっぽっちもしなかった。

　いっそ不思議なくらいに。

Omenage 897 6th revolution 18th day

サンランド無統治王国首都エルデン第十三区

“彷徨える魂区（RSW）”

chapter.4

高層寺院（スカイスクレイパー）

地上約百五十四メーテル。

第十三区で二番目、エルデン中でも三番目に高い高層寺院ＧＭエンパシィの屋上から見る眺ながめは、ちょっとしたものだ。

何しろ、第一区にあるキング・グッダーの居城、シャイニンググローリーパレスまで見下ろすことができる。屋上をぐるりと移動して、エルデン全域を見み渡わたせる場所なんてそうはない。

だから、マリアローズはここを住居に定めた。

いや、もう一つ、理由があるにはある。

昔、マリアローズはこの第十三区で大切なものを永遠に失った。それから、何の因果かラフレシア第三帝てい国こくへ行くことになり、紆う余よ曲折あってこのエルデンに戻もどってきてからも、しばらくはここの空気を吸うのも嫌いやだった。

けれども、そのままでいいなんて思わなかった。

癪しやくではないか。

いつまでも忌いまわしい記き憶おくにとらわれて前に進めないなんて、冗じよう談だんじゃない。どうせなら、いっそのこと憎にくたらしい坊主ぼうずどもを、第十三区を、このエルデンを眼下に見下す場所で寝ね起おきしてやる。まあ、ここまで高いと、安全でもあるし。

そんなわけで、ここに居を定めて、一年半少々。

高層寺院の坊主どもは、この高い高い建造物の全体を利用しているわけではない。連中が寝ね床どことしたり、礼拝堂やら聖堂やらと呼んで大おお仰ぎような祭さい壇だんを設置しているスペースは、ごく一部だ。とりわけ、下層部に使用領域が集中しているのは、階段を上るのが面めん倒どうなせいだろう。

その気持ちは、マリアローズもわからないでもない。

百五十四メーテル、三十五階建て。屋上三十六階までの階段の上り下りは、はっきりいって苦行だ。しかも、マリアローズは坊主ど

もが通常用いている階段を使うわけにはいかない。アンダーグラウンドとは別の地下へ潜もぐってＧＭエンパシィの地階に侵しん入にゅうし、梯子はしごを伝って五階まで上り、そこから裏階段でもって三十五階まで、さらに梯子で屋上に出る。

　非常に面めん倒どうだ。

　ここの眺めが気に入っていなければ、こんな馬ば鹿かげた真似はしない。

　また、高層寺院ＧＭエンパシィの屋上には、かなり居住性の高いドーム状の天てん井じようを備えた部屋がもとからあった。何のための部屋か知らないが、ここには水道のみならず、湯ゆ沸わかし器の設備もある。これも決め手の一つとなった。

　朝早く目が覚めたとき、マリアローズは部屋を出て屋上の縁ふちに腰こしかけ、風に身をさらす。

　高所だから、いつも風が強い。

　強風にあおられて、真しん紅くの髪かみと外がい套とうの裾すそが大いに乱れ、体温はどんどん奪うばわれてゆく。

　たいていの人間は下を見ると目がくらむだろうが、マリアローズは平気だ。

　大だい丈じよう夫ぶではあるのだが――

「……何か変な感じだな……うーん、何だろ……」

　今日はこれから動物園事務所へ赴おもむいて、そのあと閉鎖魔宮へ向かうことになっている。それはもう、大いに乗り気で約束してしまったし、うまくゆけば劫ごう火かが手に入るので、今さらやめようとは思わない。マリアローズは行くだろう。

　行って、トマトクンらと行動をともにする。

　順調にゆけば、劫火がマリアローズのものとなって、そして、狙ねらいどおりクランに。

　――僕があいつらの仲間に……？

　トマトクン、ユリカ、カタリ、ピンパーネル、サフィニア。

　彼らとは昨日が初対面だ。まだお互たがい何も知らない者同士といってもいい。

　彼らの印象といえば、皆、一ひと癖くせも二癖もあって、ちょっと変わったやつらだということくらいか。

　そんな連中とお茶を飲んで、無む駄だ口ぐちを叩たたいたり、腹を立てたり、ボケにツッコんだり。

　昨日のことを思い返すと、何だか幼い頃ころの夢を見たあとみたいな気持ちになる。

　二度と戻れない、取り戻せないはずの日々に帰ったかのような錯さつ覚かくと、目覚めたときの居い心ごこ地ちの悪さと、苦々しさと。

　せつなさ。

「はは……何、言って……」

　マリアローズは両りよう腕うでで強く自分の肩かたを抱だき、膝ひざに顔を埋うずめて目を閉じた。

「……嫌だな。不ふ愉ゆ快かいだ、こんなの……」

「何がだい？」

「いや、うまく説明はできないんだけど」

「言ってごらん。ゆっくりでいいからサ」

「でも──って」

　マリアローズは顔のそばに何かの気配を感じた。

　それだけではない。耳みみ許もとで囁ささやくこの声は。

「どうしてきみがここにいるんだ！」

　立ち上がって振ふり返るのと同時に繰くり出した超音速マツハ突きパンチは、だが、黒衣の男にやすやすと受け止められた。

　マリアローズはすぐさま右籠こ手てに左手を伸のばして、矢の発射スイッチを押そうとした。アジアンはその手を寸前でかすめとってねじり上げ、あれよあれよという間にマリアローズの背中をとった。

「フッ、マリア。マリアマリアマリア。ああ、このかぐわしきキミの体たい臭しゅう」

「か、嗅かぐな、変態！」

「変態？　心外だな。いとおしい人の匂においが極ごく上じようの香こう水すいにまさる芳ほう香こうだと感じるのは、完全無欠に正常だヨ」

「ぼ、僕は女の子じゃないんだぞ。きみは男だろ、そんなの変じゃないか！」

「そうかい？　ボクにしてみれば、キミほどボクにとって愛を捧ささげるのに相応ふさわしい相手はいないと思っているのだけどネ」

「……くそ、だいたい、何でここが──」

「わかったかって？　おお、マリア、ボクを甘く見てはダメだ。ずいぶん前からここは知っていたヨ。当然サ。ボクはいつもずっとキミを見ているのだからネ。ただ、いきなり押しかけるのは今まで控ひかえていた。でも、今日は是ぜ非ひ、キミに訊ききたいことがあって……」

「ええい、この！」

　マリアローズはアジアンの右足の甲こうを踵かかとで踏ふんづけようとしたが、これは難なくかわされた。が、場所が場所だ。ここで揉もみあうのはさすがにまずいと判断したのか、アジアンはマリアローズの体をくるりと回し、肩に手を置いて正対する格好になった。

「というわけで、マリア。キミに訊きたいことが」

「何だよっ」

「真ま面じ目めな話サ」

「だったら、普ふ通つうにおじゃましますとか言って、普通におじゃましようとして、普通に追い払はらわれちゃえばいいだろ！」

「それでは話ができないヨ」

「当たり前だ。ボクはキミと話なんかしたくないんだから」

「ひどいな」

「そーだ。僕はひどいやつだ。極悪非道の冷血無情なんだ。だから僕のことは放ほうっておいて、もう二度と絶対に近づくな！」

「それは無理な相談だネ」

　アジアンは妙みように艶つやのある微び笑しようを浮うかべた。

「命ある限りボクはキミを愛す。極限愛ラヴ・マツクス。もとはといえばキミが悪いんだヨ？　キミの美しさが。かわいらしさが。キミの存在そのものが。ああ、キミは何て罪作りな美と愛の天使
だっ」

「……はあ……」

　いい加減、疲つかれてきて、マリアローズは深々とため息をつき、アジアンの手を振り払って頭を振った。

　もう一つ、ため息が出た。

「──何だよ？　訊きたいことって。答えてやるから、とっとと帰って」

「もちろんサ。ボクとてこのような手段を好きこのんで選んだわけではないからネ。フフッ。とはいえ、キミの寝ね起おき姿を見てみたーい！　という欲求がなかったといったら、嘘うそになるけど」

「やらしいこと言うな。ほら、早く質問」

「ウン……」

　アジアンは柄がらにもなく、迷うように瞳ひとみを揺ゆらした。

「ああ──そういえば昨日あのあと、ちっこいのにまた会ったヨ。確か、コロナくんといったっけ」

「は？　コロナ……？」

　どうしていきなりそんな名前が出てくるのか。訝いぶかって眉まゆをひそめるマリアローズの前で、アジアンはなぜか逃にげ道でも探すみたいにどうでもいい言葉を重ねる。

「そう、これが意外でネ。あの子、一人じゃなかったんだ。何でも、エルデンへ来る途と中ちゆうに知りあったとかで、あれから偶ぐう然ぜん、再会したらしいヨ。無ぶ愛あい想そな若い男でサ。こう、への字口で眉み間けんに皺しわが刻まれていてネ、目つきも悪くて。いかにも彼がコロナくんの世話を焼いているという感じだったけど、とても親切そうには見えなくて。それともあれかな。あんな顔をして、ちっこいのが好きなのかもしれないネ。たまにいるからネ、別に珍めずらしいというほどでも──」

「ねえ」

　マリアローズは冷たい視線をアジアンに注いだ。

「それ、きみが訊きたいこととどういう関係があるわけ？　何か、質問に繫つながりそうな気があんまりしないんだけど」

「あァ……そ、そう……だネ。ウン。つまり、これはその……」

　歯切れが悪い、どころではない。よほど訊きにくいことなのか。しどろもどろになったアジアンは、ついに窮きゆうしたか、胸に手をあてて大きく深呼吸した。

　それから、ようやく再び口を開いた。

「実は……ボクが訊きたいのは、昨日の……鉄てつ鎖さの憩いこい場で会った男のことで」

「ん？　ああ、トマトクン？」

　マリアローズは何気なくそう応じたのだが、確かアジアンはトマトクンの名を聞かなかったはずだ。それにも拘かかわらず、アジアンの中ではその名とあの人物がちゃんと結びついているらしい。しかも、トマトクンの名は負の感情と親和性が高いようで、アジアンの顔が歪ゆがんだ。

「ウン、トマトクン──ああ、腹立たしい、何度耳にしても頭にくる

ひどい名前だ、まあいい、その男のことなんだけど」

「彼がどうかしたの？」

「彼は、その……ＺＯＯとかいう、これまたひどい名前のクランを持っているだろう？」

「みたいだね」

「もしやと思うが、マリア、キミは……」

「まだ決めてない」

　何かと思ったら、そんなことか。

　それにしても、いつになくまどろっこしいアジアンがうざったくて、マリアローズは先読みして答えた。

「ＺＯＯに入るかどうかって、きみは訊きたいんだろ。わからないよ。今日これから、ＺＯＯの人たちと閉へい鎖さ魔ま宮きゅうに行くことにはなってるけど」

「なっ……何だって……？」

　アジアンはあからさまに狼ろう狽ばいし、呼吸を整えてから細い鼻び梁りようの付け根を指で押さえた。

「信じられない……キミがそんな軽けい率そつな決断を下すなんて。どこの馬の骨かもわからない男が率いる超最低ｓｕｃｋなクランと、一秒でも行動をともにするなんて。しかも、よりにもよって閉鎖魔宮なんて。あんな危ない場所に！　とても正気の沙さ汰たとは思えない。そうだ！　きっとキミは騙だまされているんだ！　たとえば彼らは、何かキミに取引を持ちかけなかったかい？」

「取引っていうか」

　餌えさというか。

　だが、アジアンに教えなければならない義務も、教えてやる義理もない。

　そもそも、アジアンごときに、マリアローズの行動を掣せい肘ち

ゆうする権利があるというのか。

　ない。これっぽっちもありはしない。

「関係ないだろ、きみには」

「あるヨ」

「ないってば」

「あるサ。だって、ボクとキミは運命の赤い糸で結ばれているんだから」

「はい。今、切った」

「フッ。照れる必要はないヨ？」

「照れてないし。さ、質問には答えてやっただろ。もう帰ってよ。それから、できたら僕のことはきれいさっぱり忘れてくれない？てゆうか、忘れろ」

「不可能だネ」

　アジアンは人差し指を左右に振ふり、ちっちっと舌を鳴らした。

「たとえ一時忘れたとしても、キミはボクの夢の世界にも住んでいる。僕は夜ごとキミに会うんだ。何度忘れても思い出す。ボクの愛は毎日更こう新しんされる。新しく、より強固なものへと」

「死んじゃえ」

　マリアローズは髪かみの毛を掻かきむしって、部屋へ戻もどろうとした。

　その背中にアジアンが言う。

「しかし、マリア。幸いまだクランに加入していないということだから、どうかボクの願いを聞いて欲しい。クランはやめた方がいい。マリアには似合わない。人に馴なれない、気高く美しい野生の山やま猫ねこだからこそ、キミなんじゃないかな？」

「……わかったようなこと言うな」

　マリアローズは部屋のドアノブに手をかけて、ちらりとアジアンを振り返った。

「きみに僕の何がわかる」

「全部わかるサ」

　アジアンは微笑ほほえんでいたけれども、薄うす青あおい目は少しも笑っていなかった。

　見み逃のがせないほどやけに真しん剣けんなその眼まな差ざしは、だが、一いつ瞬しゆんでだらしなく口くち許もとを緩ゆるめて目め尻じりを下げた表情に覆おおい隠かくされた。

「何しろ、キミとは毎夜、夢の中で濃のう密みつ濃のう厚こうに愛しあっている仲だからネ」

「ふうん」

　気色悪さより、瞬間的な怒いかりの方がまさったマリアローズは、とっさに引きつった笑え顔がおを作った。

　それから、自分でも驚おどろくほどの素す早ばやさでアジアンの懐ふところに飛びこみ、鳩尾みぞおちに肘ひじ鉄てつをかました。アジアンはよけられなかった。いや、よけなかったのだろう。アジアンは甘んじて打だ撃げきを受けた上で、マリアローズを抱だきすくめる道を選んだ。

　マリアローズはそこまで計算していた。

「その助すけ平べい心ごころが命とりだ……！」

　アジアンがぎゅっと抱き締しめたのは、マリアローズの体ではなかった。マリアローズがするりと脱ぬいだ外がい套とうだった。

　マリアローズは飛び退のきつつ、外套を抱いたアジアンを蹴け飛とばした。

　アジアンの後ろには――

　何もない。

「オ？」

　アジアンは落下してゆく。

「オォォォォマイスウィィィィィトゥッ！　マァァァァァリィィィィィアアアアアアアアッ……」

　その絶ぜつ叫きようを最後まで聞かずに、マリアローズは部屋へ戻った。

　まあ、アジアンのことだ。あの程度で死にはしないだろう。たぶん。

　それよりも、マリアローズにとっては、あんな下げ衆す野や郎ろうを退治するために外套を一枚、無む駄だにしてしまったことが惜おしかった。

Omenage 897 6th revolution 18th day

サンランド無統治王国首都エルデン・アンダーグラウンドD1

〝閉鎖魔宮（ディバイディド・パンデモニウム）〟

chapter.5

チームプレイ

　第一区の北の端はしにある出入口から降りたあたりは、石の天てん井じようと壁かべと床ゆかに囲まれたよくあるアンダーグラウンドの風景だった。

　だが、入ってすぐの四よん叉さ路ろで左に曲がり、しばらく進むと壁が消失した。底の見えない深く広い谷に、幅はば二メーテルほどの細い橋がかかっている様子を想像してもらえるといい。橋は石に似た強固な素材でできていて、揺ゆれたりはしないが、高いところが苦手なら下は見ない方が無難だろう。

　この橋には手すりがない。橋の下は基本的に闇やみだ。ところどころに、おどろおどろしい光がまたたいている。闇からせり上がってくる風の唸うなりのような音は、悪あく魔まどもの声か。

　──ここが、Ｄ１。

　想像していたより静かだ。もっと悪魔がうじゃうじゃいて、いかにもな場所だと思っていたが、まだ悪魔にも出くわしていないのだし、この程度かと安心するのは早すぎる。いくらＺＯＯの連中が一いつ緒しよだといっても、気を引き締めてかからねば痛い目を見るだろう。

　アンダーグラウンドへ入る前にトマトクンが決めた隊列は、先頭がカタリで、その次にトマトクンとユリカ、これにマリアローズとサフィニアが続き、最さい後こう尾びにピンパーネルがつく。

　水晶様材クリスタリンの杖つえに光の要素精霊Ｌｕｉの力を宿らせたサフィニアが、顔をうつむけてマリアローズの右みぎ隣どなりを歩いている。

　もしかして、高所恐きよう怖ふ症しようなのだろうか。もともと青白い顔がさらに青ざめ、視線は左右を見ないよう一点に固定され、目ま深ぶかにかぶったフードからのぞく唇くちびるは細かく震ふるえている。

「あのさ──大だい丈じよう夫ぶ？　サフィニアさん」

「……い、いえ……は、はい……」

「どっちなの？」

「は……はい……大丈夫では、ありませんが……頑がん張ばります……」

「そっか」

　サフィニアがそう言うなら、マリアローズが口を出す問題ではない。とはいっても、隣でがたがたやられると、やはり気になった。

「ね、ユリカ、あとどれくらいで閉鎖魔宮に着くのかな」

「しょうね、あと五分くらいかしら」

　ユリカは少しだけ顔を後ろへ向けて答えた。その右手には彼女の背せ丈たけより長い棍こんが握にぎられている。全体が白で、赤いラインが入っているのは服装とあわせたデザインか。あれがユリカの得物のようだ。ユリカは医術士にして棒術の使い手なのかもしれない。

「でも、サしやフィニアのことなら心配しなくていいのよ。本当にダメなときは、ちゃんとダメと言う子だから」

「あ、いや、別に心配とかしてるわけじゃなくて」

　というより、他人を心配する機能なんて、自分に備わっているのだろうか。長い間、そういうこととは縁えん遠どおかったもので、マリアローズ自身にもよくわからない。

「ほら、サフィニアさんは魔ま術じゆつ士しでしょ？　他ほかに魔術士はいないみたいだから、やっぱり大事な戦力だろうし、その人の具合が悪そうなんで、みんなにとって、ひいては僕にとってマイナスっていうか──」

「あの……わたしは……」

　サフィニアは消え入るような声を出した。

「……いつもこうなので……平気です……自分の役割は、ちゃんと果たしますから……」

「そ、そう」

　どうもサフィニアの声を聞いていると気が滅め入いる。いや、滅

入るなんてものではない。ただでさえも暗いＤ１全体が、いっそう暗くなってしまったかのような感じさえする。

「それと……」

　サフィニアは不ふ吉きつな響ひびきを持つ声で、さらに不気味なことを言い足した。

「わたしの存在は……あまり気になさらずに……いないものと思った方が……きっと、あなたの身のためです……」

「な、何で？」

「……不幸に……なります……」

　それきりサフィニアは黙だまりこんでしまい、マリアローズも口をつぐんだ。

　根こん拠きよはない。だが、これ以上、問い返せば本当に不幸になってしまうのではないか。何となくそんな思いが頭をかすめた。強きよう烈れつな目め眩まいがしたのはそのときだった。

　マリアローズはよろめいた。

　いけない、このままでは──と、危あやうく橋から足を踏ふみ外しかけたマリアローズを、誰だれかが後ろから支えてくれた。

「……あ、ありがと」

　マリアローズが礼を言うと、ピンパーネルは痩やせた頬ほおをほんの少しだけ緩ゆるめてみせた。

　貧ひん血けつだろうか。けれども、体に異状は感じられない。むしろ快調なくらいだ。ということは、さっきあの瞬しゆん間かんだけ、何かが起こったということになる。が、それが何かはわからない。

　マリアローズは橋から落ちないよう注意して歩きながら、ちらりとサフィニアの横顔に目をやった。「不幸になります」──あの言葉が脳のう裏りに焼きついて離はなれない。まさかとは思うが、あの目眩とサフィニアの存在との間に、何らかの関係が？

いやいや、そんな馬ば鹿かな。単なる偶ぐう然ぜんだろう。

偶然、だといいのだが。

漠ばくたる不安を胸に、五分ほど黙もく々もくと足を運ぶと、やがて行く手に橋の終しゆう端たんが見えてきた。

それは断だん崖がい絶ぜつ壁ぺきに空いた暗い穴で、ユリカが指差しながら「あしょこよ」と教えてくれた。

「──うわ……」

橋を渡わたり終えて穴に入ると、そこは二十五メーテル四方はあるだだっ広い空間だった。

高さはさほどでもないが、壁かべから床ゆかから天てん井じように至るまで、全面に緻ち密みつな彫ちよう刻こくがあますところなく施ほどこされている。それらの彫刻群が、一行がこの空間へと足を踏み入れた途と端たん、どこからか射さしてきた明かりによって、美しく照らし出されていた。

「あれが双そう生せい児じ魔ま導どう王おうニオ・キオの肖しよう像ぞうや」

最前列のカタリが、足を止めて正面の壁を指差した。

カタリが示した壁には、王おう冠かんを被かぶった裸はだかの赤子二人の姿が浮うき彫ぼりされていて、右の赤子は緑色、左の赤子は橙だいだい色いろに輝かがやいている。どうやら、彫刻全体に宝石が鏤ちりばめられているらしい。

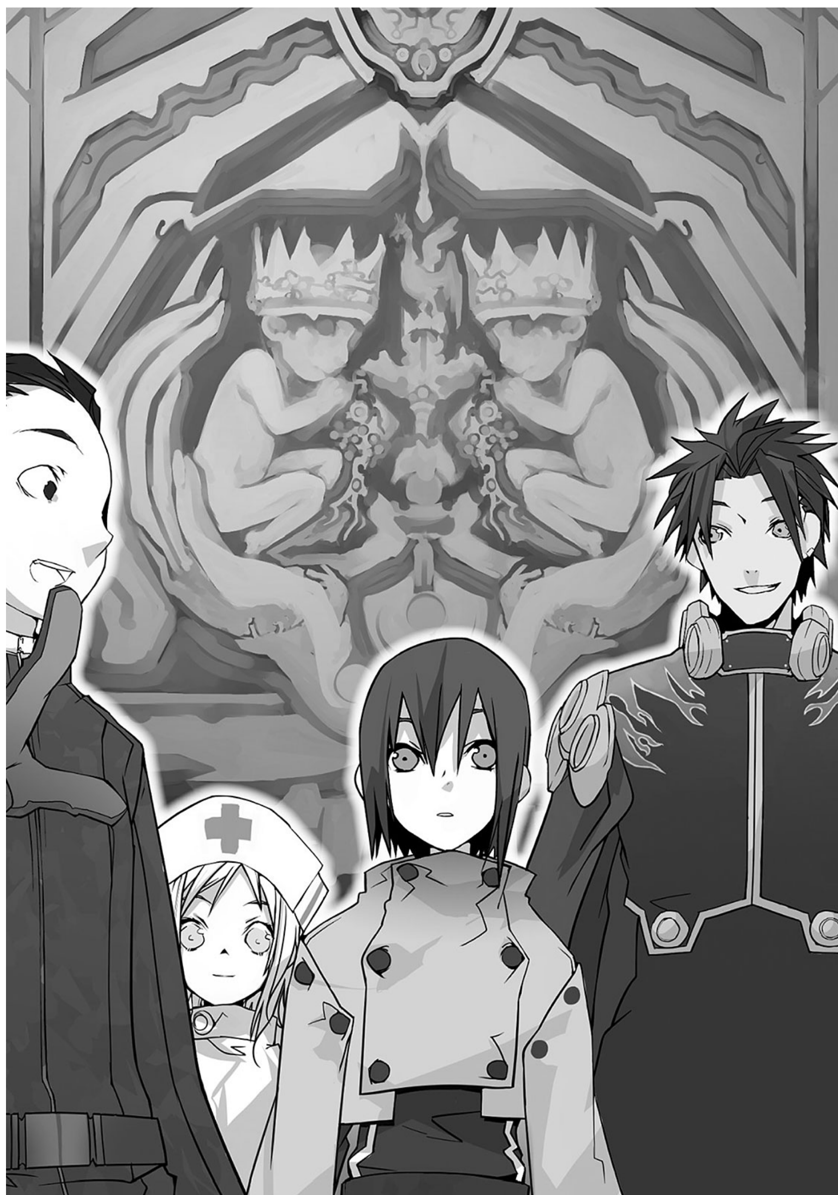
「あの宝石、ひとかけらでも高いんだろうな……」

「やめといた方がいいぞ」

トマトクンがヒヒヒと笑った。

「魔導王ってのは、結構ケチだからな。下へ手たに盗ぬすみでも働こうものなら、何が起こるかわかったものじゃない。それで、魔導王が残した遺い跡せきでは、そこにいる生き物が持ってる物以外、手を出さないというのが不文律の掟おきてなんだ」

「僕は高いだろうなって言っただけで。盗むなんて一言も言ってないだろ」



「物欲しそうな声に聞こえたんだが」

「失礼な。きみの耳ってばどうかしてるよ」

「これでも耳はいい方だぞ」

「悪くなったんじゃない？　何かの病気かもしれないね。きっと悪い病だよ。たぶん、明日くらいにはポックリ逝いってるね」

「どんな病気だ？」

「ぱーぺけぺーぴょこぴゅこ病」

「ぱーけぺ……うむ、何だか言いづらくてやばそうな名前だな」

「かなり珍めずらしい奇き病びようだからね」

　どうも歯は応ごたえがない。自分の口からでまかせにも、切れ味がないような気がする。トマトクンと話をしていると、どうも調子が狂くるう。

　気を取り直して、マリアローズは実際的な話題に切り替かえた。

「で、ここからどうするのさ。まさかここで行き止まりってことはないんでしょ」

「サフィニア」

　カタリに呼ばれて、サフィニアが前に出た。

「……開門、しますので……ご注意を……」

「開門？」

　マリアローズは四囲を見回したが、門らしきものはない。あるいは、どこかに隠かくし扉とびらでもあって、サフィニアの魔術でそれを探知しようとでもいうのか。

　ただ、カタリがやたらとニヤニヤしているのが気になる。もしかしてこいつら、何か企たくらんでいるのではないか。マリアローズを罠わなに嵌はめるために。

　しかし、そんなことをして彼らの得になることがあるとは思えないし、また、わざわざこんな手のこんだ真ま似ねをする必要は──

「ＨＺＣｘｋｏｂａｚ我呼Ｎｇｚ声主開ＮａｇｇＺａｎｇ狭門開胡麻」

考えているうちにサフィニアが呪じゅ文もんを詠えい唱しようし終え、魔ま術じゅつを完成させた。

多くの魔術で用いられる上古ハイロ高位語メオンとしても、かなり聞きとりづらい部類に入る呪文だ。濁だく音おんが多く、独特の特とく徴ちよう的な韻いん律りつを持つこの呪文は、おそらく限定魔術と呼ばれるたぐいのものだろう。触しよく媒ばいを用いていない点も、限定魔術の特徴に当てはまる。

限定魔術は、マリアローズが知る限り、ある特定の条件下でしか効力を現さず、何かの鍵かぎとして用いられることが多い。

──鍵。

そういうことか、と思った。

双生児魔導王の彫刻が輝きを増し、緑色と橙色の光がそこら中に溢あふれる。充じゆう満まんして、飽ほう和わした。マリアローズは何も見えなくなった。同時に、落下する。落ちてゆく。

どこへ？　落ちるというからには、下へ？

違ちがう。

上ともいえず、左右ともいえず、平へい衡こう感覚が完全に麻ま痺ひしてしまい、眼前に広がったはずの光はあっという間に消え失うせ、完全なる、闇やみ──夜よりも深い真の闇に囚とらわれたマリアローズは、こみ上げてくる嘔おう吐と感かんをこらえるのに苦心した。

自分は振ふり回されているのか？

もしくは、自分以外のすべてが回転している？

そうかもしれず、そうではないのかもしれず、自己の存在さえあやふやになって、僕はここにいる！　そう大声を出して確かく認にんしたくなったとき、足の下に地面を感じた。

「……ここは……」

どこだろう。

　いつの間にか世界は色しき彩さいを取り戻もどし、見上げれば星空が広がっているのだが、空の果ては青あお紫むらさきに色づいている。とにかく広大だ。地面は砂地だった。すくってみると、実に粒つぶの細かい純白の砂は、なぜか奇き妙みように甘い匂においがする。おまけに、かすかに発光していた。

「びっくりしたやろ。ここが閉へい鎖さ魔ま宮きゆうや」

　カタリの声がした。

　見ると、マリアローズのそばにはちゃんとトマトクンがいる。ユリカがいて、カタリも、サフィニアも、ピンパーネルもいた。今まで彼らの気配を感じなかったのは、五感を喪そう失しつしたあの時間が、マリアローズの感覚を狂わせていたせいかもしれない。

「閉鎖魔宮は、アンダーグラウンドにあってアンダーグラウンドにない。扉を通り抜ぬけんとたどり着けへん場所にあるんや。すなわち、ここや」

「だけど、何もないよ？」

　実際、方角はわからないが、前後左右、見み渡わたす限りどこまでも砂地が続いている。人工物らしきものは、マリアローズたちを囲むかのごとく砂に突つき刺さっている、十三本の背の低い石柱だけだ。

「閉鎖っていうのも、違ちがう気がするし」

「でも、サしやフィニアがいなければ、入ることも出ることもできないのよ」

　ユリカが棍こんの先で砂を軽く突いた。

「しょの意味でいうと、確かにここは物理ぶちゆり的に閉じられているわ」

「え？　じゃ、もしサフィニアさんに何かあったら、僕らはもとの場所へ戻れないの？」

「しょういうことになるわね。だから、ここではサしやフィニアを守るのが最しやい優ゆう先しえん。わたしみたいな医い術じゆちゆ士しは、怪け我がや病気を治ち療りようしゅることはできても、死

者を蘇よみがえらしぇることは絶じえつ対たいにできないから。サしやフィニア以外はここで死んでしまっても、決定的クリテイカルな部位が破は損しよんしてしゃえいなければ、遺体を持ち帰れば何とかなるけど──」

「うちには専属の坊主ぼうずがおるからな」

　カタリが一ひと握にぎりの砂をそこらにばら撒まいた。

「トワニングっちゅうやつでな。トマトクンの家にはトワニング専用の祭さい壇だんまでありよる。そういえば、あの髭ひげは何で来こおへんのや」

「誘さそってはみたんだがな。無益な殺せつ生しようは好まんとか言って来なかった」

　トマトクンはゆっくりとあたりに視線を巡めぐらせた。

「それでいて髭のやつ、有益だと判断した殺生なら喜んでするからな。とんだ破は戒かい僧そうだ」

「ともかく、そういうわけや」

　カタリは腰こしの斧おのに手をかけてマリアローズに笑ってみせた。カタリが腰に吊つるしている二本の斧はやや変わった形をしている。何でも由来名めい称しようともに不ふ詳しようだが、魔ま導どう王おう時代の業わざ物ものできわめて軽く、カタリはそれぞれをイノイチ、ロノニーと呼んで可愛かわいがっているのだという。趣しゆ味みが悪い。

「マリアローズも万が一、死んでもうても大だい丈じよう夫ぶやからな。わしらがちゃあんと死体を回収して、髭に生き返らせてもらうさかい」

「誰だれが死ぬもんか」

　髭だか破戒僧だか知らないが、坊主の世話になるなんて真っ平ごめんだ。図はからずも坊主への嫌けん悪おで気合いが入ったマリアローズは、周囲の空気が緊きん迫ぱくしていることに気づいた。

「……何かあるの？」

「ファッルーカが来る」

　トマトクンが背中の大剣の柄つかを握にぎって両りよう眼めをすぼめた。

「気をつけろ。ふざけたやつだが、一応、地じ獄ごくの公こう爵しやくだ」

「一応とは──」

　と、マリアローズの耳みみ許もとで声がした。

　それは高くて、低く、幾いく重えにも重なりあっているかのような、管楽器とも弦げん楽がつ器きともつかない、誰も彼もを嘲あざ笑わらう声だった。

　マリアローズはとっさに振り向いたが、誰もいない。

　誰もいないのに、耳許で声がする。

「どのような意味で？　この鏡を磨みがきたる者、力と技わざの卓たく越えつ者しや、いたわり偽いつわり欺あざむく者、蝶ちようの星、穢けがれの象しよう徴ちよう、ジルマイヤ酒血湖及およびハ・マーン淫いん楽らく街がいの領主にして、道化のジエステル・大公爵ハイヴエリオンたるアウトルマ・ファッルーカが、一応、公爵とは、いったいどのような意味で仰おつしやったのです？」

「なっ……こ、この声、どこから」

　これはちょっとした怪かい談だんだ。マリアローズが右を向けば左から聞こえるし、左を向けば右から聞こえる。左右を同時に見ることは不可能だから、声の主はいちいち移動しているのだろう。

　だが、肩かたに感じるこのわずかな重みが、声の主の正体だとしたら。

　軽すぎる。とても人の重みではない。

　それなのに、声量は一いつ般ぱん的な人間と変わらず、というか、かえって大きいくらいだ。

　いったい、何が起こっているのか？　マリアローズは慌あわて

た。あたふたしているマリアローズの右みぎ肩かたあたりを、いきなりトマトクンの大剣が一ひと突つきした。

「──あ、危ないじゃないかっ！」

「大丈夫だ」

　トマトクンはまだ大剣を鞘さやに収めていない。構えたままだ。

　黄玉トパーズの目をマリアローズの背後に向け、トマトクンは口許だけで薄うすく笑った。

「お前に当てるようなヘマはしない」

「っていっても……」

　マリアローズが動かなかったから、当たらなかった。少しでも動いていたら、マリアローズの肩はあの剣身波打つ琥こ珀はく色いろの大剣に貫つらぬかれ、粉々に砕くだけていただろう。

　それにしても、トマトクンは何を狙ねらったのか。

　嫌いやな感じがしまくりだが、マリアローズは生なま唾つばを飲み下して後ろを振ふり向いた。

　そいつは、そこにいた。

　砂地の上に立っている。

　小さな、小さな、人の形をしたものが。

　おしろいか何かを塗ぬりたくって真っ白にしたそいつの顔面には、赤と青で奇き怪かいな紋もん様ようが描えがかれている。衣い装しようは金銀をあしらった派手で古風な貴族服で、先が幾いく叉またにも分かれた帽ぼう子しをかぶって尖せん頭とう靴かを履はき、手に持つステッキは黒と黄色の横よこ縞じま模様だ。

　その格好はまさしく旅芸人の一座にいるような道どう化け師しだった。トマトクンの第一印象も道化師めいていたが、こちらはめいているではすまない。どこからどう見ても、完かん璧ぺきな道化師だ。

小さくなければ。

「人間の方々、ようこそ！　我が友、双生児魔導王ニオ・キオが造りましたる閉へい鎖さ魔ま宮きゆう、寂さびしがり屋の玩がん具ぐ展覧会、悲しき双ふた子ごの魂たましいが眠ねむる黄金の墓所へ、ようこそ、ようこそいらっしゃった！　あらためて自己紹しよう介かいをば。私はジェンバジェンガ・フルミネンセ・パルートルメイヒヨーケンデール（中略）グランド・セクスィ・マスター・アウトルマ・ファッルーカ。ちなみにファーストネームはアウトルマですが、是ぜ非ひファッルーカとお呼びになられるがよい」

「……な、何だよ、このちんちくりんは」

マリアローズが唇くちびるの端はしを震ふるわせると、ファッルーカはステッキをぐるぐる回し、その先せん端たんからピンクと黒の花を出してみせた。

「ちんちくりん！　今、ちんちくりんと申されましたか？　では、どうです？」

すると、どうだ。

ファッルーカが大きくなってゆく。

「これで？」

徐じよ々じよに。

「いかがかな？」

だが、確実に。

見る間にマリアローズより背が高くなったファッルーカは、その場で華か麗れいにターンを決め、優ゆう雅がなのにどこか卑ひ猥わいな礼をした。

「さて、今一度申し上げましょう、私のことはファッルーカとお呼びください、ＦＡＦＡＦＡＦＡＦＡＦＡＦＡファッルーカと。よろしいですね、人間の方々？　私はファッルーカ、これでも地獄ヘルでは七億八千万の軍勢を率いる大公爵ハイヴエリオンなのですよ？」

「相変わらず小うるさいやつだな」

　トマトクンがマリアローズを押しのけて、大剣を一いつ閃せんさせた。

　その一ひと振ふりは剣聖ヴァン・ヴラドＸＬ〝モータルレッド〟でもたぶん文句のつけようがないほど鋭するどく、無む駄だのない超ちよう速度の斬ざん撃げきだった。それにも拘かかわらず、ファッルーカはよけ──なかった。まともに食くらった。

　だが、右肩から左ひだり腰こしを結ぶラインで一刀両断にされたファッルーカは、二つに分かたれたままでその場にとどまりつづけている。

「ＦＡＦＡＦＡＦＡＦＡ！　気の短いお方ですな？　しかし、貴公の持つその剣。剣。剣。それこそ真に刃やいばたる剣！　見覚えがありますぞ、いやいや何も申されるな。今まさに、この膨ぼう大だいな記き憶おくが蓄たくわえられしキュートな脳内水すい槽そうから、すくい上げましたる貴公に関する一いち握あくの情報。アイシィ。メルシィボクゥ。思い出しましたぞ。貴公、これまでも幾いく度どとなくお会いしたことがおありで？　オォ、そちらの方々は昨日も？　お一人だけ見知らぬ顔がございますな？」

「まあな。だから、貴様のお喋しやべりは聞き飽あきてる」

　トマトクンは大剣の切きつ先さきをファッルーカに向けた。

「いい加減、歓かん迎げいの準備をしたらどうだ。貴様にとっても多少の暇ひま潰つぶしにはなるだろう」

「ごもっとも！　ごもっともです！　ＦＡＦＡＦＡＦＡＦＡ！　では、それでは……！」

　もう一度、あの猥わい褻せつで優雅な礼をしてみせたファッルーカの姿が、いきなり消えた。

　と思ったら、間を置かず少し離はなれた場所に再出現した。そのときにはもう、ファッルーカは十年ほど前からラフレシア貴族の間で流行している燕えん尾び服ふくに着き替がえていた。

　ファッルーカの右手には、短い棒状の物体が握られている。小指が立っていた。

「テスッテスッ、マイクテスッ、えー、只ただ今いまマイクのテスト中」

　どんな仕組みかは知らないが、どうやらその物体を通すと声が大きくなるようだ。

「さて、本日、お越こしいただきました淑しゆく女じよ紳しん士しの皆みな々みな様さま！　我が友、双生児魔導王ニオ・キオとの約定により、道化の大公爵ファッルーカがお送りいたします、楽しく嬉うれしくちょっぴり悲しい、華麗なる血みどろショウの始まりでございます！　野郎ボーイズ女郎ども＆グアールズ、美しく歓かん待たいせよ、葬そう列れつを！　葬列を！　葬列を！　葬列を出すのだ！　地獄直行、極ごく彩さい色しきの葬列を！」

　ファッルーカの声を合図に、閉鎖魔宮の様相は一変した。

　地平線の彼方かなたまで何もなかった砂地に、続々と現れる建造物の数々。道路が敷しかれ、地上世界では見られない奇怪な形の街路樹がそそり立ち、どす赤い液体が流れる水路ができあがり、閉鎖魔宮は街と化した。おそらく、地獄の街へと。

　さっきまでと変わらず残された場所は、マリアローズたちがいる十三本の石柱に囲まれた直径十五メーテルほどの砂地だけだ。

「遊戯ゲエムのルールを説明いたしましょう」

　ファッルーカは燕尾服を脱ぬいで道化師の格好に戻もどった。

「あなた方がいるその場所。そこがあなた方のテリトリです。他ほかはこのファッルーカが支配する地獄のフロンティーア。あなた方はご自分らのテリトリ内にいる限り安全です。私たち悪あく魔まは一いつ切さい手出しいたしません。何度もご経験なさっておられるようですから、もうご承知のこととは思いますが、初体験の方もおられるようなので。そう、初体験はよいものですな。あの膜まくを押し広げ侵しん入にゆうする喜びは、人間の心の臓を抉えぐり出し食す喜びに匹ひつ敵てきします」

「……ド変態」

　低く呟つぶやいたマリアローズに向けて、ファッルーカが一礼した。

「お褒ほめにあずかり光栄です。愛らしいお嬢じようさん」

「プチ殺す！」

　脳内で何かが切れる音に続いて、瞬しゆん間かん的に暴発した殺意が声になった。

　マリアローズは狙ねらいをつけるのもそこそこに、右籠こ手てから矢を二連射した。が、憎にくたらしいことに、ファッルーカはわざとらしく驚おどろいたような仕草で矢をよけ、そのまま消えてしまった。

「くそ、しとめ損そこなった！　むっかぁー！」

「落ち着け。思う壺つぼだぞ」

　トマトクンが大剣を背中に戻して、落ち着き払はらった声こわ音ねで言う。

「ふざけたやつってのは、おおよそああやって相手を自分のペースに巻きこもうとしてるんだ。少なくとも、悪魔は例外なくそうだな。いちいち腹を立てていたらきりがない」

「うるさいな、わかってるよ、そんなこと！　てゆうか、きみにそんなこと言われたくないんだけど。きみも結構、ふざけてるよね」

「俺はいつも真ま面じ目めなつもりだが」

「冗じよう談だんでしょ？」

「冗談に聞こえるか。俺にユーモアのセンスがあるとは知らなかった」

「いや、ないよ。全然。毛穴ほどもないね」

「そこまで言われると、少しはあると思いたくなるが──」

　トマトクンは浮うかべた微び苦く笑しようをすぐに収めて、皆に視線を巡めぐらせた。

「目的地は赤のレツド・男爵館ツエペリアルだったな。とりあえず、隊列はユリカをサフィニアの横に下げる以外、さっきまでと同

じでいく。道順は先頭のカタリが決めろ。状じよう況きよう次し第だいで俺が出す命令には必ず従え。全周囲、警けい戒かいを怠おこたるな。特にピンパーネルは用心してくれ」

「はイ」

　マリアローズが初めて聞いたピンパーネルの声は、乾かわいた響ひびきを持ち、共通語に慣れていないのか、イントネーションが変だった。

「後ろワタシ、守りマス」

「まあ、お前に限って間ま違ちがいはないだろうが、頼たのむ。それと、全員、サフィニアだけは絶対に死なせるな。サフィニアも自分の身の安全を第一に考えろ。俺たちへのアシストは優先順位を下げていい。そうだ、マリア」

　一いつ瞬しゆん、マリアローズの胸がざわりとした。原因はすぐにわかった。

　マリア。この男はいつからマリアローズのことを馴なれ馴れしく「マリア」なんて短縮形で呼ぶようになったのだろう。

　それだけではない。

　てきぱきと皆に指示を下し、にわかにリーダー然としてきたトマトクンが、何だか気に食わないのだ。挙句、まだＺＯＯに加入したわけではないマリアローズまで、自分の手下みたいに扱あつかおうとしている。偉えらそうに。

　けれども、今は我が慢まんだ。劫ごう火かのため。三億ダラーのために。

「何？」

「お前も黙だまって後ろに隠かくれてるだけではつまらんだろう」

「別に──」

　ひやりとした。見み抜ぬかれているのかと思ったのだ。

　とにかく、妙みようにするどいところのある男だから、案外、

用心しなければならないのは、悪魔よりトマトクンかもしれない。

「つまんないってことはないけどね」

「そう言うな。正直、お前が集団パーティー戦で何をどれだけやれるのか、俺にはさっぱりわからん。よほど気心の知れたやつなら遊兵として自由に動いてもらう方法もあるが、お前の場合、計算できなくて危険だ。そこで、お前に一つ明確な役割を与あたえる。サフィニアを守れ。魔ま術じゆつ士しを護衛することの意味はわかるな？」

「ばかにしないでよ。特殊なチヤネ精神集中リングとか詠えい唱しようの時間を稼かせぐために、囮おとりになったり、術者を庇かばったりすればいいんでしょ」

「そういうことだ。ユリカはサフィニアの護衛を中心に、いつもどおり全体をサポートしろ。前衛はカタリが少し前目に出て、無理そうならどんどん通せ。俺が全部食い止める」

「頼たよりにしてまっせ」

　カタリはテリトリから出るべく進みはじめた。その足どりは普ふ段だんと同じように見える。が、この砂地の外は敵の領域なのだ。

　サフィニアの左ひだり脇わきについて、ふとその事実を意識した途と端たん、マリアローズは身み震ぶるいがした。

　だって、敵。ここにいる敵は、悪魔だ。

　たとえば、あのファッルーカが本気を出せば、きっとマリアローズなど蟻ありを踏ふみ潰つぶすように殺してしまえるだろう。そんな相手にお嬢さんと呼ばれ、頭にきて矢を放ったマリアローズは、とてつもなく幼よう稚ちで、愚ぐ劣れつで、身のほど知らずの考えなしだったのではないか。

　恥はずかしい。

　一人なら赤面した顔を外がい套とうで隠してこの場を去ればいいだけだが、今はそうもいかない。

　そういえば、アジアンが言っていたっけ。キミにクランは似合わない。人に馴れない、気高く美しい野生の山やま猫ねこだからこそ

キミだ、と。

　気高い山猫云うんぬんは別としても、そのとおりだ。この窮きゅう屈くつさはマリアローズの肌はだにあわない。仲間、か。仲間なんて、と思う──やっぱり、自分には無理なのではないか？　集団パーティー戦、役割、責任。ようやくこれからという段階なのに、何だ、この重苦しさは？

　とはいえ、ここで引き返すなんて不可能だ。今は生せい還かんすることのみを考えよう。とにかく、死ぬのだけは回かい避ひしなければ。

「緊きん張ちようしているの？　マリア」

　サフィニアの右側を固めているユリカが、小首を傾かしげて尋たずねてきた。

「肩かたに力が入っているみたいだけど」

「う、ううん、平気」

　マリアローズは腕うでを回してみせ、足を速めてトマトクンに続きテリトリから出た。

　その瞬しゆん間かん、空気の質が変わったように感じたのは、気のせいだろうか。

「ここの大気組成は地じ獄ごくと同じだ」

　まるでマリアローズの違い和わ感かんを察知したかのように、トマトクンが前を向いたまま言う。

「窒ちつ素その割合が若じやつ干かん多くて、二酸化炭素が少ない。酸素はやや濃こいかな。他ほかに、サタニウムとかいう地上にはない物質が含ふくまれてる。少し甘あま酸ずっぱい匂においがするだろう。この匂いの元だ」

「サタニウム、ね」

　確かに、ここの空気は甘酸っぱい。嗅かいでいると、くらくらしそうだ。それ以前に、地上ではまずありえないけばけばしく毒々しい色使いと、曲線を複雑に組みあわせた奇き抜ばつなデザインの建

物に囲まれているだけでも、頭が痛くなってくる。

　また、テリトリを出たと同時に鼓こ膜まくを震ふるわせはじめた、この断続的な音は何だろう。

　非常に微弱な音だが、さながら蠅はえや蚊かの羽音のように、不快でたまらない。

「何だか、うるさいね」

「囁しやしややき悪あく魔まの仕し業わじやよ」

　ユリカは歩きながら絶えず周りの気配をうかがっている。であれば、前と後ろ、右の方はユリカを含めた他の連中に任せておけばいいとしても、左の方はマリアローズが警けい戒かいしないといけないのだろう。

「囁しやしややき悪魔は、サしやタニウムを餌えしやにしている小しゃな悪魔なの。だから、サしやタニウムが存しよん在じやいしない地上にも、アンダーグラウンドにもいないわ」

「もしひっつかまえたら、ごっつう高たこう売れるで」

　カタリが前の方から口を挟はさんできた。

「囁ささやき悪魔の体の半分は、サタニウムの結けつ晶しようでできとるからな。透すきとおった紫むらさき色いろの、むっちゃきれいな宝石に見えるんや。口に入れたら死ねる毒やけど」

「きれいな宝石……」

　それは是ぜ非ひ見てみたい。だけでなく、手に入れて、持ち帰りたい。

　だが、物欲に涎よだれを垂らしていられる状じよう況きようではなかった。テリトリを出て三分ほど、三さん叉さ路ろを右に曲がろうとしたところで、トマトクンが低く皆みなに注意をうながしたのだ。

「敵だ」

「え？」

　マリアローズは左右を見回したが、どこにも人ひと影かげ、というのもおかしいか、魔影は見あたらない。それらしい物音もなく、聞こえるのは囁き悪魔の声と、一行の息いき遣づかいだけだ。

　だいたい、囁き悪魔の声はともかくとして、静かすぎる。閉へい鎖さ魔ま宮きゆうは、悪魔の巣そう窟くつではなかったのか。

　話に聞く悪魔は、自己顕けん示じ欲よく旺おう盛せいで威い張ばりたがりで凶きよう暴ぼうで、人間だけでなく他の異界生物フリークスに対してもきわめて好戦的だという。ファッルーカのような大物でも、凶暴さ以外の特とく徴ちようは確かに当てはまっている。当然、ここには小物もたくさんいるだろう。そんな連中が、こうまでおとなしくしているものなのか。あるいは、実のところ、たいした数の悪魔はいないのか。

　マリアローズはエストックを抜ぬいて構えた。この剣けんがどれくらい役に立つのか不明だが、何もしないわけにはゆかない。見み映ばえというものがある。

　しかし、見映え、か。

　一人じゃないっていちいち面めん倒どうだと、マリアローズが重心を低くしたときだった。

「いるぞ」

　トマトクンが大剣を振ふりかぶって、斬きった。

　何もないところを。

　否いな。

　そうではない。

　トマトクンが斬ざん撃げきを浴びせた空間に裂さけ目が現れ、黒い液体が飛散した。浮うき出てきた人型の茶色っぽい生物は、ばったりとその場に倒たおれて生き物ではなくなった。

「隠おん密みつ悪魔だ。雑ざ魚こだが、姿が見えない。空気を読め」

　言いながら、トマトクンは左右に大剣を振るい、次から次へと隠

密悪魔を斬り殺した。カタリも負けじと両手の斧おので見えざる敵を倒し、マリアローズの後ろではピンパーネルも雌し雄ゆうの短剣で何匹ひきかしとめていた。

「けど、空気を読めとかいわれてもさ……」

　まさか、雰ふん囲い気きにそぐわない言動を控ひかえろという意味ではないだろう。それでは何だ？

　わからない。わかるものか。マリアローズは突つっ立っているしかない。

　まあ、現時点ではユリカもサフィニアの隣となりでじっとしているし、自分だけ働いていないわけではないので、まだよかろう。

　問題は、働かねばならなくなったときだ。そのとき、ちゃんと働けるかどうか。

　はっきりいって、自信がない。

「マリア……！」

　と、そんなことを悠ゆう長ちようにに考えていたマリアローズの鼻先を、ユリカの棍こんが通りすぎた。

　鈍にぶい音がして、顔になまあたたかい液体がかかった。横目で見ると、マリアローズのすぐそばまで接近していた隠密悪魔の顔面に、ユリカが繰くり出した棍がめりこんでいた。

「ぼうっとしてないで！　死にたいの！」

「ご、ごめんっ」

　マリアローズはユリカの剣けん幕まくに気け圧おされ、鼻はな面づらが潰つぶれた隠密悪魔を蹴けり倒して空気を読もうとした──が、空気を？　空気を読む、だって？　どうやって？

「ええい、もう！」

　仕方なく闇やみ雲くもに剣を振り回すと、偶ぐう然ぜん、手て応ごたえがあった。負わせた傷はかなり浅手だが、血液と呼ぶのもおぞましい体液が少量出て、一応、そいつの居場所は視し認にんでき

るようになった。

　といっても、傷の部位が腕うでなのか、胴どうなのか、顔なのかも判然としない。適当に目星をつけて籠こ手てから矢を発射してみたものの、外れたらしい。挙句の果てに、たぶんそいつに足あし払ばらいをかけられて転てん倒とうしてしまう始末だ。

　しまった、と舌打ちをする余よ裕ゆうすらない。

　ユリカはユリカで右側の敵に対処しているし、これではサフィニアが──

「爆条Ｍｅｘｅｓ雷來礼」

　もしかして、狙ねらっていたのか。そう疑いたくなるほど絶ぜつ妙みようのタイミングで、サフィニアの魔ま術じゆつが完成した。

　マリアローズの知識によると、これは爆ばく雷らい索さくという高位要素魔術の一つだ。発動した場面は見たことがないけれども、書物で呪じゆ文もんを読んだことはあるし、おおよそどういう現象が起こるのかも知っている。

　ほぼイメージどおりだった。だが、想像していたよりずっと華はなゞばなしい。

　サフィニアの杖つえから発せられた幾いく筋すじもの雷かみなりは、見えないはずの隠密悪魔どもに絡からみつき、あっという間に黒くろ焦こげにして感電死させた。

「大だい丈じよう夫ぶですか……マリアローズさん……」

「あ、うん」

　マリアローズは立ち上がりつつ、サフィニアの魔術士としての力量に半ば呆ぼう然ぜんとしていた。

　要素魔術はＬＥＰ（下層エレメンタルプレーン）にいる要素精せい霊れいの力を借りて、この世界に何らかの現象を引き起こす魔術だ。ごく初歩的なものならマリアローズでも使えるが、制せい御ぎよが難しい。ただ放つ。引っこめる。強弱をつける。それくらいは何とかなっても、サフィニアのように仲間を対象から外した上で爆発的な威い力りよくを発揮させるなど、いったいどうすればそんな

曲芸めいた芸当ができるのかという話だ。

「でも……」

　──こんなすごい人が、どうして魔術士マジシヤン？

　非常に不健康そうで薄はつ幸こうそうで不景気そうな面おも差ざしをしているが、サフィニアはせいぜい二は十た歳ちくらいだろう。いや、もっと若いか。まあ、様々な魔術的な方法によって、年ねん齢れいをごまかしていなければの話だが。

　それにしても、魔術士マジシヤンはない。

　魔術士といえば、錬れん金きん士し、機術士、医術士以外の魔術を使う者全ぜん般ぱんのことだが、もう一つ意味がある。

　魔術士全体の中では魔術士マジシヤンが一番下したっ端ぱで、彼らの師し匠しよう、つまり弟で子し持ちの魔術士は魔術師マギと呼ばれ、孫弟子までいる魔術士が魔導師マジスタ。さらには、俗ぞつ界かいに関心を持たず魔術の研究に没ぼつ頭とうしているような者、要するに、面めん倒どうくさがって弟子をとらない高位の魔術士は魔導士ウイザードと呼ばれたりする。

　ただ、魔術士の結社、組合などに加入している者は別として、このランク分けは厳密なものではないらしい。

　その点は、魔術をある目的のみに限定して用い、厳格な徒と弟てい制がある錬金士や機術士、師弟関係を重んじる医術士とはまるで違ちがう。魔術師マギ、魔導師マジスタ、魔導士ウイザードなどを勝手に自じ称しようしても、実力さえあれば文句を言われないのが、魔術士の世界だ。

　たとえば、マリアローズが知っているとある魔術士は、ろくな弟子もいないのに魔術師マギを名乗っていた。

　ただ、彼はその称号を守るため、たまに辻つじ勝負を挑いどんでくる魔術士マジシヤンどもを蹴け散ちらさなければならなかった。裏返せば、敗北しない限り、彼は魔術師マギなのだ。

　その彼と比べても、魔術士としての力量は、サフィニアの方が遥はるかに上だろう。であれば、当然、サフィニアは魔術師マギを名乗ってもいい。

実績もなく、魔導師マジスタや魔導士ウイザードを自称すると、魔術原理主義者の集団も目の仇かたきにしてくるらしいので敷しき居いが高いが、せめて魔術師マギ。

というか、これで魔術士マジシヤンと言い張るのは、むしろ詐さ欺ぎだ。

「……関係ないけどね」

マリアローズは黒焦げになった隠密悪あく魔まを跳とび越こえながら、小さく呟つぶやいた。

そう、関係ない。

サフィニアがどんな事情で魔術士マジシヤンを自称していようが、個人的な問題に立ち入る権利など、マリアローズにはない。その必要もない。

もし、このままＺＯＯに加盟することになったとしても、マリアローズの目的は彼らを利用することであって、彼らと馴なれあうことではないのだ。そういうつもりだったはずだ。

つまらない失態のことなど、忘れてしまえ。

とにかく、今は劫ごう火かを、三億ダラーを──

「しかしな」

トマトクンが足を止めずにマリアローズを振ふり返り、片方の眉まゆをつり上げた。

「この程度でそんなざまだと、先が大変だぞ。隠おん密みつ悪魔なんて物の数に入らんからな。本来、サフィニアが魔術を使うような相手じゃないんだ」

「……僕のせいだって言いたいの？」

「そう聞こえなかったか？」

トマトクンはあっさり肯こう定ていした。

「お前のせいじゃなくて、誰だれのせいだ。お前以外は全員、普ふ

段だんどおりに動いた。お前にサフィニアの左側を任せたユリカにも落ち度はない。実際、ユリカは右側の敵を全部止めて、なおかつ一度はお前を救ったんだからな。お前がすっ転んだりしなければ、サフィニアの魔術なしで撃げき退たいできただろう」

　糾きゅう弾だんするでもなく、淡たん々たんとしてもいない。かえって面おも白しろがるような口調だったので、マリアローズは困こん惑わくした。これでは、しょげ返ってみせればいいのか、とりあえず口先だけでも謝罪すればいいのか、それさえも判断がつかない。

「マリア」

　トマトクンが三さん叉さ路ろからしばらく進んだところで立ち止まった。

　皆みな、無言でそれに従った。

　まるで、トマトクンのためだけに存在する兵隊のごとく。操あやつり人形のように。

「集団パーテイー戦では、弱点の衝つきあいになる。この集団の弱点はお前だ。集団パーテイーはどこかが崩くずれると脆もろい。たとえ、それがとるに足らない一部分でもな。死はそれだけ重いんだ。特に人数が少なければ少ないほど、この傾けい向こうは顕けん著ちよになる」

「何が言いたいのさ」

　マリアローズは不ふ愉ゆ快かいそうな声こわ音ねを作ろうとしたが、今にも顎あごが震ふるえ出しそうだった。

　トマトクンは、小こ面づら憎にくいほどいつもと変わらない。

「お前はお客さんのつもりでいるのかもしれん。だが、いったん俺の集団パーテイーに組みこまれたからには、それだと困る。はっきりいって、お前一人が死ぬのと、お前を助けようとして他ほかの一人が死ぬのと、どちらかを選ばなきゃならんのなら、俺は迷わずお前を見捨てる」

「み、見捨てればいいだろ……勝手に」

「それですむなら問題ないけどな。さっきも言ったとおり、集団パーティーは崩れると脆い。俺はまず滅めつ多たなことでは死なんが、そうじゃないやつだっている。お前の技量が劣おとっているのは仕方ないとしても、気持ちが定まらんせいで他のやつを死なせるのはごめんだ」

「回りくどいね。つまり、僕が足手まといだってことでしょ？」

　挑ちよう戦せん的に言い放ったつもりが、声が裏返ってしまった。

　思わず下した唇くちびるを噛かんだマリアローズを、トマトクンが静かに凪なぎいだ黄玉トパーズの目で見つめた。

「技量が劣っているのは仕方ない。二度も言わせるなよ。お前が足手まといかどうかは、力の差じゃない。心構えで決まる。それがわからないなら、とりあえず俺の言うこと以外は一いつ切さいするな。俺に盲もう従じゆうしろ。俺が命じるように動いて、あとは黙だまっていればいい」

「……横暴だね」

「集団パーティーってのは、全員で一人の人間みたいなものだからな。頭は二つ以上いらん。意見は聞くが、最後に決断するのは俺だ。クランも同じだぞ」

「独裁者なんだ」

「いや、園長マスターだ」

「動物園ＺＯＯの園長マスター？　ふん……」

　マリアローズはちらりとトマトクン以外の面々の顔色をうかがった。マリアローズが神経質になりすぎているのかもしれないが、皆との距きよ離りがいきなり開いてしまったような気がする。

　結局、マリアローズ一人だけが部外者なのだ。

　一人だけ弱くて、のけ者で、いなくてもいい。いや、いない方がいい。

　そう考えると、何もかもが馬ば鹿からしくなってきた。

「わかったよ。きみに従えばいいんだろ。で、何をすればいいの？　ここから一人で帰れってのだけは勘かん弁べんしてよね。帰れないし」

「そうだな、さしあたって──」

　そこまで言ったところで、トマトクンの目つきが険しくなった。

「おい、カタリ、入ってから何分経たった？」

「へ？」

　カタリは腰こしの物入れから懐かい中ちゆう時計らしき物をとり出した。

「二十三分ってとこやな。魂たましい集めの巡じゆん回かいまでには、まだ時間があるはずやで」

「妙みようだな」

　トマトクンは犬のように周囲の匂においを嗅かいだ。

「やっぱり匂うぞ。お前の時計、壊こわれてないか」

「そんなわけないがな。トマトクンの鼻がおかしうなったんちゃうか」

「いいや、間ま違ちがいない。ピンパーネル」

　トマトクンに名を呼ばれると、ピンパーネルは人間離ばなれした身軽さで手近な建物の屋根に上り、素す早ばやく三百六十度に視線を巡めぐらせた。

「来マス」

　ピンパーネルの指が一点を示した。

「アっち。距離百」

「近いな」

　トマトクンは低く唸うなって眉まゆ根ねをよせた。

「ファッルーカめ。俺たちが常連なもんだから、ルートを変えやがったな」

「どうするんや。百メーテルじゃ逃にげられへんで」

　そう問いながらも、カタリはもう斧おのを抜ぬいて臨戦態勢をとっている。ユリカも棍こんを握にぎり締しめているし、サフィニアも特殊なチヤネ精神集中リングに入っている顔つきだ。事情が呑のみこめずに置いてけぼりを食くらっているのは、一人、マリアローズだけだった。

　もっとも、彼らの緊きん迫ぱくした様子から、うかがい知れることはある。きっと何か厄やつ介かいな敵でも迫せまっているのだろう。彼らでさえ安あん穏のんとはしていられないような、恐おそろしい敵が。

「やむをえん、やるぞ」

　トマトクンが抜き放った大剣を担かつぎ上げるように構えると、カタリがその右側につき、屋根から飛び降りたピンパーネルが左側についた。

　前衛が三人、後衛の真ん中がサフィニアで、右にユリカ、左にマリアローズ。ただし、トマトクンの話の内容からも、マリアローズは戦力外だ。それどころか、邪じや魔ま者ものだろう。

　いっそ、今すぐこの場から消えてしまいたいくらいだが、それは不可能だ。死にたくもない。マリアローズは自分の心臓の鼓こ動どうを聞きながら、ここで待つしかない。本当は待ちたくなどないのに。

　逃げ出したい。これはきっとやばい。やばい感じしかしない。

「魂集あちゆめは」

　ユリカが囁さささやくように言った。

「正しくは悪魔ではないわ。ファッルーカの使ちゆかい魔なの。悪魔以外の生しえい物には問答無用で襲おしよいかかるように条件付ぢゆけられている、一種の擬ぎ似じ生しえい命体で━しょうね、キング・グッダーの魔導兵に近い存しよん在じやいといえるかもしれない。手て強ごわい相手よ」

「そんなこと、僕に教えてどうするのさ」

　マリアローズは皮肉っぽく唇くちびるを歪ゆがめようとしたが、うまくゆかなかった。

「僕を怖こわがらせて楽しい？　やめといた方がいいんじゃない。パニクって、暴れて、きみたちのチームプレイを滅め茶ちや苦く茶ちやにしちゃうかもよ」

「マリア……」

　ユリカは短くため息をついて頭を振ふった。

「しょんな気持ちのままでいたら、あなた、死ぬわ。死ねば二度と生き返れないかもしれないのよ」

「わかってるよ！　言われなくたって、そんなこと……」

　つい声を荒あらげてしまったのは、これまで見てきた無残な死の数々が、一いつ瞬しゆん、脳のう裏りをよぎったからだ。

　僧そう侶りよとか坊主ぼうずとか神官とか呼ばれる連中が、蘇そ生せい式しきという独自の技術で死者の復活を行うようになってから、どれくらい経つのか。少なくとも、百年や二百年の歴史ではない。世界には坊主どもが支配している国もあるという。死を乗り越こえる技術は、それほど人にとって高い価値を持っているということだ。

　しかし、魂アニマの情報を復元し、修復した肉体に封ふう入にゆうする蘇生式も、決して万ばん能のうではない。

　坊主どもは蘇生式を厳重に秘ひ匿とくしているので、詳くわしくはわからないが、とりわけ、脳。この複雑怪かい奇きな器官の復元は困難を極きわめるという。著いちじるしく脳が損傷している死体、あるいは肉体の半分以上が破損した死体、または腐ふ敗はいが進行しすぎた死体に対しては、坊主の腕うでや祭さい壇だんの性能にもよるが、だいたいお手上げらしい。

　いずれにしても、死は必ずしも永遠の眠ねむりを意味するわけではない。

　だが、必ずしもという副詞は絶対に取り外せない。

──死。

死はそれだけ重いんだ、だって？

「……わかってるに決まってるだろ……」

俗ぞくに、蘇生式でも生き返ることのできない死を永久死というが、マリアローズだってその場面は何度も見てきた。自分が関かかわった永久死も、無関係の永久死もあった。多くの死があった。無数の死があった。父が死んだ。母も死んだ。大切な人はほとんど全員、死んだ。彼らの死はすべて重かった。本当に重かったのだ。マリアローズの細く薄うすい肩かたには重すぎた。

そんなことを考えているうちに、なまあたたかい風が吹ふき下ろしてきて、正面の建物の上に黒っぽい何かが現れた。

そいつが音もなく空中を滑すべって進み出てくると、マリアローズたちは見る間にその影かげの中にすっぽりと入ってしまった。

しかし、大きい。

大きすぎる。人間何人分などと言い表すのも馬ば鹿か馬鹿しいほどだ。

そいつはたぶん、直径二十メーテルほどの球形──いや、球とは呼べないだろう。肥満した人間が真っ黒い大きな布を頭からかぶって歩いたら、あんな形に見えるかもしれない。

その胴どう体たいから腕らしきものが一本ずつ左右に伸のびていて、体の中心には真っ赤な三日月形の、あれは口か。黄ばんだ歯や舌みたいなものがのぞいているので、やはり口に違ちがいない。

──こいつが、魂たましい集め。

いわばファッルーカ製の魔導兵だという魂集めは、大きく口を開いて生なま臭ぐさい息を一行に吐はきかけ、右手に巨きょ大だいな包丁を出現させた。

「寒磁罪母刹ＲｅｕＬａ外ＮａｕＲａ矛Ｊｕｄａｓ怨氷結酷寒冷獄」

そこにサフィニアが叩たたきこんだのは、おそらく要素魔ま術じ

ゆつだろう。呪じゆ文もんの感じからして、要素精せい霊れいの中でも気位が高くて扱あつかいづらい、水すい霊れいや時霊といった連中を使し役えきしたのかもしれない。

　果たして、一瞬のうちに魂集めの巨体の表面が霜しもで覆おおわれた。

　巨体から黒い何かの破は片へんがぱらぱらと剝はく落らくして、地上に降り注ぐ。いや、落ちてきたのはそれだけではない。サフィニアの魔術によって運動能力が著しく減損したのだろう。魂集め自体も、建物を押し潰つぶしながらゆっくりと降下してきた。

　こうして手の届く位置まで引きずり下ろされた魂集めに、トマトクン、カタリ、ピンパーネルの三人が襲おそいかかった。

　まず、トマトクンの大剣が一いち撃げき。間かん髪はつを入れず、カタリが両手の斧おので二連撃。ピンパーネルは大だい胆たんにも魂集めの体を駆かけ上り、雌し雄ゆう一いつ対ついの短剣でその頭頂部を滅めつ多た刺ざしにした。

　だが、もともと短時間しか持続しない魔術なのか、それとも魂集めがタフなのか。

　三人の攻こう撃げきでかえって目が覚めたように、魂集めが天地を揺ゆさぶる雄お叫たけびを発して包丁を振り回した。これをよけるために、トマトクンとカタリは後退せざるをえない。後退して間合いが開いてしまうと、リーチの差があるので、手出しができない。

　結果、ピンパーネルだけが魂集めに突つき刺した短剣にしがみついているという、あまり楽観できない状じよう況きようになった。

「時間が……必要です……」

　たぶん、長い集中と詠えい唱しようが必要な魔術を使うつもりに違いない。サフィニアはローブに複数あるポケットからいくつかの触しよく媒ばいをとり出し、杖つえを握にぎって目をつぶった。

　時間を稼かせげ。つまり、彼女が言いたいのはそういうことなのだろうが、マリアローズには何をするべきかわからない。というより、自分が何かするのだとはこれっぽっちも考えなかった。

だから、トマトクンとカタリが左右から魂集めに接近しようと試み、ユリカが二人をサポートするために前へ出るのを、マリアローズはただ眺ながめていた。

何もしなかった。できなかったのではない。しなかったのだ。傍ぼう観かん者しやでいることを、マリアローズは自ら選んだ。

まあ、マリアローズが座ってくつろいでいようが、あたふたして駆けずり回っていようが、死んでいようが、同じだろう。大勢に影えい響きようはない。

魂集めは、最初、トマトクン、次いでカタリに注意を向ける素そ振ぶりを見せた。

しかし、彼らより早く魂集めの懐ふところへ入りこんだ者がいた。

魂集めは、おそらく反射的に、この小さな女医術士ナースを血祭りにあげることに決めたようだ。

包丁が唸うなりを上げた。二階建ての建物をたやすく粉ふん砕さいする一ひと振ふりで、ユリカの愛らしい肢し体たいが一いつ瞬しゆんでミンチに──はならなかった。

「離りゃぁぁっ……！」

ユリカは、受け流したのだ。

人間の手首ほどの太さもない、あの棍こんで。

凄すさまじい速度と重量で迫せまる包丁を、ユリカは棒で受け止めて体を回転させ、どのような物理法則に則のつとった作用によるものか、魂集めも横転した。ただし、ユリカも無事ではすまなかった。

体を回転させた勢いのまま、撥はね飛ばされたように近くの建物の壁かべに激げき突とつしたユリカは、地面にずり落ちて、すぐには立ち上がれそうもない。その胸に自らの手を当てて身動きしなくなったのは、自分に医術式を施ほどこしているからだろう。見た目は地味だが、医術式は非常に精密な技術だ。時間がかかる。いずれにせよ、ユリカの復帰はしばらく期待できまい。

とはいえ、ユリカは大きな仕事をした。

トマトクンとカタリ、それと、いつの間にやら彼らと肩かたを並べたピンパーネルが転てん倒とうした魂集めに加えているのは、もはやリンチだった。

特に、トマトクンの大剣は魂集めの外がい殻かくを縦じゅう横おう無む尽じんに斬きり裂さいて、内部を破は砕さいし、夥おびただしい量の褐かつ色しょくの粘ねん液えきを飛び散らせた。包丁を持つ右みぎ腕うでを切断したのが決定的だった。魂集めは反はん撃げきに転じるための手段を、その気力さえも失ったかに見えた。

「──来るぞ、下がれ……！」

このまま息の根を止めることができるのではないか。

だが、マリアローズがそう思ったところで、トマトクンが後退を指示し、カタリとピンパーネルは弾はじかれるように飛び退すさった。ユリカもよろよろと移動する。いったい、何が起ころうとしているのか。

横よこ倒だおしのまま、残ざん骸がい同然の姿となった魂集めが、めりめりと音を立てながら限界以上に口を開けたとき、ちょうどサフィニアの詠唱が始まった。

「ＮｉＬＩＬＮｕｍＭｏＬＳｅＬＺｅＬ我申子浄化閻魔也ＤａｇｅｌｉｓＦｏｎｄＶｏｎｄ真藍蓮往還涅槃王ＳｅｖｅｎＮｅｖｅｎＸ＋Ｘ喪──慧──手──翅──痲──衛」

長い呪じゅ文もんだった。呪文というやつは、長いからといって、省略したり早口で言ったりできない。対人間の会話と同じだ。聞き手がいるので、相手に理解されなければまったく意味がない。

今、サフィニアが語りかけた要素精霊は、ちゃんと彼女の意志を汲くみとり、彼女に力を貸すことに同意した模様だ。

炎えん霊れいＮｉｇ。

ＬＥＰの住民の約一割を占しめるという炎ほのおの要素精霊のうち、もっとも凶きょう猛もうで魔ま術じゅつ士しにとっては扱あつかいづらい乱暴者たちが、猛たけり狂くるう特とく徴ちょう的な藍あい色いろの炎で焼きつくそうとしたのは、魂集めそのものではな

かった。

　魂集めの口から飛び出してきた、何か。

　それは痩やせこけて四し肢しが異様に長く、大きさは人間の五倍ほどはありそうだった。それでいて人間の特徴を持つその生物は、空中で藍色に燃え上がって垂直落下し、魂集め本体をも延焼させて、あっという間に消し炭と化した。

「ひゅう。魂集めなんぞには、ちともったいない火か葬そうやったな」

　カタリがまだ煙けむりを立ちのぼらせている消し炭を一いち瞥べつしてから、ユリカを振ふり返った。

「ユリカ、大だい丈じよう夫ぶやったか？」

「ええ、何とか……」

　ユリカは建物の壁にもたれかかって医術式を継けい続ぞくしている。「何とか」とは言いつつも、まだ大丈夫そうには見えない。回復までには今しばらくかかるだろう。もともと、医術士が自分自身に医術式を施すのは、集中が乱れやすく難度が高いのだ。

　それにしても、あそこでユリカがあの行動を選せん択たくしなかったら、どうなっていたか。

　間ま違ちがいなく、彼らはもっと苦戦していただろう。サフィニアが魔術を完成させるタイミングも狂ったかもしれない。すべてが嚙かみあって、うまくいったからいいようなものの、綱つな渡わたりのような連れん携けいだといわざるをえない。

　誰だれかが何か一つ間違えれば、死ぬ。

　冗じよう談だんじゃない。

　誰かのせいで死んだり、負傷するなんて、本当に冗談じゃない。

　もちろん、自分のせいで誰かが死ぬのも、傷つくのも気分が悪い。というか━嫌いやだ。それだけは、絶対に、たまらなく嫌だ。

　彼らは狂っているのではないかと、半ば本気でマリアローズは

思った。

　だって、おそらく彼らはユリカを信じていたのだ。

　この状じよう況きようではユリカはこう動いて、自分はこうすればよく、そうするとサフィニアの魔術が発動して、こうなるのだと。

　だが、ユリカが動かなかったら？　サフィニアの魔術が発動しなかったら？　一瞬のうちに共有しうる筋書きが彼らにあったのだとしても、そのとおりになると誰が保証するのか？　何でそこまで他人を信しん頼らいできる？

　マリアローズは、煙を上げつづける魂集めとその中から出てきたやつに目をやった。

　なぜか、胸の奥にはどろどろと濁にごった淀よどみのようなものがたまっている。

　失望とか、絶望とか、落らく胆たんとか。

　名前をつけるとしたら、そんな感じになるだろう。マリアローズにとって慣れた感情ではあるが、どうして、と疑問を感じる。何で、自分がこんな気持ちにならなければならないのか。

　もし、今、誰かに話しかけられでもしたら、とんでもないことを口走ってしまいそうだが、その心配はなさそうだ。

　五人がマリアローズのことをどう思っているか。考えるまでもない。こんな能なしのお荷物のことなんて、誰も気にかけたりしないだろう。

　マリアローズは彼らの表情をうかがう気にもなれず、さっきから見つめている魂たましい集めの口から出てきたやつの亡なき骸がらがごそりと動いたような気がして、あれ、と首をひねった。

「――あいつ、まだ……」

　生きているという表現が、正しいかどうか。

　やつの焼け焦こげた表皮を内側から引き破って躍おどり出てきたのは、ぬらぬらした透とう明めいの液体にまみれた妙みように肌は

だの白い素すっ裸ぱだかの赤子だった。

　むろん、ただの赤子のはずがない。額に赤く《Ｆ》の文字が刻印されたそいつら──そう、赤子は一人ではなかった。全部で五人いた。五人の赤子は、それぞれ手に包丁を持ち、目にもとまらぬ速さでマリアローズに飛びかかってきた。

　こんなことが起こるなんて。

　予想だにしておらず、まるで反応できないマリアローズの前に、砂色の風が吹ふいた。

　ピンパーネルだった。

　神速で駆かけてきたピンパーネルが、雌し雄ゆう一いつ対つい二本の短たん剣けんを振るって、赤子どもを叩たたき斬きったのだ。

　三人斬った。

　二人斬り損そこねた、といってしまうのは、酷こくかもしれない。

　そもそも、他ほかの者たちはもちろん、ピンパーネルだって、とうていマリアローズと赤子の間に割って入れる位置にはいなかった。それでも間に合ったのは、ピンパーネルの人間離ばなれした身体能力のおかげだろう。本来、一番マリアローズの近くにいたカタリでさえ、この距きょ離りを縮めるためには、あまりに時間が足りなかったはずだ。

　足りないはずだったのだが。

　ピンパーネルの短剣をかいくぐるため、二人の赤子どもは大きく軌き道どうを変えた。

　それでできた一秒か、二秒か。

　もっと短いかもしれないが、とにかくその時間、やはりただ突つっ立っていたマリアローズを何かが突き飛ばした。

　何か？

　そんな言い方はない。

　相手は人なのだから。

「……ぐう……いっつう……何、さらしとんねん、ワレェッ……！」

　一本の包丁を右みぎ肩かたで、もう一本の包丁を左胸で受け止めたカタリは、動きの止まった赤子の首を両手の斧おので斬り飛ばした。

　だが、そこまでだった。

　赤子を斬った拍ひよう子しに包丁が抜ぬけると、カタリの傷口、特に胸の傷から、物もの凄すごい量の血液が噴ふき出した。

　カタリはたまらず斧を放ほうり投げて、その場にへたりこんだ。

「……は、反則や、ファ、ファッルーカめぇ……た、魂集めが、二回剝むけるなんて、い、今までとちゃうやん……」

「動くな、カタリ」

　大剣を背中に戻もどしたトマトクンが走りよってきて、カタリの背中を抱だくようにして姿勢を固定させた。

「うむ、こいつは急所をやられてるな。ユリカ、治ち療りようできるか」

「やってみるわ」

　うなずいてカタリの傷口に手をあてたユリカも、顔色が悪い。まだ自分の治療が完かん了りようしていないのだろう。そのせいもあってか、医術式をカタリに施ほどこしているユリカの表情はひどく険しい。出血も止まらない。それなのに、カタリは薄うすく笑っている。

「──どうして……」

　マリアローズはうつむいた。カタリの顔を見ていられない。

　あの血の赤さは、目の毒だ。

「何でだよ……僕なんかのこと、助けるなんて……」

「しゃ、しゃあないやんか」

　カタリは少し咳せきこんだ。ユリカは別の術を使いはじめたらしく、その唇くちびるから呪じゅ文もんが紡つむがれている。

「もともと、わしらが誘さそったんやし……そ、それに、お前やったら、あれ、食くろうてたら……たぶん、しんどかったで。頭な……頭、やられとったかも、しらん。そしたら……お、おしまいや。わしなら、こ、こんくらいで、すむわ。ピ、ピンプ、トマトクンみ、みたいに……」

「喋しやべるな、カタリ」

　トマトクンが静かに命じても、カタリはやめなかった。

「わしは、そんなに強う、あらへんけど……お前よ、よりかは、だいぶマシやってとこ……見せな……か、かっこつか……」

「僕は」

　マリアローズはそこで声を失い、自分は何を言おうとしたのかと訝いぶかった。

　だいたい、何だこの雰ふん囲い気きは。

　死ぬのか。

　死ぬというのか。

　まあ、たとえ死んでも、ＺＯＯには専属の坊主ぼうずがいるという。頭もやられていないし、死体を持ち帰れば、たぶん生き返ることができる。蘇そ生せい式しきはたまに失敗してしまうこともあるらしいが、大だい丈じよう夫ぶだろう。おそらく──絶対、とは言いきれないが。

　そもそも、助けてくれと頼たのんだわけでもないのに、カタリが勝手に飛び出してきて、身代わりになったのだ。あのままマリアローズが死んで、たとえ蘇生不可能に陥おちいっても、カタリには関係ないのに。マリアローズがそんな目に遭あうとしたら、自じ業ごう自得だ。

　そう、だからこれもマリアローズのせいではない。

　カタリの自業自得だ。

「僕、は──」

　マリアローズは拳こぶしを握にぎり締しめて、強く唇を嚙かんだ。

　ぶつけどころのない憤いきどおりとともに絞しぼり出した声は、まるで自分のものではないかのように低く、かすれていた。

「恩に着たりしないからね」

「は、はは……」

　カタリは乾かわききった力のない笑い声を立てた。

「は……す、好きに……せえや、わしかて、死ぬの、これが、初めて、や……ない──」

　言葉が途と切ぎれ、ユリカの呪文が止まり、トマトクンが深くため息をつく音が聞こえた。

　マリアローズは顔を上げることができず、血ち塗まみれの石いし畳だたみと、動かなくなったカタリの手をしばらくの間、ただ見つめていた。

Omenage 897 6th revolution 19th day

サンランド無統治王国首都エルデン第五区・第一王立銀行前広場

〝鉄鎖の憩い場(アイアンチェインスクウェア)〟

chapter.6

雨のせい

翌日は朝から雨模様で、鉄てつ鎖さの憩いこい場もいつもより人の出が少なかった。

そういえば、あの日もこんなふうに雨が降っていた。

肌はだを刺さすような大おお粒つぶの雨が。

父の遺体を納めた棺ひつぎと、母の手を引いて第十三区を歩いた、あの日も──

マリアローズは、父にも母にも似ていなかった。

両親とも髪かみの毛と瞳ひとみは黒かったし、こういっては何だが、顔形もごくごく普ふ通つうだった。幼い頃ころは、まったく両親と共通点のない自分の容姿を奇き異いに感じたものだ。

また、母親の趣しゆ味みか何かで、女の子の服を着せられるのが嫌いやで、よく反発した。

頭とう髪はつの色から名づけられたらしい自分の名も、恥はずかしくて仕方なかった時期がある。

だが、両親は渾こん身しんの愛情を注いで育ててくれたのだと思う。

大切にしてもらっていた。守られているという実感があった。父も母も、神話的なまでのお人ひと好よしで、誰だれかに頼たよられると、自分がどんなに困っていても助けようとし、すぐに他人を信じる人だった。子供のマリアローズから見ても、本当にあぶなっかしいったらなかったが、これ以上ないほどあたたかい家庭だった。

一家三人でエルデンに流れ着き、父が家族を食わせるために侵入者クラツカー稼か業ぎようを始めてからも、それは同じだった。

もともと、父が親しん戚せきの借金を肩かた代がわりする羽目になり、国を出ざるをえなくなったのだが、父の口から誰かへの恨うらみ言ごとを聞いたことはない。母も決して笑え顔がおを絶やさず、夜は必ずマリアローズをしっかりと抱だいて眠ねむった。あまり力仕事が得意ではなかった父は、三流以下の侵入者クラツカーで、貧びん乏ぼうだったものの、家族のために最低限の食料品は確

保してくれた。

　それでも、たまに父がマリアローズや母に言った。「お金があれば。父さんが人並みにちゃんとお金を稼かせぐことができたら、お前たちにこんな思いをさせなくてすむのに、ごめんな」

　そのたびに、母とマリアローズは父を慰なぐさめた。

　実際、母もマリアローズも不満など持っていなかった。

　仕事を終えた父が、第六区の貧ひん民みん窟くつに帰ってきて、母とマリアローズを抱き締め、三人で食事をとり、一日にあったことを話して眠りにつく。それだけの毎日だった。夏は暑く、冬は寒かった。娯ご楽らくなどなかった。特に、父にとっては楽ではなかっただろう。それでも、大切な日々がそこにはあった。

　終わりは、突とつ然ぜん。

　その日、帰りが遅おそい父を掘ほっ立て小屋の外で待っていると、同じ貧民窟に住んでいた父の同業者が、沈ちん痛つうな面おも持もちで声をかけてきた。

　マリアローズと母は、その同業者に連れられ、初めてアンダーグラウンドに足を踏ふみ入れた。

　出入口の近辺で、変わり果てた姿の父を見つけた。

　父はひどい傷を負って息絶え、何者かの手によって、身ぐるみ剝はがされていた。

　あれから──今、思えば本当に子供の考えだが、マリアローズは父を納めた棺と茫ぼう然ぜん自失の母の手を引き、第十三区の高層寺院を訪ねて回ったのだった。

　たった数千ダラーの、しかし、全財産を握り締めて。

　きっと、お坊ぼうさんなら父を生き返らせてくれるだろう、と根こん拠きよもなく信じて。

　肌を刺すような大粒の雨が降っていた。

　坊主は皆みな、大金を要求した。中には、マリアローズや母が身

を差し出すなら、という条件を出してきたやつもいた。

　僧そう侶りよや神官といえば、困った人に手を差し伸のべてくれる偉えらい人たちだと思っていたのに。

　少なくとも、マリアローズの故郷ではそうだった。

　しかし、第十三区の高層寺院で崇あがめられているのは、生命を嘲ちよう弄ろうする女め神がみ、悪徳のイヴ・ヴイヴイシヤスやその従属神たちが主だ。弾だん劾がい神しんＺＹＸや光明神マークス７など、一いつ般ぱん的に善神とされる神々に仕える僧侶や神官は、過去、高層寺院の占せん領りよう合戦でほとんど敗退したのだという。

　いずれにせよ、たった数千ダラーで何とかなるものではなかった。

　あのとき、マリアローズはようやく父の言葉の意味を理解した。

　金。

　もっと金があれば。

　金で買えないものも確かにあるかもしれないが、金があるに越こしたことはない。事実、金があれば、父を生き返らせることだってできたはずだ。

　このエルデンではよくある出来事といってしまえばそれまでだが、それからのことは思い返すのも苦痛だ。

　いい加減、精も根もつき果てて、第十三区の路地裏で途と方ほうに暮れていたところを、複数の男たちに襲おそわれた。母は、まあ、何というか、早い話が乱暴されて、すでに死んでいた父の遺体は連中に足あし蹴げにされ——父の顔が踏みにじられて、壊こわされる光景は、今でもはっきりとマリアローズの目に焼きついている。

　雨が降っていた。

　濡ぬれた地面が、母と父の血でさらに濡れた。

　マリアローズは一人だけ生かされたが、何のことはない。売り払はらって金にするためだったのだろう。

—こんなことを思い出してしまうのは、この雨のせいに違ちがいない。

アンダーグラウンドへ行く気になれないのも。

かといって、第十三区にいるのも嫌で、傘かさも差さずに人の出が少ない鉄鎖の憩い場をぶらついているのも。

昨日のことが、頭から離はなれないのも。

誰かの声に誘さそわれるように、一いつ軒けんの露ろ店てんの前で足を止めたのも、全部。

歌、だろうか。

露店の奥で、顔を頭ず巾きんで隠かくした女が、七本弦げんの弦楽がつ器きを弾ひきながら歌をうたっている。

客寄せのつもりか。市場には、たまにこうして一芸を営業に生かそうとするやつもいる。

ただ、女の歌はひどいものだ。だいたい、雨音にかき消されて、店先にいるマリアローズにしか聞こえない。

いったい、何をやっているのか。

襤ぼ褸ろをまとい、古びた楽器をかき鳴らして、ひどくしゃがれた声で歌う顔の見えない女も。

濡れ鼠ねずみでそれに耳を傾かたむけている自分も。

「今の、何の歌だったの」

マリアローズは、女が楽器から手を離したのを見て声をかけてみた。

女が黙だまって店先に置いてある皿を顎あごで示したので、その中にアルミニウム貨を一枚投げ入れてやると、やっと答えが返ってきた。

「モトローリィの残忍公ザ・クリユーエルアザエル・ノーウェンダルクの物語」

「ふうん……残忍公、か。昔の人だよね」

女はそれには返事をせず、代わりに楽器を持ち直して、再び歌いはじめた。ひょっとすると、あのアルミニウム貨を前まえ払ばらいの料金と見なしたのかもしれない。



まあ、何でもいい。

マリアローズは地面に腰こしを下ろし、濡れそぼった外がい套とうにくるまり、女の歌を聴きいた。

いくら鉄てつ鎖さの憩いこい場とはいえ、無防備に目をつぶって。

まったくもって、正気の沙さ汰たではないが、なぜか全然気にならなかった。それも、この雨のせいか。

女が歌ったのは、モトローリィで政変に遭あって失しつ脚きやくした残忍公とクラン・その一族クリユー郎党エルがサンランドに逃にげこんでエルデンを占せん拠きよし、やがてエルデンの民たみが結成した復讐者クラたちン・の血盟アヴエンジヤーズに駆く逐ちくされるまでの物語だった。

その歴史上の事実は、サンランドにおけるクランの起源とされている。

もともと、クランとは、サンランドの北にある国モトローリィで、血族集団のことを指す言葉だ。ただし、今現在、サンランドでクランというと、基本的に血の繫つながりとは関係ない。その源流をたどってゆけば、残忍公一党に対たい抗こうするため、血判状を作って盟約を交かわした人々により結成された、いくつかの集団に行き着くのだという。

よって、クランとは、血よりも濃こく結びついた相そう互ご扶ふ助じよの集団ということになる。

親兄弟に対するように、裏切らず。

血けつ縁えんがぬぐいがたいものであるように、離り脱だつせず。

中には、いまだに加盟の際、血判状を作らせたり、互たがいの血を混ぜたワインを回し飲みする儀ぎ式しきを執とり行うクランもあるらしい。

とはいえ、さすがにそんな古風なクランは少数だろう。今では、強ごう奪だつ殺人強ごう姦かんを生業なりわいとする悪党バスタードもがつるんで悪事を働くために作ったクランや、侵入者クラッ

カーが何となく寄り集まっただけのクランもある。それでも、あるクランのメンバーが他ほかのクランのメンバーに殺されて、そこからクラン同士の抗こう争そうに発展するといった話は、結構あるらしい。

　つまり、赤の他人のため、仇あだ討うちだの落とし前だのといって、本気で喧けん嘩かするわけか。

　阿あ呆ほらしい。

　ここは無統治王国ではなかったのか。

　それなのに、決して少数派とはいえない多くの人々が、それぞれ集団を形成し、ある程度の秩ちつ序じよを保って暮らしている。血判状だとか、血入りのワインだとか、クランの面子メンツだとかでそれらしい格好をつけ、お互いが裏切らないという証あかしを立てて、群れていなければ不安で仕方ないのだ。

　一人で生きてゆくのは、つらいから。

　その気持ちはわかる。

　確かに、楽じゃない。楽じゃないとも。

　けれども、誰だれかと寄り添そっているのだって、結構、つらい。

　アジアンも言っていたように、余計な気苦労は増えるし、他人のために厄やっ介かい事ごとを背負いこむことだってあるだろう。そんなのはごめんだと好き勝手ばかりしていたら、おそらく嫌きらわれて、疎うとまれる。いづらくなって、息苦しい思いをしそうだ。どれも一人ではありえない苦労だ。

　もちろん、メリットもある。

　一人ではできないことも、他人の力を借りればできるかもしれない。

　そう思えばこそ、一度はＺＯＯの連中と行動をともにしてみた。だが──

　マリアローズは、目の前で自分を庇かばって死んでいったカタリ

に、礼すら言わなかった。

　謝りもしなかった。

　あまつさえ、逃げ出した。

　蘇そ生せい式しきを施ほどこされ、カタリの土気色の顔が生気を取り戻もどすまで、最低それまではトマトクンたちに付き合うべきだとわかってはいた。それは侵入者クラッカーの仁義というか、暗あん黙もくの了りよう解かい事じ項こうみたいなもので、マリアローズは蘇生したカタリに会い、別れを告げてから消えるべきだった。

　それにも拘かかわらず、Ｄ１から地上に出て、トマトクンに担かつがれたカタリの死に顔をはっきりと見た瞬しゆん間かん、マリアローズは駆かけ出した。後ろでユリカが何か叫さけんだように思う。マリアローズを呼び止めようとしたのだろうが、無視した。脇わき目めもふらずに走って、第十三区の高層寺院ＧＭエンパシィへ戻り、自室に着いてから、毛布をかぶってすぐ眠ねむろうとした。

　結局、夜が明けて、今現在まで一いつ睡すいもできていない。

　どうしてあんなことしたのだろう。

　わからない。

　ただ、怖こわかった。

　そうだ。ずっと恐おそろしかったのだ。

　閉へい鎖さ魔ま宮きゆうからサフィニアの限定魔ま術じゆつでＤ１に帰き還かんするまでも、そこからＤ１の出入口までの間も、自分のせいで死んだカタリに目をやらないようにしていた。

　日の光の下に出たときだった。思わず見てしまった。当然、カタリは完全に死んでいた。そして、考えてしまったのだ。

　もし、何かの間違いで、カタリが生き返らなかったら？

　父みたいに帰ってこなかったら？

　母のように。子し爵しやくに殺されていった友だちのように、二

度と帰ってこない、永と遠わの死人となり果ててしまったら？

「……だから、やだったんだ……」

　マリアローズがそう呟つぶやくと、女が演奏をやめて、世界が雨音に塗ぬり潰つぶされた。

　女が頭ず巾きんをめくって、まじまじとマリアローズを見つめている。

　思っていたより、女はずっと若いようだ。

　着ているものはくたびれているが、黒くろ髪かみや浅黒い肌はだは汚よごれていない。美女といっても嘘うそにはならないだろう。しかし、あらわになったその喉のどには、あまりにも無残に醜みにくく引きつれた傷きず痕あとがあった。声がしゃがれているのも、もしかするとその傷のせいか。

「それ」

　最初にマリアローズの頭に浮うかんだのは、なぜ医術式で治ち療りようしてもらわないのか、という疑問だった。

　女も察したのだろう。片手で喉を押さえて、聞きづらい声で言った。

「時間が経たちすぎて、治せないと」

「……そうなんだ」

　相あい槌づちを打ってから、後こう悔かいして顔を伏ふせた。見知らぬ女に、いったい何を訊きいているのか。視線を落とした店先に、ちょうど一ひと振ふりの剣けんが雨ざらしになっていたので、何気なく手にとった。

　それは、マリアローズが使っている刺し突とつ剣けんとは違ちがう。短めの長剣だ。分類的には、小剣ということになるだろう。気がつけば、マリアローズは剣さえ持っていない。丸まる腰ごしでエルデンを歩いていたのか。

　まあ、捨て売りの品をさらに値切って買った中古のエストックなど、たいして役に立ちはしないだろうが。

一応、剣聖の弟で子しバーニング・バラッドが著あらわした『武技概がい論ろん』を読み、独学で練習してみようとはしたものの、すぐにやめて──ふと思う。でも、本当にそれでよかったのか？

マリアローズは結局、一人きりなのだ。

確かに、いくら鍛きたえても筋肉がつかないこの体は生まれつきの不利だが、それはもうどうしようもない。自分を生んでくれ、あたたかい思い出を残してくれた両親を恨うらみたくもない。せっかく彼らがくれた命だ。生きられる限り生きて、生き抜ぬいてやる。そのためには、持ちうる牙きばや爪つめを研とげるだけ研いで、最後まで戦うしかない。

小剣の鞘さやを払はらってみると、結構軽いし、見たところ造りもしっかりしていて、こんなうらぶれた店に置いてある品物にしては、悪くなかった。

少なくとも、あのエストックよりはずっと武器らしい武器だろう。

「私の歌」

と、女が例のざらついた声で尋たずねてきた。

「耳みみ障ざわりだったでしょう」

マリアローズは小剣を鞘に収め、女の瞳ひとみを真っ正面から見み据すえて、うなずいた。

「うん」

「雨の日だけ歌うことにしているの」

「そっか」

「お買い上げ？」

「値段次し第だいかな」

「五千でいい」

「適正価格だね」

　マリアローズとしては珍めずらしいことに、なぜか値切る気にはならなかった。

　ベルトの物入れを探さぐると、ちょうど千ダラー金貨が三枚と五百ダラー銀貨が四枚あった。マリアローズはそれで代金を払い、立ち上がって鞘ごとの小剣を腰に吊つるしてから、頭巾をかぶり直した女をちらりと見た。

「第六区にさ、モリー・リップス・アサイラムっていうところがあって」

「モリー……リップス？」

「有名だから、知ってるかもしれないけど」

　マリアローズは髪かみの毛が含ふくんだ水気を手で払い、女に背を向けた。

「凄すごく腕うでのいい医術士がいるから、治してもらえるかもよ、その喉」

　それだけ言って逃にげるようにその場をあとにした。なぜそんなことを言ったりしたのか。自分でもよくわからない。自然と言葉が口から滑すべり出たのだ。

　ただ、あの女の歌は、声こそひどかったけれども、音程は確かだったし、楽器の演奏も上手だったから。

　だから──そんな理由になるかどうかあやしいことを考えつつ、早足で露ろ店てんと露店の合間の細い道を曲がったときだった。

「──あ」

　相あい合あい傘がさでこちらへ歩いてくる男女と目があった。

　二人のうち、傘を差している男の方は知らないが、女とは面識がある。いや、女という呼び方はそぐわないか。

　黒っぽい三さん角かく帽ぼうとローブを身にまとい、背に長剣を背負って手には杖つえを持ったその少女は、忘れもしない。

「あ、えと」

コロナはマリアローズに挨あい拶さつしようとしていた。二度と姿を現すなと言ったはずなのに。

「その節は色々とお世話になりました！　おかげさまでコロ、いえ、わたし、生きてます！　ごめんなさい！」

「……何で謝るんだよ」

思わず返事をしてしまったのが、運のツキだった。

そのせいで無視するタイミングを逸いつして、コロナの顔を見ていると言いたいことが山ほどあるように思え、結局、それは全部ただの憎にくまれ口ぐちだった。

「謝ることないだろ。きみが生きようと死のうと、知ったことじゃない。でも、僕の視界の中には入ってくるなって言ったよね？　覚えてないの？　もしかして、ばか？　そっか。ばかだから師し匠しように見限られて追い出されたんだね。ばかだから魔ま術じゆつの才能だってないんだろ？」

「あ、あ、その……」

「おい、待てよ」

口を挟はさんできたのは、コロナの横に保護者然として立っている男だ。そういえば、アジアンが言っていたっけ。コロナが愛あい想その悪い男と一いつ緒しよにいたとか、何とか。きっとこの男のことだろう。

「確かにこいつは抜けてるけどな。何もそこまで馬ば鹿か馬鹿馬鹿馬鹿言うことねえだろ」

「ばかにばかって言って何が悪い」

マリアローズが鼻先でせせら笑ってみせると、男は一歩前に出てコロナを下がらせた。

まだ若い男だ。コロナより少し年上といったところで、マリアローズと同じくらいか、やや下か。

「悪いかどうかなんて知るかよ。ただ、腹が立つ。こいつは馬鹿かもしれねえけど、好きで馬鹿やってるわけじゃねえんだ。だいた

い、こいつはあんたに挨拶しただけじゃねえか」

　男は黒くろ髪かみに目は銀色という珍しい組み合わせで、鎖くさり帷子かたびらの上に今風ではない板ばん金きん鎧よろいを着け、円形盾たてを背負い、腰には長ちよう剣けんを吊していた。オーソドックスというより、古めかしい剣士の格好だ。百七十五サンチほどの背せ丈たけに比べ、横よこ幅はばが足りないせいだろう。体つきは若じやつ干かん頼たよりなげに見えるが、アジアンの言っていたとおり、やたらと不ふ機き嫌げんそうな東方系の顔には、糞くそ生意気さや青あお臭くさい傲ごう岸がんさや横おう柄へいさが影かげを落としていて、ある種の迫はく力りよくがあった。

「たまたま虫の居所が悪かったのか、反へ吐どが出るくらいこいつが嫌きらいなのか。どっちにしたって、大人げねえよ。別に、謝れとは言わねえけどな。こいつの代わりに同じ言葉を返させてもらう。二度と俺たちの前に姿を見せるな」

「な──」

　絶句したマリアローズと男の間に、コロナが割って入ってきた。というか、男にしがみついた。

「あ、あの！　やめて！　やめてください！　もとはといえば全部コロナのせいなんです！　マリアさんのせいじゃなくて！　マリアさんも、レニィさんの言ったことは気にせず！」

「うっせえ、どけ、コロナ！」

「どきません！　嫌いやです！　喧けん嘩かはいくないです！」

「喧嘩とかそういう問題じゃねえだろ。だからお前は馬鹿だって言われるんだ、馬鹿！」

「うう、レニィさんもコロナにばかばかばかばか言ってるっしょや」

「お前が馬鹿だから、つい馬鹿って言っちまうんだ。馬鹿に馬鹿って言って何が悪い！」

「……僕と同じ台詞せりふだし」

　それこそ馬鹿馬鹿しくなって呆あきれ半分にマリアローズが言う

と、揉もみあっていた二人がぴたりと動きを止めた。

「ホント、いいコンビだね。ばか同士、さぞかし話もあうだろ」

「何？」

　レニィと呼ばれた男が目をすぼめて腰の剣に手をかけようとしたが、再びコロナに制止された。そのことが原因で、またじゃれあいが始まった。もう勝手にやってろ。

「ばいばい」

　それだけ言い残してその場を離はなれながら、だが、マリアローズは苛いら立だちと一緒にむなしさみたいなものを味わっていた。

　何が他ほかに訪ねるあてもない、だ。むきになって庇かばってくれる人がちゃんといるではないか。あの男も、あんなへっぽこ魔術士の面めん倒どうを見ているなんて、ずいぶんな物好きだ。それとも、そういう関係なのか。それにしたって、あんなぺたぺたと薄うすっぺらいちんまりした女の子がいいなんて、変わっている。きっと変態に違ちがいない──そして、また、このパターンか。でも、どうして、マリアローズがこんな気持ちにならないといけない？

　だが、今回は何となくわかった。

　認めたくなかったのだ。

　ほんの一いつ瞬しゅんでも、コロナを羨うらやみ、嫉ねたんだなんて。

　これからも自分一人でどうにかするしかない、と思ってはいても、本心では何かにすがりたくて、一人でいたくなくて、どうしようもない、なんて。

「……はは」

　情けない。どこまで格好悪ければ気がすむのか。マリアローズは声を上げて泣きたい気分だった。しかし、涙なみだの代わりに出てくるのは低い笑い声ばかりで、立ち止まってあたりを見回すと、誰だれも彼もが誰かと一緒にいて、自分だけが一人ぼっちのように思えた。

Omenage 897 6th revolution 20th day

サンランド無統治王国首都エルデン・アンダーグラウンドD7

〝地中砦アヴァシー〟

chapter.7

痛みと距離の関係

　全長約六十サンチの小剣はまだ手に馴な染じんでいない。昨日、五千ダラーで購こう入にゅうしたばかりで、今日から使うのだから当然だ。

　ただ、アンダーグラウンドに潜もぐってしまえば、そんなことは何の言い訳にもならない。

　ここはＤ７、亜あ人じんボーグの根城、地中砦アヴァシー。

　ボーグは薄い灰色の肌はだを持つ人型の異界生物フリークスだ。体毛は一いつ切さいない。のっぺりした顔には黒豆みたいな目がやや離れてついており、鼻は小さな穴が二つ空いているだけで、下か顎がくより上じよう顎がくが出っ張った口は、大きく左右に裂さけている。

　意外とかわいい。

　だが、ボーグは非常に排はい他た的だ。異種族に対しては好戦的で、しかもメリクルの下位種のように馬鹿ではない。少なくとも、人間の可か聴ちよう域いき内の声は出さない連中だし、何を考えているのかわからないが、戦ってみれば人間に近い知能を有していることはすぐにわかる。

　今、そのことを思い知らされていた。

　そいつは三時間もかけて、ようやく見つけた狙ねらい目のボーグだった。

　単身武器も持たず、アヴァシーの入口付近をうろついているなんて、きっと魔まが差したのだろう。場所も慎しん重ちように選んだ。ボーグが袋ふくろ小路こうじの前まで来たところで、これなら絶対に一対一に持ちこめると踏ふんで襲おそいかかった。

　実際、初はつ太た刀ちはかわされたものの、そのボーグを袋小路へ追いこむことに成功した。

　相手は衣類の上に鎖くさり帷子かたびらを着ているだけだ。ちなみに、アヴァシー上層の建物やそこにいるボーグの身の回りの物は、ほとんどセルマイトでできている。このボーグの体色と同じ色の素材は、やや重いが、加工しやすくて、かつ鉄より硬こう度どが

高く耐たい久きゅう性せいもある。侵入者クラッカーの中には、ボーグから奪うばった武具を常用する者も少なくない。

　むろん、目の前にいるボーグが身にまとっている鎖帷子も、セルマイト製だ。持ち帰れば、多少傷があっても五千や六千の金にはなるだろう。

　だが、それより一いつ騎き打うちだ。単独でボーグをしとめることこそが、今のマリアローズにとっては、何よりも重要だった。

　アヴァシーは初心者ニユービー時代に一人で何度か挑いどんで、歯が立たなかった。ここでコンスタントに稼かせぐことができれば、自分が進歩したと実感できる。

　この二年半は決して無む駄だではなかった、と。

　証明したかったのだ。自分はいくらかでも強くなっていると思いたかった。結果が欲しかった。誰にも頼たよらず、一人でやってゆくための自信をつけたかった。

　その思いが、マリアローズを剣けんに固こ執しつさせたのかもしれない。

　籠こ手ての矢を狙って放てば、たぶん命中した。そのタイミングはあった。

　だが、あの頃ころは特注品カスタムメイドの籠手なんか持っていなかった。そこまではっきりと考えたわけではないけれども、気がつくと間合いをつめて小剣を右から薙ないでいた。二重の失敗だ。

　なぜなら──

「……くっ！」

　ボーグが踏みこんできて、あえて斬ざん撃げきに身をさらしたからだ。

　小剣がとらえたのは、ボーグの左ひだり上じよう腕わん部ぶあたりか。

　手て許もとに入られてしまったため、浅い。だけでなく、よほど膂りよ力りよくにすぐれるか、確かな技術を持っていないと、重量

わずか一キルグラハムあまりの小剣で、セルマイト製の鎖帷子を斬きり裂くことなど、そもそも不可能なのだ。

　また、鎖帷子に対しては、斬るくらいなら、突つくべきだった。

　皮肉なことに、この場合に限っていえば、エストックの方が有効だったかもしれない。

　いずれにしても、それらを見み越こして鎖帷子に傷をつけただけで小剣を弾はじいたボーグは、冷静で利口だった。甘い敵では決してなかった。強敵だった。あの頃と同じだ。マリアローズにとっては、依い然ぜんとして命がけの相手だった。

　変わっていない。

　──やっぱり、僕はちっとも前に進んでない。

　絶望というほどの深みはなかった。ちらりと思っただけだ。ボーグに押し倒たおされ、組み敷しかれて、両手で首を絞しめられているときに、自分の進歩のなさを嘆なげく馬ば鹿かはいない。

　馬鹿かもしれないが。

　だって、与くみしやすしと見て襲った無手のボーグにいいようにあしらわれ、死のうとしているのだ。こんな間ま抜ぬけがいるだろうか。

　しかし、悪いが、まだだ。まだこんなことで死ぬわけにはゆかない。

　迂う闊かつといってしまうのは気の毒だが、さすがのボーグも、籠手に矢を射出できる仕組みがあるとは予想していなかったのだろう。マリアローズが空気を求めて喘あえぎながら、ボーグのズボンを穿はいただけの大だい腿たい部ぶに右の掌てのひらを押しつけて狙いをつけても、やつは無む警けい戒かいだった。左手でスイッチを押すのはやや苦労したが、結果的に矢は射出された。ほぼゼロ距離射しゃ撃げきだ。これで外す方がどうかしている。当然、矢は命中した。

　それから、矢に仕込んだ神経毒Ｐ９ドウター＋プラスがショック症しよう状じようを引き起こすまで、マリアローズはボーグに首を絞められつづけた。

五秒間くらいか。

もっとか。

わからない。

どうでもよかった。

ボーグの手は少し湿しめり気けがあって、あたたかく、つるつるしていた。

不思議と気持ち悪くはなかった。

恐きよう怖ふもない。

憎ぞう悪おもない。

ふと、こんなところで、自分は何をやっているのだろうと思った。

──ホント、何やってるんだろ、僕。

そのとき、ボーグがびくんと全身を震ふるわせた。首を絞めるボーグの手の力が緩ゆるんで、いきなり雪な崩だれこんできた空気に、マリアローズはむせた。咳せきこむマリアローズに、痙けい攣れん中ちゆうのボーグが覆おおいかぶさってきた。マリアローズは下した敷じきになった。

しばらくそのままでいた。

押し潰つぶされて苦しいと、いっそ楽だった。

目をそらしていられるからだ。何も考えなくていい。

少しして、ボーグの下から這はい出し、小剣でとどめを刺さす作業は憂ゆう鬱うつだったが、マリアローズは毒矢でかろうじて勝ちを拾ったのだ。敗者をちゃんと始末しなければ、何のために勝ったのか、生き延びたのかという話になる。セルマイト製の鎖くさり帷子かたびらと、他ほかの所持品も頂ちよう戴だいした。これを売って金を作り、飯を食う。難しく考えることはない。それでいいじゃないかと思った。そう思うことにした。

「五千ダラー、か……」

　アンダーグラウンドに入ってから三時間半で、ボーグ一匹ぴき。

　背負い袋ぶくろにつめた戦利品の鎖帷子は、野暮ったい板ばん金きん鎧よろいや胴どう鎧よろいを使う者が中に着たりするし、結構、需じゆ要ようがある。おかげで高く売れるから、今日はこれで終わりにしても、そう悪い稼かせぎではない。それに、ボーグの所持品には、彼らの通貨なども含ふくまれていた。全部処分すれば、あと千ダラーくらいは上乗せされるかもしれない。そうすると、昨日、小剣を買ったぶんを差し引いても黒字になる。

「重いしね、うん」

　──帰ろう。

　一日だけのことなので、参考にしかならないが、時間と稼ぎを考えあわせると、裏迷めい宮きゆうよりも何倍も効率がいい。もちろん、これは満足すべき結果だ。

　だが、第七区に通じる出入口へと向かうマリアローズの気分は晴れなかった。

　あるいは、灰色一色のアヴァシーという場ば所しよ柄がらのせいかもしれない。では、古代遺い跡せきといった趣おもむきのテトルアープにでも狩かり場ばを移すか。それとも、まだ行ったことのない場所を開かい拓たくするか。そんなことで解決する問題なのか。

　きっと、時間が必要なのだろう。

　この塞ふさいだ気持ちに慣れるまでの時間。もしくは、何もかもを忘れてしまえるまでの時間。あるいは、へまをして死に、考えることさえできなくなるまでの時間が。

「……でも、わりとしつこいんだよな、僕」

　少なくとも淡たん泊ぱくな方じゃない、と一人苦く笑しようして、あと二つ角を曲がれば出入口へと続く坂道に出る地点まで来たときだった。

　声が聞こえた。女の声だ。悲鳴。男の声もする。複数だ。争っている？

　角から少しだけ顔を出してうかがったが、人ひと影かげはない。声はまだ聞こえる。もう一つ先か。

　さらに通路を進み、次の角から同じようにして様子を見ると、いた。

　全部で十人。倒れたまま動かない二人を含めれば、十二人。戦利品の取り分を巡めぐって、仲間割れでもしているのか──いや。

　どうやら、女一人を含めた三人が、他の七人に取り囲まれているようだ。

　倒れている二人は、三人の方の仲間か。この五人は、まあごくまっとうな侵入者クラツカーといった格好をしているから、まず間ま違ちがいないだろう。問題は七人の方だ。

　たぶん、彼らは侵入者クラツカーではない。侵入者クラツカーみたいなこともするかもしれないが、本業ではない。独特の雰ふん囲い気きですぐにそれとわかる。

　卑いやしくて、野や蛮ばんで、常に徒党を組み、自分たちより数の多い相手や強そうな者の前では借りてきた猫ねこみたいにおとなしいくせに、小勢やひ弱そうな者に対しては大声を上げて脅おどす。乱暴する。殺す。奪うばう。

　人はそうした連中を悪党バスターと呼ぶ。

　略りやく奪だつや恐きよう喝かつを主な収入源としている、いわば職業的な悪漢だ。

「だからァ、俺は最初っから持ってるもの全部出しゃ見み逃のがしてやるって言ってんだろうがよォ。下手に逆らうからこういうことになるんだぜェ」

　モヒカン刈がりの悪党が、医術士らしい女に剣けんを突つきつけて薄うすら笑いを浮うかべている。

「女ァ。お前だけは別だけどなァ。お前は俺たちがたァッぷり可愛かわいがってやる。心配すんなよ。怖こえェことはねェ。すぐに終わるさ。終わったら、ちゃんと殺してやる。俺たちは中ちゆう途と半はん端ぱなことはしねェ。お前も楽しんだ方が身のためだぜェ？」

　モヒカンに媚こびへつらうように、他の悪党どもがゲッゲッと下げ卑びた笑い声を立てた。あのモヒカンがリーダー格なのだろう。出入口近くでアヴァシーから戻もどってきた侵入者クラッカーを待ち伏ぶせして戦利品を奪う、モヒカン＆六人の愉ゆ快かいな仲間たち、というわけだ。

　虫むし酸ずが走る。

　マリアローズは大ゴ脂ツ羽キ蟲ーよりも悪党が嫌きらいだ。坊主ぼうず以上に大嫌いだ。

　また、感情的な面はさて置いても、マリアローズのような一いつ匹ぴき狼おおかみにとって悪党は天敵だ。連中ときたら、必ず数を揃そろえている。単独ということは絶対にない。数を恃たのみ、一人では何もできない、性しよう根ねの腐くさった根性なしのろくでなしの豚ぶたの尻しり穴あな野や郎ろうどもの集団が悪党だ。

　できれば会いたくない。というか、会ってはならない。腹立たしいことだが、もし目があってしまったら一目散に逃にげるしかない。運悪くつかまったら、とにかく何もかも差し出して命いのち乞ごいするしかない。あの五人は、そんな相手に対たい抗こうしようとして、二人殺やられたのか。

　一いつ瞬しゆん、父と母の──そして、なぜかカタリの死に顔がマリアローズの脳のう裏りをよぎり、ずん、と胸に重く鈍にぶい痛みが走ったが、頭を振ふって追い払はらった。

　馬ば鹿かな連中だ。

　七対五。数で少々劣おとれど、腕うでに自信があって勝てると踏ふんだのかもしれないが、ああ見えて悪党は対人戦せん闘とうの専門家だ。甘い見通しに相応の報むくいだろう。同情の余地はない。マリアローズとしては、モヒカンたちが五人からの略奪品で満足して立ち去ってくれるのを祈いのるばかりだ。

　それ以外に、何ができる？

「さァてどうすっかな……」

　モヒカンが床ゆかにしゃがみこんで声も出せないでいる女の顎あごを指でつまんだ。

「女はいいとして、問題は野や郎ろうだよなァ。何だったら自分で選ばせてやってもいいぜェ？　今すぐ死ぬか、それとも、お楽しみの場面をじっくり見物した後で死にてェか。どっちでもいい。好きな方を選べよ」

「──畜生ダアム！」

　この言葉に激発して、男の一人がモヒカンにつかみかかってゆこうとした。

　が、すでに武装解除されていて、男は素す手でだ。これでは殺してくれと言っているようなものだ。モヒカンも男のメッセージを正確に受けとり、手にした片かた刃ばの剣を一いつ閃せんさせた。

「ひぃっ」

　女が両手で顔を覆おおって、短く声を洩もらした。

　まあ、目を塞ぎたくもなるだろう。仲間だった男が首筋から鮮せん血けつを噴ふん出しゆつさせているところなんて、誰だれも見たくない。マリアローズだってそうだ。

　胸が、痛い。

　血のシャワーを浴びた女の悲鳴が通路にこだまし、悪党どもが愉たのしげに笑う。

　もう一人の男が、何かわめきながら暴れようとした。

　すかさずモヒカンが再び剣を振るうと、その男もやはり頸けい動どう脈みやくを斬きり裂さかれ、大量の血液をあたりに振りまく羽目になった。

「ヴィ……ヴィアン……すま……な……」

　男はそう言いながら女に手を伸のばしたところで、力つきたように倒たおれた。

　しかし、謝るくらいなら、どうすれば死なないですむか、もう少し考えて行動すればいいものを。本当に馬鹿な連中だ。お前たち男が死ねば女がどうなるかくらい、想像できないのか？

　息が、苦しい。

　そうだ。

　これから、あの女は、母みたいに──と考えかけて、自分が思いきり下した唇くちびるを嚙かんでいることに気づいた。

　血の、味がした。

　母と同じように……？

　いや──だが、それがどうした。見も知らぬ他人だ。知ったことか。あんなやつらがどうなろうと、知ったことじゃない。

　そう自分に言い聞かせ、何とか気持ちを落ち着かせようとしているマリアローズの目に、あの光景が飛びこんできた。

　モヒカンが、倒れた男の後頭部を踏んづけたのだ。

「……お父さん……」

　違ちがう。

　靴くつの踵かかとを、何度も顔面に叩たたきつけられているのは、父ではない。

　モヒカンの靴底には金属でも仕込んであるのか、頭ず蓋がい骨こつが割れ、脳と脳のう漿しようがぶちまけられた。

　でも、それは父ではない。

　そのすぐそばで、泣きながら狂くるったように男の名を呼ぶ女は、母ではない。違う。

　そうじゃない。

　違う。

　モヒカンが高笑いしている。

　違う。

　──やめろ。

やめて。お願いだから。

頼たのむから。

マリアローズはしゃがみこんで目を閉じ、耳を塞ふさいだが、まだ聞こえる。

女の声。母の声？　モヒカンの声。他の悪党どもの声。あの日、母を乱暴し、父を二度と蘇そ生せいできなくした悪党どもの声？　どうすれば、消える？　どうすれば？

マリアローズは、自分が意味不明の声を洩らしていることに気づかなかった。

それを耳にしたモヒカンが、近づいてきていることにも。

本当に気づかなかったのだ。

いきなり腕をつかまれ、角から引っ張り出されるまで、まったく。

「おい……！　てめえ、何してやがるんだ。こんなとこに隠かくれてよォ！」

床に右半身を叩きつけられた衝しよう撃げきで目を開くと、モヒカンに見下ろされていた。

その頬ほおに、意い匠しよう化かされた文字が黒く刺青いれずみされている。

《ＳｍＣ》。

加虐的サディスティック・殺戮マーダー愛好会ズ・ク会ラブ。

かなり有名なクランだ。もちろん、その名を見ればわかるとおり、悪名の方でだ。奪、盗、姦、虐、殺を愛し、楽しみ、悪をなして悪に溺おぼれる者たちのクラン。よりにもよって、モヒカンたちはそのＳｍＣの一員らしい。

マリアローズは、もう完全にパニックに陥おちいっていた。一度、アヴァシーに引き返し、時間を置いてモヒカンらがいなくなってから地上へ出ればよかったのに、そうしなかったばかりか、こん

な失態を演じた。その事実自体が、マリアローズを混乱させていた。

「そォーらァッ！　ギヒヒハッ！」

　それに、マリアローズが正気を取り戻もどして何か行動を起こす前に、モヒカンの強きよう烈れつな蹴けりが飛んできた。腹に食くらった。これはきいた。一いつ瞬しゅん、息ができなくなり、意識が途と切ぎれそうになっている間に、髪かみの毛をつかまれて引きずられた。

「ギハハハッ、野や郎ろうどもォゥ！　嬉うれしいお知らせがありまァーす！　もう一匹ぴき釣つれちゃいましたァ！　こいつはなかなかの上物だぜェ。でも、俺はやさしい男だからよォ、独ひとり占じめなんかしねェ、みんなで楽しもうじゃねェか！　ギヒャヒャハァッ……！」

　だが、おそらく、ここまでの経けい緯いとマリアローズの見た目のせいだろう。モヒカンは、明らかに油断していた。マリアローズに抵てい抗こうされるなどとは、露つゆほども思っていない様子だった。

　そこに付け入る隙すきが生じた。というより、窮きゅう鼠そ猫ねこを噛んだといった方が正しいだろうか。

　マリアローズは必死で左ひだり籠こ手てをモヒカンの顔に向けた。右手でスイッチを押したが、一発目は外れた。すぐに発射した二発目がモヒカンの顔面に命中したのだと思う。少しすると、髪の毛を引っ張る手の力が緩ゆるんだ。モヒカンがよろめいて転てん倒とうし、マリアローズは自由になった。

　体だけは。

　心は何かどす黒いものにとらわれたままだった。

「……ぐ……ぐ、て、てめェ……」

　そして、痙けい攣れんしはじめたモヒカンに、足首をつかまれた瞬間だった。

　そのどす黒いものが、マリアローズの何もかもを呑のみこもうとした。

　マリアローズはそれから逃にげたかった。

　振ふり払はらおうとした。

　だから、尻しり餅もちをついた姿勢のまま、モヒカンの頭を蹴飛ばした。

　蹴って、蹴って、蹴りまくった。

　足首をつかんでいた手が外れたので、立ち上がってモヒカンの頭をさらに踏ふみつけた。

　やがてモヒカンが動かなくなると、マリアローズはようやくいくぶん落ち着きを取り戻した。

　落ち着いている場合ではなかったわけだが。

「てめえ……！」

　マリアローズだけでなく、モヒカンの手下たちも、我に返っていたのだ。

　これで形勢逆転、というか、マリアローズが優勢だった時間など、初めから一秒たりともない。マリアローズはたまたま無む我が夢中で迂う闊かつなモヒカン一人をやっつけただけで、それは単に一対七が一対六になったということでしかなかった。

「ふざけた真ま似ねしやがって！」

　まずは厳いかつい顔をした五ご分ぶ刈がりの男に頬を殴なぐられ、よろめいたところを別のやつに羽は交がい締じめにされた。

　たぶん、副リーダーのような立場なのだろう。五分刈りは他ほかの一人にモヒカンの介かい抱ほうを指示すると、マリアローズの頭とう髪はつをつかんでゆっくりと顔を近づけてきた。

「よくもジョシュアをやりやがったな、ええ？　どこの誰だれだか知らねえが、てめえはＳｍＣをこけにしやがったんだ。ただじゃすまさねえぞ。この街の人間なら、当然、俺たちの恐おそろしさは知ってんだろうが」

「……知るもんか！」

　状じよう況きようは絶望的だ。マリアローズはやけになって、五分刈りの顔に唾つばを吐はきかけた。が、五分刈りはよけなかった。それどころか、頰のあたりについたマリアローズの唾だ液えきを手でぬぐい、そいつをわざわざ舐なめてみせた。

「それで抵抗したつもりかよ。かわいいじゃねえか、ああ？　あいにく俺は唾液フェチでなあ。そんなものは痛くも痒かゆくも──」

「僕、女じゃないけど」

「何……」

「女だと思った？」

　マリアローズはにやりと笑ってみせた。こいつら、結構、不注意だ。というより、頭が悪いのか。

　相手の馬ば鹿かさ加減に勇気づけられたマリアローズは、間ま抜ぬけ面づらをしている五分刈りの股こ間かんを蹴り上げ、後ろから拘こう束そくしている男の足の甲こうを踵かかとで踏み抜ぬいて、力が緩んだ隙にまんまと脱だつ出しゆつした。そこまではよかった。

　だが、まだ三人いる。

　しかも、その三人は全員剣けんを抜いていた。

　ついでに、マリアローズは躊ちゆう躇ちよしてしまった。

　今、こいつらを一人で皆みな殺ごろしにして虎こ口こうを脱するには、ハーレム・ゴードンを使いでもしない限りたぶん無理だ。ハーレム・ゴードンを使うなら、距きよ離りをとるか、自分もろとも自じ爆ばくするしかないし、女が──惚ほうけたような状態とはいえ、あの女医術士がまだ生きている。

　縁えんもゆかりもない、死のうが生きようがどうでもいいはずの女だが。

　逃げるのか、とどまるのか。どっちつかずのマリアローズの前に、太った男が立ちはだかって剣で斬きりつけてきた。マリアローズはとっさに床ゆかへ身を投げ出して、これをよけた。よけたつもりだったが、右みぎ肩かたに熱が走った。斬られた、と思った。

　しかし、致ち命めい傷しようではない。まだ動ける。マリアローズはすぐに起き上がって、次の行動に移ろうとした。その矢先というより、実際には起き上がる前に、右の太ふと腿ももに棒のようなものを突つっこまれたような感かん触しよくを覚えた。

　立てつづけに、左のふくらはぎにも。

「……ぐ……」

　数すう瞬しゆん遅おくれの痛みは鈍にぶく、重かった。体の内側をかき回されるような、自殺したくなるような嫌いやな痛みだった。動けない。足がうまく動いてくれないので、どうにもできない。

「手こずらせやがって、この女──違ちがうな、フー、男か。うまく化けたもんだぜ。どっからどう見ても女じゃねえか、フー」

「何だ。案外いけるクチなんじゃねえのか、ゲヘヘ」

「冗じよう談だんじゃねえ、フー。いくら見た目が女だろうと、アレがついてちゃしょうがねえだろう。たまにいるんだ、フー、凄すげえのがな。このオカマフア野郎ギーみてえに超最低ＳＵＣＫなやつがよ」

「引っかかったことがあるみてえな口くち振ぶりだな、おい」

「フーッ！　うるせえぞ、タコ！」

「何だと、デブ」

　マリアローズは床に頰ほおをつけている体勢なので見えないが、声からして、フーフーうるさい女装の男だん娼しように騙だまされたのは太っちょだろう。そのうち、ようやく下腹部へのダメージから回復したらしい五ご分ぶ刈がりの足が、マリアローズの脇わき腹ばらを蹴飛ばした。

「くそ、油断したぜ。おい、ペッペ、ジョシュアはどうだ」

「どうかな。息はしてるけどよ」

　ペッペと呼ばれた男がそう答えると、五分刈りが「上を向かせろ」と他の連中に命じた。

　太っちょたちの手で仰あお向むけにされたマリアローズに、五分刈りが凄すごんでみせた。

「落とし前をつけてもらうぜ、オカマファ野郎ギー」

「……ふん」

　マリアローズはこの期ごに及およんでふてぶてしい態度をとってみせようとしたが、そんな余よ裕ゆうは一瞬で消し飛んだ。五分刈りの右足に、右手の人差し指から小指までを踏ふまれたのだ。

　不快な音がした。

　骨折、それも粉ふん砕さい骨折くらいはしていそうだが、右手の激痛に身をよじっている暇ひまなどなかった。間を置かず、五分刈りの左足が、今度はマリアローズの左手を叩たたき潰つぶしたからだ。

「□□□□！」

　声なんて出なかった。ただ、涙なみだがにじんだ。

　両手を踏みつけたまま、マリアローズをまたぐような体勢になった五分刈りは、ズボンのファスナーに手をかけていた。

　五分刈りが何をするつもりなのか、すぐにわかった。

　マリアローズに小便を浴びせるつもりなのだ。

　苦痛と屈くつ辱じょくをたっぷり味わわせ、時に慰なぐさみものにして、人間としての自尊心を粉々に打ち砕くだき、生ける屍しかばねにしてから殺す。とりわけ残ざん虐ぎゃくな悪党バスターは、そうやって殺人を愉たのしむ。だからこそ、彼らは忌いみ嫌きらわれるだけでなく、恐おそれられる。

　マリアローズも恐きよう怖ふしていた。恥はじも外聞もなく、殺すなら早く殺して欲しいとさえ思った。舌を噛かんで死のうかとも考えた。状況からすると、マリアローズがマリアローズのためにマリアローズの意思で選せん択たくできる行動は、それしかなさそうだった。そうしなかったのは、女医術士が五分刈りの足にしがみついて、泣きながら何か叫さけんだからだ。

女医術士は半はん狂きよう乱らんで、その人の代わりに自分を殺してとか、そんなたぐいのことを言った。

五分刈りが苛いらついたように眉まゆをひそめた。

「おい、誰だれかこのうざってえ女をどうにかしやがれ。女で遊ぶのはこのオカマフア野郎ギーを始末してか──」

そこで声が途と切ぎれた。

マリアローズは、五分刈りの額に、何か細いものが突き刺さる場面を目もく撃げきした。

細いといっても糸ほどではなく、直径一サンチくらいはありそうな、それは──

何だろう。

わからない。

ただ、黒かった。

それは出入口の方から伸びてきていた。

マリアローズはその先に何があるのか確かめようとした。

顎あごを上げるようにしてそちらへ目をやると、逆光の中に黒い人ひと影かげがあった。

細いものは、彼の右手から伸びているようだった。

「一度しか言わない。よく聞け」

人影の声は、聞く者を震ふるえ上がらせる冷たさを帯びていた。マリアローズの知らない声こわ音ねだった。だが、声自体は知っていた。

「その人から離はなれろ。さもないと全員殺す」

「……て、フー、て、てめえは……」

太っちょが最初に後あと退じさった。他ほかの連中もすぐそれに続き、マリアローズのそばにいるのは五分刈りと女医術士だけに

なった。もっとも、五分刈りは離れたくても離れられないだろう。生気がない。立ったまま死んでいるらしい。

「命拾いしたな」

　人影がそう言って右手を下ろすと、五分刈りの額から細いものがするりと抜ぬけて、戻っていった。

　見ると、人影の右手の周りには、細いものが幾いく本ほんも鎌かま首くびをもたげ、あるいはうごめいている。まるで、それぞれが意思ある生き物であるかのようだ。

　そして、これはマリアローズの主観だが、たぶんそれらは本当に生きているのだ。少なくとも、魔ま導どう兵へいや魂たましい集めのような擬ぎ似じ生命体であることは間ま違ちがいないだろう。

　そんなものを手に飼っている、彼は──

「ああ、マリア……何てことだ」

　虐殺人形カーネイジ・ドールの異名をとるクラン昼飯時ランチタイムの頭領マスターは、ダッシュで近づいてくるなり五分刈りを蹴けり倒たおして、マリアローズの体を触さわりまくった。今回ばかりは痴ち漢かん行こう為いを働いているわけではなく、負傷を確かく認にんしているだけなのかもしれないが、どうも触り方がねちっこい。

　しかし、今はそれさえも、助すけ平べの仮面をかぶった擬態に見えた。

「これはひどい。マリア、おお、マリアマリアマリア……痛いだろう？　できることならボクが代わってあげたいが、残念ながら、それは無理だ。せめて大至急キミを医術士に診みせよう。あの第六区の医術士でいいかい？　確か、モリー・リップスとか──ン？　そこのキミ、キミはひょっとして医術士じゃないのかネ？」

　アジアンに声をかけられた女医術士は、うなずくよりも早くマリアローズの右みぎ太ふと腿ももに手を当てた。

「動脈が……応急処置を……」

　すぐに体の中をいじり回される感覚がマリアローズを襲おそっ

た。かなり性急な治ち療りようだが、手早く負傷箇か所しよに優先順位をつけて即そく座ざに医術式を施ほどこすあたり、腕うではそれなりなのだろう。まともな心理状態ではないだろうに、職業意識というやつか。たいしたものだ。

　マリアローズも一時は死を望んだくらいだが、助かった以上、死にたいとは思わないので、されるがままになっていた。血が足りなくなってきているのか、頭がぼんやりしてもいた。五ご分ぶ刈がりに殴なぐられた頬ほおをアジアンに撫なでられたけれども、痛みさえ遠く感じる。

　マリアローズは苦笑いを浮うかべてみた。

「やっぱり、生きてたんだ」

「フッ。高層寺院から落下したくらいでは死なないヨ。ボクは不死身だからネ」

「そう」

「マリア、その……いつも偉えらそうなことを言っていたのに、助けるのが遅おそくなって──」

「僕を助ける義務なんて、きみにはないだろ」

「いやいや、そんなことは！　あるヨ。あるに決まっているだろう！　ところで」

　アジアンは顔だけ振ふり返らせて悪党どもをねめつけた。

「いつまでそこにいるんだヨ。失うせろ」

「……て、フー、てめえ、アジアン……」

　太っちょはアジアンを見知っているようだ。それも、ただ名前と顔だけ知っているという感じではなさそうだった。

「こんなことして、フー、ただですむと思うなよ。ダレットを、こ、殺しやがって。このことは全部、ＳＩＸに報告するからな」

「好きにするがいい。キミも殺されたくなかったら、さっさと仲間の死体を担かついでどこかへ行ってしまえヨ」

「フーッ！　あとで泣かせてやる、覚えてやがれ……！」

　太っちょは捨て台詞ぜりふを吐はきながら、他の連中とともにモヒカンと五分刈りを持ち上げ、出入口へ向かった。

　不意に、マリアローズは思った。

　助けてくれたアジアンより、あの悪党どもの方が自分には近いのかもしれない、と。

　アジアンは強者であり、マリアローズやあの悪党どもは弱者であって雑ざ魚こだ。虫けらだ。

　まあ、虫けらの悪党に殺されかけたマリアローズや女医術士の仲間たちは、虫以下の屑くずということになるのだろうが。

「……礼は言っておくよ、アジアン」

「そんな、礼なんて」

　アジアンは軽く首を振ってみせた。

「ボクは当然のことをしたまでサ。むしろ謝らなくてはいけないくらいだ。まさか、アヴァシーにいるなんて思わなくて、それで──イヤイヤ、言い訳などしても意味がないネ。とにかく、遅おくれて申し訳ない。それより、どうしたんだい。一人で、その……」

　アジアンが気にしているのは、トマトクンたちとのことだろう。だが、それは今、もっとも考えたくないことの一つだ。マリアローズはアジアンの問いを無視し、女医術士をどけて立ち上がった。

「あ、あの、まだ」

「もういいよ」

　医術式を再開しようとする女医術士に首を振ってみせ、試ためしに足を踏ふん張ってみると、何とか力は入る。両手は治療してもらっていないので凄すさまじく痛いし、体はひどく重くて怠だるいが、両足の出血はすでに止まっていた。どうにか歩くことくらいはできそうだ。

「きみもせっかく助かったんだからさ。仲間、生き返らせてあげら

れそうな人もいるし、そっちの面めん倒どうをみてやったら」

「はい……でも」

「でも、じゃない！　仲間なんだろ！　死んで、二度と会えない人が増えれば増えるだけ、そのぶん──」

　マリアローズはその先を呑のみこむと、もう女医術士には目もくれず、壁かべによりかかって出入口の方へ歩き出した。

　すぐさまアジアンが追ってきて、肩かたに触ふれようとしたけれども、今度はもう許さなかった。

「やめろ」

　手を振り払はらわれたアジアンは、きょとんとしている。

「マリア？」

「自分の面倒くらい自分で見る」

　支し離り滅めつ裂れつだということは自分でもわかっていた。命を救われておきながら、自分で自分の面倒を見る？　どの口でそんなことが言えるのか？

　さすがに呆あきれられたのだろう。アジアンは軽くため息をつき、微び苦く笑しようを浮かべてみせた。

「そんなことを言ってもネ……ほら、歩くのもつらそうだヨ。ボクは別に恩を着せようとか思っているわけじゃないし、だいたいキミだって、いつもは──」

「そうだね」

　マリアローズはアジアンを正面から見み据すえた。

「僕は、いつもきみに助けられてばかりだ。僕はきみみたいに強くない。弱い。弱くて、弱すぎて、お話にならない。ねえ、何のつもり？　どうして僕につきまとうの？　僕を哀あわれんでるの？」

「だから、マリア、何度も言っているように、ボクはキミを」

「好きだって？」

　今の表情を鏡に映して見たら、自分でも吐き気を催もよおすくらいの嫌けん悪お感かんを抱いだくに違ちがいない。

　アジアンも驚おどろいたように両目を軽く瞠みはっている。それを見て一いつ瞬しゅん、怯ひるみかけた自分自身を叱しつ咤たするように、口が勝手に動いた。

「いい加減にしてよ。気持ち悪いんだ。本当に──」

　もう何が何だかわからない。

　自分は何がしたいのか。何を言いたいのか。何を思っているのか。

「もうたくさんだよ。きみの気持ちはきみのものだから勝手にすればいいけど、僕には押しつけないでくれる？」

「マリア……」

「呼ぶな！」

　マリアローズはアジアンから顔をそむけた。

「──僕の名前を呼ぶな。嫌いやなんだ。きみを見てると、自分が……みじめで。これ以上、そんなふうに思いたくない！　耐たえられない！　だから、僕は……きみの顔なんて、見たくない。ずっと見たくなかった。僕のことはもう……放ほうっておいてよ」

　アジアンは答えなかった。もとより返事など期待していなかった。

　マリアローズは激痛が走る両手で壁を伝って出入口を目指しながら、早くモリー・リップスのところへ行こうと思った。

　第六区。モリーに治ち療りようしてもらおう。どこもかしこも、怪け我がをしていない胸までも、痛くてかなわないから。

　ああ、でも、Ｄ７の出入口がある第七区とは隣となりあっているはずなのに、第六区がひどく遠い。

　果てしなく感じるほど遠すぎて、気が遠くなる。

Omenage XXX Xth revolution Xth day

ラフレシア第三帝国？

〝unknown〟

chapter.8

やさしい気持ち

「……背筋を伸のばしなさい。もっと顎あごを引いて。足の裏は踵かかとの外側から接地し、爪つま先さきで地面を蹴ける。腕うでの振ふりは大きからず小さからず。お尻しりは常に締しめて、目は見開かず、視線はまっすぐ前方よりやや下。はい。一。二。三。一……はい。そこでターン。首。少し前に出ている。引いて」

　━ああ、そうだ。貴婦人キヤット歩きウオークの訓練の最中、か。

　覚えなければならないことは、他ほかにもたくさんある。テーブル・マナー。ラフレシア第三帝国貴族が最低限身につけるべき一いつ般ぱん教養的知識。たまらなく嫌だが。女としての振る舞まい方全ぜん般ぱん。それから、子し爵しやくへの仕え方。主人の前で理想的な飼い犬になる方法。

　子爵の子供は、常時だいたい十五人くらいだ。たまに減る。減ると補ほ充じゆうされる。

　あるとき、補充された子供は最初から教育しなければならないので大変だと、教師の一人がぼやいた。滅めつ多たなことを言うものではない。別の教師にそう咎とがめられたが、翌日以降、その教師は二人とも子供たちの前に姿を見せなくなった。

　きっと、誰だれかが彼らの不用意な発言を子爵に密告したのだろう。

　教師たちだけではない。子供たちはもっと用心しなければならない。

　子爵は従順な子供を愛していた。ただ、厳しく躾しつける以外、表面的にはおかしなこともしなかった。まるで本当の子供みたいに扱あつかわれた。しかし、一度でも飼い主の手を嚙かんだ飼い犬は、容よう赦しやなく壊こわされた。嚙もうというそぶりを見せることすら、許されなかった。

　子爵は壊した子供を前にして、幼児のごとく泣きじゃくった。

「ああ、私のすべて、愛するパーメラ、なぜ汝なんじは息をしておらず、汝の手足は氷のごとく冷たいのか」

あんたが殺したんだろ。とは誰も言わなかった。言えるはずがなかった。

子爵はその筋で有名な外げ道どうの錬れん金きん士しだった。普ふ通つうの錬金士は決して作らない劇薬を平気で生成し、子供の餌えさに混ぜて与あたえた。

そして、のたうち回って悶もん絶ぜつ死しした子供を抱き締め、またお決まりの台詞せりふだ。

「ああ、私のすべて、愛するガブリエル、なぜ汝は息をしておらず、汝の手足は氷のごとく冷たいのか」

次は誰が殺されるのか。友だちかもしれない。自分かもしれない。もちろん皆みな、注意はしている。けれども、明らかに原因が推測できることもあれば、そうでないこともあった。

子供たちの中の誰かが、ありもしない不実を子爵に密告しているのだという噂うわさも流れた。

それまで、子爵のおぞましい愛の檻おりの中で生き延びなければならないという一点で共感し、支えあい、助けあっていた子供たちの結束が乱れはじめた。

「疑ったりしないで。そんなひどいことをする人なんて、いるはずないよ。信じて」

そう呼びかけた。

　そうだね。そうだよ。うん。手を繋つないで眠ねむろう。

　怖こわいの？　お母さんがしてくれたみたいに抱だき締めて寝ねてあげる。とても安心できるよ。

　子供たちは、大部屋に並んだベッドで寝る。怖がる子供を抱いてあげた。

　けれど、次の日、また一人、死んだ。

「ああ、私のすべて、愛するドミニク、なぜ汝は息をしておらず、汝の手足は氷のごとく冷たいのか」

　子供が死ぬたびに、胸が引き裂さかれる思いがする。死んでゆく一人一人と思い出がある。

　一人死ぬと、他の子供と一いつ緒しよに泣いて慰なぐさめあった。その子供が死ぬと、また他の子供と泣いた。その子供も死んだ。泣いた。死んだ。泣いた。その繰くり返しだったのだが、ある日。

「でも、変よ。死んだのって、マリアローズのベッドで寝た人ばかりだわ」

　最初にそんなことを言い出したノーラは、翌日、餌に混ぜられた劇薬のせいで悶絶死した。

「おかしいって思ってたんだ。あいつ、他人に構いすぎだろ。スパイなんじゃない？」

　違ちがう。

「そういえば、知ってる？　あいつ──」

「え？　そんなのって……」

「何よ、それ。気味が悪いわ」

　嘘うそをついていたわけじゃない。どうしてそんなことを言うの？　この間まで抱きあって眠っていたじゃないか。こうしていると落ち着くって、皆、言っていたのに。知っている人もいたけど、誰もそんなことは言わなかった。気にするそぶりもなかったのに。今さらどうして？

　でも、死んだ子供が全員、マリアローズのベッドで眠ったことがあるのは事実だった。

　当たり前だ。

　こんなふうになるまで、誰も彼もがマリアローズと一緒に寝たがった。マリアローズはお母さんみたいだとよく言われた。マリアローズも母になったつもりで彼らを抱いて眠った。

　けど、いいんだ。仕方ない。

　だって、誰もマリアローズと寝ようとしなくなってから、ぴたりと死人が出なくなった。たぶん、本当にマリアローズのせいだったのだ。心当たりはなかったが、そういうことなのだろう。寂さびしかったけれども、マリアローズが我が慢まんすれば、誰も死ななくてすむ。

　だったら、いい。

　誰も死なない方が、ずっといい。

「来るがいい、マリアローズ」

　そのうち、子し爵しゃくに呼ばれて色々なことを教わるようになった。主に錬れん金きん術じゅつについて。

　すると、マリアローズは依え怙こ贔ひ屓いきされていると噂が立ち、本当に誰も近づいてこなくなった。

「やっぱりそうだったのよ。あの人が密告していたのだわ」

「うん、怖いよね。でも、変なことは言わない方がいいな。殺されたらたまらないよ」

　別に、もう何を言われてもいい。友だちなんかいなくても構わない。子供たちは以前より明るくなった。夜、寝しん室しつで楽しそうに笑い転げることも増えた。それに加わることはできず、眺ながめているしかないのはつらかったが、彼らは死なないのだと思えば、心が安らいだ。

　嘘だ。

　本当はつらかった。自分は何もしていない。信じて欲しいと叫さけびたかった。いつも皆を抱き締しめる側だったのだから、今度は誰だれかに抱き締めてもらいたい。そんなふうに見返りを求める自分が汚きたなく思えた。徐じよ々じよに、心の表面が硬かたくなってゆくのがわかった。

　何も感じないように。

「色々考えたけど、やっぱり君は裏切り者じゃないと僕は思うんだ」

　あるとき、青みがかった灰色の瞳ひとみに強い光を宿した金きん髪ぱつの少年が、そんなことを言った。

　貴族の子し弟ていのような品のいい顔立ちをしたローメオは、どうやら実際にいい家の子だったようだ。ローメオは頭がよかった。他ほかの子供たちとは毛色が違っていて、教師にとっては出来のいい生徒であり、持ち前の利口さで、子爵の前では誰よりも忠実な飼い犬のふりをした。

「みんなの気持ちもわかるけど、そもそも論理的じゃないよね。君が一緒に寝ねたことのある子供が死ぬんだったら、もっとたくさん死ぬべき者はいるはずだよ。しかも、君とは全然関かかわりなく死んだ子供が、前にいくらでもいたじゃないか」

　だが、マリアローズはできるだけローメオをさけた。不安だったのだ。本当に自分に関係ないのだろうか？　仮に関係ないとしても、さけられるリスクは極力さけるべきではないか？

　もし、これでローメオが殺されたらどうする？

「君は心配しているんだね。でも、平気だよ。僕は怖こわくない」

　僕は怖い。

「それに、不公平だと思うんだ。君のおかげでぐっすり眠ねむることのできた人が、今は根こん拠きょもあやふやな理由で、君を仲間外れにしている。少し前まで、僕らは君に救われたような気持ちになって、感謝していたのに、こんなのってないよね」

　ローメオはにっこり笑うと、天使みたいにきれいな少年だった。

マリアローズは思わずローメオに引きこまれかけたが、いけない、と思った。

　いけない。ローメオにもしものことがあったらどうする？　いや、もしも、ではないのだ。

　マリアローズは薄うすなうす勘かんづいていた。この恐おそろしいからくりに。

　だから、徹てつ底てい的にローメオを無視した。ローメオが空気であるかのように振ふる舞まった。そうするごとに、ローメオはむきになった。ある日の午後、ついにローメオはマリアローズを無理やりつかまえて、目をそらせないくらいまで顔を近づけて言った。

「逃にげないでよ。僕はもう見ていられないんだ。君だってこのままなんて嫌いやだろう。戻もどりたいだろう。君はいつも遠くから僕らを見つめているじゃないか。悲しそうな目をしているじゃないか。放ほうっておけるわけがないよ」

　見られていた。気づかれていたのだ。

　マリアローズは胸の裡うらをぶちまけてしまいたい衝しよう動どうに駆かられた。自分は潔白だと訴うつたえたかった。自分のせいではない。だが、そうではないかもしれない。マリアローズの意思とは無関係に、この罠わなは発動するのかもしれない。

　だとしたら、危険だ。ローメオ。心配してくれてありがとう。でも、だからこそ、死んで欲しくない。そう思い、ローメオを突つき飛ばして逃げた。その翌日だった。

「マ……リア……ローズ……？」

　朝食のとき、スープを一口だけ飲んだローメオが、喉のどのあたりを両手で押さえて、まずマリアローズを見た。マリアローズは動

けなかった。人間が椅い子すごとひっくり返って倒たおれる音がした。ローメオは獣けものが唸うなるような呻うめき声を洩もらしながら、床ゆかをのたうち回った。息絶えるまで、かなり時間がかった。

　おそらく、長く苦しませて殺す薬だったのだろう。

　そして、子し爵しやくが愛いとし子ごを抱だき上げ、お決まりの台詞せりふだ。

「ああ、私のすべて、愛するローメオ、なぜ汝なんじは息をしておらず、汝の手足は氷のごとく冷たいのか」

　こうしてローメオも死んだ。

　やはり、死んだ。

　──僕のせいだ。

　僕のせいだ。

　子爵がマリアローズの耳許で、ひっそりと囁ささやいた。

「お前はやさしい子だ。マリアローズ。お前の胸にこんこんとわきつづけている愛の泉のあたたかさは、何より尊い。お前のような素す晴ばらしい子を傷つける者は許してはおかぬ。だが、マリアローズ、私の愛、私の神秘、私のすべてよ。覚えておくのだ。お前のやさしさは私だけに向けられるべきだ。他の者には一いつ滴てきたりとも注がれるべきではないのだ。お前を引き裂さき、嬲なぶり、愛する権利があるのは私だけだ。お前はこの世界で一つしかない、真に稀まれなる私だけの宝なのだから。お前は特別なのだ」

マリアローズの──子爵にとって唯ゆい一いつ特別な飼い犬の心は、どんどん硬かたくなっていった。表面だけでなく、内側までも冷たく凍こごえていった。子供たちがはしゃいでいるのを眺ながめることもなくなった。一人で平気だった。黙もく々もくと完かん璧ぺきに礼れい儀ぎを守って子爵に仕えた。しかし、冷たく固い殻からに包まれた心の中心には、決して冷めることのない熱いかたまりがあった。

イシュタル・アガメムノ・ゴードン子爵。

この男だけは、必ず破は滅めつさせてやる。

絶対に……。

Omenage 897 6th revolution 20th day

サンランド無統治王国首都エルデン第六区

〝モリー・リップス・アサイラム〟

chapter.9

ヴィーナス・バミューダ

　目を開けると、白い天てん井じようが見えた。

　頬ほおのあたりが少し濡ぬれている。泣いたのか。処方された痛み止めのせいもあってか、治ち療りようを受けている間に眠ねむってしまい、夢を見ていたらしい。

　あんな昔のことを、何で今さら──

　第六区、別名〝屑くず街がい〟に、アサイラムと呼ばれる施し設せつがある。

　高く分厚い壁かべと鉄てつ条じよう網もうに囲まれ、勇ゆう猛もうなる〝銀の軍団ザ・シルバリイ〟、クラン秩序のモラル・番人キーパーズに守られたその陸の孤こ島とうの正式名めい称しようは、モリー・リップス・アサイラムという。

　だが、この施設の責任者である女医術士モリー・リップスは、その名称があまり好きではないようだ。

　以前、治療してもらった際、モリーにこう尋たずねたことがある。

「ここってもともとモリーのお金で作ったんでしょ。だったら、モリーの名前がでかでかと看板に書かれちゃっても仕方ないんじゃない？」

「感性の問題ね」

　モリーは年ねん齢れい不ふ詳しようだ。一応、二十四歳ということになっているが、十年以上前、彼女個人の資金でモトローリィの石工、大工、鍛か治じ士しあわせて三百人、他ほか、大勢の錬れん金きん士し、機術士を雇やとい入れてアサイラムをたった十日で築き上げたときも、自称二十四歳だったと噂うわさされている。

　どちらにしても、白い女性用ナース医術士服・ユニに身を包んだ彼女は、とびきりの美人だ。

　モリー・リップス。

　男をぺろりと食べてしまいそうな妖よう艶えんさを漂ただよわせ

た、エルデン一高名な超肉感的ダイナマイト女医術士・ナースは、また、恋こい多き女としても知られている。

「このろくでもない国には、キング・グッダーというげんなりダウナー・糞野郎フアツキーもいて、あの腐くされ土ど手て南瓜かぼちゃはいくつかの王立施設に自分の名前をつけたりしているわ。それはそれでいいのよ。構わない、全然。でも、わたしの美意識にはそぐわないわね。自分の名前が冠かんむりについているなんて、考えるだけでもおぞましくて失禁しちゃいそうよ」

「でも、実際、冠でついちゃってるけど。だいたい、アサイラムを作ったのはモリーなんだから、名前だって自分でつけたんじゃないの？」

「あれはね、ミスなの。アサイラムを作ったときに、モトローリィで二十七代続く書道家とかいう馬ま糞ぐそジジイに看板を書かせたのよ。それで、わたしは単にアサイラムと書くよう命じておいたのに、その馬糞ジジイは何を勘かん違ちがいしたのか《MollyLips' Asylum》なんて書きやがって、あの肥こえ溜だめ襤ぼ褸ろ雑ぞう巾きん。書き直しやがれと看板をモトローリィに突つっ返したら、ついさっきくたばったところで、弟で子し千人を集めて葬そう式しき中ちゆうだなんていうじゃない」

「おじいちゃんだったんだ」

「享きよう年ねん百二十二歳だったらしいわ。で、二十八代目の書道家が書き直した看板を見たのだけれど、これが糞ふん橇ぞり蛙がえるの首切り畑よ」

「ごめん、モリー。それ、さっぱり意味がわからない」

「ダメだったの。まったくなってなかったわ。それから一万遍べん書き直させたのに、やっぱりダメダメ。結局、二十七代馬糞ジジイが書いた看板、遺作ということになるのかしらね。それを使うことにしたというわけ」

　という感じで、なかなか変わり者のモリーだが、やっていることは結構凄すごい。

　モリーがアサイラムで常時保護しているのは、孤こ児じ二百人ほどと、精神障害者三百人ほど。皆みな、アサイラムがなければ、ま

ず間違いなく死ぬか売られるかしていた者たちだ。

　モリーはこの国の利己エゴ主義者イストたちを嘲あざ笑わらうかのように、弱者救済に力を注いでいる。それゆえ敵も多く、アサイラムが襲しゆう撃げきを受けたのも一度や二度ではない。一方で支し援えん者しやもいる。その代表格が、勧かん善ぜん懲ちよう悪あくを旨むねとするエルデン最大の物好き集団、秩序の番人だ。

　モリーはそれ以外にも多くの者たちと協力し、あるいは強ごう引いんに従わせて、アサイラムを守っている。力には力で応じ、何が起こっても顔色一つ変えず、正直、何を考えているのかわからない。これほどの有名人なのに、はした金で一いつ介かいの侵入者クラツカーに医術式を施ほどこす仕事をいまだに続けているのも不思議な話だ。

「目が覚めたみたいね」

　そのモリーは、広々とした診しん療りよう室しつの窓まど際ぎわに設しつらえられた机に向かって、何か書きものをしていたようだ。

　診療台で横になっていたマリアローズは、上体を起こしながら、目をこするふりをして涙なみだをぬぐった。

「どれくらい寝ねてたのかな、僕」

「二十三時間半くらいかしらね」

「嘘うそでしょ」

「一時間くらいよ」

　モリーは万年筆を置いて顔を上げた。

「切きり創きず三箇か所しよ、打だ撲ぼく四箇所、両手指の骨折いっぱい。重傷だったわよ」

「まあ、ね……」

　マリアローズは清潔な白い被ひ術じゆつ衣いを着せられている。モリーの診察は独特で、緊きん急きゆうを要する場合以外は内視系エンドスコープスの医術式に加え、機術士に作らせた各種機材で微

びに入り細に入り検査を行う。そのため若じゃつ干かん時間はかかるが、見立ては正確だし、施術系オペレーションズの腕うでは一級品だ。負傷や病気の状態さえはっきりすれば、だいたいあっという間に治ち療りようしてしまう。

「色々あってさ。たまにはこんなこともあるよ」

「性しよう懲こりもなく一人でやっているのでしょう、あの糞くだらないモグラごっこ。あまり無理をすると、わたしじゃなく烏い賊か臭くさい色いろ惚ぼけ坊主ぼうずの世話になる羽目になってしまうわよ」

「僕の死体なんて誰だれも運んでくれないだろうから、死んだら死にっぱなしだと思うけど」

「腐って大ゴ脂ツ羽キ蟲ーの餌えさというわけね。死は万ばん人にんに等しく訪おとずれる。君が明日、死んでもわたしは驚おどろかないわ。悲しいけれどね」

「悲しい……？　モリーが？　どうして？」

「どうしてだと思う？」

「うーん……」

　マリアローズは首をひねって考えた。モリーの下には医術士が何人もいて、それぞれ診療室を持っているが、マリアローズの治療を担当するのはいつも必ずモリーだ。立場上、色々と忙いそがしいだろうに。

　おそらく、モリーはマリアローズに気を遣つかってくれているのだろう。

　だが、なぜわざわざ気を遣ってくれるのかといえば——

「実は僕のこと好きだったりして？」

「うふふ。礼は体で払はらえという諺ことわざがあるのを知っている？」

「知らない。それ、あんまり諺になってないし。どうせモリーが作ったんでしょ」

「ええ、そうよ。人はわたしを歩く諺製造天使ヴィーナス・バミューダと呼ぶわ」

「誰も呼んでないって」

「じゃ、君が今日から呼びなさい」

「い・や・で・す」

　マリアローズは診療台から下りて、診療室の隅すみにあるパーティションで区切られた更こう衣いスペースに入った。被術衣を脱ぬいで身み支じ度たくを整え、背負い袋ぶくろを引きずって更衣スペースから出ると、モリーがお茶を飲んでいた。

　アサイラムは採光にとても気を配った造りで、非常に窓が多い。一部、まったく光の入らない闇やみ部屋もあるらしいが、少なくともモリーの診療室は二面が窓で、夏などは暑いはずなのにそうでもない。何らかの仕組みによって、室温が一定に保たれているようだ。

「それじゃモリー、僕」

「お待ち」

　モリーは隣となりに置いた椅い子すを顎あごで示した。

「君が寝ている間に事務仕事も片づけたし、わたし、これから一休みするつもりなの。ちょっくら話相手になりなさいな」

「でも、モリーが聞いて面おも白しろいようなネタなんて、僕、持ってないよ」

「別に粋ＣＯＯＬな漫まん談だんをしろといっているわけではないわ。普ふ通つうに超最低ＳＵＣＫで退たい屈くつな世間話でいいのよ。そうね、付き合ってくれたら、治療代を一割まけてあげる」

「半額にしてくれるなら」

「しょうがない子こ猫ねこさんね」

　モリーは「いいわ」とうなずいて立ち上がり、椅子に座ったマリアローズに用意したお茶を手て渡わたした。

「熱いから気をつけなさい」

「……いや、これ、冷たいけど」

　カップから伝わる温度だけでわかるが、口をつけてみるとさらにはっきりする。カップの中身は間ま違ちがいなく暑い日には嬉うれしい、絶ぜつ妙みような冷たさの砂糖入りバスク茶だ。

　もっとも、モリーがこのお茶をカップに注いだ際は、湯気が立っていたように見えたが。

「ふふ」

　モリーは椅子に腰こしを下ろして足を組んだ。

「小こ粋いきな小こ悪あく魔ま的てき小こ悪戯いたずらよ。すっかり熱いと思いこんで、熱くもないお茶をフーフー冷まそうとする間ま抜ぬけな人間の姿を眺ながめるのが、わたしは好きなの」

「ごめんね。引っかかってやれなくて」

「気にすることはないのよ。君という生物はそこにいるだけでわたしの性感をくすぐり、わたしは時折、君の体を触さわりまくりながらエクスタシーを感じることがあるわ。ちなみに、わたしの性感帯はこの高潔なる精神。凄すごく感じちゃう」

「まだ昼間なのにエロエロ全開だね……欲求不満？」

「多た忙ぼうにつき、蜘く蛛もの巣が張っていることは事実ね」

「嘘でしょ。モリーに限ってそんな」

　マリアローズはお茶で喉のどを潤うるおしながら、雑談に応じる。こんなことは今までもなかったわけではない。たぶん、本当に一休みしているのだろう。

　その証しよう拠こかどうか知らないが、モリーは話が途と切ぎれると、紙かみ巻まき煙草たばこをくわえて火を点つける。アサイラムの中は原則、禁きん煙えんなので、本来これは禁止行こう為いだ。

　むろん、見つかってもアサイラムの主を咎とがめる者はいないだ

ろうが、モリーも普ふ段だんは控ひかえているのだろう。診しん療りよう室しつには灰皿がなく、空いたカップが灰皿代わりになる。

「ねえ、モリー」

　モリーが吐はき出す紫し煙えんをぼんやりと目で追っていたマリアローズは、ふと気になって尋たずねた。

「煙草ってさ」

「ん？」

　モリーは煙けむりで輪を作ってみせる。モリーの煙草はそこらの酒場などでよく吸われているようなものと違って甘い香かおりがするけれども、所しよ詮せんは同じだろう。

「体に悪いんじゃなかったっけ」

「ええ、猛もう毒どくよ」

　モリーは平然と答えた。

「しかも、この毒に冒おかされた体は簡単には治せない。医術式も万能ではないわ。切った貼はったくっつけたは得意でも、変容した体組織を元通りの状態にするのは困難を極きわめる。いわゆる、癌がん。この病は、進行の度合いや冒された部位によって、治ち療りようの難度が異なるのよ」

「モリーは治せる？」

「治せる場合もあれば、治せない場合もあるわね」

「煙草を吸ってると、その病気に罹かかりやすくなるんでしょ？ラフレシアの貴族なんかには多いみたいだけど」

「要因は様々で、すべてが複合的に作用するから、一いち概がいには言えないわ。でも、喫きつ煙えんと癌の発生率に因果関係があると結論づけている研究結果は多いわね」

「だったら、何で吸うのさ。やめた方がいいんじゃないの」

「あら」

　モリーはつやつやした赤い唇くちびるの両りよう端たんをつり上げて目を細めた。

「わたしの体、心配してくれているの？」

「え？　そんなんじゃ……」

　マリアローズは両手で包んだカップの中に視線を落とした。

「──僕には他人を気き遣づかうような余よ裕ゆうとか、ないし」

「確かに、余裕がなさそうね」

「自分のことだけで手て一いつ杯ぱいだから。いつもそうだけど」

「寂さびしいのなら、抱だいてあげてもいいわよ」

「それ、本気でしょ？」

「もちろん」

「遠えん慮りよしとく。怖こわそうだし」

「失礼ね。わたしにだって、初めての相手にはソフトなプレイで我が慢まんする理性くらい、なくはないのよ」

「あのさ……」

　マリアローズが顔を上げると、モリーは指で押し上げた鼻の穴の片方に煙草を差しこみ、突つき出した舌を高速で左右に動かしていた。

「……モリー……何、やってるの？」

「見ればわかるでしょう。変な顔よ」

　モリーは真顔に戻もどって舌打ちをした。

「いまいちウケなかったみたいね。残念」

「僕の笑いをとって、どうするのさ」

「泣きながら一いつ兎とを追う者は、笑う二兎に蹴けられて死んで

しまえと言うでしょう」

「言わないって」

「つまり、余裕がないと君が言うから、笑わせて余裕を持たせてやろうと思ったまでよ」

　モリーは煙草を空きカップに押しつけ、得意げに言った。

「わたし、気に入っている者には結構やさしいの」

「そうゆうのって、自分で言うことかな」

「事実だから構わないでしょう？」

「ま、そうだけどね」

　実際、モリーはやさしい。アサイラムの孤こ児じや精神障害者たちから、異様なまでに慕したわれているのは、何もモリーがここの責任者だからという理由だけではない。全入院者の名前、顔から始まるプロフィール一式を全部記き憶おくしているモリーは、彼らの救い主であるだけでなく、母であり、姉であり、友人なのだ。

　また、マリアローズにとっても、最初にアサイラムで治療を受けて以来、モリーは特別な存在になった。

　モリーは違ちがうのだ。

　他人を治し、救い、守ることを、呼吸するのと同じように考えているなんて、人間とは思えない。きっと人間ではない。

　人間とは違う、別の、特別な何かだ。

「モリーは、さ……」

　だから、モリーの前では素す直なおになれるのかもしれない。

「あ、話は変わっちゃうけど──その……怖いとか、思わないの？」

「怖い？　何が？」

「何ていうか、ほら、アサイラムも何度か変な連中に襲おそわれたりしたことあるでしょ。子供たちとか、患かん者じやさんとか、モ

リーが大事にしてる人たちが、傷つけられたり……殺されちゃったりすると」

「ああ」

　モリーはマリアローズの言わんとしていることを理解したらしい。二本目の煙草たばこに火を点つけて、ゆっくりと紫し煙えんを吐はき出した。

「怖いとは思わないわね。むろん、わたしの被ひ保護者たちに危害が加えられれば、悲しいし、腹が立つし、必ず復ふく讐しゆうしてやろうと思うわ。けれど、失うことを恐おそれていては、何も手に入れられない。傷つくことを怖がっていては、何も守れないもの」

「そっか」

「そうよ。人なんて特にひ弱で、容よう赦しやなくどんどん死んでゆくでしょう。誰だれかが死ぬたびにいちいち立ち止まっていたら、前に進めないわ。わたしは彼らの死を背負う代わりに、止まることだけはしないと決めているの」

「モリーは強いね」

「抱いて欲しくなった？」

「その逆」

　マリアローズはバスク茶を飲み干して椅い子すを立ち、モリーの机の上に空のカップを置いた。

「抱き締しめてあげたくなった」

　なぜ、そんなことを言ったのだろう。

　きっと、モリーだって、誰かにやさしく包んでもらいたいときがあるに違いない。おそらく、そう思ったのだ。

　けれども、言ってしまってから、天下のモリー・リップスに何て生意気なことを、と恥はずかしくなった。

　おまけに、モリーが少女のように頬ほおを染めているのを見て、どうしていいかわからなくなった。

「──ぼっ、僕、そろそろ帰るよ。えっと、あ、うん、そう！　一休みがあんまり長くなってもあれだろうし……」

「そ、そう」

　モリーは二本目の煙草を消し、椅子を回転させて背中を向けた。

「料金は半額よ。会計係には伝えておくから、呼ばれるまで待合室で待っていなさい」

「あれ、タダじゃなかったっけ」

「たとえタダにしてあげたとしても」

　とぼけてみせたマリアローズに対するモリーの切り返しは、予想外の場所を狙ねらい撃うちした。

「そのぶんをうちの運営費に匿とく名めいで寄付するのなら、同じことでしょうに」

　マリアローズは、とっさに何も返事ができなかった。黙だまってドアの方へ向かい、診しん療りよう室しつを出る間ま際ぎわ、かろうじて「またね」とだけ言った。「じゃあね」でも、「ばいばい」でも、「さよなら」でもなく、「またね」と。

　モリーも「またいらっしゃい」と言ってくれた。

「──ばれてるし……」



マリアローズは閉めたドアに軽く額を打ちつけた。

顔が、熱い。

さすがはモリー。やられたぶんはきっちりお返しする。

つまり、そういうことなのだろう。

Omenage 897 6th revolution 20th day

サンランド無統治王国首都エルデン第五区・第一王立銀行前広場

〝鉄鎖の憩い場（アイアンチェインスクウェア）〟

chapter.10

天の邪鬼

　まだ夕方だったので、アサイラムを出た足で鉄てつ鎖さの憩いこい場へ向かい、戦利品の売ばい却きやくや預金などの用をすませた。

　そのまま帰ろうとも思ったが、一人になると、途と端たんにまた余計なことが頭の中を駆かけ巡めぐって、いつの間にか市場の中に迷いこんでいた。

　トマトクン。ユリカ。サフィニア。ピンパーネル。そして、カタリ。

　カタリはちゃんと生き返ることができただろうか。

　アジアンには助けられておきながら、ひどいことを言って──まあ、相手が相手だけにどうでもいいのだが、ほんの少しだけ気にはなる。

　いっそ、きれいさっぱり忘れ去ってしまえればいいのに。

　もちろん、そう簡単に記き憶おくから抹まつ消しようすることなんてできるものではないが、では、いつになれば忘れられるのか？　どれくらいの時間が必要なのか？

「どしたい、お客さん。ぼうっとして……」

「え？」

　陰いん気きな声で我に返ると、しみったれた露ろ店てんの店先にしゃがみこんでいた。

「へへへ……そんなじいっと見てたって、たいしたものはねえだろ。さっぱり売れねえからなあ。品しな揃ぞろえが悪いってことだろうさ。客は正直だからねえ……」

「品揃え、ね」

　確かに、ざっと見ただけでも、この露店の問題点を挙げればきりがない。陳ちん列れつの仕方も雑然としすぎているし、品物の種類もばらばらで、何の店なのかわからない。

目につくものといえば、マリアローズが無意識のうちにいじっていた懐かい中ちゆう時計くらいか。様々な花の紋もん様ようが細かく彫ちよう刻こくされていて、これだけはちゃんと磨みがけば何とか売り物になりそうだ。

「ああ……その時計な」

露店主は鬱うつ々うつとした声で語った。

「そいつは別れた女にょう房ぼうが嫁よめ入いり道具に持ってきたものさ。もう二十年も前だがね。別れてから十二、三年にもなるか……その頃ころは俺も、自分には何かできるはずだなんて、根こん拠きよもなく信じててな。今考えれば危ねえことばかりに手を出して……女房に愛あい想そつかされたのを、これ幸いとこの国にきた。侵入者クラツカー、やってたんだぜ……これでもな」

「ふうん……」

こんなくたびれたオッサンの話に耳を傾かたむけて、どうするのだろう。そうは思ったが、いきなり腰こしを上げて立ち去るのも何だか気が引けた。どうせ、他ほかに用事があるわけでもないし。

「一番いいときは……そうさな、D13のテトルアープの下にダーナムレーンてとこがあるだろ。そうだよ、蜥蜴とかげ人どもの棲すみ家かさ。あそこを仲間と六人で荒あらしまくってな。結構稼かせいだよ。その昔、キング・グッダーの魔導兵団ドレツドループスも、蜥蜴人には手こずったって話だからな……いいもの持ってやがる。ダーナムレーンには、連中の鍛か冶じ場ばがあって、自分で武器防具一式作りやがるんだ……あんなナリして、器用なんだよな」

「蜥蜴人、か。テトルアープの下等蜥蜴人とは、全然違ちがうんだろうね」

「やるなら一匹ぴきに二人であたらねえとな。手て強ごわいぞ……とにかく、そんなやつらをうまく回せてたから、調子に乗ってた。俺はちょっとしたもんだってな。俺には何かできる……やっぱりそうだ、できるんだって思い上がってた。それがいけなかったのかねえ……」

露店主は肺が空っぽになりそうなくらい深々と息を吐はいて、遠い目をした。

「侵入者クラツカーの間でな……鋏使いザ・チヨツパーって呼ばれてた蜥蜴人がいた。その名のとおり、鋏みてえな形の妙みような武器を両手にぶら下げて、時たま同族の蜥蜴人もメタクソに切り刻んでぶち殺すキレたやつだった。誰だれがあいつをしとめるかって、賭かける阿あ呆ほうが大勢いたくらい有名で……俺たちに金を賭けた間ま抜ぬけもいくらかいた。そうなったら……やるしかねえって気になるじゃねえか。ある日、俺たちは鋏使いザ・チヨツパーを探し出して勝負を挑いどんだ。ところが……」

　まるで勝負にならなかったと露店主は言った。

　結果は、露店主を含ふくめた六人のうち、蘇そ生せい不能の死者が四人。露店主は腕うで一本を失う重傷を負いながら、もう一人の生存者を引きずって地上に戻もどったのだという。

　もちろん、そんな状態で、誰の助けも借りずに逃にげきれるはずがない。そのとき、Ｄ13にいた侵入者クラツカーたちが、我こそは鋏使いザ・チヨツパーを倒たおそうと襲おそいかかったけれども、誰も望みは果たせなかった。彼らの大半は無残に死んで、その日のＤ13は血の海と化したらしい。

「鋏使いザ・チヨツパー……誰かが倒したって噂うわさも聞かねえ。今もどこかにいるのかもしれねえな。そのあと俺は侵入者クラツカー稼か業ぎようから足を洗った。おっかねえんだ。アンダーグラウンドに潜もぐれなくなっちまった。生き残った仲間はサンランドを出たよ。今でもな……闇やみの中にいると、鋏の音が聞こえてくる。シャキン、シャキンってな……いまだにだぜ……でも、生きてるしな。何もしねえわけにもいかねえから、がらくたを集めて、売って。昔、貯ためた金がなかったら、飯も食えねえ稼ぎだけどな……女房、元気にやってるといいんだが……」

「気になるの？」

　マリアローズは時計の蓋ふたを開けて、その裏に刻まれた文字を読んだ。

《ダリオ、もう愛していないけど、生きていて》

　どうやら露店主ダリオの女房が刻んだものらしい。

「そうさな……気になる、か……気になる、ね……どうだかな。ど

うせ二度と会えやしねえだろうしな。ああ……あんた、その時計、欲しいなら持ってってくれて構わねえぜ」

「え？　でも」

「売る気のないものなら店先に並べたりしねえよ。いや、違ちがうな……本当は捨てちまいたいくらいなんだ。でもな、いざ捨てるとなると……できなくてな。あんたが持ってってくれれば、いっそ諦あきらめもつくってもんだ」

「そんな──」

　マリアローズにしてみれば、そんな重苦しい思い出の後始末を他ひ人とに押しつけるな、と言いたいところだ。

　実際、そう言おうとしたのだが、後ろから首を突つっこんできた何者かに台詞せりふを奪うばわれた。

「あかん！　あかんあかんあかんで！　そないなこと人任せにするっちゅう根こん性じようがまずあかんがな！」

「そうだネ、感心しないな、というよりいけ好かないヨ」

　しかも、二人。

　ただ、この二人は示しあわせたわけではないらしい。偶ぐう然ぜん、ほぼ同時に左右から介かい入にゆうしてしまっただけのようだ。

「ん？　何や、お前」

「キミこそ何だヨ」

「わしはわしや。見も知らん男に名乗る名はないがな」

「ボクだって同じサ。キミみたいな魚似の面おも白しろ顔がお男に教える名はないネ」

「魚！　魚っちゅうたな！　魚やと！　おい、訂てい正せいせえや！」

「訂正の必要はないだろう？　キミが魚にそっくりなのは事実だ」

「ワレェ……！」

　ケメック訛なまりのきつい魚顔は、黒衣の男につかみかかろうとして、空から振ぶりした。黒衣の男が軽かろやかな身のこなしで魚顔の手をするりとすり抜ぬけたのだ。

「やれやれ、顔だけじゃなくお脳まで魚並みかい？　キミとボクの間に厳然として存在する絶対的な力量差を見通せないなんて、死にマニア決定だヨ？」

「おお、言うてくれたな。死にマニアやて？　それがどないしたっちゅうねん！　死ぬのが怖こわくて生きてられるかい！」

「アハハ、楽しいこと言うネ。それじゃここで死んでみるかい？」

「上等や！」

　カタリは腰こしから二本の変形斧おの、イノイチとロノニーを抜いて、アジアンを挑ちよう発はつするようにくるりと回した。

「やってもらおうやないか。ドタマかち割られてから泣き入れたっても遅おそいで。今、土下座して詫わび入れるっちゅうんなら、許してやらんこともないけどな！」

「誰が」

　と、唇くちびるの片かた端はしに冷れい笑しようを閃ひらめかせたアジアンが泣き叫ぶスクリーミング短剣・ダガーを抜いた瞬しゆん間かん、カタリの目が大きく見開かれた。

「──ちょ、ちょっ……ちょい待ちぃ！」

「ン？」

「そ、その短剣……」

「これがどうかしたかい？」

　アジアンが泣き叫ぶスクリーミング短剣・ダガーを軽く振ってみせると、カタリはドタマをかち割るどころか、地べたに這はいつくばって土下座した。

「そっ、それ……見せてくれへんか、頼たのむわ。なあ、お願いや！　わしが見み間ま違ちがえるはずはない、それ、あれやろ。スクリーミング・ダガー、泣き叫ぶ短剣！　〝死霊女王スペクトラクイーン〟とも呼ばれた魔ま導どう王おうレディ・麟りん霊れいが、千人の戦せん闘とう奴ど隷れいを手ずから殺してその血を吸わせ完成させた、ちゅうても、あまりの凄せい惨さんな記録に実在さえもあやしまれとった、あの伝説の──」

「詳くわしいネ。でも、ダーメ」

　アジアンがそう言って舌を出してみせた。その隙すきに、マリアローズは懐かい中ちゆう時計を店先へ戻もどし、こっそりダリオの露ろ店てんをあとにしようとしたのだが、アジアンに気づかれてしまった。

「──ハッ！　マリア、待ってくれ！　さっきのことで、話が……！　ボクは──」

　しかし、もっけの幸いとでもいうべきか。泣き叫ぶスクリーミング短剣・ダガーにすっかり心を奪われたらしいカタリが、マリアローズに追いすがろうとするアジアンの腰にタックルをかました。

「逃がすか！　見せてもらうまで、絶対に逃がさへんで！」

「くっ、放せヨ！　ボクにはキミのような魚男と遊んでいる暇ひまは……ええい、この……」

　あのアジアンをつかまえて足止めするとは、カタリの執しゆう念ねんも見上げたものだ。マリアローズも、そのおかげでまんまと雑ざつ踏とうに紛まぎれこむことができたわけで、感謝するというのも妙みような話だが、まずはよかった。アジアンにしても、カタリにしても、少なくとも今は、いや、たぶんこの先もずっと、できるだけ顔をあわせたくない。

　それにしても、どうしてあの二人が。

　まあ、アジアンについては、あんなことがあったあとだし、もともとしつこい男だから、何やかんやと言いに来てもおかしくはないとして、だ。

　問題はカタリだった。

「……ちゃんと生きてたな。足は、ついてたし……」

　正直、その点はマリアローズもほっとした。ＺＯＯの専属坊主ぼうずトワニングとやらがどの程度の腕うでか知らないが、蘇そ生せい式しきは決して完全に安定した技術ではないと聞く。どのような蘇生式でも失敗の確率はゼロではないというし、カタリのケースがその不運な例になる可能性もあったはずだ。

　幸い、そうはならなかったようで、何より。

　であれば、鉄てつ鎖さの憩いこい場はそもそもエルデン中の人間が集つどう場所だし、偶然、カタリと行き会ったとしても不思議はない。が、仮にたまたま通りかかったのだとしても、なぜカタリはマリアローズに近づいてきたりしたのか。

　マリアローズが一昨日おととい、仁義を欠く去り方をしたことは、当然、カタリも聞いているだろう。

　それを知れば、何だあいつ、と呆あきれるか。超最低ＳＵＣＫなクソ野郎モウフオだと蔑さげすむか。いずれにせよ、好感とは正反対の感情を抱いだくに違ちがいない。そういうことをしたのだから、当たり前だ。

　でも、いい。もういいのだ。

　どうせ、連中には二度と顔向けできない。だから、全部忘れてしまいたい。今までだって、同じように葬ほうむろうとしてきた記憶おくはある。それが一つ増えただけのことだ。

　そう思っていた。

　──だけど、無理だ。

　できない。

　ああ、不可能だとも。

　忘れられるはずがない。

　幸せや嬉うれしさなんて、すぐ雪みたいに溶とけてなくなってしまいそうになるが、痛みや恥ち辱じよくはいつまでも消えない。心に負った傷は、見えないだけで、何かの拍ひよう子しにまた疼うず

き出す。すべて抱かかえてゆくしかないのだ。この痛みを乗り越こえることなんてできない。

　だって、マリアローズはモリーみたいに強くはなれない。たぶん、マリアローズを庇かばって一度は死んだ阿あ呆ほうなカタリにさえ、及およびもつかない。

　体はもちろん、おそらく心も。

　差は絶望的だ。

「……くそ……」

　そして、絶対に認めたくはないが、認めざるをえないだろう。

　カタリを見た瞬間、マリアローズは期待してしまった。

　自分を捜さがしてくれていたのではないか、と。

　そんなことはありえないと思いつつ、甘っちょろい望みに胸を焦こがしかけた。

「はは……」

　もう恥はずかしくて、情けなくて、笑うしかなかった。

　トマトクンに誘さそわれ、ＺＯＯの連中と会って、何だか変なやつばかりだと感じながら、久しぶりに大人数と──自分を含ふくめて六人でも、マリアローズにとっては十分、大人数だ。とにかく、複数の他人とお茶を飲んだり、くだらない話をして、そんなことが少しだけ楽しかった。

　あの閉へい鎖さ魔ま宮きゆうで、いじけたりふてくされたりせず、ちゃんとやっていたら、と思う。何もかもうまくいったら、今いま頃ごろ、ＺＯＯの一員だったろうか。

　三億ダラー相当の劫ごう火かも入手することができて、一財産築いていたかもしれない。

　いや、金の問題ではない、とまでいってしまえば嘘うそになるが、それだけでないことは確かだ。

　いずれにせよ、何もかもマリアローズ自身に原因があって、責任がある。

　どうしようもない。今さらどうしろと？　何をどうすれば挽ばん回かいできるのかすら、もうわからない。

　行き交かう人波の中、立ち止まると、次々と通行人に突つき飛ばされた。

　何度、背中や肩かたを押されただろう。

　とうとう、誰だれかに──

　後ろからそっと抱だきとめられた。

「……れ？」

「大だい丈じよう夫ぶデすか」

　この奇き妙みような抑よく揚ようの乾かわいた声は、一度聞けば忘れられるものではない。

　顔だけ振ふり返らせて視線を上げると、案の定、静かな砂色の瞳ひとみがあった。

「きみ……どうして」

　カタリの次はピンパーネル。この出会い方に作さく為いめいたものを感じないほど、マリアローズは鈍にぶくなかった。ピンパーネルもまた、マリアローズの想像を肯こう定ていした。

「アナたヲ、捜しテいまシた」

「な、何で……？」

「みンナ、気ニなッテ・まシタ」

　ピンパーネルはマリアローズの体から腕を離はなして、唇くちびると目め許もとをかすかに緩ゆるめた。

「カタリが特ニ、気ニしてイまシタ」

「……さっき会ったよ」

「何か言ッテ・まシタカ？」

「いや、別の変態野郎がたまたま絡からんできて、ごっちゃになってたから」

「ソ・ですカ」

　ピンパーネルは少しだけうなずき、何か言いたそうに口を動かしたが、途と中ちゆうで困ったように眉まゆをひそめた。思いをうまく共通語で表現できないらしい。少し待っていると、ピンパーネルは意を決したようにゆっくりとまばたきをした。

「ワタシ、ラハンから来まシタ」

「え？　ラハンって、ラハン大陸のこと？」

「はイ」

「ず、ずいぶん遠くから来たんだね」

　ラハンといえばα大陸の南東に位置する大陸だ。マリアローズは知識としてしか知らない。サンランド無統治王国があるエルデェイニオン地方は、広大なα大陸の北西部だから、ラハン大陸までは想像を絶するような距きよ離りがある。

「海・泳いデ、陸ハ歩きまシタ」

「お、泳ぎと歩きで来たの？」

「一年半、かかりまシタ」

「それはまた……」

「逃にゲテ、きたのデス」

　ピンパーネルは右手を軽く握にぎった。

「ワタシ、ラハンでは、アッサシンでシタ」

「アッサシン？」

　聞き覚えのない言葉だが、ピンパーネルのつたない説明を聞いているうちに、何となくその意味がわかってきた。

　アッサシン。

　彼らは物心がつく頃ころからあることだけを教えこまれる。

　要するに、殺すことを。

　おのれの肉体と武器でもって、命じられるままに標的を殺す。たとえ、相手が女子供だろうと一いつ切さい容よう赦しやせず、殺す。自分の意志など持たず、殺す。殺すためだけに生きる。

　ここ五百年ほど戦火の絶えないラハン大陸では、各国がこぞってアッサシンと呼ばれるそのような者たちを養成しているのだという。

　ピンパーネルはあることがきっかけでアッサシンをやめ、ラハン大陸を脱だつ出しゆつしてきたらしい。

「ワタシ・殺ス、何とも思わナイ。好キです。殺スとき、ワタシ・気持チよくナル。そのようニワタシ・作らレテいマス」

　突とつ然ぜん、そんなことを打ち明けられても、マリアローズには返す言葉がない。おのれの異常性せい癖へきをひけらかして、ピンパーネルはいったいどういうつもりなのだろう。

　マリアローズが戸と惑まどっていると、ピンパーネルはまた少し考えこんでから静かに言った。

「トマトクン、カタリ、ミんナ……ＺＯＯ□色んナ人いマス。デも、仲良シ。アなタも」

「僕？」

　マリアローズは自分を指差して、ピンパーネルの砂色の瞳をじっと見つめた。人殺し専門の道具として育てられたという男の目は、信じられないほど澄すんでいる。まるで鏡のようだ。そこにマリアローズの姿が映っている。

　弱くて、臆おく病びようで、自分勝手で、そんな自分のことさえも見失いかけ、行き止まりかもしれない細い道で立ち往生して、進むことも、戻もどることもできずにいる。

　ちっぽけなマリアローズが。

「……でも、僕はきみたちとは、関係━」

「ないってか？」

　と、マリアローズの肩かたを後ろからつかんで強ごう引いんに振り向かせたのは、魚顔の男だった。

「何やわたわたしとって見み失うしのうたけど、ようやっとめっけたで。ほいで、関係ないっちゅうんはどういうわけや？　どの口がそないなこと言いよるんや？　ど、の、く、ち、が、言、い、よ、る、ん、や？」

「こ、この口だよ！　だって……関係ないだろ、僕は」

　マリアローズは慌あわてて手を振りほどこうとしたが、カタリは頑がんとして力を緩めなかった。

「僕はきみたちのことなんて……」

「劫ごう火か、欲しうないんかい」

「いらないよ！」

　マリアローズは身をよじりながら叫さけんだ。出てくる言葉は必ずしも自分の本心ではなかったが、いったん勢いがつくと舌が勝手に回って止まらなかった。

「━いらない！　これ以上、僕に何をしろっていうんだ！　何もできないのに、きみたちについていって、後ろでぶるぶる震ふるえてろって？　ばかにするな！」

「だ、誰だれも馬ば鹿かになんてしとらんやろが！」

「へえ、自覚がないんだ？」

　侮ぶ蔑べつするような表情など浮うかべて、そんなことまで言う必要はどこにもないのに。

　もしかしたら、カタリの魚顔のせいか。そうだ。きっとカタリが悪いのだ。押しつけがましくて、しつこくて、暑苦しくて、うざったくて、頭にくる。

　だいたい、どうしてこいつはマリアローズなんかのことを、わざわざ捜さがして追い回すのか。何のつもりだ。マリアローズのせいで、一度死んだことを覚えていないのか。アジアンが言ったとおり、魚並みの脳か。

「何様のつもりか知らないけどさ。高いところから手を差し伸のべて、弱虫の臆病者をここまで引っ張り上げてやろうって？　いい気なもんだね。しかも、無自覚で。タチが悪いよ、まったく」

「わ、わしはそんなつもり」

「いや、いいって。むきにならなくても。何をどう考えて誰に何をしたってきみの自由だよ。どうせ、ここはそういう国だしね。だけど──」

　マリアローズは一いつ瞬しゆんだけ全身の力を抜ぬいてカタリの油断を誘さそい、両りよう肩かたをつかむ手からするりと逃のがれた。

「僕にもきみを拒きよ絶ぜつする自由がある。きみみたいに無神経で、図ずう々ずうしくて、不細工な野や郎ろうと、同じ空気を吸ってると思うだけでぞっとするよ。はっきりいって、不快なんだ」

「みぐっ、ひ、他ひ人と様さまの身体的欠けつ陥かんあげつらうんは反則やろが！」

「僕にだって身体的な欠陥はある。そのせいで不利なことなんかいっぱいあるよ。嫌いやな目にもたくさん遭あってきた。きみもその顔のまずさのせいでふられるってわけだ。同じことだろ！」

「ふ、ふられるて、わしはナンパしとるわけちゃうねんど！」

「だったら」

　カタリがぎょっとしたような顔をしていた。どうしてだろう。すぐに気づいた。

　視界が歪ゆがみはじめている。

　目から溢あふれそうになる透とう明めいな液体を、マリアローズは外がい套とうで乱暴にぬぐった。

「……だ、だったら、何だっていうんだよ！　き、きみたちに会ってから、僕はもう……めちゃくちゃなんだ！　何でこんな……」

「お前じぶんを捜してたんは」

　カタリは頭を掻かきながら、きまりが悪そうにマリアローズから顔をそらした。

「閉鎖魔宮、もっぺん攻せめよかと思てな。確かにこないだはあんな結果になってもうたけど、わしらにもまずいとこはあったし。第一、しくじったままっちゅうのも腹立つやろ」

「勝手に行けばいいだろ」

　踵きびすを返そうとしたマリアローズに、カタリが馬鹿みたいな大声で言った。

　いや、きっとこいつは馬鹿なのだろう。

　馬鹿に決まっている。

「明日、十時にＤ１の入口！　待っとるからな！　ええか、必ず来いよ！　来こおへんかったらピンプを刺し客かくとして送りこむで！　ピンプは凄すご腕うでや、狙ねらった獲え物ものは絶対に外さへんぞ！」

「行くもんか！」

　マリアローズもそう叫び返して走り出した。もう、まったくわけがわからなかった。いったい何なのだ。阿あ呆ほうだ。阿呆に違ちがいない。こんなひねくれ者につきまとい、こんな人ひと混ごみの中で声を張り上げて、何の益もないはずなのに、もう一度、一いつ緒しよに、だって？

　また足を引っ張られたいのか？

　今度こそ本当に死にたいのか？

　だったら、死ねばいい。死ね。死んでしまえ。どこか人目につかないところで、少なくともマリアローズの目が届かないところで、一人で勝手に死ねばいいのだ。

明日、十時。

──行かない。

行くはずがないじゃないか。

いくら何でも、そこまで恥はじ知しらずにはなれない。マリアローズの面つらの皮は、そこまで厚くない。無理だ。できない。できるはずがない。当たり前じゃないか。どうして──と、喚わめき散らしたい衝しよう動どうを必死にこらえながら駆かけていた足の先が、石いし畳だたみの継つぎ目めに引っかかった。

なまじ速度が出ていたため、マリアローズは態勢を立て直す間もなく転んだ。

とっさに両手で体を支えたので、石畳に顔面を打ちつける羽目には、何とかならずにすんだ。

だが、無様だった。

何人もの通行人の失しつ笑しようを買った。それも恥はずかしかったし、頭にきたが、もっと違う種類の憤いきどおりというか、やるせなさがこみ上げてきた。抑おさえきれなくて、マリアローズは右の拳こぶしで力任せに地面を殴なぐりつけた。

何度も、何度も、何度も。

そうして、いったい何回、硬かたい石畳を叩たたいただろう。

見れば、拳のところどころが裂さけて、血がにじんでいる。

結構、ひどい有あり様さまだ。

「……痛ぁ……」

馬鹿は自分だ。

そう思った。

Omenage 897 6th revolution 21st day

サンランド無統治王国首都エルデン第一区

〝D1出入口前〟

chapter.II

さよならの途中で

「──で」

　時刻は十時を少し回ったあたり。

　マリアローズは、Ｄ１の出入口から二十メーテルほど離はなれた建物の陰かげに身をひそめていた。

「何で来ちゃってるんだよ、僕……」

　Ｄ１出入口に通じる下りの坂道の前には、すでにトマトクン、カタリ、ユリカ、サフィニアの姿がある。ピンパーネルだけは見あたらないが、カタリとユリカはちらちらと周囲に目を配り、いかにも待ち人来たらずといった様子だ。

　実は、マリアローズは十時十五分前にはここにいた。

　トマトクンたちが到とう着ちやくしたのは、その五分後だった。

　つまり、マリアローズはもう二十分ばかりこうしていることになる。

　それにしても、本当に、なぜ来てしまったのか。

　何となく来ずにいられなかった、というのが正直なところだが、家を出たときはカタリの話が嘘うそでないか確かめようという理由で自分を納なつ得とくさせた。

　けれども、確かく認にんする必要も本来、全然ないわけで。

　待ちぼうけを食わされる連中の姿を眺ながめて笑ってやろうとか、やつらが何分待つか一人で賭かけをしようとか、言い訳じみたことを考えつつ、ここでじっとしているのはどうしてか。

　繰くり返す自問自答も、どこか空々しい。

　いい加減、帰ろう。

　幾いく度どとなくそう思い、この場をあとにしかけて、そのたびに考え直した。

　結局、未練があるのか。けれども、どうしようもないではない

か。不可能だ。いったいぜんたい、どの面つらを下げて彼らの前に出てゆけというのだ。

　マリアローズにだって、ちっぽけかもしれないが、プライドくらいある。羞しゅう恥ち心しんもある。それさえも失ってしまえば、自分を支えるものが何もなくなってしまうだろう。

　いや、そんな理り屈くつも半分こじつけにすぎなくて、要するに怖こわいだけだ。ここまで来て、最後の一歩を踏ふみ出す勇気が、マリアローズにはないのだ。

　マリアローズは建物の冷たい壁かべに後頭部を押しつけ、自分の右手に視線を落とした。まさかモリーに治ち療りようしてもらうわけにもゆかなくて、右手はまだ痛む。昨夜はこの痛みのせいでよく眠ねむれなかった、といったら大おお袈げ裟さすぎる。実際は、手に力を入れると、鈍にぶく疼うずくだけだ。

　そう──なかなか寝ねつけなかった理由は、右手のせいなんかではなかった。

　振ふり仰あおぐと、雲一つない晴天が広がっていて、空の青さが目にしみる。

　瞼まぶたを閉じて、もう自分に嘘をついても仕方ない、せめて一人のときくらい素す直なおになろうと思った。

　カタリ。ピンパーネル──捜さがしてくれた。

　嬉うれしかった。

　ああ、そうとも。嬉しかったのだ。

　ゴードン子し爵しやくの館やかたで孤こ立りつしていた頃ころをずっと引きずっていた。仲間や友人を作ることには強い抵てい抗こうがあった。その資格もないような気がしていた。誰だれかを好ましく感じたり、大事に思うのも、その相手を失ったときの痛手を考えると怖かった。

　父。母。

　彼らの死が、マリアローズの胸に大きな穴を空けた。

　子爵の館でーいつ緒しよだった友人たち。パーメラ。ガブリエル。ドミニク。ノーラ。そして、ローメオ。他ほかにも、たくさん。

　彼らはマリアローズのせいで死んだ。マリアローズのそばにいたからだ。マリアローズが殺したも同然だった。生き返ったとはいえ、カタリだって。

　だから、一人でいた。

　そうすれば、誰も自分のせいで傷つかない。自分も誰かのせいで傷つかない。

　子爵の館にいた頃から、マリアローズは変わっていないのだ。変わることができなかった。けれども、それでいいのだ。その方が気楽だ。ずっと、このままで。

　本当に？

　──わからない。

　ただ、本音をいえば、寂さびしかった。心細かった。マリアローズは強きよう靭じんな肉体を授さずかったわけでも、何か特別な英才教育を受けたわけでも、特とく殊しゆな才能があるわけでもない。つらいときは、よく両親のことを思い出してこらえようとしたものだが、所しよ詮せん、彼らはもういないのだ。

　一人は嫌いやだった。

　でも、一度、はっきりとそう思ってしまったが最後、我が慢まんできなくなる。一人で立っていられなくなる。そうなったとしても、誰かに助けてもらうことなど望めない。

　一人で強がっていた。

　そんなマリアローズに、カタリたちが、ＺＯＯの皆みなが、手を差し伸のべてくれた。

　嬉しかった。

　とても。

涙なみだが出るくらい。

情けないことに。

だが、やはり、彼らの前には出てゆけない。

そうした方がいいのだろう、と思う。そうするべきだとさえ。

けれども、残念ながら、その勇気が本当にないのだ。そちらの方へ足を踏み出そうとすると、膝ひざが震ふるえて体中から力が抜ぬけ、一歩も前に進めないのだ。

またこれから虚きよ勢せいを張って生きてゆくのか、と考えれば鬱うつになるが、それでもマリアローズは生きてゆかねばならない。たとえひどい鈍どん足そくで周りの風景が一向に変わらず、じりじりしても、腹が立っても、たまに立ち止まっても、時に後あと戻もどりしても、結局、進むしかないのだ。

まあ、一連の出来事を通して前向きにそう思えるようになったことは、収しゆう穫かくかもしれない。

だから、ＺＯＯの連中には感謝する。アジアンや、コロナにも、少しだけ。

—ありがとう。

そして、さよなら。

「……仕方ないよね」

マリアローズは瞼を押し上げて一つ息をつき、トマトクンたちがいるＤ１の出入口とは反対の方向へ歩き出した。

何だかおかしくなって、少しだけ笑った。

その口を塞ふさがれた。

これは—布？

やたらと甘ったるい匂においがする。

だめだ。これは、吸ってはいけない。

　でも、もう吸ってしまった。

　手て遅おくれだ。

「──だ……」

　誰がこんなことを？

　即そつ効こう性せい強きよう度ど睡すい眠みん導どう入にゅう剤ざいのたぐいは、錬金士Ａ組合Ｇに属さない外げ道どうと呼ばれるはぐれ者の錬れん金きん士ししか売らない。かなり悪用可能なため、足がつけば組合に目をつけられるし、値段は馬ば鹿か高だかいはずだ。こんなものを──

「すみまセン」

　意識が完かん璧ぺきなる黒で塗ぬり潰つぶされる寸前、彼の声を聞いたような気がする。

　砂色の瞳ひとみ。髪かみ。

　アッサシン。

　即効性強度睡眠導入剤ナプシサンＫがたっぷりしみこんだ布を、後ろから伸ばした手でマリアローズの口に押しつけた元殺し屋は、たぶん、微び妙みょうに申し訳なさそうな表情をしていた。

Omenage 897 6th revolution 21st day

サンランド無統治王国首都エルデン・アンダーグラウンドD1

〝閉鎖魔宮(ディバイデッド・パンデモニウム)〟

chapter.12

仲間

……即効性強度睡眠導入剤とは、要するに麻ま酔すい薬やくのことだ。麻酔薬は中ちゆう枢すう神しん経けい系けいの機能を抑よく制せいして、意識の喪そう失しつ、筋きん弛し緩かんをもたらす。

このような人体に多大な影えい響きようを与あたえる薬物の生成は、錬金術の中でも邪じや術じゆつとされる。その背景には、魔ま導どう王おう時代終しゆう焉えん後ご、しばらくしてから盛さかんになった領分議論がある。

つまり、そこからあそこまでは錬金術だとか、あそこからここまでは機術だとか。三年に一度開かい催さいされる総会（本当はとてつもなく長たらしい正式名めい称しようがある）では、各派きっての論客がおのれの領分を死守し、相手の領分を切り崩くずそうと躍やつ起きになる。

中でも、伝統的に卓たく絶ぜつした理論家を揃そろえているのが医術士だ。彼らはたかだか三百年の歴史しか持たないのにも拘かかわらず、特に錬金士の領分をかなり食い荒あらした。

その結果、現在では錬金士が表立って販はん売ばいできる医薬品というと、風か邪ぜ薬ぐすり、目薬、頭痛薬、腹痛薬、整腸剤、軽い睡眠導入剤など、作用が軽いものばかり。しかも、それらすべてについて、汎Ｐ大陸Ｃ医術Ｍ士会Ａの認にん可かが必要となる。

ただし、錬金士が一方的に割を食っているだけかというと、そうではない。

たとえば、医術士が大規模な医術式の際、時々用いる麻酔薬を供給しているのは誰だれか？　医術式より投薬の方が治ち療りよう効果が高い、と判断した医術士が処方する薬を生成しているのは？

答え。

錬金士だ。

人体の研究と医術式による治療を専門とする医術士と、現象を追求してきた錬金士とは、密接に繫つながって利益を分けあいつつ、互たがいを補完しあっている。

こうした関係は、何も錬金士と医術士に限ったことではない。錬

金士と機術士の間にも見られ、一部、医術士と機術士の間にもある。その意味でいうと、領分議論とは内輪の談合、利益と役割分担の調整会議であるという見方が正しかろう。

　そんな中で唯ゆい一いつ、誰とも何も分けあわず、おのれの立場を一いつ切さい変えないのが、魔ま術じゆつ士しということになるだろうか。

　破は壊かい、殺傷を目的とする卑いやしい術士として忌いみ嫌きらわれつつも、かつて恐怖のドレツド操り手スターとして世界を統すべた者たち、その頂点に君臨した魔導王ドレツドロードの、正統な、後こう継けい者しや、として……。

　その公平さにより、総会の、議長に選ばれるのは、魔術士が、多く……。

　畏い怖ふ。

　彼らは自由である、から……。

　恐おそれられて、羨うらやまれ……。

　本来、おのれの力に制約など設けるべきでは、なく……。

「だから、私は生成するのだよ、マリアローズ。魔導王の思想を継けい承しようする錬金士として。私の思想に基もとづいて。ナイアガル・ブレイ。ゴウタΘ。レクイエム。セーラム・ゴードン。ナプシサンＧ。ホムニアス・カーヴ……」

　──麻酔薬で引き起こされる眠ねむりは、睡眠というより、意識障害から喪失に陥おちいると表現した方が正しい。普ふ通つうの眠りと違ちがって、最さ中なかに夢を見ることはまずないが、覚かく醒せいに至る段階では、外界の刺し激げきの奔ほん流りゆうが記き憶おくと結びついて、様々なイメージが錯さく綜そうする。

　マリアローズが見たのは、口くち髭ひげと顎あご鬚ひげを鋭えい角かく的に整えた、イシュタル・アガメムノ・ゴードン子し爵しやくの顔だった。

　彼の生白い手と、奇き妙みようにつるんとした手の甲こう。女性のように、マニキュアを塗ぬった指。彼は血ち塗まみれで青っぽい灰色の目をした金きん髪ぱつの少年を背負い、マリアローズを抱だいて軽かろやかに円舞曲ワルツを踊おどっていた。

　どうして、彼らがここにいるのか……？

　金髪の少年は、子爵に殺された。

　子爵はマリアローズの一計により殺人罪で起き訴そされて国外脱だつ出しゆつし、サンランドで行方ゆくえ不明になったはずだ。

「何を言うのだ私のマリアローズ真に稀まれなる私だけの宝私のすべて私の愛私の神秘」「そうだよ僕はこうして生きている」「お前の中で」「君の中にいる」「私は永遠に生きる」「仲良くしようよ？」「私のもとへ」

　嫌いやだ。

「……離はなして……」

「無む駄だだ私はお前の中にいるのだ私はお前を離しはしない離すものか」「僕は君と一心同体なんだ悲しい目をしたマリアローズ君を放ほうってはおけないって言っただろう？」

「……やだ……」

「マリア？」

「やめ……てよ……」

「マァァァァリアロォォズ」「マァァリア」

「……僕……を……」

「マリアァァッ」「マァリアァ」

「──マリア！」

　頬ほおを叩たたかれた。

「マリア？」

　仕置きの鞭むちだろうか。それにしては痛くないし、声が違う。子爵でも、ローメオでもない。

　女の声だ。

「……あ……」

　目を開けると、脇わきに赤いラインのある女性用ナース医術士服・ユニを着たブロンドの少女がいた。

　澄すんだ瞳ひとみの色はローメオのそれに若じやつ干かん似ているが、もっと青い。

　ユリカだ。

「え……何で……？　僕……」

「大だい丈じよう夫ぶ？　うなしゃれていたわ」

「いや……大丈夫、でもないけど──」

　マリアローズは手で目をこすった。そのとき、気づいた。右手が痛くない。

「あ、勝手に治療しておいたけど、まじゅかった？」

「う、ううん。まずくはないよ。全然。ええと、その……ありが

と」

「どういたしまして」

　ユリカの微笑ほほえみがまぶしすぎて、くらくらする。そのまばゆさから目をそらすように上半身を起こしたマリアローズは、あたりの風景に愕がく然ぜんとした。

　何ということだろう。まだ夢の中にでもいるのだろうか。

　だが、あの悪夢を遡さかのぼって記憶をたどってみると、マリアローズはピンパーネルに即そつ効こう性せい強きよう度ど睡すい眠みん導どう入にゅう剤ざいを吸わされた。となれば、こういうこともありうる。意識を失っている間に連れてこられたということだろう。

　石柱に囲まれた砂地、閉へい鎖さ魔ま宮きゅうのテリトリへ。

「お、目え覚ましたんか」

　カタリが頭を掻かきながら近づいてきた。

「すまんかったな。ちいとばかし手て荒あらな真ま似ねさせてもろたで。ピンパーネルに頼たのんでおいたんや。近くでマリアローズをめっけたら、無理やりでも連れて来いっちゅうてな」

「ど、どうして……」

「ほんなら、わしから訊きかせてもらうで。何であないなとこで、こそこそわしらのことうかがっとったんや」

　マリアローズは答えられなかった。そんなことより、火を噴ふきそうなほど熱くなった顔を外がい套とうで隠かくさないといけなかった。答えられるものか。

「ま、ええわ」

　カタリは少し離れた場所でゆっくりとあたりに目を配っているトマトクンに声をかけた。

「お目覚めやで、トマトクン」

「ああ」

　振ふり返ったトマトクンは、相変わらず超ちよう然ぜんとしているというか、とらえどころがなく、底が見えない。野性的でありながら野暮ったくなく、どこか品のある珍めずらしいタイプの美男子なのだが、何を考えているのかさっぱりわからない男だ。

「用意しろ、マリア。今日こそ赤の男だん爵しやくをしとめるぞ」

「え？　いや、用意しろって……」

　マリアローズは首をひねらざるをえない。トマトクンには何のわだかまりもないのだろうか。

「だけど、僕は」

「今回はお前の役割を変える」

　トマトクンはマリアローズの戸と惑まどいを完全に無視した。

「色々考えたんだが、お前に守備的な役割は向かないと見た。で、ピンパーネル、サフィニア、ユリカ、俺はそのままにして、お前とカタリを入れ替かえる」

「はい？」

　マリアローズはさらにいっそう首を傾かしげた。

　むろん、言葉どおりの意味は理解できる。だが、カタリと交代するということは、前衛を務めるということだ。トマトクンは、先頭に立って悪あく魔まと戦えと、マリアローズに言っている。

　雑ざ魚こだという隠おん密みつ悪あく魔まにさえ苦戦しまくったマリアローズに向かって、そんな滅め茶ちや苦く茶ちやな話があるだろうか。

「ちょ、ちょっと待ってよ……僕が前衛？　そんなの、無理に決まってるだろ」

「無理じゃない」

　トマトクンはわずかに片方の眉まゆを上げた。

「俺がカバーするからな。俺のそばにいれば、お前は死なない。それに、カタリが下がることでユリカの負担も減る。カタリとユリカの二人ならサフィニアの守りは万ばん全ぜんだから、ピンパーネルだってもっと自由に動けるだろう。考えてみれば、このフォーメーションがベストだ。前回は俺の判断ミスだった」

「え？　あ、謙けん虚きよなのはいいことだけど──や、そんなことはどーでもよくて、きみのそばにいれば大丈夫とか、それって単なる自信過か剰じようじゃないか」

「お前の言うことを聞いていると、俺は謙虚なのか自信過剰なのか、よくわからなくなるな」

「じ、自信過剰！　自信過剰だよ、絶対！」

　マリアローズが断言しても、トマトクンはまったく動じなかった。

「そんなことはないぞ。俺の剣けんが届く範はん囲いにいてくれれば、まず大丈夫だ。やばそうだったら、ちゃんとそう言う。そのときはそのときで、俺の指示に従って行動すれば何とかなるはずだ」

「はずだって……」

「俺が責任を持てるのは、的確な指示を出すところまでだからな。その先はお前次し第だいだ」

「そりゃそうだろうけど」

「剣、買い替えたのか」

　トマトクンは唐とう突とつに話題を変えた。

「ほう。小剣だな。前に持ってたエストックよりはいいんじゃないか。あれは実戦向きじゃないからな。それでカタリが寝ているお前を触さわりまくってたのか」

「カタリが？」

　マリアローズに睨にらみつけられたカタリは、大おお慌あわてで弁解を始めた。

「ちゃ、ちゃう！　ちゃうて！　わしはいわゆる一つのアレや、ほれ、お前を担かついで運んできたんや。そしたら、腰こしのもんが前とちゃうやんか。何や見てやろ思て、そしたらベルトに色んなもんが挟はさまっとったもんやから、気になって、ちいとばかし──それだけやで？　おかしなことは何もしとらんがな、ホンマやて！　この目えを見てみんかい！　嘘うそついとる目えちゃうやろ！」

「嘘か本当かで目を引きあいに出す場合ってたいていあやしいし、それより問題なのは僕を運んできたことだと思うけどね……」

　マリアローズは肩かたを落とし、世界最深だというガリダナエ海かい溝こうより深いため息をついた。

　何てことだ。本当に、何てことだろう。

　確かに、あそこまでは自分の意志で行ったとはいえ、色々悩なやんだ末、また一人で頑がん張ばる道を選ぼうとした。その矢先に強制連行だ。どうにも腹立たしい話だが、閉へい鎖さ魔宮に出入りするには、サフィニアの限定魔術が必要となる。

　つまり、逃にげられない。

　唯ゆい一いつ、この場に一人でとどまりつづけるという選せん択たく肢しも、あっさり消えることになる。

「トマトクン」

　ユリカが懐ふところからとり出した時計を確かめ、気になることを言った。

「もう時間がないわ。しょろしょろ出しゆつ発ぱちゆした方がいいかもしれないわね」

「む？　そうか」

　うなずいたトマトクンだけでなく、カタリもピンパーネルもサフィニアも、もちろんユリカも、思い思いに装備を整えて歩き出そうとしている。

　時間がない？

　いったい、どういうことなのか。

「何か起こるの？」

「ルールの変へん更こうがあった」

　トマトクンが立ち止まって少しだけ肩をすくめてみせた。

「ファッルーカのやつ、今度はテリトリを時間ごとに移動させるというんだ。まあ、魂たましい集めの巡じゅん回かいルートを変えたのと違ちがって、前もって宣言してくれたから、まだよかったが」

「い、移動？」

「何でも、テリトリの移動には規則性があるらしいけどな。まだ初回だ。限定魔術はテリトリの中でしか効果がないし、帰りは散々探し回らなきゃならんだろう」

　ファッルーカ。道化のジエステル・大公爵ハイヴエリオン。まったく、余計なことをしてくれる。恒こう久きゆう的な安全地帯でないのなら、こんなところに一人でいられるはずがない。

「どうした。行くぞ」

　結局、さも当然といった顔で顎あごをしゃくってみせるトマトクンに従って、マリアローズは進むしかない。他ほかに、どうしろと？　どうせ、炎模様フアイヤーパターンが異い彩さいを放つ濃紺色ネイビーの全身鎧よろいを身に着けたこの男が相手では、罵ば詈り雑ぞう言ごん抗こう議ぎ反論、すべてむなしい。

　むろん、納なつ得とくしたわけではないが、テリトリを出ればそんなことを言ってもいられない。

　何せ、ここは閉鎖魔宮。

　地じ獄ごくの異界生物フリークス、悪魔どもの巣そう窟くつだ。

　一説によると、地獄にはおよそ三十万種、六百六十六億の悪魔が棲せい息そくしているという。その大おお仰ぎような数は眉まゆ唾つばだが、実際、彼らは人間とは比べものにならない多様性を持っている。この閉鎖魔宮にだって、どんなやつが潜ひそんでいるかわかったものではない。

　当然、トマトクンたちは、マリアローズよりずっと閉鎖魔宮につ

いて詳くわしいだろう。彼らから情報をえて心の準備をするのが一番なのだろうが、何だかそれも癪しやくではないか。

　━━でも、こいつらってば、何考えてるんだろ。

　そんな疑問を頭の奥に押しこめつつ、マリアローズは気持ちを集中した。同じ失敗を二度繰くり返してたまるか。これこれこういうわけで注意力散さん漫まんでした、などという弁解は無意味だ。何より、自分で自分が許せない。

　だいたい、プライドだの羞しゅう恥ち心しんだのを云うん々ぬんするのなら、トマトクンたちの後ろに隠かくれていればいい、自分の出る幕なんかない、などという意識は持つなという話なのだ。

　非力さを嘆なげいて卑ひ下げするのは、やれるだけのことをやってからにすればいい。剣けんだって『武技概がい論ろん』に書かれていた剣聖直系正統派剣けん闘とう術じゆつの基本くらいは覚えている。それなのに、うまくできやしないと最初から諦あきらめ、実戦で試ためすこともしなかった。思えば、少しの労力と小手先の器用さで何とかなること以外は、万ばん事じそんな調子ではなかったか。

　最善をつくす。振ふり返ってみれば、そんな当たり前のことさえしてこなかった。

　足手まといかどうかは、心構えで決まる。

　結局、そういうことなのかもしれない。

　マリアローズは神経を研とぎ澄すまし、黙だまってトマトクンの隣となりを歩いた。それが今、マリアローズにできることだった。その甲か斐いあってか、不意に、来る━━と、はっきりした根こん拠きよは何一つないが、確かにそう感じた。

　それは、かすかな物音や空気の微び妙みような乱れだったのかもしれない。第六感とでも呼ぶべき超ちよう感覚によって知りえたのかもしれない。

　いずれにしても、向かって右側の建物の壁かべを粉ふん砕さいし、飛び出してきたそいつの奇き襲しゆうを、マリアローズはよけることができた。

　しかも、間かん一いつ髪ぱつというほど危あやういタイミングではない。そのときのマリアローズは、自分でも不思議に思うくらい冷静だった。身をかわしながら、相手の動作に無む駄だが多すぎることを見てとり、これなら何とかなりそうだと考える余よ裕ゆうすらあった。

　そいつは、身長約一・八メーテル。頭部は牛に似ていて、やたらと筋肉質マッチヨな赤しやく銅どう色いろの体にまとうは腰こし布ぬの一枚。巨きよ大だいな戦せん槌ついを両手で持った──

「牛頭悪あく魔まだ。一匹ぴきは任せるぞ」

「……名前、そのまんまじゃないか」

　マリアローズは低く毒づいて右足をやや前に出し、『武技概論』でいう中ちゆう庸ようの構えをとった。背中あわせになったトマトクンは、左側の建物をぶち壊こわして躍おどり出てきた二匹ひきと対たい峙じしている。やや後方の建物の壁を破って現れた三匹びきは、カタリとピンパーネルが対応するようだ。

　しかし、マリアローズが周りの状じよう況きようを確かく認にんしたのは、ほんの一いつ瞬しゆんにすぎなかった。

　咆ほう哮こうを発しながら、牛頭悪魔が突とつ進しんしてきたのだ。

　こうなると、何かを考えている余裕などない。マリアローズはとっさに横にステップを踏ふんでこれを回かい避ひし──勝手に体が動いて、自然と記き憶おくの底に眠ねむっていた正統派剣闘術の型が出た。

　すくい上げ斬ぎりから、剣を返して、背面袈け裟さ斬ぎり。

　だが、二手とも浅いか。

　まるでこたえた様子のない牛頭悪魔は、勢いのまま少し直進して回れ右し、戦槌を振り上げた。マリアローズはその懐に飛びこみ、両手首、両りよう肘ひじを薙なぎ斬りして素す早ばやく後退する。これもまた、型どおりだった。

　ただ、戦槌を持っていられなくなったといっても、今の牛頭悪魔にそれ以外の機能不全があるわけではない。安心するのはまだ早い

が、腕うでを振り回して、悲鳴混じりの怒ど声せいを上げつつ、飛びかかってくる、敵。

　怒いかりに我を忘れているのだろう、というか、おそらくもともとオツムの出来があまりよろしくない、敵。

　──倒たおせる。

　自分より体格的にかなり恵めぐまれている人間型の悪魔に対して、剣で優位に立っているという事実が、マリアローズを調子づかせた。

　直線的に向かってくる牛頭悪魔を、嘲あざ笑わらうように曲線的な足あし捌さばきで悠ゆう々ゆうとかわす。すれ違ちがいざまに足あし払ばらいをかけ、体勢を崩くずさせたところで首筋を斜ななめに斬り下ろした。傷口から噴ふき出す黒ずんだ血液は、今までの出血と勢いが違う。頸けい動どう脈みゃくを切断することに成功したようだ。

　地面に倒れた牛頭悪魔は起き上がろうとして叶かなわず、血の池に突つっ伏ぷした。

　そのみじめな敗残者の背中を見下ろして、マリアローズは内心、喝かつ采さいを上げた。

　──やった……！　できる。僕にもできる。やれるじゃないか！

「終わったみたいだな」

　振り返ると、大剣を外がい套とうでぬぐうトマトクンの足あし下もとには、四匹の牛頭悪魔が転がっていた。いや、それぞれ縦と横に両断された二匹が、あわせて四匹に見えただけか。ピンパーネルとカタリもすでに三匹片づけていて、結局、ユリカとサフィニアには出番がなかったらしい。

　トマトクンがマリアローズの小剣に目をやってヒヒヒと笑った。

「剣、使えるじゃないか。付け焼き刃ばみたいだが」

「うるさいな」

　マリアローズはむっとして口を尖とがらせた。せっかく人がいい

気分に浸ひたっているときに水を差すなんて、野暮なやつだ。

「付け焼き刃だろうが何だろうが、敵を倒せるならどっちでも一いつ緒しよだろ」

「まあな。見たところ、バーニング・バラッドの正統派剣闘術か。どれくらい練習したんだ」

「別に……昔、本をぱらっと読んだだけだよ。練習？　ハッ、この僕がそんな面めん倒どうくさいことするわけないだろ。嫌きらいなんだよ。汗あせとか努力とか熱血とか根こん性じようとか友情とか愛情とか義理人情とか、そうゆう言葉」

「今の話と関係ない言葉も混ざってたみたいだが」

　泰たい然ぜんとしているトマトクンが、マリアローズにとっては面つら憎にくい。

「ついでに教えてあげたまでだ！」

「それは感謝すべきなのか」

「きみがどぉーしても感謝したいって言うなら、感謝させてやらないこともないけどね」

「別に、感謝はしたくないぞ」

　トマトクンは顎あごを撫なでながら「それより」と話を戻もどした。

「剣けんのことだけどな。正統派剣闘術には従着破極という考え方があるだろう」

「ふん……何かそんなことも本に書いてあったね。あんまり覚えてないけど」

　確か、従とは型に従う。着とは型が身に着いて実戦に即そくした使い方ができるようになる。破とは型を破り、原則論を超ちよう越えつして有効な戦法が選せん択たく可能となる。極とは剣を極きわめ不敗に至る。従着破極とは、以上の四段階を示していたはずだ。

　剣聖モータルレッド直系の正統派剣闘術各派では、この従着破極

を一段階ずつ着実に上ってゆかねばならない。そうすることによって、初めて目録への道が開かれ、皆かい伝でんを経て剣けん豪ごうに至り、最終的に剣聖に近づけるのだという。

「あれを全面的に否定するわけじゃないが」

　トマトクンは大剣の腹で自分の肩かたを軽く叩たたいた。

「従と破の間に隔かく絶ぜつがあるだろう。やたらとたくさんある型をいちいち体に覚えこませてから崩せというわけだ。暇ひま人じんはそれでいいのかもしれんが、馬ば鹿か正直に一つ一つやっていたら、とんだ回り道じゃないかと思ってな」

「ずいぶん偉えらそうなこと言うじゃないか」

「そんなつもりはないが、正統派なんていっても、結局はバーニング・バラッドがモータルレッドの見よう見み真ま似ねである程度系統立てた練習法を作っただけだ。あいつが誰だれかに何かを教えたわけじゃない」

「え？　でも、バーニング・バラッドは、モータルレッドの弟で子しだって」

「あいつが弟子なんてとるものか。もともと、普ふ通つうの人間があいつの真似をしようってのが間ま違ちがいなんだけどな」

「あいつあいつって、まるでモータルレッドその人を知ってるみたいな口ぶりだね」

「知りあいだぞ」

　少なくとも数百年前から剣聖と呼ばれている伝説的な人物のことを、トマトクンは幼おさな馴な染じみか何かのように語った。

「しばらく会ってないが。そういえばあいつ、元気にしてるかな。まあ、あいつのことだから死んでるってことはないか」

「……交友関係、広いんだね」

　今まで見てきただけでも、トマトクンが只ただ者ものではないということはわかる。だが、α大陸全土で知らぬ者の方が少ない剣聖と知りあいとなると、これはスケールが違う。相手がトマトクンで

なければ、問答無用で与よ太た話ばなしだと笑い飛ばすところだろう。そんな大きなことを言っても、あながち法ほ螺らでもなさそうだと思わせる何かが、トマトクンにはある。

　とはいっても、トマトクンの言葉を鵜う呑のみにすることはあるまい。

　だいたい、人を高みから見下ろしているかのような口のきき方や態度、均整のとれた長身など、マリアローズの気に食わない要素が、トマトクンにはてんこ盛りなのだ。

「とにかく、僕は僕のやりたいようにやるよ。誰かに指図されるのは嫌いなんだ」

「嫌いやなら嫌で仕方ない。だが、前にも言ったように、俺の命令には従ってもらうぞ」

「それは──」

　マリアローズとしても、前回のような結果はさけたい。となれば、トマトクンが出す最低限の指示には従わざるをえないだろう。

「まあ……ぼちぼち、ね」

「俺も剣のことまではとやかく言わんようにしよう。ただ、せっかくお前には今までやってきたやり方もあるんだ。俺が見たところ、お前は要領がいい。機転もきく。剣に固こ執しつしないで、もっと自分の長所を生かした戦い方ができるんじゃないか」

「……わかったようなこと言うね」

　少々不ふ愉ゆ快かいのような、わりと褒ほめられているようなので、嬉うれしいような。

　どんな表情をしていいかわからないでいるマリアローズに、トマトクンが唇くちびるの片かた端はしをつり上げてみせた。

「人には得手不得手があるだろう。短所を潰つぶすのも大切なことだが、長所を伸のばすのはもっと大事だ。何のために他ほかのやつがいると思う。自分にできないことをやらせて、楽をするためだぞ」

「楽を？」

　それはわかりやすい話だと思った。同時に、トマトクンはわざわざマリアローズが理解しやすいように言葉を選んだのではないか、とも。

「何かこう、騙だまされてるような、懐かい柔じゆうされてるような……」

「む？　怪かい獣じゆうがどうかしたのか？」

「いーや、こっちの話。ま、忠告は頭に入れとくよ。さ、こんなことでいつまでも突つっ立ってたってしょうがないだろ。先に──」

　と、マリアローズが言いかけたときだった。砂色の疾しつ風ぷうがすぐ脇わきを通りすぎた。ピンパーネルだ。

　ピンパーネルは人間業わざとは思えない速度で駆かけてゆき、十五メーテルほど先の角を右に曲がって、すぐに引き返してきた。

「こーるまんデス……！　逃のがシマシタ！」

「迂う闊かつやったな」

　カタリが楽しげに笑って両手の斧おのをくるりと回した。

「こら仰ぎよう山さんきよるで。けどまあ、これでこそ閉へい鎖さ魔ま宮きゆうや。腕うでが鳴るっちゅうもんやな」

「しょんなこと言って、死なないでね。死にマニアなんだから」

　ユリカに軽く釘くぎを刺さされ、カタリの魚顔が若じやつ干かん歪ゆがんだ。マリアローズが耳にするのはこれで二度目だが、ユリカが使ったところをみると、死にマニアという言葉は常用語らしい。

　そんなことはどうでもいい。

「コールマンって？」

「悪魔の斥せつ候こうや」

　カタリは答えながら、サフィニアの盾たてになるような位置どり

をした。

「魂たましい集め同様、ファッルーカが作った擬ぎ似じ生命体でな。おっとろしく存在感のないやつで、ピンプは目えが異様にええからめっけられたんやろが、気配を察知するんは至難の業や。閉鎖魔宮には一体しかおらんルールになっとって、会おうてまうのはごっつうアンラッキー──」

　その単語がカタリの口から出た瞬しゅん間かん、サフィニアがびくりと細い肩かたを震ふるわせてうつむいた。

　カタリは慌あわてて口を塞ふさぎ、しどろもどろになって言い直した。

「あー……と、アレや、その、たまにはこうゆうこともあるっちゅうことで、コールマンに会うたのもこれが初めてやないし、せ、せやから、別に誰だれのせいちゅうこともな……」

「サフィニア」

　トマトクンがサフィニアを振ふり返った。普ふ段だんよりもぬくみのある声こわ音ねだ。

「お前が本当にマチルダの言うとおり、一億人に一人の凶きよう運うんを持つ〝世界をザ・デス滅ぼす者トロイヤー〟なら、俺たちはとっくに生きてないと思うぞ。それに、もしそうだとしても、俺にくっついていれば平気なんだろう」

「……ですが……」

　いつのものことだが、サフィニアの声は今にも消え入りそうだった。

「それは……わたしが、七天占せん星せい術じゆつの禁を破り……自らを占うらなった結果でしかありませんし……解かい釈しやくの仕方も、色々……」

「お前の解釈とやらが正しいことは、もう証明されてるようなものさ」

　トマトクンは大剣を担かつぐように構えて正面に向き直った。

「俺たちはうまくいってる」

「……はい……」

「今のところ、うちは少数精せい鋭えいだ。当然、お前もその中に入ってる」

「……は、はい……」

「それだけじゃ不満か」

「……いいえ……とんでも……」

　サフィニアは顔を下に向けて杖つえにしがみつくような姿勢になった。特殊なチヤネ精神集中リングに入ったらしい。

　しかし、少数精鋭、か。むろん、その中にマリアローズは含ふくまれないだろう。

　現状、マリアローズの自己評価は、よくて雑ぞう兵ひよう、悪ければ足手まといといったところだ。トマトクンらのマリアローズに対する評価もそれと同じようなものだろうが、妙みような劣れつ等とう感かんも疎そ外がい感かんも、今はもうない。

　雑兵には雑兵なりの意地があるのだ。というより、意地を持つか持たないかは自分にかかっている。ずっと雑兵のままでいるか、それ以上の仕事を成し遂とげてやろうという気き概がいで事に臨のぞむか。それも含めて、結局、すべてはマリアローズ次し第だいなのだ。

「来まス」

　角から周りをうかがっていたピンパーネルが戻もどってきた。

　前衛はトマトクン、その右にマリアローズ。サフィニアの左やや前をユリカ、右やや後ろをカタリが固め、最さい後こう尾びはピンパーネル。隊列が完成すると、トマトクンが鋭するどく指示を飛ばした。

「全方位に注意しろ。下手に動けばまた敵がよってくる。ここで全部片づけるぞ。サフィニア以外は休むな。動け。止まっていたら目立つからな。標的にされるぞ。ユリカとカタリはサフィニアを死

守」

「はいよ」とカタリが、「了りよう解かい」とユリカが答え、サフィニアは特殊な精神集中の只ただ中なかにいるため無言だった。

　トマトクンは引きつづきピンパーネルに物ぶつ騒そうな命令を下した。

「ピンプ、お前は好きに殺せ」

「はイ」

　マリアローズの気のせいではあるまい。返事をしたピンパーネルの声は弾はずみ、喜色がにじんでいた。

　トマトクンは最後に付け加えた。

「マリアは俺から離はなれるな」

「わかった」

　マリアローズは素す直なおにうなずきながら、角の向こうから濁だく流りゆうのごとく押しよせてくる悪魔どもの群れを見た。

　接敵まで、あと四十メーテルといったところか。

　あっという間に、三十五メーテル。

　先手を打ったのは、サフィニアの魔ま術じゆつだ。悪魔どもに向かってサフィニアが投じた青い宝石のようないかにも値が張りそうな物体は、おそらく触しよく媒ばいだろう。

　触媒が悪魔どもの前に落ちるより早く、呪じゆ文もんの詠えい唱しようが始まった。

「十字架ＷＯ崇ＭＥＳＩ者聖者ＷＯ貫ＫＩＳＩ者ＳＯＮＯ血ＷＯ浴ＢＩ歓喜ＳＵＲＵ者罪ＮＩ酔ＩＴＥ高笑Ｕ者汝ＫＯＲＥ贄也此処ＮＩ来ＴＡＲＩＴＥ償ＩＷＯ為ＳＥ」

　聞き覚えのない呪文だ。呪文であるからには上古ハイロ高位語メオンなのだろうが、共通語に似ている。何の魔術か。触媒を要する魔術といえば、マリアローズが知る限り、要素魔術、憑ひよう依い

魔術、降こう霊れい魔術、そして──召しよう喚かん魔術。

　数ある魔術の中でもとびきり難しく、危険で、魔術師マギ、魔導師マジスタレベルでも使いこなせる者はまずいないというが。

　質量がなく、実体もなく、この世界の尺度でいうと、存在さえしていないＬＥＰ（下層エレメンタルプレーン）の要素精せい霊れいはあくまで特別なのだ。まともな空間に無理やり強ごう引いんに穴をこじ開け、異界生物を引っ張ってくるとなると、物もの凄すごいというより、そんなことが可能なのかという話だ。

　どうやら、可能らしい。

　悪魔どもに踏ふみ潰つぶされた触媒が黒く光っている。

　むろん、光が黒いなど普ふ通つうありえない。

　この世界であるはずのない事態が起こるということは、異界との物理接続が成立したのだ。

　亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞……！

　苦しそうな、恐きよう怖ふしているような、慟どう哭こくしているような、聞く者の胸を打ち、怖おじ気けづかせて、毛穴を開かせ、狂きよう気きに導かんとする叫さけびを上げて、黒い光の中からそれは出てきた。

　巨きよ人じんだ。

　数十本の槍やりと矢に身を貫つらぬかれ、それぞれの傷口から絶望の黒い粘ねん液えきを流し、目玉は抉えぐり出され、舌は抜ぬかれて、茨いばらの王おう冠かんを被かぶらされ、全身に《贄にえ》の焼印を押された彼は、間ま違ちがいない。異界〝贄のサクリファイス園プレーン〟の住人だろう。

「悶もだえる者か」

　さすがのトマトクンも顔をしかめている。凄せい絶ぜつな贄の園の住人を目にして、何も感じない者はいまい。

　二年ほど前、マリアローズも一度だけ見かけたことがある。そい

つは手足を玉結びにされた幼児の姿で、赤子のように泣いていた。まったくもって、彼らは哀あわれだ。しかし、手を差し伸のべてはならないとされる。危害を加えるのもやめておいた方がいい。贄の園に連れこまれたくなければ。

　それは人間だけの共通認にん識しきではないらしい。他ほかの異界生物フリークスたちも、贄の園の住人には手を出さないようだ。

　もっとも、今回の場合のように贄の園の住人に襲おそわれたとしたら、どうか。

　どうしようもない。進んで戦わずとも、身を守らないわけにはいかない。せめて身長六、七メーテル、永えい劫ごうの痛みに耐たえかねたように暴れ回る悶える者から、逃にげなければならない。

　こうして、悪あく魔まどもの行進は止まった。

　それどころではなくなったのだ。

　悶える者が両手で地面を叩たたく。それで槍が、矢がさらに深く食いこみ、激痛で跳とび上がって着地した悶える者に、何匹ひきの悪魔が踏ふみ潰つぶされただろう。亞亞亞亞亞亞亞亞。横に、前に、後ろに転がる悶える者が、いったいどれだけの悪魔を肉にく片へんに変えたことか。亞亞亞亞亞亞亞亞。

　たぶん悶える者は、殺すつもりはなく殺している。

　悪魔どもは、殺されたくないのに殺されている。

　両者の出会いはとことん不幸だ。この不幸をもたらしたサフィニアは、マリアローズにはよくわからないが、やはり本当に〝世界をザ・デス滅ぼす者トロイヤー〟なのかもしれない。いや、そもそも、魔導王たちが健在だった時代、恐怖のドレツド操り手スターと呼ばれた魔術士たちの真の姿とは、まさしくこういったものではなかったのか。

　壊こわす者。亞亞亞亞亞亞亞亞。死を弄もてあそぶ者。亞亞亞亞亞亞亞亞。暗黒を司つかさどりし者。

　ドレッドスター。

　亞亞亞亞亞亞亞亞。サフィニアはまさしく恐怖を操る魔女だ。

　ただ、阿あ鼻び叫きょう喚かんの巷ちまたは永続しなかった。亞亞亞亞亞亞亞亞。存分に悪魔どもを叩き殺した悶える者の足あし許もとに、突とつ如じょ、黒く光る穴ができた。亞亞亞亞亞亞亞亞。悶える者は落ちてしまった。きっと、贄の園に送そう還かんされたのだろう。



「……つ……疲つかれ、ました……」

　後ろでサフィニアの声がした。

　トマトクンがマリアローズをちらりと見た。

「来るぞ」

「……うん」

　マリアローズの手は震ふるえている。

　前方、悶える者が消えたあたりに、褐かつ色しよくの甲かつ冑ちゆうで全身を覆おおった半馬人の一団が現れた。

　数は十から十五の間か。彼ら以外の悪魔も、どんどん後続が距きよ離りをつめてくる。

　ふと、トマトクンの言葉を思い出した。せっかくお前には今までやってきたやり方もあるんだ──自分のやり方？

　気がつくと、知らぬ間に空いた手でベルトのホルダーをまさぐっていた。小さく仕切られたこのホルダーは、カバーで保護されているだけでなく、安全装置の仕組みも備えていて、仕切りごとにプラスマティック製の小こ瓶びんを一つずつ収納している。

　瓶の中身は、ハーレム・ゴードンや、レクイエム、ＨＶ５などだ。どれもゴードン子し爵しやくに教えられ、あるいは盗ぬすみとった錬れん金きん術じゆつの知識でマリアローズが生成した。

　一人のときは、切り札としてこれらの小瓶を使った。生成に手間と金がかかるので、濫らん用ようはしなかったものの、何度となくこの小瓶に命を救われた。

　なぜ、ＺＯＯの連中と行動している間、小瓶を使おうと考えなかったのか。

　一つは、集団パーテイー戦の経験が少ないせいだろう。そのため、周りに誰だれかがいて、同じ敵と戦っている、自分を庇かばおうとする、自分が誰かを庇う、そうした多くの情報を処理しつつ立ち回るのが、途と方ほうもない厄やつ介かい事ごとに思えてしまう。

たとえば、ハーレム・ゴードンを投げるにしても、自分一人の安全が確保できればいいというものではない。前回のように、マリアローズのためにＺＯＯの誰かが死ぬなどというのは論外で、それは──そもそも、おかしい。違うだろ、と思う。逆だ。戦力的にこの中で欠けても問題ないのは、マリアローズだけのはずだ。

そんな引け目が、劣れつ等とう感かんが、不慣れが、ただでさえ実力で劣おとっているマリアローズを萎い縮しゆくさせていた。マリアローズはいつものマリアローズではなかった。トマトクンは言った。お前はもっと自分の長所を生かした戦い方ができるはずだ、と。

そのとおりだ。

だいたい、マリアローズが多少無茶をしたとしよう。

それで、何を考えているのかわからない凄すご腕うでの男や、魚顔の死にマニアや、幸さち薄うすそうな恐怖のドレツド操り手スターや、元アッサシンや、棒一本で魂たましい集めをひっくり返してしまう豪ごう腕わんの見た目ちびっこ女医術士ナース──そんな連中が、だ。

マリアローズが何かしでかしたくらいで、慌あわてふためいてへまをするような玉か。

阿あ呆ほらしい。いちいち驚おどろかされているのは、マリアローズの方ではないか。彼らに遠えん慮りよする必要がどこにある。

そもそも、マリアローズが是ぜ非ひにと頼たのみこんで連れてきてもらったわけではないのだ。もし、マリアローズの行動が少々の混乱や迷めい惑わくを生んだとしても、彼らにはそれを耐たえる義務がある。責任がある。マリアローズには好き勝手にやる権利がある。

トマトクンの命令？

偉えらそうに。知ったことか。それに──

彼らは、強い。

父や、母や、ローメオたちとは違ちがう。簡単には死んだりしな

い。いや、カタリだけはわりとあっさり死にそうだけれども、死にマニアというだけあって、死に慣れているようだから、たぶん平気だろう。何とか永久死はさけるに違いない。

　マリアローズは恐おそれなくていいのだ。

　そうだ。怖こわくない。怯おびえる必要などないのだ。

　モリーが言っていたではないか。失うことを恐れていては、何も手に入れられない。傷つくことを怖がっていては、何も守れない、と。

　だが、自分は何を守りたい？　何が欲しいのか？

　わからないが、間違いなく、心と体は前に進みたがっていた。そのために、マリアローズはホルダーのカバーを外して、小瓶を抜ぬきとった。愛あい称しようは爆ばく弾だん。中身はハーレム・ゴードン。変態錬れん金きん士しゴードン子爵を破は滅めつさせたセーラム・ゴードンの改良版、あるいは改悪版だ。

　それを、甲冑半馬人の群れに投げつけてやった。

　伏ふせろとも、気をつけろとも言わない。

　言わなくても、トマトクンを始めＺＯＯの面々は、マリアローズが何かを投とう擲てきしたことに気づいたらしい。

「マリア、お前──」

　爆ばく発はつ音おんがトマトクンの声をかき消した。爆弾はかなり強きよう烈れつな光を発し、瞬しゆん間かん的に盛せい大だいな炎ほのおを巻き上げる。その際の音もそうとうなものだ。

　とはいえ、威い力りよくの方はサフィニアの魔ま術じゆつに遠く及およばない。利点があるとしたら、魔術のような集中や呪じゆ文もんの詠えい唱しようは要しないことか。

　ただ、この場合、それはわりと大きな利点だったかもしれない。最終的に、マリアローズは三本の爆弾を悪魔どもに見み舞まった。それでやめたのは、品切れになったからではない。爆発と炎と煙けむりを物ともせず、突つき進んでくる敵がいたからだ。

　そいつらは、ぬめぬめした一ひと抱かかえほどもある蛇へびめいた体を持ち、やけに整っている人間の顔をした人面蛇じや身しんの悪魔だった。

「気色悪っ。じゃ頑がん張ばって、トマトクン」

　マリアローズはトマトクンの背中を叩たたいて後退した。トマトクンはマリアローズに向かって何か言いかけたが、途と中ちゆうでやめた。

　見る間にトマトクンの足あし許もとにまで至った三匹びきの人面蛇身悪魔──牙きばを剝むいて大口を開けたそいつらの頭部が、体とおさらばする。むろん、彼らにさよならさえ言わせなかったのは、トマトクンの大剣だ。

「ほら、トマトクン、まだ来るよ」

「む？　おお」

　当然、マリアローズに指図されずとも、トマトクンは察知していただろう。人面蛇身悪魔に続いて、煙えん幕まくを突とつ破ぱしてくる一団があった。

　そいつらは背が低くて、首も頭もない。その代わり、胸に赤子の顔が四つ浮うき上がっている。武装は槍やりと盾たてで、緑色の肌はだをしていた。連中の四つの口は別々に動き、それぞれ違うことを喋しやべっているらしく、ひどくやかましい。

「うあ。妊にん婦ぷが見たら流産しちゃいそうだね。ささ、ぱっぱとやっつけて」

「お前、無む駄だ口ぐちを叩く暇ひまがあったらな……」

　言いながらトマトクンは大剣を振ふり回し、一度に三匹の四顔赤子悪魔を斬きり伏せた。

「少しは手伝え！」

「うーん──」

　マリアローズはトマトクンの後ろ一・五メーテルに位置を定め、慎しん重ちように状じよう況きようをうかがった。サフィニアたち

はマリアローズよりさらに四メーテルほど後方にいて、彼らに敵の手が届く気配はない。ハーレム・ゴードンの爆ばく炎えんはすでに弱まってきたが、まだ悪魔どもにとっては障害になっている。

「今のところ、僕の出番はなさそうだし」

「そう言うなよ」

　と、いきなりトマトクンが二メーテルほど前に出た。踏ふみ出しつつ大剣を一いつ閃せんして三匹の四顔赤子悪魔を叩き潰つぶし、一匹ぴきだけ後ろに通したのは、おそらくわざとだろう。

「──チッ！」

　やむをえず、マリアローズは四顔赤子悪魔を小剣で迎むかえ撃うった。敵は盾持ちだ。トマトクンのような剛ごう剣けん使いではないマリアローズにとって、やや厄やつ介かいな相手ではある。

　重要なのは、速度だろう。

　突き出された槍をかいくぐる速度。そこから顔面を狙ねらい打ちしてきた槍をよける速度。左へ、左へと回りこむ速度。四顔赤子悪魔は右手で槍を、左手で盾を操あやつっているから、マリアローズから見て左側は盾でカバーできない。

　三歩、素す早ばやく移動したとき、空いた。

　小剣を繰くり出した。違う。槍の間合いなので、小剣では致ち命めい傷しようを負わせられない。だから、放った。籠こ手てから矢を。四つあるうち、左ひだり端はしの顔面に矢を食くらった四顔赤子悪魔は、少し苦く悶もんしたあとに全身を痙けい攣れんさせ、ばったりとその場に倒たおれた。それから先は乱戦になった。

　マリアローズは籠手の矢と小剣で悪魔どもと渡わたりあいながら、時折、遠くに爆弾を放ほうり、少しでも危険を感じると、トマトクンに敵を任せた。

　決して、無理はしない。技量体力すべてに劣おとるマリアローズがいっ杯ぱい一杯になってしまえば、ろくなことにならないだろう。

　さすがに余よ裕ゆうなどないが、視野を広く持って、まずはおの

れの身の安全を第一に考える。ひいては、それがトマトクンたちのためにもなる。そう━━トマトクン。マリアローズは不覚にも感心してしまった。

　トマトクンはマリアローズが難敵を引き連れてそばによると、たとえどんな悪魔と切り結んでいても、そいつを一刀のもとに斬り伏ふせてこちらを掩えん護ごしてくれた。

　必ず、確実に、だ。トマトクンは一度も手間どらなかった。マリアローズはトマトクンの近くという安全地帯をえて、絶対的な安心感のもと、好きなように戦えばよかった。

　また、神速で動き回って次々と敵を血祭りにあげるピンパーネル、どちらかといえばあまり動かずに敵を捌さばいて一定の場所を確保するカタリ、全体を見通してここぞというポイントを的確に埋うめるユリカなど、他ほかの連中のコンビネーションも絶ぜつ妙みょうだった。ずっと休んでいたサフィニアも、後半からはいくつかの魔術で皆みなを掩護した。正直、無数の悪魔どもを向こうに回して、まるで負ける気がしなかった。完かん璧ぺきだった。

　こんなことがあるのか。人間って、こんなことができてしまうのか。

　感動的だった。

　マリアローズにとっては未知の世界で、自分がその中にいるということが、どうにも信じられないくらいだった。

「こいつで━━」

　さらに信じがたいことには、最後にカタリが鱗うろこを持つ悪魔にとどめを刺さすと、全部片づいてしまった。

　ものの十分ほどで、あれだけいた悪あく魔まが全部、だ。

　確かに、敗北の予感などかけらも抱いだかなかった戦いではあるが、いざ終わってみると非常に奇き妙みょうな心ここ地ちがした。

　マリアローズは半分放心していた。

「しまいやな。ん？　どないしたんや、マリアローズ。変な顔して」

「きっ、きみに変な顔なんて、言われたくない！」

「失敬な。わしはこれでも女の子にモテモテやねんぞ」

「モテモテ……死語だよ、それ」

「うっさいわ。そんなら何か？　モテモテに代わる適当な言葉があるっちゅうんかい。ないやろ。ないと思うで。わしは思いつかんな。あるなら言ゆうてみんかい、おお？」

「ふん。そうやってごり押しして強ごう引いんに口説き落とすっていうか、押し倒すの？　それって、もててるわけじゃなくて単なる強ごう姦かんだよ。この鬼き畜ちく半魚人」

「ダァホ、いくらわしでも、そこまでするかい！　とりあえず、茶ちやあしばくとこまでこぎつけてやな……」

「で、いつも勘かん定じようだけ払はらわされて、逃にげられる、と。なるほどね」

「うくっ」

　カタリは胸に手をあてて地面に片かた膝ひざをついてみせた。どうやら図星だったようだ。

　──それにしても。

　マリアローズはカタリに中断させられた感かん慨がいを呼び戻もどし、あたりを眺ながめ渡した。

　擬ぎ似じ地じ獄ごくに累るい々るいと積み重なり、散らばっている、悪魔どもの屍しかばね、屍、また屍。

　いったい、何匹屠ほふったのか。数えるのも阿あ呆ほらしいくらいだ。中でも、トマトクンに一刀両断された死体と、ピンパーネルに切り刻まれた肉にく片へんは、恐おそろしいほど莫ばく大だいな数、というより量に達していた。

　一方、マリアローズが直接倒したのは、たぶん五匹か、六匹か。

　全部使いつくした爆ばく弾だんで吹ふっ飛ばした分を入れればもっと増えるだろうが、手て応ごたえとしてはそんなものだ。

「しかしな」

　マリアローズが籠手に予備の矢をつがえていると、トマトクンが大剣についた血ち脂あぶらを外がい套とうでぬぐいながらヒヒヒと笑った。

「マリア、お前が何かぶん投げて爆ばく発はつしたときはびっくりしたぞ。お前、いつもあんな物ぶつ騒そうな物を持ち歩いてるのか」

「きみの剣ほど物騒じゃないと思うけどね」

「こいつか？」

　トマトクンは片方の眉まゆを上げて、刃はこぼれ一つしていない波打った剣身に目をやった。

「うむ。こいつとは長い付き合いだからな。特にこいつは悪魔の血肉が大好物なんだ。悪魔どもに対してだと、切れ味が三倍増しくらいになる」

「その剣けんって、名前とか由来とかあるの？」

「ないこともないけどな。教えられん」

　トマトクンはカタリを一いち瞥べつした。

「カタリにもだいぶうるさく訊きかれたんだが、そういう約束なんだ」

「約束……？」

「トマトクンがどうしても口を割らへんから、わしもずいぶん調べたんやけどな」

　カタリが斧おのを回しながら眉み間けんに皺しわをよせた。

「ああ、思い出すとまた具合悪うなってくるわ。何日も何日も調べて、調べて、調べ倒たおして、それでも何の手がかりものうて、悶もん々もんとしてた日々がこう、走そう馬ま灯とうのように……」

「大おお袈げ裟さ」

「いやいや、大袈裟なことあらへん。どう見ても魔ま導どう王おう時代の秘宝級以上の逸いつ品ぴんやのに、手がかり一つつかまれへんで、呼び名すらわからんかったモンは、ホンマにあとにも先にもそのトマトクンの剣と鎧よろいくらいなんや。せやけど、絶対にごっつう凄すさまじいお宝のはずやで。わしの目に狂くるいはない。わしは餓が鬼きの頃ころからずっと、値打ち物の刀剣やら鎧兜かぶとやら何やらかんやらに囲まれて、眼力を養いつつ育ったんやからな」

「ふうん。実家でそういう商売でもやってたわけ？」

「ちゃうちゃう」

　カタリは胸を張って一つ咳せき払ばらいをした。

「王様や」

「は？」

　マリアローズは一いつ瞬しゅん、カタリの言ったことが呑のみこめなかった。

　カタリはさらにいっそう胸をそびやかした。

「せやから、キングや。ちっさな国やし、親父おやじが王様やっとってもわしは三さん男なん坊ぼうやさかい、王位継けい承しよう順位は低いけどな。キングダム・イズルハっちゅうて」

「……知ってる」

　キングダム・イズルハ。α大陸中央部にある小国だが、金こん剛ごう輝き石せきとダントタイルという特とく殊しゆな鉱石の産出国で、国民の暮らし向きはかなりいいらしい。

「でも、きみ、ケメック訛なまりだし──」

「よう言われるんやけどな。ケメック訛りとイズルハ訛りは微び妙みようにちゃうねんで」

「うむ。同じ関西弁でも、地域によって差があるようなものだな」

　トマトクンはそう言ってうなずいたが、他ほかの者はマリアロー

ズも含ふくめて皆みな、首を傾かしげている。

　だが、まさかカタリが王様の息むす子こだなんて。

　王様の息子ということは、王子様？　この魚顔の男が？　王子？　全然似合わない。

「じゃあ、王様も他の王子様も、みんな魚顔……？」

「魚はやめえや。第一、わしは親父にも兄貴にも姉貴にも妹にも、誰だれにも似とらへんし」

　カタリは自じ嘲ちようするような笑えみを浮うかべ、自分の顔を親指で示してみせた。

「親父っちゅうても、わしはあいつの実の子やないからな。ちょうどこないな顔した不ふ倫りん相手がお后きさき様さまを孕はらませて、ばーんと生まれて出てきたのがわしや。親父はけったいなくらいの美形やし、おかんもわしが言うのも何やけど美人やから、そら一発でばれるわな。しかも不倫相手が左大臣っちゅうから、穏おだやかやない」

　こんなところで身の上話を聞かされるとは思っていなかったが、カタリが言うには、左大臣はキングダム・イズルハの大黒柱だったらしい。王様は妻の不ふ貞ていに対する怒いかりと有能な左大臣を天てん秤びんにかけ、後者を選んだ。カタリは王様の子として育てられた。

　ただし、顔を見られれば、すぐに父親が誰かばれてしまう。それくらい、カタリは実父である左大臣に似ていた。そこで、先天性の病で顔が二目と見られぬ有あり様さまだということにされ、幼少時は、一日中仮面をかぶせられていたのだという。

「そっか。それで魚みたいな顔に……」

「んなわけあるかい！」

　それでも表向き、身分は第三王子だし、カタリは大事に育てられた。

　腫はれ物ものに触さわるように、王城の敷しき地ちから一歩も外に出してもらえず、母や制度上の父や本当の父にさえ会うこともな

く、大切に。

　そんな陰いん惨さんな環かん境きようの中で、カタリ少年は意外と活発だった。いつも一人で宝物庫に忍しのびこんでは珍めずらしい武具や宝ほう飾しよく品ひんなどで遊び、教育係や書物からそれらの品々についての知識をえた。

　遊び相手がいなかったカタリにとって、宝物こそが友だちで、それらへの執しゆう着ちやくで孤こ独どくを慰なぐさめていたのかもしれない。

「十三のとき、わしのホンマの親父にあたる左大臣っちゅう御ご仁じんが流行はやり病やまいでくたばりよってな。色々こみ入った事情もあって、身の危険を感じんでもなかったさかい、逃にげ出すことにした。そのあとは色んな国を旅して回って、気がついたらここにおったっちゅう感じやな」

「ふうん……」

　どうせ作り話だろう、と疑う気にはなれなかった。

　カタリは目が離はなれ気味で、エラが張っていて、早い話、魚顔だし、お節せつ介かい焼きだし、助すけ平べえだが、たぶん嘘うそはあまりつかない。

　認めたくはないが──悪いやつではない。

「くだらん話やったな」

「いや、そんなことはないけど」

　ばつが悪そうに頭をかくカタリを眺ながめて、でも、なぜ、とマリアローズはあらためて考えた。様々な宿命を背負い、それぞれ力を持つ彼らに囲まれ、どうして自分はここにいるのか？

　やはり、はっきりさせておきたい。

　疑問、ではない。不安なのだ。

　本当に、自分はここにいていいのか？　その資格があるのか？　ここに自分の居場所はあるのか？

「あのさ……」

　マリアローズは矢をつがえ終えた籠こ手てをさすりながら、上うわ目め遣づかいでトマトクンを見た。

「訊ききたいことがあるんだけど」

「ん？」

「何で──」

　三秒ほど躊躇ためらったあと、マリアローズは思いきって尋たずねた。

「何で僕をまた連れてきたの？」

「うむ」

　トマトクンは大剣の腹で肩かたを三度、叩たたいた。

「まあ、とりあえず縁えんってやつだろうな」

「縁？」

「ああ。お前と最初に会ったのは鉄てつ鎖さの憩いこい場だった。あのとき、俺は偶ぐう然ぜん、お前が変な男に剝むかれてるのを見て」

「剝かれてないって」

「そうだったか。とにかく、余計なお世話だったかもしれんが、俺はお前を助けた。それで、話をしているうちに、お前がどうしてもと懇こん願がんするもんだから」

「いや、懇願なんてしてないし。きみが誘さそったんだろ」

「そうだったか？　まあ、そういうわけで知りあいになって、一度は一いつ緒しよに集団パーティー戦も経験した。結果は散々だったが」

「だから、それなのにどうしてって僕は訊いてるんだけど」

「もし、お前があのまま普ふ通つうにカタリが蘇そ生せいするまで

俺たちに付き合って、わびの一つでも言って去っていったら、それで終わったかもしれんな」

　トマトクンは少しだけ唇くちびるを歪ゆがめた。

「だが、お前はそうしなかった。いきなりどっか行っちまうんだからな。気にもなるさ。ユリカやあとでその話を聞いたカタリが言うんだ。マリアローズはどうしたんだろうってな。俺たちの頭の中にお前の存在がこびりついて離れなかった」

「怖おじ気けづいて、勝手にへまをして、迷めい惑わくをかけまくりの嫌いやなやつって……？」

「そうかもしれんし、そうじゃないかもしれん。いずれにせよ、俺たちとお前の間には縁ができた。俺は縁ってやつを大事にすることにしてる。ＺＯＯのメンバーだって、みんなくだらないことやちょっとした偶然で知りあったやつばかりだ。お前もそうなるかもしれんと思った」

「……仲間に？」

「可能性だけどな。俺たちの仲間になるかどうかは、お前の自由だ」

　おそらく、マリアローズの決断が何であれ、トマトクンは全面的に受け入れるだろう。それがマリアローズの本心であれば「そうか」と言ってうなずくに違ちがいない。そんな気がした。

　決めるのは、あくまでマリアローズ自身ということだ。

　ここにいていいのか、居場所があるのかではない。

　ここにいたいのか。居場所を作りたいか。

　──僕は、どうなんだろう。

「それに」

　トマトクンの黄玉トパーズ色いろの瞳ひとみがマリアローズをじっと見つめている。

　明るいのに、どこまでも深い、何かを秘ひめているような色だ。

マリアローズは引きこまれるようにトマトクンを見上げた。

「それに……？」

「いや、忘れろ。何でもない」

トマトクンはかすかに笑って首を振ふった。その意味深な態度を不ふ審しんに思っていると、お尻しりのあたりにユリカの手が触ふれた。

「何も急いしよいで今、決めることはないのよ」

ユリカとしてはマリアローズの背中を抱だいているようなイメージなのだろうが、身長差があるので何だか妙みような具合になる。

「でも、正直、マリアローズがいてくれると、わたしは助たしゆかるけど」

「え？　僕が？」

意外だった。前回も色々と世話をかけたユリカからそんな意見が出ようとは、思いもよらなかった。

「僕がユリカを助けられることなんてないんじゃない……？」

「しょんなことないわ。考えてもみて。トマトクン、カタリ、ピンパーネル、サしやフィニア、しょして、わたし──」

「うん」

「何か気ぢゅかない？」

「ええと」

マリアローズは各人を順番ずつ見回して思案を巡めぐらせた。一つだけ、思いあたる節がないでもなかった。

しかし、ユリカがそんなことを理由に挙げるものだろうか。

自信はなかったが、一応、言ってみることにして、まずトマトクンを指差した。

「天然」

　動じないトマトクンに続いて、サフィニア。

「暗い」

　ちょっとショックを受けたらしいサフィニアの次は、ピンパーネル。

「無口」

　それから、カタリ。

「間ま抜ぬけ」

「おーい」

　無視してユリカ。

「──ボケ、ではないけど……」

「しょういうことよ」

　ユリカは真しん剣けんな表情で、だが、かわいらしくうなずいた。

「うちには現在じやい、ちゅっこみができしょうな人材じやいがいないの」

「な、なるほど……」

　それは結構、実は深刻な問題なのかもしれない。特に、外見と中身のギャップを除けばまともそうなユリカは、自然に皆みなの抑おさえ役に回らざるをえまい。このメンツでその仕事はかなり大変そうだと同情しかけたときだった。

　ピンパーネルとトマトクンが、ほぼ同時に空を振り仰あおいだ。マリアローズも、すぐ彼らに倣ならった。

　何だろう。

　青あお紫むらさき色いろの空に散らばった、あの無数の黒い点は──鳥？　いや、擬ぎ似じ地じ獄ごくの鳥がただの鴉からすや鳶とびであるはずはない。鳥に似た悪あく魔まだろう。連中はこちらへ近づいてくるようだ。

「ここでは見たことのないタイプだな」

　トマトクンは即そく断だんした。

「よし、逃にげるぞ」

「逃げきれるの？」

　マリアローズが訊きくと、トマトクンは「さあな」と首を傾かしげた。



「だが、戦おうにも俺たちは飛べない。サフィニアにあまり魔術を使わせて消しよう耗もうさせるわけにもいかん。先があるからな。だから、このまま赤の男だん爵しやくの館やかたまで走る」

「あの……わたしは……」

　サフィニアが一歩前に出て杖つえをきつく握にぎり締しめ、うつむいた。

「大だい丈じよう夫ぶです……少しくらい、無理をしても……ですから……」

「ダメだ」

　トマトクンは有う無むを言わさぬ断固とした口調で告げた。

「意見を聞いてる時間はもうない。方針は決定だ。行くぞ！」

　実際、ごちゃごちゃと議論している場合ではなかった。怪かい鳥ちよう悪魔の群れが、一いつ斉せいに黒っぽい火矢のごとき物体を投じてきたのだ。

　幸い、これは距きよ離りが遠いこともあり、皆、建物側によってかわすことができた。

　しかし、もう一刻の猶ゆう予よもなかった。マリアローズたちはトマトクンを先頭に、とりあえず手近な建物の中に突とつ入にゆうした。その中を通って裏口から出て、さらに道をまたいだ別の建物に入った。そこを棲すみ家かにしていた豚ぶた顔がお悪魔十二匹ひきのうち、トマトクンが五匹、ピンパーネルが三匹びき、カタリが二匹、マリアローズとユリカがそれぞれ一匹ぴきずつをあっという間にしとめた。

「カタリ！　方向がわからん、お前が先導しろ！」

「あいよ」

　先頭をトマトクンから引き継いだカタリは、複雑な進路を選んだ。どうやら怪鳥悪魔をまこうとしているようだった。

　その甲か斐いあってか、いくつかの建物に無断侵しん入にゆうし、その中にいた何匹か何十匹かの悪魔を強制排はい除じよしたあと、見上げた空に怪鳥悪魔の姿はなかった。

　それにしても、どれくらいの間、休まずぶっつづけで動いていただろう。マリアローズは乱れに乱れた呼吸を何とか整えようとしながら、撃うちつくした右みぎ籠こ手てに矢をつがえるべきかと迷った。そうしたいのは山々だが、本当に疲つかれた。

　どうしようもなく、両手で膝ひざを押さえて肩かたで息をしていると、ユリカが近づいてきてマリアローズの背中を軽くさすった。

「あ……急に楽になった。今の、医術式？」

「鵺ぬえ流古式戦せん闘とう術じゅつ、内気功。ちょっとしたおまじないみたいなものよ。しょれより──」

　ユリカは棍こんの先で前方を示した。

「着いたわ。あれが赤のレッド・男爵館ツエペリアルよ」

「あれ？　って……」

　マリアローズは両目をこすった。それからユリカの表情をもう一度、確かめた。ユリカは別にふざけているわけではなさそうだ。

　それは、巨きょ大だいで真っ赤な菱ひし形がたに見えた。あんなに接地面積が狭せまいのに、どうして倒とう壊かいしてしまわないのだろう。近づくと、さらに驚おどろかされた。

　薄うすい。紙のようだ。菱形に見えるのではない。それは事実、菱形以外の何物でもなかった。

「絶対入れないって、これ」

　マリアローズは菱形の裏側に回ってみたが、やはり菱形だ。真横からだと直線に見える。もし、地上でこんなものを指して館だなんて言おうものなら、頭がおかしいと思われかねない。

「そら、そう思うのも無理ないわな」

　カタリはニヤニヤしている。

「わしかて、ついこないだまでこれが館やなんて思いもせんかった。ここにこいつがあるっちゅうことは知っとったけど、何や妙みょうなもんが建っとるな、くらいでな。せやけど、いかにもあやしいやろ。それで、中央文書館で調べてみたわけや。あったで。『地じ獄ごく巡めぐりぶらり一人旅』。奇き跡せき的てきに地じ獄ごくへ行って帰ってきた魔術士エリオットの著書に、赤の男爵っちゅう悪魔の館として、この外観と入り方が紹しよう介かいされとったわけや」

「男爵、か」

　道どう化けの大だい公こう爵しやくファッルーカのように、悪魔の中には爵位を持つ連中がいる。これは勝手に名乗っているのではない。地獄は地獄帝てい国こくに支配されていて、力のある悪魔が地獄帝王から爵位と領土を授さずけられるのだという。

　一いつ般ぱんに、爵位持ちの悪魔は、それ以外の悪魔と比べて格段に手て強ごわいとされている。

　事実、ファッルーカなど、トマトクンの鋭するどい斬ざん撃げきをかわしもせず、甘んじて受けて、なお全然平気という離はなれ業わざを披ひ露ろうした。ファッルーカが公爵で、赤の男爵がその名のとおり男爵という差があるとしても、あれが爵位持ちの実力だとするなら、だ。

　いっそう気を引き締めてかからなければならないだろう。心なしか、トマトクンたちも今までより張りつめたものを漂ただよわせているように思える。緊きん張ちようして生なま唾つばを飲みこんだマリアローズの前で、カタリが菱形の表面に人差し指を這はわせた。

「ほんなら、行きまっせ」

　そして、文字を書いた。

《開　緋　門》

　カタリが書いた三つの文字は、淡あわく輝かがやいて浮うき出し──突とつ如じよ、菱形の最下部がぱっくり左右に割れた。何だか、生き物めいた気味の悪い割れ方だった。

　割れた部分に現れたのは、菱形の向こうの風景、ではない。

　まるで、油の膜まくが張った水面のように七色に光る、それは──

「何、これ？」

　マリアローズが何気なくそれに手を伸のばすと、トマトクンが、次いでカタリが血相を変えて何事か叫さけんだ。

　珍めずらしいこともあるものだ。トマトクンが慌あわてる顔なん

て初めて見た。

　けれども、なぜトマトクンは慌てたりするのだろう？　彼は何て叫んだ？

　確か──

「馬ば鹿か、戻もどれ！　一人で行ったら」

「へ？」

　彼らの制止は間に合わなかった。

　七色の膜に触ふれた瞬しゅん間かん、マリアローズは暗くら闇やみに落ちた。

Omenage 897 6th revolution 21st day

サンランド無統治王国首都エルデン・アンダーグラウンドD1

“閉鎖魔宮（ディバイディド・パンデモニウム）”

chapter.13

赤の男爵（レッド・ツェペリオン）

五感を喪そう失しつしていた時間は五秒か、十秒か。

もっと短かったかもしれないが、二十秒や三十秒ということはないだろう。

最初に視覚が蘇よみがえり、天てん井じようから射さしこむ赤い光と白い光の帯が交差している光景を見た。

王宮を想像させる荘そう厳ごんな造りの、ずいぶんと広い部屋だ。

マリアローズは、その端はしに両足を投げ出して座りこんでいた。

石か何かの硬かたく滑なめらかな床ゆかが、ひどく冷たい。

流れる三さん拍びよう子しの音楽は、子し爵しやくの館やかたでよく聴きかされた円舞曲ワルツという種類の楽曲にそっくりだ。

マリアローズがいる場所とは反対側の端に、誰だれかいる。

そこは床より何段か高くなっていて、豪ごう奢しやな玉座が設しつらえられていた。

玉座に腰こしを埋うずめて足を組み、音楽にあわせて肘ひじ掛かけを人差し指で叩たたいているそいつは、人間に見える。距きよ離りが二十メーテルほどあるし、光の加減もあって顔はわからないが、少なくとも人と似たような姿をしているのは間ま違ちがいない。

「……ここって……」

マリアローズは近くに転がっていた小しよう剣けんを拾い、目を凝こらして再び玉座の人物を見た。

近づいていいものか、迷う。

というか、非常に、とんでもなく、まずいような気がする。

だが、後ろには彫ちよう刻こくが施ほどこされた壁かべがあるだ

けで、扉とびららしきものはない。自分がどこからどうやってここに出現したのかもわからない。この無む駄だに広い部屋の中にいるのは、マリアローズとあの人物の二人だけだ。人物──否いな、人間がいるはずはないのだ。

　悪あく魔ま。

　そう、あれは悪魔だろう。

　赤い宝石らしきもので飾かざり立てられたカフスも豪ごう華かな膝ひざ丈たけのコートを着て、純白のスカーフを胸むな元もとにあしらい、半ズボン、ソックスにつやつやした革かわ靴ぐつを履はいた──昔のラフレシア貴族を思わせるいでたちの、悪魔。

　嫌いやな予感がした。

　悪魔がゆっくりと立ち上がって、玉座脇わきの台座から一ひと振ふりの剣を持ち上げた。

　鞘さやが払はらわれ、あらわになったその細身の刃は、遠目からでも炎えん熱ねつをまとっているとわかる。

　焼きバーつくしニング刺しレイ貫く剣ピア。

　──劫ごう火か。



　マリアローズは頭を抱かかえたかった。何でこんなことに。僕が何か悪いことをしたか？　いや、まったくしていないとは言えないけれども、だいたい、どうして一人きりなのか？　というか、なぜあの悪魔とツーショットなのだ。これは罠わなか？　嵌はめられた？

　むろん、そうではないことは承知している。

　どうなっているのかさっぱり理解不能だが、こうなってしまうことを予期して、トマトクンやカタリは慌てたのだ。

「だけどさ……前もって教えておくべきじゃないか。そういう大事なことは……ねえ？」

「それは私に言っているのか」

　マリアローズの呟つぶやきが聞こえるなんて、さぞかし耳がいいのだろう。

「しかし、久々に我がもとへたどり着きし者がいたかと思えば──」

　悪魔は劫火で空を一ひと薙なぎし、喉のどの奥で低く笑った。

「とんだ退たい屈くつしのぎになりそうだ」

「む」

　マリアローズは脊せき髄ずい反射的に怒いかりを覚えたものの、どう考えても、ぶちきれて突とつ進しんするのは下げ策さく中の下策だ。深呼吸を一つして感情を抑おさえ、さてどうするべきかと思案しようとしたが、どうするといったって。

　この威圧感プレツシヤーは何だ。

　さっきから、二十メーテルの距離はこれっぽっちも縮まっていないというのに、喉のど元もとに刃物を突つきつけられているかのような恐きよう怖ふがぬぐい去れない。本当にあの悪魔とタイマンで勝負しなければならないとしたら、マリアローズの未来は十中八九、絶望色の暗黒で彩いろどられることになるだろう。

　格が違ちがいすぎる。

　土下座して謝ったら見み逃のがしてくれないだろうか、とも思った。

　やりあう前から、これほど力の差が実感できるくらいなら、這はいつくばって足を舐なめても恥はじにはなるまい。幸運なことに、誰も見ていないし。

「……絶対、やだけどさ」

「何をぶつぶつ言っているのだ」

「あ、独り言だから気にしないで。てゆうか、もしかして意外とフレンドリー？」

「私は孤こ独どくを好むが、それも数十年、百年ともなればさすがに飽あきがくるものだ。たまには世間話の一つもしたくなる」

　悪魔はゆったりした足どりで高座から降りてくる。

「しかし、我が従者どもは愚おろかでな。阿あ呆ほうと口をきいていると、殺してしまいたくなる。当然、殺せば殺すだけ従者が減る。なおかつ、やつらを殺したところでたいして気は晴れぬ。あらゆる知的生命体の中で、悪魔はもっとも殺し甲が斐いがない。我らには、死を恐おそれるという習慣がないからだ。殺して愉たのしいのは、やはり人間であろうな」

「そ、そう……でも、ほら、せっかく久しぶりに人間と会ったんだし、すぐに殺しちゃうのもねえ？　ちょっと勿もつ体たいなくない……？」

　マリアローズは後あと退じさりつつベルトのホルダーに手をかけた。ハーレム・ゴードン入りの爆ばく弾だんはすでにない。残っているのは、催さい眠みん剤ざい入りの煙けむりを発生させるレクイエムと、有機リン酸系の弱神経毒ガスＨＶ５、それからホムニアス・カーヴ。レクイエムとＨＶ５は自分にも被ひ害がいが及およぶ可能性があるし、実は未完成品で、効果も不安定だ。となれば、使用できるのは、必然的にホムニアス・カーヴだけということになる。

　だが、ホムニアス・カーヴは少々特とく殊しゆな生成物だ。この場面でどれだけ役に立つのか。かなり疑問はあるけれども、何も手を打たないよりはマシ、なのだろうか。

「あ、そうだ、ずっと一人だったっていうなら、地上の話でもどう？」

「地上。貴様たち人間の世界か」

　悪魔は━おそらく、赤のレツド・男爵ツエペリオンという名の劫

火を手にした悪魔は、もう十メーテルまで迫せまっている。

　赤の男爵は、肌はだが白いというより青ざめているものの、貴公子然としたなかなかの美青年だ。ただ、長く伸のばした眉まゆ毛げが上に向いて弧こを描えがいているのは、どんな冗じよう談だんか。悪魔的には、あれが格好いいのか。謎なぞのセンスだ。

「興味はなくもないがな。いずれ前兆のオーメ時代ネイジが終われば、我らのものとなる世界だ。地上を知るのはそれからでも遅おそくない」

「アンダーグラウンドに閉じこめられてるくせに……」

「何か言ったか」

「ううん。何も言ってないよ──と！」

　マリアローズはホムニアス・カーヴ入りの小こ瓶びんを投げた。小瓶が赤の男爵の二メーテルほど前に落ちて割れると、中のホムニアス・カーヴは一いつ瞬しゆんで白い泡あわに変わった。いや、それは泡よりもっと密度が濃こくてクリーミィだ。たとえていえば、マシュマロに似ていた。

　というか、見た感じは完全にマシュマロだった。

　しかも、そのマシュマロが見る間に膨ぼう張ちようしてゆく。

　それはもう、爆発的な体積の増え方だ。

「ぬお……！」

　これにはさしもの赤の男爵も驚おどろいたらしく、とっさに飛び下がろうとしたようだが、遅かった。赤の男爵を呑のみこんだマシュマロは、半径七メーテルほどの半球と化したところで、ようやく膨張をやめた。

「──ふう。まずそ。ま、食べ物じゃないけどさ」

　減らず口を叩たたいてはみたが、正直、マリアローズには塵ちりほどの余よ裕ゆうもない。問題はこのあとなのだ。

　マシュマロみたいに見えるホムニアス・カーヴのなれの果ては、

実際、マシュマロ程度の固さしかない。赤の男爵はすぐに出てくるだろう。マリアローズは次の手を打たなければならない。とはいえ、あれにしようかこれにしようかと悩なやむまでもなかった。自じ滅めつをさけるのなら、攻こう撃げき手段は二つしかない。

　小しよう剣けんか、左ひだり籠こ手てに三本残った矢か。

　接近戦を挑いどむのは明らかに無む謀ぼうだろうから、また一つ消える。

　つまり、神経毒Ｐ９ドウター＋プラスを仕込んだ矢を、何としても命中させるしかない。

「……当てる、必ず」

　マリアローズは小剣を鞘さやに収め、左手を前に突き出して射しや撃げき体勢をとったまま、まばたきをせずにマシュマロのかたまりを凝ぎよう視ししつづけた。

　マシュマロが小こ揺ゆるぎするたびに、心臓が止まるような思いを味わった。

　ミスが許されるのは二発までだ。一発は是ぜが非ひでも当てなければならない。当てたとしても、確実に神経毒が作用するとは限らないという不安は置いておいた。そんなことを考えても意味がない。

　集中しろ。牛頭悪あく魔まのときと同じように。感じるはずだ。

　感じる。

　わかる。

　――いる。

　赤の男爵の気配がマシュマロの中でうごめいている。

　重低音の唸うなり声。違ちがう。笑い声か。

「くっくっくっ……人間の考えることは理解できぬ。こんなことをして何のつもりだ？　だが、少なくとも、抗あらがうだけの気き概がいはある獲え物もののようではないか。よかろう。遊んでや

る……！」

　出てくる。

　そのタイミングだけではなく、赤の男爵がマシュマロのてっぺんから物もの凄すごい跳ちよう躍やく力りよくで飛び出してくることも、マリアローズは感知していた。

　立て続けに射出音、射出音、射出音。三連射した矢のうち一本が赤の男爵の胸の中央に、もう一本が額に命中した。

　だが、赤の男爵は少しも怯ひるまない。勢いを殺さず猛もう然ぜんと襲おそいかかってくる。マリアローズもすかさず小剣を抜ぬいた。剣で戦っても勝ち目がない。そんなことは頭になかった。マリアローズの体はほとんど自動的に動いた。

　おかげで、無む駄だな迷いがなく、赤の男爵の第一いち撃げきをかわすことができた。

　頬ほおのあたりを劫ごう火かの刃は先さきがかすめ、火傷やけどを負うくらい間かん一いつ髪ぱつではあったが。

　ただ、死神は一分先に待ち構えているかもしれない。三十秒かもしれない。十秒だとしてもおかしくない。

　間断なく、しかも優ゆう雅がな剣けん捌さばきでマリアローズを攻せめ立てる赤の男爵は、絶えず笑えみを浮うかべていた。宣言どおり遊んでいるのだ。手加減されている。

　それにも拘かかわらず、マリアローズは劫火の突つきをよけるので精せい一いつ杯ぱいだった。

　反はん撃げきするくらいなら、少しでも呼吸したい。そうしなければ、息が切れる。動けなくなる。遊び応ごたえのなくなった玩具おもちゃは、破は壊かいされるだろう。

　まるで、焼けた鉄板の上で踊おどらされているようなものだ。

　踊りつづけなければ、こんがりと焼かれて死ぬ。いつかは踊れなくなる。踊れなくなれば、死ぬ。たとえ踊りつづけたとしても、そのうち死ぬ。

　未来は一つしかないのに、苦しいから、痛いから、怖こわいから、踊らざるをえない。

　そして、マリアローズも一つの未来に向けて加速していた。

　終着点は、おそらくもう近かった。

　それまで曲線的な足運びを心がけて身をかわし、必死に逃にげ回っていたのだが、とうとう足がもつれて、やむなく小剣で赤の男だん爵しやくが繰くり出した劫火を弾はじいた。弾こうとしたのだ。

　できなかった。

　赤の男爵は巧たくみに剣の軌き道どうを変えて、マリアローズの右手を狙ねらってきた。

「──熱っ」

　斬きられた、というほどのことはない。火傷もたいしたことはなかったが、思わず小剣を落としてしまった。さらに、間を置かず次々と左右正面から襲いくる劫火を懸けん命めいによけているうちに、ついには部屋の角に追いつめられた。

「つまらんな」

　赤の男爵は半身立ちになり、右手で劫火の剣先をマリアローズの眉み間けんに突きつけつつ、左手で額に刺さっていた矢を引き抜いた。その矢を床ゆかに放って、胸の矢も抜く。爵位持ちの悪魔には、痛覚がないのか。傷口からにじみ出ている血液らしき液体は、青あお紫むらさき色いろをしていた。

「貴様のような小物が、よもや一人で我が館やかたまで来たわけではあるまい。他ほかに何人いるのだ。その中に、貴様より歯応えのある人間はいるか」

「……僕が一番弱い」

　マリアローズは一度、奥歯をぎりりと嚙かみあわせてから、無理やり笑え顔がおを作ってみせた。

「みんな、僕なんかとは比べものにならないくらい凄すごいやつ

ばっかだ。きみがいい気になっていられるのも、今のうちだよ」

「それはそれは」

　赤の男爵は左手で左ひだり眉まゆの跳はね上がった先せん端たんをつまみ、唇くちびるを横たわった三日月の形に歪ゆがめた。

「楽しみだ。念のために訊きいておくが、貴様は何度、扉とびらをくぐった」

「扉って何さ」

「貴様も通ってきただろう。あれだ」

　赤の男爵が顎あごで示した先には玉座があった。さらには、その右みぎ斜ななめ後ろと左斜め後ろに一つずつ、姿見の鏡ほどの大きさの七色の膜まくがある。あれが扉というわけか。

「一回だけだよ」

「ほう。貴様は運がいい。いや、悪いというべきか。我が館にある扉の大半は、無作為ランダムに行く先が決まるようになっている。ただし、別々の扉を十三回くぐれば、必ず私の部屋にたどり着くようにはなっているがな。だが、貴様の仲間はここまで来られるかな？　我が従者どもはきわめて愚おろかだが、血に飢うえているぞ」

「来るに決まってるだろ」

　マリアローズは即そく答とうしてから苦く笑しようした。今度は作り笑いではなかった。

　そう、トマトクンたちはきっと来る。何のかの言って、連中はお人ひと好よしだ。今いま頃ごろ、マリアローズを捜さがそうと必死になって、扉とやらをくぐりまくっていることだろう。

　だから、マリアローズも簡単に諦あきらめるわけにはゆかない。たとえ間に合わなくても、たぶん間に合わないだろうが、最後の最後まで悪あがきでも何でもしてしがみつくべきだ。やれることを全部やれば、骨は彼らが拾ってくれるだろう。

　もっとも、やれることなどもうほとんど残っていない。あとは、

赤の男爵を道連れにしてＨＶ５を使うくらいか。それとて、Ｐ９ドウター＋プラスが効果を現さないことを考えると、単なる自殺に終わってしまいかねない。

　どうする──と、唇の端はしを嚙んだときだった。

　赤の男爵がよろめいた。

「……う……ぐ……」

　端たん整せいな顔に滝たきのような汗あせが浮かぶ。足がふらついている。劫火の切きつ先さきも震ふるえた。赤の男爵は二、三歩、後退して胸をかきむしりながら、憤ふん怒ぬの形相でマリアローズを睨にらみつけた。

「き……貴様……な、何を、した……」

「僕？」

　自分を指差したマリアローズは、すぐに合が点てんがいった。

　やっと効きはじめたのだ。

　赤の男爵には、毒が効かなかったのではない。効くまでに時間がかかっただけだった。いや、だけ、と断言してしまうのは早計かもしれない。

　なぜなら、赤の男だん爵しやくは苦く悶もんしつつも、全身痙けい攣れんに陥おちいるどころか、どうにか立っていた。

　しかも、立って、唸うなり、荒あらい息をして、マリアローズを憎にくゝにくしげにねめつけ──

　変わりつつあった。

　姿形が。

　人間そっくりで、美形ですらあった赤の男爵が。

　全体的に体が一回りか二回りほども大きくなり、衣類ははち切れんばかりで、特に顔面は見るも無む惨ざんな変化を遂とげていた。

　額が狭せばまって、鼻が盛り上がり、顎がせり出し、犬歯が伸の

びて、血走った双そう眼がんが爛らん々らんと輝かがやくその顔は、狡こう猾かつで凶きよう暴ぼうそうな猿さると犬を足して、二で割った感じとでもいおうか。

　とにかく、もはや人間とは似ても似つかない。

「……お……おのれ、何か……やりやがったな、このくそったれが……！」

　ついでに、声は野太くなり、言こと葉ば遣づかいも下品になった。

　さらに、変身（？）することによって、赤の男爵は徐じよ々じよにＰ９ドウター＋の作用から脱だつ却きやくしつつあるようだ。

　マリアローズは、赤の男爵が身み悶もだえている間に小しよう剣けんを拾って距きよ離りをとり、身構えることだけはできた。

　だが、今の赤の男爵に少しでも接近するなんて、思いもよらなかった。事態は振ふり出しに戻もどろうとしていた。いや、明らかに最初よりもっと悪かった。

「――ぐっぐっぐっぐっ……なあんにもしねえから、ちょっと教えてみろ……貴様あ、俺に何をしやがった……？　ああ？　教えてみろよ？」

　赤の男爵の異様な迫はく力りよくに押されて、マリアローズは返事をすることもできない。腰こしが勝手に引ける。逃にげたい。が、ここで背中を向けて走り出したら、完全に心が折れてしまうだろう。

「そんなこと言って……僕のこと、殺すつもりでしょ」

「ぐっぐっぐっ。そおんなことしねえよ。なあんにもしねえと言ってるだろうが！　俺は約束は守る悪魔おとこだ。悪魔紳士ジエントルマンのたしなみとして、大おお嘘うそつきだがなあ！」

「めちゃくちゃじゃないか！」

「ぐっぐっぐっ……どっちにしても――」

　赤の男爵は一度、大きく深呼吸をしてから、上着を引きちぎるよ

うに脱ぬぎ捨てた。

　そのおぞましく凶きよう猛もうそうな巨きよ軀くの中で、すでにＰ９ドウター＋の毒素は、すっかり中和されてしまったらしい。

「今のは少し痛かったぞ。残念ながら、俺はマゾじゃねえからなあ。痛いのは大だい嫌きらいだ。俺の真の姿を見た貴様は簡単には死なせねえ。いたぶって、弄もてあそんで、体を端はしから少ぉしずつ少ぉしずうつ切り刻んで、泣なき叫さけばせ、決して気絶はさせずに、貴様が感じる百億の痛みと屈くつ辱じよくをすべて全部このグルメな俺がぺろりんちょと味わいつくしてやる」

「……変態」

「悪あく魔まだからなあ」

「そ、それもそうか」

　変に納なつ得とくしてしまったマリアローズに、赤の男爵が一歩、近づいてくる。

　歩ほ幅はばが、広い。

　体がでかいのだから当たり前だけれども、一歩ごとに縮められる距離が、途と方ほうもない恐おそれとなってマリアローズに襲おそいかかってくる。また逃げ出したくてたまらなくなった。もう逃げてもいいのではないかと思う。というか、逃げるしかない。

　だって、逃げる以外に何ができる？

　脈みやく拍はくが急激に上じよう昇しようし、頭がぼうっとして歯の根があわず、体にうまく力が入らない、こんな状態で他ほかに何が？

　しかし、マリアローズが断だん崖がい絶ぜつ壁ぺきの下へ飛び降りるような逃とう走そうを決意する前に、赤の男爵が何の前まえ触ぶれもなくいきなり最高速度トップスピードになった。あ──と思ったときには、体当たりを食くらって背中から壁かべに衝しよう突とつしていた。

　一いつ瞬しゆんだった。

　マリアローズは実に呆あつ気けなく、選せん択たく権けんを失った。

「……ん……う……」

　意識が朦もう朧ろうとしていて、呼吸ができない。本能的に酸素を求めて喘あえぐと、胸に鋭するどい痛みが走った。それで若じゃつ干かん、正気づいた。

　肋ろつ骨こつが折れたようだ。ゆっくり息を吸いこんで吐はくと、折れた骨が音を立ててもとの位置に戻るのがわかり、何とか呼吸はできるようになった。

　手は、動く。小剣を放していないのは、我ながらたいしたものだ。

　足も動く。ただ、動くといっても、今すぐ立ち上がることはできそうもない。

　後頭部はあまり激しく打っていない模様だ。とっさに受け身をとったのか。

　━でも。

「さあて、まずはどこを壊こわしてやろうか」

　赤の男爵がすぐ目の前にいる。劫ごう火かの刃はの腹で左の掌てのひらをぽんぽんと叩たたきながら、マリアローズを見下ろしている。熱くないのだろうか。そんなくだらないことを考えて現実逃とう避ひしてしまうくらい、末期的だった。

「それとも、そう、人間のように貴様を犯おかして汚けがしつくしてから破は壊かいするという手もあるな。悪魔と人間の美的感覚というやつは、遠いようで近いんだ。よく見れば、貴様はなかなか愛らしい面つらをしているじゃねえか」

「……余計な……お世話だ」

「ぐっぐっぐっぐっ、いい目だ！　まだ反はん抗こうの意志があると見える。その光が悲ひ哀あいや恥ち辱じょくにまみれ、輝きを失い、死者のように何も映さぬ濁にごった目になるところが見たあい！　よし、決めた！　小こ娘むすめ、これから貴様を丸まる裸は

だかにして、ぺろりんちょといただいてやろう！」

「──小娘ぇ……？」

　いわゆる、敵に塩を送るというやつか。赤の男爵にそんなつもりはなかっただろうが、限りなくゼロに近かったマリアローズの気力は、これで再さい充じゆう塡てんされた。

「……小娘……ね……ふふふふふふふふ……小娘、か……」

「んー？　ついに頭の具合がおかしくなったか？　でもバツト大丈夫、ノープロ無問題ブレムッ！　この俺が今から目を覚まさせてやる！　さあ、注射の時間だ……！」

　人間でも悪魔でも同じだ。情欲に駆かられた瞬間には必ず隙すきができる。マリアローズの手足の自由を奪うばおうと覆おおいかぶさってきた赤の男爵もまた、例外ではなかった。

「──僕は！」

　マリアローズは引きつけて、引きつけて、これ以上は無理だというタイミングで跳はね起きるのと同時に、バックハンドで小しよう剣けんを振り回した。

　しかし、いくら隙があったとはいえ、そんなものを食らう赤の男爵ではない。赤の男爵は身を反らせてこれをよけた。その瞬間だった。

「女じゃ……！」

　マリアローズが赤の男爵の鼻面にお見み舞まいしたのは、床ゆかについた両手を軸じくに、全身を回転させて放った変則的な回し蹴げりだ。

　ただ、赤の男爵にたいしたダメージは与あたえていない。マリアローズも、こんなことで活路が開けるなんて思っていなかった。

　だから、すかさず体を丸めて赤の男だん爵しやくの股こ間かんに突とつ進しんした。

　本当はこんなことをしたくはなかったが、マリアローズは半ば確信していたのだ。

　こいつも、人間の男と一いつ緒しよで、あそこは急所に違ちがいない、と。

　そのとおりだった。

「ないっての！」

　マリアローズの強きよう烈れつな頭ず突つきを股間に食らった赤の男爵は、声にならない悲鳴を上げて、体を強こわ張ばらせた。

　マリアローズはその硬こう直ちよく時間を利用して、赤の男爵から飛び離はなれた。一瞬、気が遠くなりかけた。激しい動作のせいで、折れている肋骨がまたずれたらしい。だが、それがどうした。

　今は、気合いだ。

　もっと自分を煽あおり立てて、奮い立たせなければ。

　しゃがんで背中を震ふるわせている赤の男爵に、マリアローズは言ってやった。

「ふん……ざまあないね。まったく、赤の男爵が聞いて呆あきれるよ。単なるエロ犬じゃないか。いや？　こんなことを言っちゃ犬がかわいそうだな。犬はもっとかわいらしいし、発情期は決まってるし、きみみたいに醜みにくくない。つまり、こういうことなんでしょ？　孤こ独どくを好むとか何とか格好つけてたけど、本当は何かの拍ひよう子しにその姿を見られるのが怖こわかったんだ。単なるビビリだ。やーい、ビビリ！　まあ、そこまで不細工だと、そりゃあ見られたくないよね？　僕だったら、とてもじゃないけど人前には出られないな。人間やめたくなるよ──と、きみは人間じゃないか。ねえ、悪あく魔まやめたくならない？」

「……ぐう……ぎ、ぎざま……」

「ぎざま、だって！　ぎざま！　言えてないし！」

「おのれ……！」

　罵ば声せいを浴びせることで、赤の男爵が激発することは承知の上だった。それでもあえてマリアローズがそうしたのには、二つの理由がある。一つは、喋しやべりまくることで自分を勢いづかせるためで、もう一つは、赤の男爵を逆上させてまともな判断力を奪う

ためだ。

　とはいえ、赤の男爵が冷静でなくなったからといって、マリアローズが必ずしも有利になるとは限らない。それもわかっていて、一いちか八ばちかの勝負に出たのだが、正直、ここまでとは予想していなかった。

　赤の男爵が、四よつん這ばいの姿勢のまま、跳ちよう躍やくした。

　速い、が、着地点がマリアローズの今いる場所だということは、予測できる。マリアローズは息を止めて、右方向へ身を投げた。生きている。何とか回かい避ひしたようだ。しかし、この音。巻き上げられた大量の石くれは、いったい何だ。まさか、赤の男爵が着地した衝しよう撃げきでこんな有あり様さまに？

　そのまさかだった。

「殺シヤア！　殺シヤア！　殺シヤア！　殺シヤァァァァァッ！」

「うわ──」

　休む間など与えてもらえない。赤の男爵は右手の劫ごう火かで、あるいは何も持たない左手でざくざくと床を切り刻み、あるいは粉ふん砕さいして、必死に転げ回るマリアローズを追ってくる。とんでもない馬ば鹿か力ぢからだ。

　このままでは、やられる。というか、もう赤の男爵はマリアローズを射程に収めつつある。最後の手段として、ＨＶ５を使う余よ裕ゆうすらない。

　石せつ塊かいだらけの場所に飛びこんでしまい、息がつまったマリアローズは、さすがに観念した。

　──これで終わり、か。

　この期ごに及およんで、頭をかち割られないように殺されるなんて芸当が、果たしてできるだろうか。

　そんなことを考えながら、マリアローズはせめて前を向いて死のうと、仰あお向むけになって赤の男爵を睨にらみつけた。赤の男爵は、まさしく赤い男爵と化していた。体中に無数の赤い筋みたいな

ものが浮うき出している。気色悪い。鳥とり肌はだものだが、目は閉じなかった。赤の男爵が劫火を振ふり下ろすまでが、ひどく長く感じられた。

　本当に、ずいぶん長かった。

　長すぎた。

　そして、そのときは永遠に訪おとずれなかった。

　正確にいえば、劫火はマリアローズを真っ二つにする前に止められたのだ。

　何によって？

「……ピンパーネル」

　たぶん、横から割って入ってきたのだと思う。電光石火のごとき速度だったので、よく見えなかったけれども、マリアローズの斜ななめ前に立って、交差させた形の違う雌し雄ゆう一いつ対ついの短たん剣けんで劫火を受け止めているのは、確かに砂色の元アッサシンだった。

「下がッテ」

「う、うん」

　ピンパーネルに従って後退しながら周囲に目を配ると、部屋の隅すみに扉とびらがあった。扉はすぐに消えてしまったが、ピンパーネルはあれを通ってやって来たのだろう。他ほかの連中の姿はない。足の速いピンパーネルが一人だけ先行してきたのか。

　とにかく、助かった。

　ピンパーネルの登場が一秒でも遅おそければ、マリアローズは間ま違ちがいなく死んでいた。

　だが、安あん閑かんとはしていられなかった。少し離れてみると、赤の男爵がなぜ鍔つば迫ぜり合あいなんて馬ば鹿かげたことを挑いどんでいるのかわかった。その状態は、赤の男爵にとって五分ではないのだ。

ピンパーネルの衣ころもの端はしを、皮ひ膚ふを、劫火の熱が焼いている。

けれども、さすがに膂りょ力りょくでは赤の男爵に劣おとるだろうピンパーネルは、迂う闊かつに動けない。

少しでもタイミングを計り間違えれば、そのまま斬きられてしまうだろう。

「ぐっぐっぐっ……俺のお楽しみを邪じゃ魔ましやがった罰ばつだ。生きながら腕うでを炙り焼きローストされる気分はどうだ、ああ？」

「熱イ」

ピンパーネルはそう言いながらも表情は動いていないが、むろん平気なはずはない。

マリアローズは見ていられなかった。そう思いつつも、結局は見ているだけだ。助けてもらっておいて、それでいいのか？　何もできないのか？　何かできることは？

そうはいっても、自分の力では━自分の力？

だったら、それ以上の力を出すことができれば？

「……そうだ」

次に会うことがあったら、こちらから挨あい拶さつくらいはしてやろう。

本格的なものではないけれども、暗示術で自分を強化する訓練はマリアローズも受けたことがある。よもや倍化ブーストにあんな使い方があるとは想像もつかなかった。

感謝だ。

━コロナ。

マリアローズは暗示にかかりやすいよう、目を半開きにして焦しょう点てんをぼかし、左手でそれらしく印を結んだ。トマトクンが言ったように、要領がいいのはマリアローズの長所だろう。根気が

ないから、奥まで極きわめることはできなくても、入口のドアはすぐに開けることができる。

　暗示術。

　ちょっとしたコツさえつかめば、誰だれにでもできる。

　さらに、切せつ迫ぱく感かんがマリアローズの集中力を増ぞう幅ふくさせ、術の効果を極限まで高めた。

「僕は……強い……強い……強い強い超ちよう強い凄すごい強い……強い……強い……強い……」

　唱えるうちに、自分の中で歯車が噛かみあうような感覚があった。

　途と端たんに溢あふれて体中を満たす、力。

　力、力、力。

「──倍化完了ブーステツド！」

　マリアローズは小しよう剣けんを一ひと振ふりした。空気を斬り裂さく音が違う。剣速がいつもと段違いだ。ただ、どれくらい持続できるか。知ったことか。たとえ限界を超こえて、この身が壊こわれそうになっても構わない。まあ、あとでユリカに治してもらえばいいし。

　そう、ピンパーネルが来たということは、他の皆みなもここへ向かっているということだ。

　すぐにトマトクンが来る。ユリカも、カタリも、サフィニアも来る。それまで頑がん張ばればいい。

　一人じゃないのって、面めん倒どうくさいが、何て楽なんだ。

「エロ犬！」

　マリアローズは叫さけびつつ、駆かけた。赤の男だん爵しやくがこちらを見たときにはもう、小剣の間合いに入っていた。赤の男爵も、この速度は予想外だったのだろう。マリアローズは赤の男爵の右みぎ腕うでをすくい上げるように斬ろうとしたので、これをさけ

るためには劫火を引くしかない。けれども、迂闊に劫火を引けば、ピンパーネルに斬られてしまう。

　難しい決断を迫せまられた赤の男爵は、第三の手段を選んだ。

　押したのだ。

　赤の男爵はピンパーネルを押しきって、返す刀でマリアローズを迎むかえ撃うとうとした。

　だが、それは舐なめすぎというものだった。マリアローズはさっきまでのマリアローズではなかったし、ピンパーネルは単純な力以外の点では現状の赤の男爵に見み劣おとりする要素がないくらい、すぐれた戦士だった。

　結果的に、赤の男爵は、後方へうまく体を流したピンパーネルに引きずられるように体勢を崩くずし、その背中にマリアローズの一ひと太た刀ちを受ける羽目になった。

　ピンパーネルは、さらに赤の男爵の腹部や下腹部に次々と膝ひざをめりこませて股ももの間から滑すべり出ると、二振りの短剣を逆手に持ち直した。マリアローズも、赤の男爵に二撃目を見み舞まおうとしていた。

　もしかしたら、これはトマトクンたちの到とう着ちやくを待つまでもないかもしれない。

　そんな楽観的な予想がマリアローズの脳のう裏りをよぎったか、どうか。

「オォォォォォォォォングストロォォォォォォムッ……！」

　突とつ如じよ、赤の男爵が謎なぞの絶ぜつ叫きようを発した。

　すると、どうしたことだろう。

　マリアローズも、ピンパーネルも、金かな縛しばりに遭あったように動けなくなった。

　部屋の中で自在に動いているのは、床ゆかに手をついて背中を丸めている赤の男爵だけだ。

「ぐっぐっぐっ……ぐあっはっはっはっ……まさか、まさかな……この赤の男爵が本気と書いてマジにならねばならぬとは……しょうがねえ、冥めい途どの土産みやげに見せてやろう、この俺の──」

　と、赤の男爵が体を起こした。

　マリアローズは目を疑うというより、もううんざりだった。

　またか。

　そういうのは一度きりにしてくれ。それがルールというものではないか。いや、魂たましい集めも二度剝むけた。悪あく魔まは好きなのか──変身が。

　赤の男爵はさらに、よりいっそうでかくなった。もっとベリー筋肉質マツチヨになって、衣類は下帯以外は完全にちぎれ飛び、顔はいっそう不細工になった。今までは犬と猿さるの特とく徴ちようを併あわせ持っていたのだが、今回、豚ぶたの特徴がそれに加えられ、見ただけで怖おぞ気けを震ふるうような、大変見み目め麗うるわしい顔立ちへとおなりにあそばされた。

　体中に浮うき出ていた赤い筋みたいなものは消えた。

　その代わりに、肌はだ全体が完かん璧ぺきに近いくらい赤くなった。

　赤の男爵は満足げに自らの肉体を見回して、陶とう然ぜんとした声こわ音ねで言った。

「これが俺の戦闘形態バトル・フオームだ。名づけて、バトル兄貴・ザ・赤の男爵……！」

　──何で兄貴なんだよ。

　などというちょっとしたツッコミを入れることも、今のマリアローズにはできない。

　口くち惜おしいことに。

「バトル兄貴となった俺は、七種類の特とく殊しゆ能力を使用することができ、標準時の約三倍のパゥワーを持つ。貴様らを動けなくしているのもバトル兄貴の特殊能力〝カナシバールÅ„だ。これが

どういうことかわかるかあ？　ん？　つまり、今の俺は！　無敵！　なのだあっハァ！」

──それ、変身する前に使ったじゃないか。

　とツッコミを入れることもむろんできないわけで、存分に舌を回転させまくる赤の男爵がピンパーネルの腹にパンチをかますのも、黙だまって見ているしかなかった。

　ピンパーネルも、凄すさまじく痛いだろうに、呻うめき声を洩もらすことさえできない。

「ぐっぐっぐっ……しかし、お遊びはもうやめておこう。どうやら、貴様ら以外の客ももてなさねばならぬようだからなあ？　フム、ムフン、赤毛の小こ娘むすめと、痩やせっぽちの出だ汁しをとったらわりとうまそうな男か」

　赤の男爵はマリアローズとピンパーネルを順番に指差して、にたにたと笑った。笑うと余計に気味が悪い。こんなやつに殺されるのか？　本当に？

　嘘うそだ。

　嘘であって欲しい。

　その祈いのりが。

「地じ獄ごく帝てい王おう陛下も、これくらいの楽しみはお許しになってくれよう。さあて、ど、ち、ら、を先に殺そうか──」

「オッサン、ちゃうがな」

　ケメック訛なまり、もとい、キングダム・イズルハ訛りの声とともに飛んできたのは、二本の斧おのだった。

　まばたきすらできなかったマリアローズが、なぜそれを知ったのかというと、動けるようになったからだ。

　マリアローズは、赤の男だん爵しやくの肩かたに突つき刺さささった二本の斧を見た。同時に、抵てい抗こうしがたい虚きよ脱だつ感かんに襲おそわれて床に倒たおれ伏ふしてしまったけれども、そこをピンパーネルに抱だき上げられた。

　ピンパーネルに運ばれている間も、マリアローズは彼らをしっかりと視界に収めていた。

「死ぬんはオッサン、お前じぶんや」

「ぎ、ぎざま……！」

　カタリを振り返った赤の男爵は、おそらくまた特殊能力とやらを使おうとしたのだろう。何か大声を張り上げようとしたところに、突とつ進しんしていったのはユリカだ。ユリカはやすやすと赤の男爵の懐ふところに入りこみ、棍こんで──あれが、あの棍？

　先せん端たんがいくつにも分かれて、それぞれが別々の形をしているなんて。

　ただの棍ではない。

　鵺ぬえ流古式戦せん闘とう術じゆつに伝わる多目的変形棍〝極限クライマックス九手棍ナインポール〟。

「破汰汰汰汰汰汰汰汰！」

　ユリカはその極限クライマックス九手棍ナインポールでもって、赤の男爵を滅めつ多た打うちにした。滅多打ちとはこういうことだといわんばかりの打うち据すえ方だった。それにも拘かかわらず、赤の男爵はユリカをつかまえようとした。

　もっとも、あれだけ分厚い筋肉の鎧よろいで守られているのだから、頑がん丈じようなのもむべなるかな。

　しかし、おとなしくつかまるほど間ま抜ぬけではないユリカは、素す早ばやく後退した。

　そこですかさず、サフィニアが魔ま術じゆつを発動させた。

「寒磁罪母刹ＲｅｕＬａ外ＮａｕＲａ矛Ｊｕｄａｓ怨氷結酷寒冷獄」

　水すい霊れいＨｙｄと時霊Ｘｅｏを使し役えきして対象を凍こおりつかせ、最上の結果としては生命活動を停止させて殺害し、最低でもしばらくの間、運動能力を奪うばう要素魔術、縛ばく氷ひよう獄ごく──以前、魂集めに食くらわせたのと同じ魔術だ。

あのときと同じように、赤の男爵の体表が一いつ瞬しゅんのうちに霜しものようなもので覆おおわれた。赤の男爵は、だが、それでも不気味に手足を蠢うごめかせて前進しようとした。さすがは爵位持ちということか。その体は霜が剥はく落らくするごとに常態を取り戻もどしてゆき、赤の男爵はとうとう大口を開けて何か叫さけんだ。

「おぉのれぇぇぇ……！　ド畜ちく生しようめが、これで死ねえ、へェェェクトォォパ──」

「悪いが」

最後に、電光石火の踏ふみこみで一気に赤の男爵を間合いにとらえたのは、トマトクンだった。

トマトクンが大剣を振ふりかぶって、赤の男爵をまず縦に、そして横に両断してのける寸前、身にまとう鎧の炎模様ファイアーパターンが輝かがやいたように見えたのは、マリアローズの気のせいだろうか。

少なくとも、波打った大剣の刃はが強く発光したのは見み間ま違ちがいではないはずだ。

トマトクンは大剣を血振りしてから、ニヤリと笑った。

「死ぬのはお前だ。二度も言わせるなよ」

「──ス……」

それが赤の男爵が発した最さい期ごの言葉だった。いや、言葉というより、音といった方が適切かもしれないが。

四つに分断された赤の男爵は、床ゆかに崩くずれ落ちてばらばらになった。

「まあ、一度目は俺が言ったんじゃないけどな」

そして──

すべてが終わった。

その光景をピンパーネルに抱かれたまま眺ながめていたマリア

ローズは、喜びとか達成感とか解放感とか安あん堵どとか、こみ上げてくる色々な感情に戸と惑まどった挙句、とりあえず恥はずかしくなった。

「あのさ、ピンパーネル……そろそろ下ろしてくれない？」

「はイ」

　ピンパーネルはかすかに口くち許もとを緩ゆるめ、すぐにマリアローズを下ろしてくれたが、うまく立てない。体の隅すみから隅までが筋肉痛になったかのようだ。倍化ブーストの反動だろう。

　仕方なく四よつん這ばいのままで、思い出したように痛み出した肋ろつ骨こつのあたりを手で押さえていると、ユリカが駆かけよってきた。

「大だい丈じよう夫ぶ？　マリア、怪け我がは──」

「う、うん、ちょっとね」

「胸を痛めたの？　もう、一人で先しやきに行ってしまうものだから、心配したのよ」

「あはは、ごめん」

　それを言われると、笑ってごまかすしかなかった。

「あ、でも、ほら、僕よりピンパーネルの方が火傷やけどしちゃってひどいからさ。先に治してあげた方がいいんじゃないかな」

「あら、本当ね。ピンパーネルは痛くても言わないから。ピンパーネル、見しぇなしゃい──座しゆわって。届かないから」

　ユリカは正座させたピンパーネルの肩に手を触ふれて、目を閉じた。医術式を開始したのだろう。ピンパーネルはじっとしている。まるで、飼い主に忠実でよく命令を聞く、普ふ段だんはおとなしい猟りよう犬けんみたいな男だ。ユリカはさしずめ犬の扱あつかいに慣れた獣じゆう医いさんというところか。

　で、その飼い主、というか、園長マスターはといえば。

「無事だったみたいだな」

　片方の眉まゆを心持ち上げて眉み間けんに皺しわを刻み、唇くちびるをへの字に曲げた何だか微び妙みような表情をしていた。

　従えたサフィニアという名のもう一頭の飼い犬は、いつもどおり青い顔でうつむいている。

「……ご無事で……何よりです……」

「あー、えと、その……ありがと」

「……やはり……わたしのせい、でしょうか……きっと、そうですね……」

「ち、違うよ。サフィニアさんのせいなんかじゃないってば。僕のせい！　僕が悪い！」

「そうだな」

　ようやくわかった。トマトクンは少々怒おこっているらしい。だが、その怒いかりをどう表現すればいいものかと、半分困こん惑わくしているようだ。

「アンダーグラウンドで、わけのわからん物にいきなり触さわる馬ば鹿かがどこにいる。何が起こるかわからんのだぞ。それくらい侵入者クラツカーの常識だと思うがな」

「う……それはそうだけど」

　マリアローズに反論の余地はない。実際、かなり反省はしているし、顔にもそれは表れているはずなのだが、トマトクンは例の困惑顔でまだ続けた。

「死んだらどうするんだ」

「どうするって言われても」

「こんなところで一人で死んだら、生き返れない死に方をする可能性が高い」

「まあ……それは確かに、ね」

「お前、死にたいのか」

「死にたいわけないだろ」

「当たり前だ。仲間が死んで帰ってこないなんて、冗じよう談だんじゃない」

　トマトクンは少しだけ声を荒あらげて、体てい裁さいが悪そうにマリアローズから目をそらした。

「──別にな。お前がうちに入らなかったとしても、仲間は仲間だからな」

「そ、そう」

　今度はマリアローズが困る番だった。そんなことを断言されても、どう返事をしていいいか見当がつかない。

　結局、口をついて出たのはこんな言葉だった。

「……以後、気をつけます」

「それならいい。ん？　囲い碁ご？」

「ち、違う！　以後っていうのは、そういう意味じゃなくて」

「囲碁じゃなくてオセロか？」

「おせろ……？」

　どうも話が噛かみあっていないように思える。ちんぷんかんぷんだ。この男に付き合っていると、いつもこうなってしまう。だが、あんなふうに心配されて、仲間だと呼ばれるのは決して不快ではない。

　むしろ──いや、待て。そんなことよりも。

「れ？　そういえば、カタリは？」

　ふと、大事なことを忘れているような気がした。

　そもそも、マリアローズは何のためにこんなことをしていたのか。何が目的で閉へい鎖さ魔ま宮きゅうくんだりまで来ることになったのか。

真しん剣けんに捜さがすまでもなかった。カタリは元赤の男だん爵しやく、現ばらばら死体の前で一ひと振ふりの剣を手に何やら首をひねっていた。

その剣こそ、マリアローズが求めていたものであり、魔導王時代の秘宝であって、三億ダラーだった。

「カタリ！　それ！　劫ごう火か！　僕の！　早く……！」

マリアローズは逸はやる気持ちを抑おさえかねて片言になりながら、ほとんど這はうようにしてカタリの足にタックルした。

「渡わたせ！　僕のだ！　くれるって言ったろ！　三億ダラー！　早く！」

「お、おお、待てえや。そないにせんでもやるがな。ほれ」

カタリの手からあっさりマリアローズの手に渡った劫火は、抜ぬき身みで、細身で、柄つかの造りが素す晴ばらしく、剣身には細かい彫ちよう刻こくが施ほどこされていた。見るからに高価そうで、品質のよさそうな剣だ。

「こ、これが……これが、三億ダラー……劫火……」

おずおずと刃はに指を近づけてみた。

そうすると、当然、その名のとおり、熱──くない。

思いきって触れてみると、冷たいとはいわないまでも、まあ、人ひと肌はだくらいの温度だ。

「何で？　劫火って、刃が熱いんじゃ……」

「ああ、姉し妹まい剣けん、劫火と凍とう甚じんはな」

カタリが人差し指を立てて得意げに解説した。

「使用者にはその魔力を及およぼさへんのや。せやから、持っとるモンが触ったかて、火傷したり凍傷になったりはせえへんで。第一、そうやなかったら、危のうて使ってられへんやろ」

「それもそうか」

　マリアローズはもう一度、刃に指を這わせてその深しん甚じんなる魔力に感心した。

「なるほどねえ。凄すごいな。どうやって作るんだろうね。こんな物」

「そら、あれやろな。腕うでのええ鍛か冶じ士しが鍛きたえるんやろな」

　さも当たり前といった顔で答えた魚顔の男にも、今のマリアローズは一向に腹が立たない。

「ははは、そんなの僕だってわかるよ。僕が不思議に思ってるのはそのあとのことだよ」

「あとって何や」

「だから、魔力をこめるっていうのかな？　何か特別なことをするわけでしょ」

「それにか？」

「これにだよ」

「せえへんやろ」

「何でさ」

　おめでたいことに、マリアローズは何ら疑いは抱いだいていなかった。

　カタリが次の言葉を発するまでは。

「それ、劫火やないからな」

「はい？」

　すぐに尋たずね返したのは、それだけ現実を認めることに抵てい抗こうがあったせいかもしれない。

「で、でもさ、さっき赤の男爵が持ってたときは――ほら、火傷やけどだって……」

「それはひょっとしたら、赤の男爵自身の力かもしらんな。この剣もようできた代しろ物ものやし、魔力伝導率も高いやろ。ホンマ、剣としては悪うないで。業わざ物ものっちゅうても言いすぎやない」

　カタリは鼻の頭を人差し指で掻かいた。

「ま、よくあるこっちゃ。外れっちゅうことやな。そらそうやで。何せあの劫火や。簡単に見つかるもんやない。こんなんでいちいちめげとったら、α大陸一の稀少物レア・収集家ハンターにはなられへんわ。明日あしたっからまた劫火関連の文ぶん献けんでも──と、痛っ！」

「この、魚顔め、よくも……！」

　マリアローズはカタリの向むこう脛ずねを籠こ手てで殴なぐって、殴って、殴りまくった。

「騙だましたな！　くそ！　僕は！　三億ダラーだって！　いうから！」

「いだっ、いだだだだっ！　や、やめいや！　騙したて、わしはそんなつもり……」

「うるさい、殺すつもりがなくても殺したら殺人だ！　騙すつもりがなくても騙したら詐さ欺ぎ師しなんだ！　責任とれ！　この！」

「せやから、劫火のことはこれからも調べるがな！　それらしい情報めっけたら、また一いつ緒しよに探しに行けばええやんか！」

「また……？」

　マリアローズは手を止めた。

　いつの間にか、周りに皆みなが集まってきていた。

　トマトクン。

　ユリカ。

　ピンパーネル。

　サフィニア。

　カタリ。

　全員、マリアローズを見つめている。

「……な、何だよ、みんなして」

「うむ」

　トマトクンがヒヒヒと笑った。

「たいしたことじゃない。以後、気をつけます、の意味を訊きこうと思ってな」

　─オセロとか変なことを言っといて、ちゃんとわかってるんじゃないか。

　マリアローズは、どう返答しようかと頭をひねりながら、少しだけＺＯＯの面々とのこれからの日々を想像してみた。

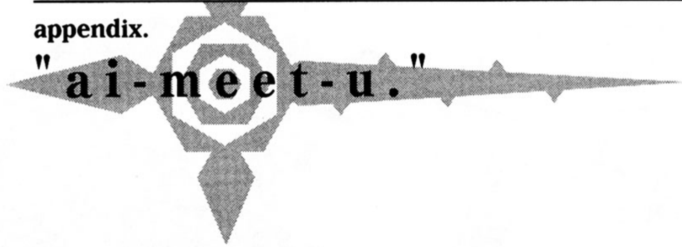
　それは、そう悪くないもののように思えた。

『僕の蹉さ跌てつと再生の日々』了



appendix.

"ai-meet-u."



-O896.7.2-

　アンダーグラウンドＤ５メリクル第二迷めい宮きゅうは、悪くない稼かせぎ場所だ。

　もう半年くらい、ここと D６メリクル第一迷宮を中心に潜もぐっているが、その考えは変わっていない。これからも変わることはたぶんないだろう。

「でも、ねえ……」

　マリアローズは暗視鏡を額までずり上げ、背負い袋ぶくろの中からとりだした戦利品を眺ながめた。

「てゆうか、もう暗いし」

　そろそろ地上だが、時刻は十九時を回っている。

　朝から今まで頑がん張ばって、値打ち物かどうかもわからない――いや、冷静に希望的観測を削そぎ落とせば、まず間ま違ちがいなく玩具おもちゃ程度の価値しかないだろう、錆さびた首くび飾かざりが一つ。

　ぴかぴかに磨みがいて、百ダラーかそこらで売れれば御おんの字の、こんな物を手に入れるために、十一時間ほども費ついやしたことになる。

「や、今日はたまたま運が悪かっただけだよ？」

　うなずいてみる。むなしい。とてつもなくむなしくて、自殺願望がわき上がってきそうだ。

　マリアローズは激しく頭を振ふって、首飾りを背負い袋に押しこんだ。

「生きてれば、こんな日もあるよね」

　確かに、結構ある。ありすぎる。そのせいで、いつ貯金が底をつ

いてもおかしくない。

「はは……それにしてもさ、独り言が多くない？　僕……」

　喋しやべる相手がいないのだから、仕方ないけれど。

「ま、ぐちぐち言ってても、ね──空からお金が降ってくるわけじゃないし」

　まったくだ。生きてゆくのって、楽じゃない。特に、剣けん術じゅつが達者なわけでもなく、強力な魔ま術じゅつが使えるわけでもない、非力非才の孤こ独どくな侵入者クラツカー（十六歳）にとっては。

　そんなマリアローズの武器はといえば、中古のエストックと骨こつ董とう品ひん同然の小型の弩いしゆみだけ。

　正直、よくやっていると思う。誰だれにも頼たよらず、独力で生き抜ぬいている自分を褒ほめてやりたい。

　もちろん、褒めるのはタダだからだ。

　いくら自分で自分を褒めても、空元気さえ出てこないのが唯ゆい一いつにして最大の欠点だが。

「はあ……」

　何だか本当に疲つかれてきて、ため息が勝手に出た。肉体的な疲ひ労ろうに加え、精神的にもかなり消しよう耗もうしている。歩く気力が完全に失うせる前に、家路につくべきだろう。

　マリアローズは背負い袋を背負いなおして、足を前に進めた。

　地上とアンダーグラウンドとを繋つなぐ出入口の両側に、数名の男が立ったりしゃがんだりしていることなんて全然気にせず、下を向いてとにかく歩いた。

　疲れていたせいか。きっとそうに違いない。

　そいつらの人相や服装が、いかにも堅かた気ぎではないこと。そんな連中が、こんな時間帯のあんな場所にいるなんて、やや奇き妙みようだということ。体格標準以下で一人きりの自分は、他人を食

い物にするようなやつらにとって、絶好の標的だということ。

　当然、頭に浮うかんでしかるべきだった。だが、そのときのマリアローズは、自分でも不思議なくらい無む頓とん着ちやくだった。ろくに警けい戒かいもせず、彼らの間を通り抜けようとした。

　で、横からヌッと出てきた手に腕うでをつかまれた。

「よぅ」

　誰かに触さわられるのは嫌きらいだ。特に男には。皮ひ膚ふ同士が触ふれあわなくても、瞬しゆん間かん的に、頭の奥で火花が散るような怒いかりを覚える。

「何だよ」

　すぐさま腕を振り払はらい、睨にらみつけた顔は、下した唇くちびるの右みぎ端はしに小指大のピアスをつけ、なおかつ薄うすら笑いを浮かべているせいで、全体的に醜みにくく歪ゆがんでいた。

「ヒィヒヒィ……何だよぉだってぇ……ヒャハハハァッ！」

　しかも、目がイッている。何が面おも白しろいのか、いきなり気が狂くるったように哄こう笑しようするあたりも、明らかに正常ではない。この街では珍めずらしくもない薬物ジヤン中毒者キーか。

　見れば、今、右側からマリアローズの腕をつかんだ男と、その脇わきにもう一人。さらに、左側から近づいてくる二人も、疑いを差し挟はさむ余地がないくらいキマっている。アウアウ言って涎よだれを垂らしているやつもいるし、目の焦しよう点てんが合っていないどころか、血走った目玉が飛びだしかけているやつもいて、これはやばい。やばすぎる。

　だが、見事にキマっているぶん、隙すきはあるはずだ。まあ、麻薬ドラッグには手を出したことがないのでよくわからないけれども、何となく。

　そう思って駆かけだそうとしたマリアローズの右足首を、口ピアスが足で払った。

　マリアローズはつんのめったが、即そく座ざに体勢を立てなおし、一も二もなく逃にげようとした。

地上へ。這はうように。後ろを見ずに。胸が痛い。心臓が跳はね回っている。頭の後ろの方に血が集まっている。七巡じゅん月げつの十九時が寒いはずはない。だが、体の末まつ端たんが氷みたいだった。心臓だけが動いているかのようだ。その他ほかの感覚がない。時間の感覚もない。それが一秒なのか。五秒なのか。あるいは一分なのか。判然としない。音がしない。はっきりと聞こえるのは、自分の呼吸の音だけだ。でも、氷ひよう塊かいのような体を動かして、逃げないと──

「アヒャ！」

耳みみ許もとでそんなおぞましい声がした。

それとほとんど同時に、後ろから腰こしにタックルをかまされて、押し倒たおされた。

「おめぇ逃げんなよぉ……！　逃げたら逃げられたら腹立つだらぁ？」「ヒヒャヒャ」「いただきぃ」「アウアウゥッ」何だよ、これ。こいつら、何だ。何されてるんだ。

恐きよう怖ふで現状認にん識しきがめちゃくちゃになりそうだったが、要するに、うつぶせで石いし畳だたみに倒れたマリアローズから、男のうち誰かが背負い袋ぶくろを奪うばった。そいつは背負い袋の中に手を突つっこみながら、ゲラゲラゲラゲラけたたましく笑っている。略奪者ルーター。悪党バスターだ。それも、ひとかけらの理性もなさそうなヤク中のろくでなしどもに、待ち伏ぶせされて、襲おそわれた。そういうことだ。

最悪だった。みじめすぎて、気が遠くなりそうだ。が、石畳にしがみついている指は、感覚を、力を取り戻もどしていた。生きている。生きてる。くそ。重い。怖こわい。殺される。逃げないと。

「は、放して──持ってる物は、全部、置いてくから……！」

「ああぁ？」「？」「アウアウ」「に？」

マリアローズは依い然ぜんとしてうつぶせで、石畳とキスしかけている。だから見えないのだが、男たちの動きが止まる気配を感じた。少なくとも、マリアローズにのしかかっている一人は間ま違ちがいなく止まった。馬ば鹿かみたいだが、助かる、と思った。見み逃のがしてもらえる。クワバラクワバラ。今日も何とか生き抜けそ

うだ。

　ありえない。

「んだとこの××がぁアメろうったってそぉはいかねぇぞ×××がぁ！」

　マリアローズの行動が逆げき鱗りんに触れたのか。何で？　何を言っているのかもわからない。とにかく、後ろから首を絞しめられた。目の前が真っ赤になった。どうして真っ赤？　血？

「あんも入ってねぇぞお×××ろぉ！」「アウアウ」「金ぇ金ぇ金ぇ金ぇ」「おく見たらこの×××めぇかぁいい顔してんぞぉ××るかぁ？」「イヒヒヒハァ」「アウアウ」

「──た……」

　助けて。助けてください。お願いします。何でもします。何でも？　本当に？

　マリアローズの唇くちびるをぞっとするものが撫なでた。ぬるぬるした何か。舌。口ピアスの息いき遣づかいを至近距きよ離りに感じる。自分の顔のすぐ横に、やつの顔がある。両足はもう他の男に押さえられていた。それだけでなく、引っ張られている。足ではなく、ズボンが。やつらは、脱ぬがそうとしている──それは、嫌いやだ。イヤだ。絶対に嫌だ。

「ヒィッ！」

　口ピアスが悲鳴を上げた。やつが間ま抜ぬけだったからだ。ヤク中で、脳がデロデロに溶とけているから、マリアローズの両手を拘こう束そくしなかった。ざまあみろ。マリアローズは右手で口ピアスの顔面を思いきり引っ掻かいてやったのだ。爪つめで抉えぐった。気持ち悪い。何で僕がこんな目に。

　僕は悪くないのに。

　そうだ。不注意だったかもしれないけれど、悪くない。悪いのはこいつらだ。

　薬物ジヤン中毒者キーで、薄うす汚ぎたない悪党バスターの、略奪者ルーター、変質者、不潔で、無礼で、臭くさい、こいつらが悪

い。

「いでえええぇえ！　いでぇよぉ……！」

　口ピアスが痛みにのけぞったおかげで、呼吸はできるようになった。ズボンは腿ももあたりまでずり下げられていたが、そっちに夢中なのか、足首を押さえる手がお留守になっていた。

　チャンスだ。

　まずは腰のあたりにまたがっている口ピアスをはねのけるため、マリアローズは一気に体を回転させた。それで横向きになると、ズボンが膝ひざまで下がってしまったが、構わず暴れた。何かが足に当たったので、蹴けった。意味のないことを喚わめきながら、そいつを蹴って、蹴りつつ、上半身を起こし、尻しりをついた体勢のまま後あと退じさった。

　少しでも、もっと、もっと、離はなれたかった。一刻も早く離れたい。

　顔を押さえてうずくまっている口ピアス。「おおお」迫せまってくる豚ぶた野や郎ろう。「アウアウ」前歯のない男。「つ、つつつかまえろぉ」鼻が潰つぶれた男。手を伸のばしてくる。襲いかかってくる。あと数十サンチ。数サンチ──間かん一いつ髪ぱつ、マリアローズは震ふるえる右手でズボンを引っ張り上げながら、立ち上がった。やつらに背を向けて、ただちに走りだした。

「おおのぉっ！」「×××ろぅ」「アウアウウァッ」「逃がすぅなやぉ」

　だが、追ってくる。追われるなんて、泣けてくる。何で僕が？　よりにもよって僕が？　金はほとんど持っていない、戦利品だって売価百ダラーもあやしい首くび飾かざりだけ、装備も安物ばかり、そんな僕が？──今日はたまたま運が悪かっただけだよ。

　自分でさっき呟つぶやいた言葉だ。ああ。そのとおり。今日はとことんついてない。厄やく日びだ。

　たったそれだけのことで、人は死ぬ。

　いくら一生懸けん命めいに足を動かしても、Ｄ５出入口まで掘ほり下げられて造成された坂道を、逃にげて、必死で逃げても、意地

悪で悪戯いたずら好ずきな死神の手にかかると、簡単に捕つかまえられてしまう。

　日暮れの坂道を上りきったところだった。

　石畳の溝みぞにつまずいたわけでもないのに、マリアローズの足がもつれた。

「い、つぅっ……」

　左の太ふと腿もも。裏側だ。それでも何とか前進しながら自分の目で確かく認にんして、愕がく然ぜんとした。

　刺さっている。ナイフだ。「うひょう当たりぃ」「グラッツ」「アウアウ」「いえーい」男たちのうち誰だれかが投げたのか。それが見事に命中したとでもいうのか。

　偶ぐう然ぜんだろう。たまたまだ。上り坂を駆かけ上ってゆく標的に、頭のおかしい薬物ジヤン中毒者キーがナイフを当てられるものか。

　もちろん、偶然だろうと奇き跡せきだろうと、マリアローズの太腿に突き刺さっているナイフが幻まぼろしみたいに消えるわけではない。この現実のナイフを抜ぬかないと、走るなんて無理だ。抜けば、出血がひどくなるだろう。でも、抜かないわけにはゆかない。迷いは一いつ瞬しゆんだった。

「──ふっ……く……！」

　不幸中の幸いとは言いたくない。だが、ナイフはそれほど深く刺さっていなかった。傷は浅い。と思いたい。しかし、頭でそう思っても、足を前に出すたびに傷がズグズグズグ疼うずく。ドプドプと傷口から血が溢あふれる音がする。傷は浅い？　ダメだ。嘘うそじゃないか。大嘘だ。

　おまけに、ちらりと振ふり返ると、口ピアスと豚野郎と前歯無しと鼻潰れの四人はもう、四、五メーテル後方まで近づいてきている。

「いげんなよぉ×××しようぜぇ」「アウアウ」「金ねぇなら×××らぁ」「イヒィヒヒ」

誰が。冗じよう談だんじゃない。ふざけるな。言ってやりたいが、声なんか出ない。だいたい、叫さけんでいる暇ひまがあるなら、走れという話だ。

あの建物の陰かげまで。いや、あの角を曲がって、広い道に出れば。黄昏Ｔの・魔術Ｄ士団・通りＳまで行けば──何か事態が好転するという見込みがあったわけではない。どのみち、同じだった。

負傷を抱かかえたまま、一人で四人から逃げきるなんて、どだい不可能だったのだ。

獣けものみたいに息を荒あらげて追いついてきた豚野郎か前歯無しに、外がい套とうの端はしをつかまれて、引っ張られた。

マリアローズは引き倒たおされた。背中を打って息がつまった。目の前に豚野郎の顔があった。前歯無しが手にしたナイフでマリアローズの胸のあたりをまっすぐ切り裂さいた。痛くはなかった。切られたのは上じよう衣いとその下の肌はだ着ぎだけだった。

「……やめろ！」目を閉じた方がいいのか。直視しつづけるべきか。わからない。「やめろって……！」それが自分の声だなんて信じられなかった。「やめて」何て声こわ音ねだ。「──お願い、します……」哀あわれみを乞こうても無む駄だなのに。

視界が歪ゆがみかけた。抵てい抗こうは完全に封ふうじられている。口ピアスと鼻潰れと豚野郎が手足をがっちり押さえていた。笑い話だ。薬物ジヤン中毒者キーのくせに、さっきの失敗を反省したらしい。

死にたい。もう本当に死ぬべきかもしれない。

そして、前歯無しが、真ん中に切れ目を入れた上衣と肌着を左右に引き裂き、首を傾かしげた。

「アァ……？」「んだぁこいつ……餓が鬼きらぁれ？」「×××ろぉ？」「ハヒィ？」

「フム」聞き覚えのない声が混じった。「女の子を男四人で陵りよう辱じよくする。楽しそうではあるけど、あまりいい趣しゆ味みじゃないネ」

「ウ？」「……な」「×××やるぁ？」「たれらぁ？」

「──へ？」

　マリアローズは四人に押さえつけられたまま、声の主を捜さがした。

　そいつは、すぐに見つけることができた。

　いつの間にか、マリアローズの頭のすぐ近くに立って、こちらを見下ろしていたからだ。

　その男は、黒衣を身にまとい、仄ほの暗ぐらい中でも酷こく薄はくそうな光を宿した薄うす青あおい瞳ひとみが際きわ立だっている。

　少し長めの頭とう髪はつは闇やみ色いろだ。

　ちょっと中性的で端たん整せいな顔には、微び笑しようともいえないかすかな笑えみが浮うかんでいた。

　何かを、いや、すべてを拒きよ絶ぜつするような、遠ざけるような、あのきれいな顔の皮ひ膚ふの裏側には、血が通っていないに違ちがいないと思わせる種類の、冷たい微笑ほほえみ──

　それが、マリアローズと目があった瞬しゆん間かん、溶とけそうになった。

　しかしまた、すぐに凍いてついた。

　前歯無しが意外と素す早ばやい身のこなしで立ち上がり、黒衣の男に向かってナイフを突つき出したせいだ。

「ボクは別に──」

　もっとも、かすりもしなかったが。

　黒衣の男は、横に少し移動しただけで楽々とナイフをかわし、軽く肩かたをすくめてみせた。

「ただ通りがかっただけだし、野次馬以上の意味はなかったんだけどネ。キマりまくって人間の言葉さえ喋しやべれないようなヤツに、ボクの話を理解しろといったところで無駄か」

「くおおうなぁ……！」

「やれやれ」

　黒衣の男の体術は桁けた外はずれだった。というか、マリアローズは目視すらできなかった。

　前歯無しが再びナイフを繰くり出すと、黒衣の男は、消えた。

　いや、跳とんだのか。

　次にマリアローズが見たのは、前歯無しの頭頂部を踏ふみ台だいにするや否いなや、右足でやつの顎あごあたりを蹴け飛とばす黒衣の男の姿だった。

「遅おくればせながら」

　そうして音もなく着地した黒衣の男は、石いし畳だたみの上に崩くずれ落ちた前歯無しにはーいち瞥べつもくれない。

　秀しゅう麗れいな面おもてには、やはりあの微笑を貼はりつかせたままだ。

「ボクに挑いどむのはやめておいた方がいいと思うな。他人の嗜し好こうについてどうこう言うつもりはないが、薬物ジャン中毒者キーの強姦者レイピストに手加減してやる義理も本来、まったくない。そんなわけで、次は容よう赦しゃなく殺すヨ？　赤子連合ベイビイユニオンの諸君」

「て、てめぇ何で……」

　口ピアスの、豚ぶた野や郎ろうの、鼻はな潰つぶれの腰こしが引けて、マリアローズを押さえつける力が緩ゆるんだ。

　マリアローズはすかさず両手を振ふりほどき、上衣をかきあわせようとしたが、さすがにそれは豚野郎に阻そ止しされた。

「おれぇらが、べ、赤子連合ベイビイユニオン、だだって……」

「キミらがつけている金の指輪リング」黒衣の男が口ピアスの手に蔑さげすむような視線を注いだ。「〝蛇へび呑のみ赤子ベイビイ〟。赤子連合ベイビイユニオンのシンボルだろう。キミらの首魁

マスター、ヨーン・ダハル・メクトマとはちょっと付き合いがあってネ。まあ、友好的な関係とはとてもいえないが」

「──く、黒い……」豚野郎が呻うめくようにそう言って、マリアローズから手を放し、飛び退すさった。「棘闇ソーンダークの……薄い、青の目……ま、まさか」

「……虐殺カーネイジ──」「人形ドール……！」

　続いて口ピアスと鼻潰れも、弾はじかれたように黒衣の男から、ひいてはマリアローズから離はなれた。

　それでようやく自由になったマリアローズは、まず肌はだを隠かくして外套に体をくるんだ。起き上がりながら、黒衣の男と赤子連合ベイビイユニオンの三人を交こう互ごにうかがった。助かった──のか？　わからない。まだ動どう揺ようしているせいか、どう動くべきか、とっさに判断がつかない。

「ボクは、ネ」

　そうこうしているうちに、黒衣の男が双そう眼がんをすぼめて一歩前に出た。

「キミらを止めようとか、そんな気はないんだヨ。好きにするがいい。ただ、さっきも言ったように、キミらの行こう為いについてのボクの感想は──あまりいい趣味じゃない」

「ヒッ」「イッ」「ヒャァッ」

　やや迂う遠えんな脅おどしではあったが、効果は絶大だった。赤子連合ベイビイユニオンの三人は半ば這はうように、転がるようにして、一目散に逃にげていった。

「あーあ。仲間を置いていくとは薄はく情じような連中だネ。せっかく殺さないでおいたのに」

　で、クソ野郎モウフオどもを呆あつ気けなく追い払はらった男は、小こ面づら憎にくいほど平然としている。人を救っておいて、一仕事終えたとも思っていないかのようだ。

　ただ、マリアローズをちらちら見る仕草は、何か戸と惑まどっているようで、落ち着きがなかった。

「ええと……そう、ボクは本当にたまたま通りがかっただけで、成り行きでこうなってしまったけど──何というか、つまり、大だい丈じよう夫ぶかい？」

　大丈夫なものか。左の太ふと腿ももの痛みだって、思い出したようにぶり返してきた。

　それに、剝むかれそうになった。上半身だけとはいえ、見られた。そうだ。この男だって見たのだ。

　だいたい、赤子連合ベイビイユニオンを退けたからといって、この男が危険じゃないという保証はない。

　野や獣じゆうを駆く逐ちくした別の野獣かもしれないではないか。

「そんな目で睨にらまなくても」

　黒衣の男は前まえ髪がみをかき上げて、心外そうに一つため息をついた。

「恩を着せるつもりはないが、キミはやばかった。ボクが見すごしていたら、犯ヤられて殺バらされていたかもしれないヨ。というか、確実にそうなっただろう。いいや、キミほどの──失礼、不ぶ躾しつけかもしれないが、キミのような美しい人なら、ましてキミはまだずいぶん若そうだし、こう言っては何だけど、商品価値も非常に高そうだから──事が終わったあと、売り払うという選せん択たく肢しもある。そうサ。そもそも、不用心すぎるヨ。キミのような女の子が、一人で──」

「おい」マリアローズは上うわ目め遣づかいで黒衣の男をねめつけつつ、最大限にドスのきいた声を出した。「今、何て言った」

「え？　だから、キミのような女の子が──」

「訂てい正せいしろ」

「……え？」

「誰だれが女の子だ」

「誰って」

黒衣の男はきょとんとした顔でマリアローズを指さそうとし、途と中ちゆうでやめた。

それから、何かを思い出すように視線を斜ななめ上に泳がせて、両手を自分の胸に当てた。

「ああ！……え？　でも……あれ？　嘘うそ？」

「嘘なもんか、僕は女じゃない！　くそ、頭にくる、この目め腐くされゲス野郎、お前なんか死ね、百回死んで、ずっと死んでろ……！」

マリアローズは叩たたきつけるように叫さけんだ。超最低ＳＵＣＫ。本当に、超最低ＳＵＣＫだ。今日は運が悪い。きわめつけに悪い。悪すぎる。こんな恥ち辱じよく、屈くつ辱じよく、久しぶりだ。屑くずどもに嬲なぶられそうになって、足は痛いし、血はドボドボ出ているし、頭に血は上っているし、見られるし、そういえばズボンも下ろされたし、口ピアスに唇くちびるを舐なめられ、首を絞しめられ、いいことなんか一つもない。

この正体不明の何とかドールだかカーネギー何とかだかも、格好をつけて、涼すずしい顔で人を助けて、何を企たくらんでいるのやら。わかったものではない。そうだ。あの冷たい目。あれは間ま違ちがいなく変態の目だ。食わず嫌ぎらいは絶対にしない、何でもいけるクチの変態に違いない。

まあ、今はぽかんと口を開け、ただただ唖あ然ぜんとしてマリアローズを見つめているだけだが。

いつ牙きばを剝くか知れない。口ピアスを片付けた手並みを考えても、太た刀ち打うちできるはずがないので、さっさと逃げないと。

「──あ、キミ……！」

踵きびすを返したマリアローズの背中に、何とかドールの声が突つき刺さった。

マリアローズはそれを振り切り、足の激痛をこらえて走ろうとしたが、再度反転。何とかドールの脇わきをすり抜ぬけて、背負い袋ぶくろの中身を拾い集め、しまいなおし、背負って、ついでにまだ気絶している口ピアスの頭に一発蹴けりを見み舞まった。ちょっと

だけすっきりした。

　だが、まだ全然足りない。やりきれない。情けなくて、泣きたくなってくる。

　だから、八つ当たりだとわかっていながら、何とかドールとすれ違う瞬しゅん間かん、肩かたをぶつけてやった。よけられるかと思ったが、何とかドールは身動きしなかった。あっさり突き飛ばされて、尻しり餅もちをついた。一度だけ振ふり返って、呆ぼう然ぜんとしているその顔を見た。目があった。あとで、自分でもばかじゃないか思った。思い出すたびに、恥はずかしくて体中が焦こげそうになった。

　去り際ぎわ、マリアローズは、子供でもあるまいし、やつに向かってあっかんべをしたのだった。

-7 days later-

　珍めずらしく仲間の侵入者クラツカーごっこに付き合ってやったのに、おっかない粉ふん砕さい女おんなに「アジアン、貴様、やる気がないなら帰れ！」とか怒ど鳴なられて、「ああそうかい。じゃあ帰らせてもらうヨ」と背を向けたら、理り不ふ尽じんなことに後頭部めがけて明けのモーニン明星グスターが飛んできた。

「いくらボクでも、あんなモノの直ちよく撃げきを食くらったら、タダじゃすまないヨ……？」

　要するに、人間扱あつかいされていないのだ。背後からでも回かい避ひして当然、万が一、命中しても、死にはしないだろうと思われている。まったく、ひどい話だ。

　だいたい、自分がマトモじゃないことは、自分自身が一番よくわかっている。

　たとえば、見るがいい。ここアンダーグラウンドＤ13上層、下等蜥蜴とかげ人どもの巣そう窟くつであるテトルアープを、アジアンは散歩でもするように歩いている。

下等蜥蜴人はそこらにたくさんいる。高度な知能を有する蜥蜴人たちの街、Ｄ13下層ダーナムレーンほど整然とはしていないが、石造りの粗そ末まつな家屋が建ち並ぶ、無数の篝かがり火びで照らされたテトルアープを──後こう肢しで直立歩行し、前ぜん肢しで道具を使う下等蜥蜴人が、一匹ぴきで、または集団でうろついている。

だが、どの下等蜥蜴人も、アジアンには近づいてこない。アジアンの存在を意識しながらも、およそ五メーテル以上の距きょ離りを空けて、無視するようなふりをしている。

それは何も下等蜥蜴人に限らない。こちらから手を出さなければ、ダーナムレーンの蜥蜴人も基本的にそうだし、他ほかにも同じ態度をとる異界生物フリークスが何種族かある。

その事実に気づいている仲間が何人いるだろう。

一応、悟さとられないように気をつけているつもりだから、多くはあるまい。

だから、仲間たちが暇ひま潰つぶしや訓練や金を稼かせぐために侵入者クラッカーの真ま似ね事ごとをするときにも、自らすすんで同行することはない。誘さそわれても、体調がすぐれないとか、何か別の用事があるとか、理由をつけてたいがい断ることにしている。しつこく乞こわれれば、今日みたいに付き合う場合もあるが、正直、やはり気乗りはしない。

やる気がないなら、か。そのとおり。最初からやる気なんてこれっぽっちもないのだ。

それでも、アンダーグラウンドだけではないが、毎日のように誰か彼かが一いつ緒しよに一緒にとうるさい。まあ、純じゆん粋すいに戦力として、アジアンをあてにしている部分もあるのだろうが──

「愛されてるなァ」

しかし、自分は？　仲間たちのことを、どう思っている……？

アジアンは立ち止まって、ポケットに突っこんでいる手をきつく握にぎった。

大事じゃないはずがない。

でも、クラニィ、ローガン、リキエル、ベティ、ダリエロ、カイ──他の皆みなも、仲間だが、一人きりだった自分に居場所をくれた大切な仲間だが、それ以上じゃない。それ以上になることはできないのだ。それは決して、皆のせいではなくて、どうしようもないことで。

とはいえ、進歩した。世界の全部が敵に見え、実際、何もかもを敵に回して、当たるを幸いに他人を傷つけ、躊躇ためらいなく命すら奪うばっていた自分が、仲間を持ち、クランを作った。

昔は本当に一人だった。そこらじゅうに散らばっている敵意の欠片かけらは、すべて自分に向けられているように感じていた。善意や親切心なんて、存在すら疑った。愛は何かを支配し、所有するための胡う散さん臭くさい屁へ理り屈くつで、欲望を解放し、抑よく圧あつを解消するための都合のいい言い訳だった。

誰だれかが手を差し伸のべてくれても、その笑え顔がおの陰かげに悪意を想像して、睨にらみつけ、振り払はらった。

──あの、真っ赤な髪かみの、オレンジ色の目をした子みたいに。

女の子じゃないと言っていた。

とてもそうは見えなかったが、確かに胸はなかった気がする。そうはいっても、じっくり見たわけではないので、はっきりとは覚えていない。女の子だって、胸のない子はいるし、誰かみたいにそれを気にして無理やり寄せて上げる子だっているくらいなので、断言はできない。

いずれにせよ、きれいな顔をしていた。あの容姿だと、女でなくても狙ねらわれやすいだろう。

何しろ、ここはエルデンだ。してみれば、助けてやったアジアンさえも信用せず、罵ば声せいを浴びせてただちに逃にげ去るのは正解か。

最後に、顔をしかめるようにして舌を出してみせたのも──いや、あれはさすがに、ちょっと違うと思うが。

「……ン？」

と、空気が蠢うごめくような、あまり好ましくない気配を感じ

て、アジアンはあたりを見回した。

　間を置かず、遠くから何かの甲かん高だかい叫さけび声が聞こえてきた。

　アジアンの近くにいた下等蜥蜴とかげ人も、すぐに異変を察知したようだ。聞き耳を立て、きょろきょろと周囲に目を配る。彼らが一いつ斉せいに動きだしたきっかけは、たぶん、ある声だった。

「Ｋｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙ Ｓｈｙｙｙｙｙｙｇｙ……！」

　微び妙みような違ちがいだが、下等蜥蜴人の声ではない。下等蜥蜴人は、数十の部族に分かれていて、部族間の関係も複雑なので、必ずしも互たがいに仲がいいわけではないが、例外があるのだ。

　それは、あの声──下等蜥蜴人の上位種族である蜥蜴人、中でも戦士階級以上に属する個体の命令があった場合だ。

「誰かが連れてきたのか」

　下層のダーナムレーンで蜥蜴人たちとやりあい、敵かなわずに敗走して追いかけられ、結果的に上層のテトルアープまで彼らを連れてきてしまう間ま抜ぬけな侵入者クラッカーが、たまにいるという。

　それにしても、Ｄ13の出入口だってそう遠くない。こんな場所まで蜥蜴人を引っ張ってくるなんて、記録的な馬ば鹿かか、あるいは意図的に引き起こされた騒そう動どうか。

　どちらにしても、蜥蜴人のものと思おぼしき声の方へと駆かけ足で向かう下等蜥蜴人の群れは、早くも興奮しはじめているようだ。キシャァだのグアヒャァだのと雄お叫たけびを上げるやつもいれば、アジアンから距離をとるのも忘れ、すぐそばを走り抜けてゆくやつもいる。蜥蜴人の声はどんどん近づいてくるし、おそらく蜥蜴軍団の集結地も遠くないのだろう。

　まあ、どうでもよくはある。昼飯時ランチタイムの誰かがあの騒動に絡からんでいるのならともかく、今日のメンツならそれはまずない。出入口が連中の大群に塞ふさがれでもしたら、さすがにうざったいが、声がするのは逆方向だ。気にせず、このまま地上に戻もどればいい。

実際、そうするつもりだったし、そうしようとした。

途と中ちゆうで方針を転てん換かんしたのは、しばらく歩いてふと目にとまった細く暗い小路こうじに、真しん紅くの髪を見かけたからだ。

彼女は──いや、本人の言葉を信じるなら、彼か。

彼は追いつめられているようだった。彼は一人ではなく、下等蜥蜴人と対たい峙じしていて、相手が手に持つフォーク状の長なが柄え武器にかなり手こずっている様子が見てとれた。

彼の得物は、刺し突とつ用らしい細く短い剣けん身しんの、エストックか。

息が弾はずんでいる。構えもさまになっているとはいいがたい。というか、侵入者クラツカーだったのか。確かに、最初に会ったのもＤ５出入口の前だったわけで、侵入者クラツカーだとしてもおかしくないのだが、それにしても。

「危なっかしくてサ──」

見ていられない。

しかし、アジアンがそう呟つぶやく寸前に、姿勢を低くした彼が下等蜥蜴人の懐ふところに飛びこんだ。

少し意外だった。長柄武器に対して接近するのは阿あ呆ほうでも考えつくが、度胸がいい。なかなかすばしっこくもある。技術は素人しろうとの域を出ていないが、下等蜥蜴人の腹部に突つき上げるような角度で一気にエストックをぶっ刺さすやり方は、殺す方法を知っているという感じがした。人型の異界生物フリークスは体の造りがわりあい人間と似ているので、腹を狙うなら、ああして腎じん臓ぞうの位置を狙うべきだ。そうすれば、素す早ばやく息の根を止めることができ、逆ぎやく襲しゆうされる危険が少ない。

彼は成功した。下等蜥蜴人はほとんど悲鳴も洩もらさずに絶命したようだった。

その死体を蹴け倒たおしつつエストックを引き抜いた彼は、当然、すかさず侵入者クラツカーにとって必要不可欠な作業にとりかかった。

しとめた死体を漁あさるのだ。下等蜥蜴人は、たいてい蜥蜴人の間で流通している貨か幣へいや、蜥蜴人が作製した古い装そう飾しよく品ひん、武具などを所持している。それらの多た寡かや価値が下等蜥蜴人にとってのステータスになり、侵入者クラツカーにとっては戦利品となるというわけだ。

彼は侵入者クラツカーとして、そうやって生きる糧かてをえているのだろう。

だから、下等蜥蜴人がたすき掛がけしていた革かわ袋ぶくろを開けるのも、その中身を探さぐるのも、真剣だった。大きめの、銀色に輝かがやく貨幣を発見したときの、嬉うれしそうな顔。アジアンに見られているなんて、まったく気づいていないようだった。

そのことが━なぜだか、後ろめたくて。

アジアンは物もの陰かげに身を隠かくし、彼を視界の外に追いやって、何をやっているんだと思った。こんなところで、ボクはいったい、何を。それでいたたまれなくなり、近くにあった石造りの建物の屋根に飛び上って、やや落ち着きを取り戻し、次の瞬しゆん間かん、馬鹿げていると思った。

「どうしてボクがこそこそ隠れたりしなきゃならない？　そんな必要は━」

ないはずなのだが。

この場所からは、下等蜥蜴人の持ち物をあらため終えた彼の姿が見下ろせる。

最後に死体を一いち瞥べつしてからその場をあとにした彼は、小路の出口の手前に落ちていた小型の弩いしゆみを拾った。背負い袋から矢をとりだして、弩につがえようとしているのか。ということは、あの弩はもともと彼の物なのだろう。

たぶん、彼にとっては、身を守り敵を引き裂さくための、ちっぽけだが、大事な牙きばなのだ。

それは理解できるが、アジアンは思わず彼に声をかけそうになった。なぜなら、今はそんなことをしている場合じゃない。

迫せまりつつあるからだ。蜥蜴人率いる下等蜥蜴人どもの群れ

が。見れば、目のいいアジアンにはもう目視できる距きょ離りだ。先頭は、人間。追われている。必死で逃にげている。それも、大勢だ。もしかすると、ここまで来る間に巻きこまれた者も混じっているのかもしれない。

　だとしたら、とんだ災難だが、アンダーグラウンドではこんなことも起こりうる。

　距離は、百から百五十メーテルの間か。時間にして、二十秒かそこらだ。

　どうする？　どうなる？　彼はまだ矢をつがえる作業が完かん了りようしていない。いや、終わった。が、いくら何でも、あの人間や蜥蜴どもの喚わめき声や、地じ響ひびきめいた足音や、その他ほかの物音が聞こえていないということはないはずだ。果たして、彼は小路から顔だけ出した。様子をうかがっている。そのときにはもう、二、三十メーテル。彼は━駆け戻った。小路の奥へと。

　判断としては、突とつ飛ぴでも常識外れでもない。

　むしろ、あの数十、あるいはそれ以上に及およぶ蜥蜴軍団の前に飛びだし、地上目指して全力疾しつ走そうするよりは、小路に身をひそめてやりすごそうとする方がマシな選せん択たくかもしれない。

　ただ、結果は凶きようと出た。運が悪かったのだ。死しに物もの狂ぐるいで逃げる侵入者クラツカーの一人が、たまたま彼と同じことを考えた。というより、とっさに目に入った細い横道へ逃げこんだだけだろう。

　で、その侵入者クラツカーを追って、五匹ひきか六匹ぴきか七匹か知らないが、とにかく少なくない数の下等蜥蜴とかげ人も小路になだれこんできた。

　哀あわれ、侵入者クラツカーの命運は小路に入った途と端たんに尽つきた。何かにつまずいて盛せい大だいにすっ転んだ侵入者クラツカーは、下等蜥蜴人たちに踏ふまれ、蹴飛ばされ、一瞬のうちに彼らの武器で切り刻まれた。

　それで終われば問題なかったのだが、昂たかぶっている下等蜥蜴人は、次なる標的を見つけた。

　弩を構えている、彼だ。

「──ッ……！」

　彼は、だが、下等蜥蜴人が動きだすより早く行動を起こした。弩の引ひき金がねを引いて、一匹の下等蜥蜴人の額に矢を命中させたのだ。そして、潔いさぎよく弩を捨て、駆かけだした。

　石造りの建物の合間を縫ぬって走るその小路は、どこに続いているのか。わからないが、行き止まりということはなさそうだ。彼の逃とう走そうはうまくゆくかもしれない。

　そんなアジアンの期待は、すぐに裏切られる。

　下等蜥蜴人に続いて、小路に進入してきたもっと危険な敵が、手にした武器を彼めがけて投とう擲てきしたのだ。

　独特の装飾が施ほどこされた甲かつ冑ちゆうを着こんだ蜥蜴人の得物は、先せん端たんに鉄球がついた鎖くさりだった。

　鉄球は、まっすぐ飛んで彼の背中に命中した。

　虐殺人形カーネイジ・ドールなどという、ありがたくない醜しゆう悪あくな二つ名を与あたえられたアジアンの体が、勝手に、自動的に動いたのはその瞬間だった。

　落下──泣き叫ぶスクリーミング短剣・ダガーを抜ぬき、一いつ閃せんさせ、蜥蜴人の首をバターみたいに切断、鮮せん血けつを迸ほとばしらせ、死を撒まき散らすため、地に降り立ち、黒衣を翻ひるがえし、回転して、振ふるう、斬きる、最短の移動、斬る、軌き跡せき、見える、斬る、脳の奥深い場所からの指令で、斬る、ただ従え、斬る、従い、斬る。

　のろまな蜥蜴どもはあっという間に死体となって、血の海と化した小路に散らばった。

　かすかに哭ないている。

　我が手の泣き叫ぶスクリーミング短剣・ダガーが、泣き叫ばせろと、無数の口を開いて、息を吐はき出している。

「黙だまれ。キミの出番はおしまいだ」

アジアンは泣き叫ぶスクリーミング短剣・ダガーを鞘さやに収め、彼に目をやった。

彼は一度倒たおれ、起き上がろうとしたところでアジアンを見て、びっくりしているというより、状じよう況きようを把は握あくしかねている様子だ。まあ、無理もないが。

「立てるかい」

「……きみ、は……」

鉄球を見み舞まわれた背中が痛むのか。彼は顔を歪ゆがめ、かなりつらそうだが、それでも何とか立ち上がって、エストックの柄つかに手をかけた。

「何が、目的……だよ」

「目的なんて」

この期ごに及んでまだそんなことを言う根こん性じようは、皮肉でも何でもなく、見上げたものだ。

ただ、今は称しよう賛さんも感心も場ば違ちがいだった。アジアンはエストックを抜く暇いとまも与えず彼に接近した。暴れられてはかなわないので、一応、両手首をつかんだが、もちろん害意はない。その意思表示をするより早く、彼の膝ひざ蹴げりがアジアンの股こ間かんを狙ねらってきた。

「──この……！」

そうこられると、もうやむをえない。アジアンは普ふ段だん、他人との身体的接せつ触しよくを好まないのだが、腕うでは二本しかないし、相手の足まで封ふうじるにはこうするしかなかった。むろん、他意はない。手っとり早く自由を奪うばうために、アジアンは彼を抱だきすくめた。そのときだった。

ぞくり、とした。

至近距きよ離りでのぞきこんだ、彼の見開かれたオレンジ色の瞳ひとみに、何かを見つけた。

「きみ、は──」

　そうなのか。そう？　何が？　わからない。だが、わかっている。総毛立つ。全身の皮ひ膚ふが粟あわ立だった。自分の中にいる別の何かが、蠢うごめき、這はい出してこようとする。抑おさえないと。やめろ。来るな。お前の出る幕じゃない。お前じゃない。お前のおかげだなんて認めない。

　この出会いはお前のものじゃない。

　ボクのものだ。

「……何もしない。少しじっとしてて」



　アジアンは彼をきつく抱いたまま、小路の出口に体を向けた。

　そこには、仲間の血の臭においに引かれてやってきた下等蜥蜴人どもが群がっていた。

　さらにその後ろには、獰どう猛もうそうでかつ賢さかしげな、身

なりのいい蜥蜴人もいる。杖つえらしき物を持っているところから見ると、やつは魔ま術じゆつを使いそうだ。

　だが、連中はアジアンの手前約五メーテルまで来ると、一いつ斉せいに足をすくませた。下等蜥蜴人は後ろに首を巡めぐらせ、指示を仰あおぐようなそぶりを見せているが、蜥蜴人も判断を下しかねているようだ。躊躇ためらっている。否いな。そうではない。恐おそれおののいているのだ。

「ger'aut.」

　あとは「立ち去れ」の一言でよかった。

　一いつ瞬しゆんの間を置いて、まず蜥蜴人が後退し、そのあとを追うように下等蜥蜴人たちも次々と退いてゆく。残されたのは、一人の侵入者クラッカーと蜥蜴人、下等蜥蜴人どもの死体と、アジアンと彼だけだ。小路の外はまだ阿あ鼻び叫きよう喚かんの巷ちまたといった騒そう々ぞうしさだが、ここはたぶんもう安全だろう。

「すまなかったネ――っと……」

　アジアンは彼を解放しようとしたが、思いとどまった。体を離はなそうとしたら、彼が倒れそうになったので、とっさに支えて抱きとめるような格好になった。

「大だい丈じよう夫ぶかい？」

「……放せ」

「でも」

「放せって……言ってるだろ！」

　アジアンを振り払はらう力の弱さと、オレンジ色の瞳にともった意志の強さとが不ふ均きん衡こうだった。

　理り不ふ尽じんだとは思う。この間もそうだったが、今回もアジアンは彼を助けたのだ。

　それなのに、どうしてか、さして腹は立たない。逆に好感さえ持っている。他人の手を拒きよ絶ぜつするどこか痛ましい刺とげ々とげしさに、かつての自分が重なるからか。共感？　同情？　だ

が、自分のような者が、誰だれかに共感したり、同情したりできるのか。不可能じゃないのか。

　相手が彼でなければ、いつものように、そう信じられたかもしれないが。

　彼はよろけつつアジアンから離れ、建物の壁かべに両手をつけて何とか立っている。

「……何なんだよ……たまに、テトルアープに来てみたら、こんな目に……遭あうし、挙句……助けられて。どうして……わけわかんないよ。二回目なんて……冗じよう談だんじゃない。知りあいでも、ないのに……」

「ただの偶ぐう然ぜんだヨ」

　嘘うそじゃない。せっかくのこの巡りあいも、単なる偶然で終わる。三度目以降がなければ。

「……感謝なんか、しない」

「いいサ。感謝されたくて助けたわけじゃない。助けたいから助けた。手を貸そうか？」

「いらない。そんなこと、してもらう理由が……どこにあるんだよ」

「理由、か」

　微笑ほほえましいくらいの強ごう情じようさだ。どう説き伏ふせてやろうと考えるうちに、アジアンは自分の思いつきがおかしくて、つい笑ってしまった。くだらない。徹てつ底てい的に馬ば鹿か馬鹿しいが、冗談みたいなその理由とやらを完全には否定できない自分が、さらにおかしかった。

「一ひと目め惚ぼれしたんだ、キミに」

　彼も呆あつ気けにとられたらしい。アジアンが勝手に彼の腕をとり、肩かたを貸す体勢になっても、まったく抵てい抗こうしなかった。数秒してからだった。彼は顔を真っ赤にして「ぼ、僕は」と叫さけんだ。

「女の子じゃない……！　ひ、一目惚れとか──」

「そんなこと、たいした問題じゃないだろう？　ボクはキミという存在に惹ひかれ、恋こいに落ちた。つまり、これは運命なんだヨ。キミがたとえ──」頭に浮うかぶまま言葉を重ねれば重ねるほど、もっともらしく思えてくる。これはいったい、どういう魔法だろう。「犬だろうと猫ねこだろうと異界生物フリークスだろうと大ゴ脂ツ羽キ蟲ーだろうと、ボクはきっとキミを好きになっただろう。キミを愛するために、キミだけを捜し出しただろう。それがたまたま今だった。それだけのことサ」

「ふ、ふざけるな！　僕は、そんな……痛っ……」

「ほら、暴れちゃいけない。おとなしくしていないと、傷に障さわるヨ？　大丈夫、任せて。ボクがキミを守ってちゃんと地上まで連れて行く。さっき見たろう？　ボクは頼たよりになるヨ」

「……くっ、だ、誰が……！」

「いいから、いいから──」

『appendix. ai-meet-u. 』

了

あとがき

空を歩く夢を見ることがあります。透とう明めいの階段をどこまでも上ってゆくのです。

目が覚めると、夢の中でさえも僕には羽がないのかと思い、少しだけ悲しくなります。

十文字青です。あるいは、初めてお目にかかる方もいらっしゃるかもしれません。

本書はザ・スニーカー誌での連れん載さい全四話と、書き下ろしの短編で構成されています。

時系列的には『I』より前のお話ということになります。すでに『I』『II』を読まれた方だけでなく、本書から『薔ば薇らのマリア』を読まれる方でも十分楽しんでいただけるはずです。

『III』を待ってくださっている皆みな様さまへ。

予定していたわけではありませんが、『Ｖｅｒ０』が先行する形になりました。少しお待たせするぶん、『III』も盛りだくさんの内容にするべく、現在、魂たましいを削けずりながら執しつ筆ぴつ中です。

いつも短い僕のあとがきですが、ページの都合で今回はさらに短くて、もう終わりです。

それでは、ＢＵＮＢＵＮさんをはじめ、本書の制作、出版、販はん売ばいに関かかわったすべての方々、そして、今、本書を手にとってくださっている皆様へ、ありったけの感謝をこめつつ。

またお会いしましょう。たぶん、すっかり暑くなった頃ころに。

十文字　青

カバー・口絵・本文イラスト / BUNBUN

デザイン / 朝倉哲也 + design CREST

MAP製作 / On Graphics

薔ば薇らのマリア Ver0

僕ぼくの蹉さ跌てつと再さい生せいの日ひ々び

十じゆう文もん字じ　青あお



平成25年9月30日　発行

発行者　宍戸健司

発行所　株式会社角川書店

〒102-8078　東京都千代田区富士見2-13-3

http://www.kadokawa.co.jp/

本電子書籍は下記にもとづいて制作しました

角川スニーカー文庫『薔薇のマリア Ver0　僕の蹉跌と再生の日々』平成17年5月1日初版発行

平成20年4月20日9版発行



BOOK☆WALKER